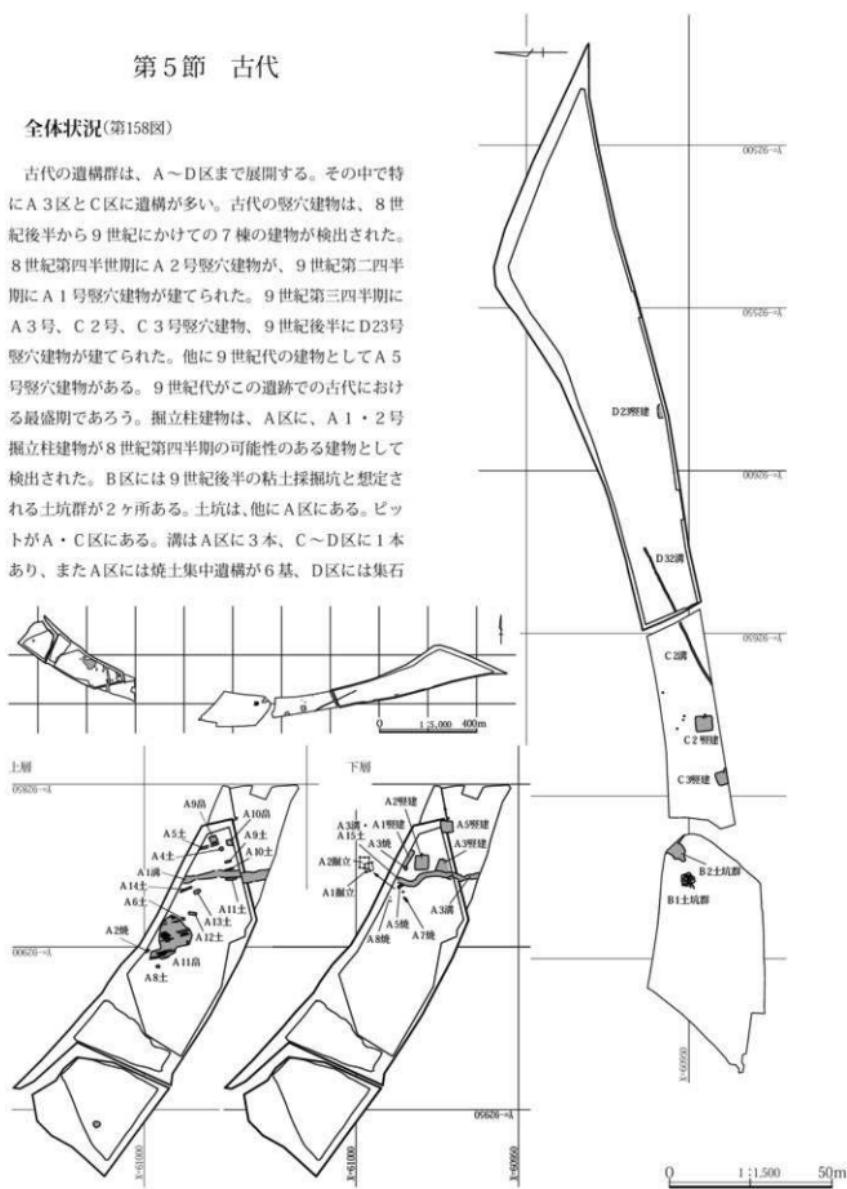


第5節 古代

全体状況(第158図)

古代の遺構群は、A～D区まで展開する。その中で特にA 3区とC区に遺構が多い。古代の竪穴建物は、8世紀後半から9世紀にかけての7棟の建物が検出された。8世紀第四半期にA 2号竪穴建物が、9世紀第二四半期にA 1号竪穴建物が建てられた。9世紀第三四半期にA 3号、C 2号、C 3号竪穴建物、9世紀後半にD23号竪穴建物が建てられた。他に9世紀代の建物としてA 5号竪穴建物がある。9世紀代がこの遺跡での古代における最盛期であろう。掘立柱建物は、A区に、A 1・2号掘立柱建物が8世紀第四半期の可能性のある建物として検出された。B区には9世紀後半の粘土探掘坑と想定される土坑群が2ヶ所ある。土坑は、他にA区にある。ピットがA・C区にある。溝はA区に3本、C～D区に1本あり、またA区には焼土集中遺構が6基、D区には集石



第158図 古代遺構分布図

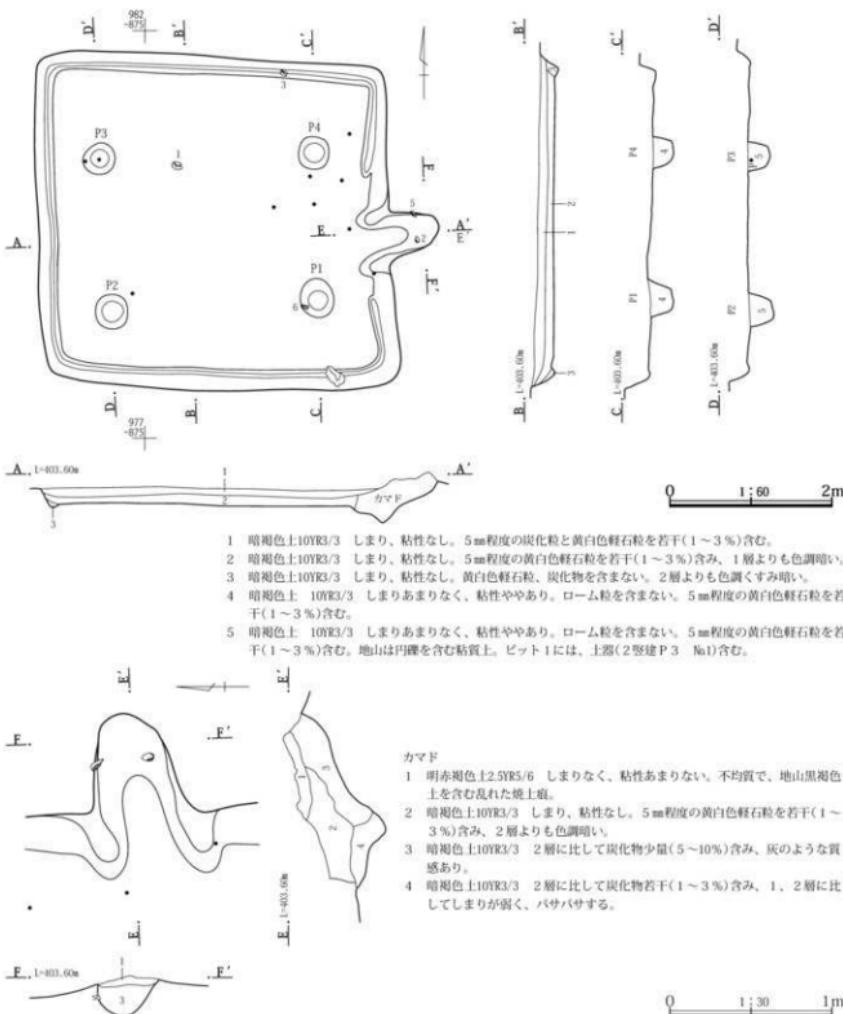
遺構が2基ある。高がA区As-B下から検出された。

竪穴建物

A 2号竪穴建物(第159・160図 P.L. 103・104・184)

位 置 A 3区東南部に位置する。北にA 2号・3号

竪穴建物が建つ。座標値 X=60977~60981 Y=-92878~92876 遺存状況・重複 竪穴建物全体が調査対象である。形 状 圓円形 周辺 東西4.33m、南北4.12m 長軸方向 N-90°-E 床面積 13.874m² 床面・壁 床面は平坦である。特記すべき硬化面は無い。



第159図 A 2号竪穴建物・カマド平面・遺物出土状況図・土層断面図

壁の残りはある程度あり、残存壁高12~26cmある。幅4~8cm、深さ4cmの壁際溝が周囲する。カマド カマド袖幅84cm、燃焼部幅30cm、長さ54cm、煙道幅32cm、長58cmである。柱穴他 4本主柱穴P 1~P 4である。長径40~48cm、短径38~42cm、深さ30~77cmである。掘 方 挖方は、認められない。遺物出土状況 カマドより土師器杯(2)、土師器甕(5)がカマド上部から出土した。土師器杯(1)・甕(6)、須恵器杯(3)が床面より10~34cm上から出土している。遺 物 出土遺物は、土師器杯(1・2)・甕(5・6)、須恵器杯(3・4)である。時 期 土器より8世紀後半に比定される。

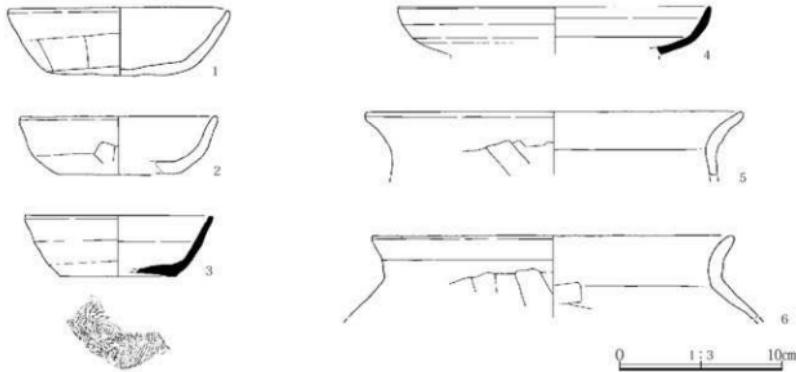
A 1号竪穴建物(第161~163図 P L. 104・105・184)

位 置 A 3区東部北側に位置する。南にA 2号竪穴建物、A 3号竪穴建物が建つ。座標値 X=60978~60982 Y=-92872~92876 遺存状況・重複 竪穴建物の南側の一部が調査対象である。重複は無い。形 状 圓円方形と推定 規 模 東西5.60m、南北(1.30)m+床 長軸方向 N-61°-E 床面積 5.112m² 床面・壁 床面は平坦である壁の残りは良く最大で40cmを有する。掘 方 床下土坑が中央部南にある。幅64cm、長さ84cm、深さ10cmの土坑である。カマド カマド・柱穴他は調査区外となる。遺物出土状況 全体に多くの遺物が出土している。土器類は、須恵器杯(1・2・5・6)、須恵器甕(8・9)、須恵器皿(11)、土師器甕(16)のうち、須恵器杯(1)・須恵器甕(9)が床面より出土し、他は7~31cm上からの出土である。石皿(19)は、床面からの出

土である。鉄器は、短刀(20)が建物西部床から40cmほど上から切先を南に向けて出土した。刀装具(21)もそばから出土している。方頭鎌は、建物東部床から30cmほど上からの出土である。鉄滓が東部まとまって出土している。遺 物 土器は、須恵器杯身(1~7)、須恵器甕(8・9)、須恵器皿(10・11)、須恵器皿蓋(12~14)、須恵器鉢(15)、須恵器甕(18)、土師器甕(16・17)と多種類の土器が出土した。石製品として石皿(19)が出土しており、鉄器として、有機質の刀装具及び鉄製の装具(21)も付けた短刀(20)、関東では珍しい方頭鎌(22)、鉄滓(23~28)が出土している。豊富な鉄製品と、鉄滓の出土は重要である。時 期 土器より9世紀後半に比定される。

A 3号竪穴建物(第164~167図 P L. 107~109・185)

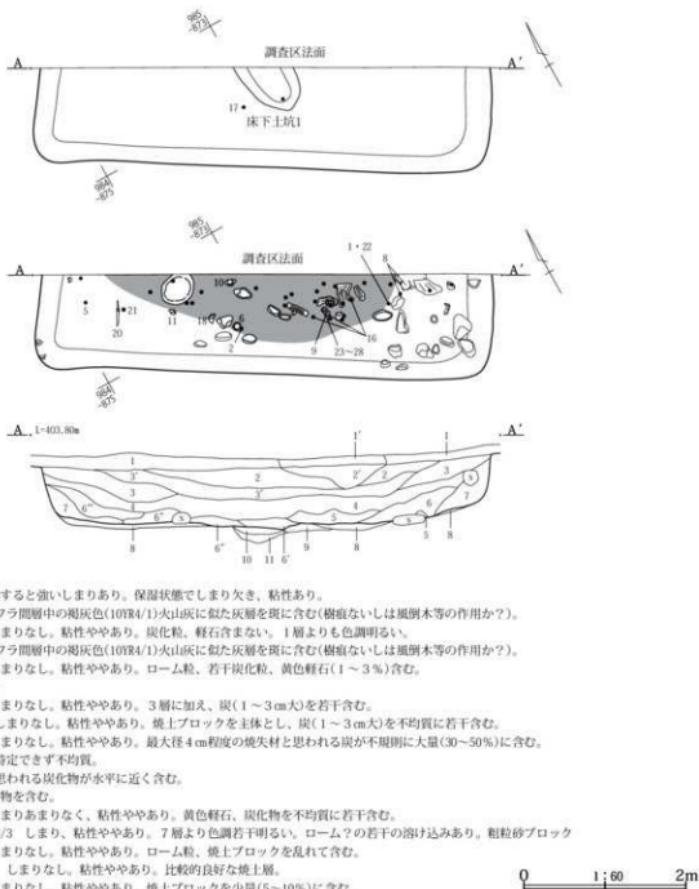
位 置 A 3区東部北側に位置する。南にA 1号竪穴建物、A 2号竪穴建物が建つ。座標値 X=60969~60976 Y=-92873~92879 調査状況 平成26年度・平成27年度に分割調査 遺存状況・重複 竪穴建物の全体が調査対象である。重複は無い。形 状 圓円方形 規 模 東西 4.40m、南北 5.45m 長軸方向 N-70°-E 床面積 19.481m² 床面・壁 床面は平坦である壁の残りは良く最大で50cmを有する。壁際溝 幅16cm、深さ4cmの溝が北壁際の中央のみにある。掘 方 挖方は、認められない。カマド カマドは2ヶ所にある。いずれも東壁にある。同時使用の可能性がある。南東部の1号カマドは、袖幅80cm、カマド長(166)cm、燃焼部幅40cm、燃焼部長(76)cmである。北東部の2号カマドは、袖幅76



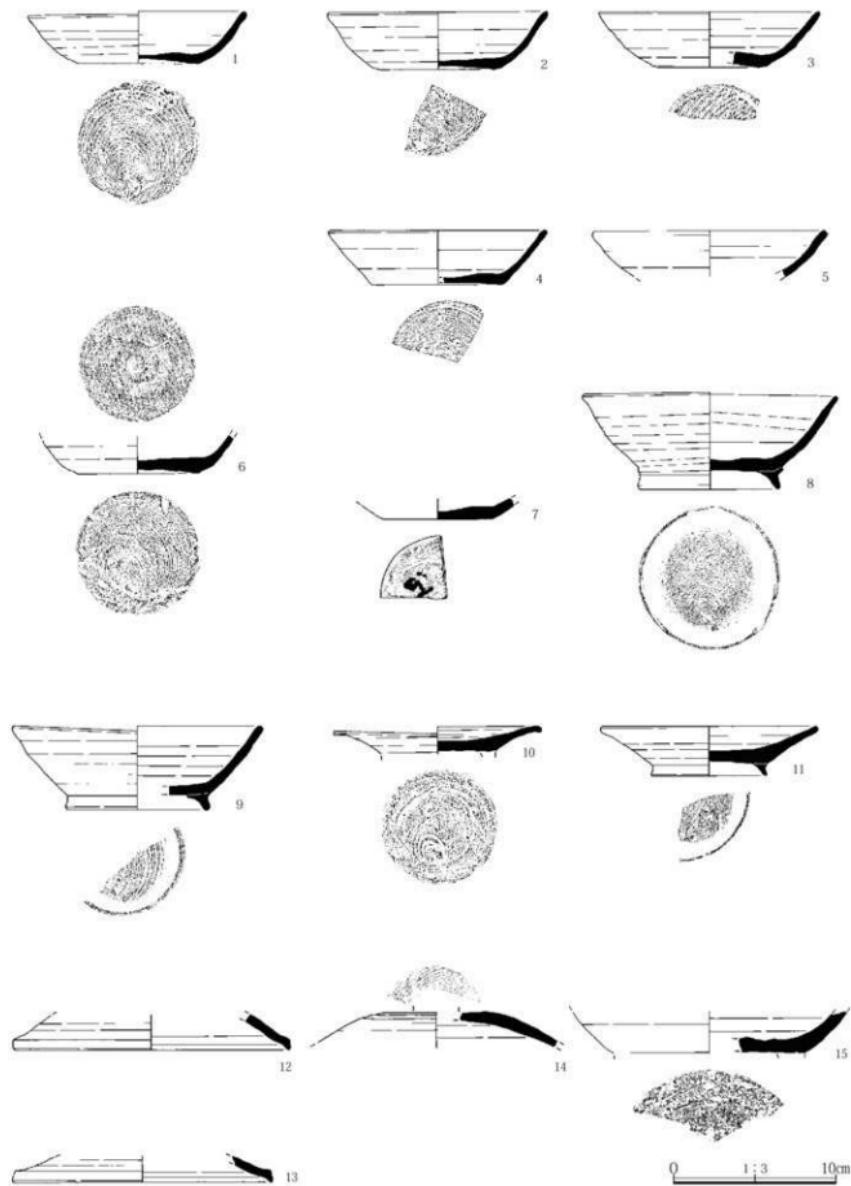
第160図 A 2号竪穴建物出土遺物図

cm、カマド長(94)cm、燃焼部幅34cm、燃焼部長(66)cmである。焼土が、第1号カマドから1.2mほど離れた箇所で幅44~84cm、長さ126cmの範囲で集中している。貯蔵穴 長132cm、幅96cm、深さ8cmで、北側に土堤がある。遺物出土状況 1号カマド周辺に須恵器杯片(3)、須恵器大甕片(21)が覆土上層から出土した。2号カマド中から須恵器鏡片(9)が覆土上層から出土した。貯蔵穴の覆土上層から須恵器杯(4)、底面から須恵器大甕口頭部(8)が出土している。床面上からの出土で土師器甕部(8)が出土している。床面上からの出土で土師器甕

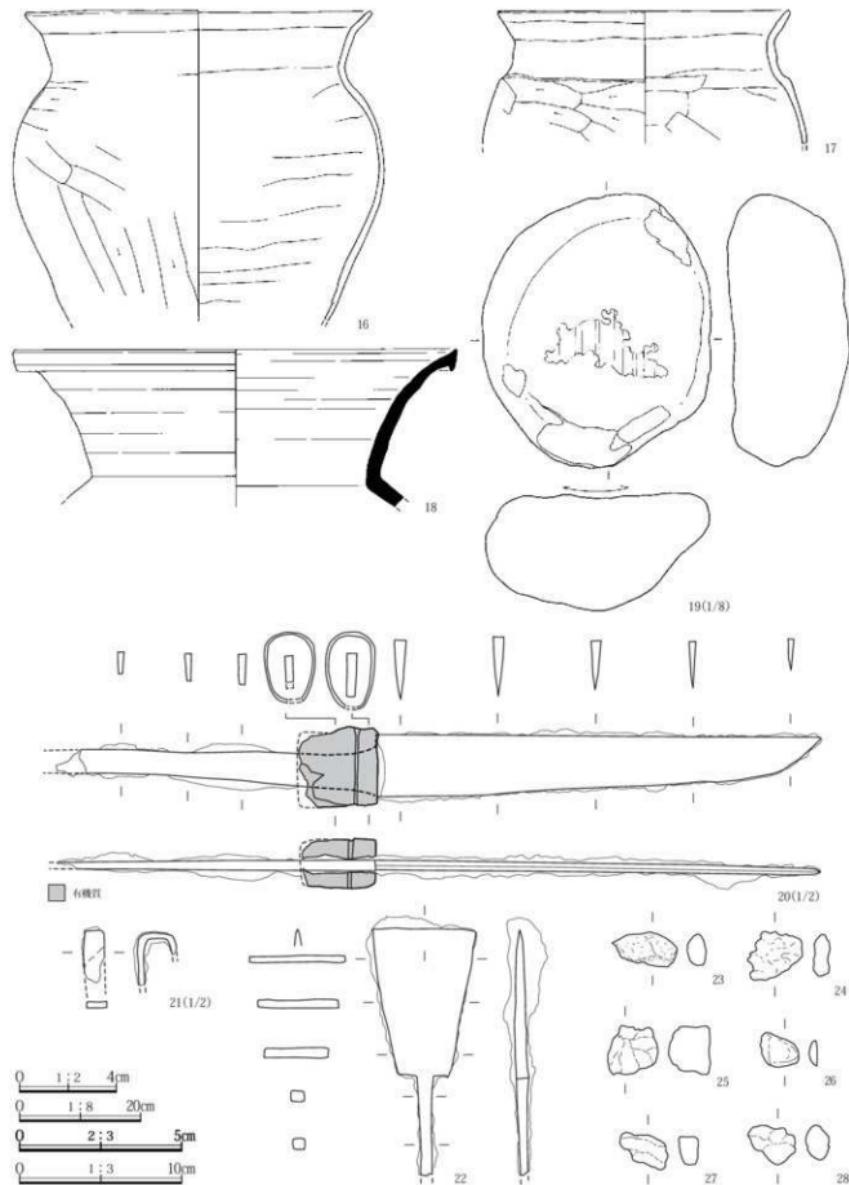
(17)が出土している。床面から3~39cmほど上位から須恵器杯(6)、須恵器椀(7・10・11)、須恵器杯蓋(13)、須恵器甕片(19・20)・須恵器長頸壺(15)などが出土している。台石(22)は床面上より出土している。遺物遺物は須恵器杯(1~6)、須恵器椀(7~12)、須恵器杯蓋(13・14)、須恵器長頸壺(15)、須恵器甕片(19~22)、土師器甕(16~18)、台石(22)が出土している。非掲載で台石が他に3点ある。時期 土器から、9世紀第3四半期に比定される。



第161図 A 1号窓穴建物平面・遺物出土状況図・土層断面図



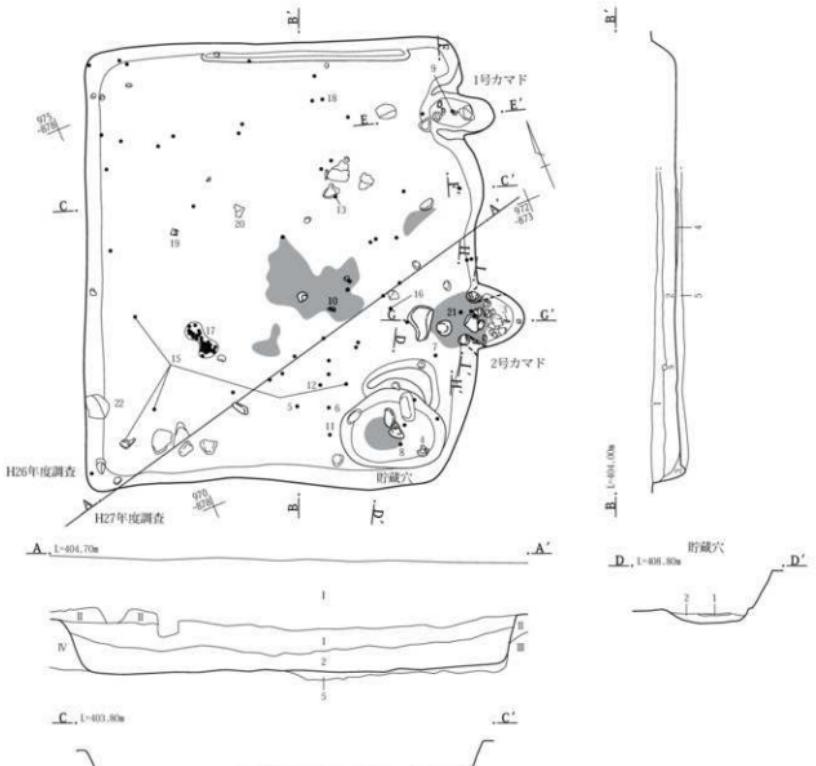
第162図 A 1号竖穴建物出土遺物図(1)



第163図 A1号竖穴墓出土遺物図(2)

C 2号竪穴建物(第168~170図 P L. 110~112・185)
位 置 C区中央部や南側に位置する。西15mにC3号竪穴建物が建つ。座標値 X=60942~60947 Y=-92674~92680 遺存状況・重複 竪穴建物の全体が調査対象である。重複は無い。形 状 様円形 規 模 東西 4.62m、南北 5.15m 長軸方向 N 88° - E 床面積 17.868m² 床面・壁 床面は平坦である。壁の

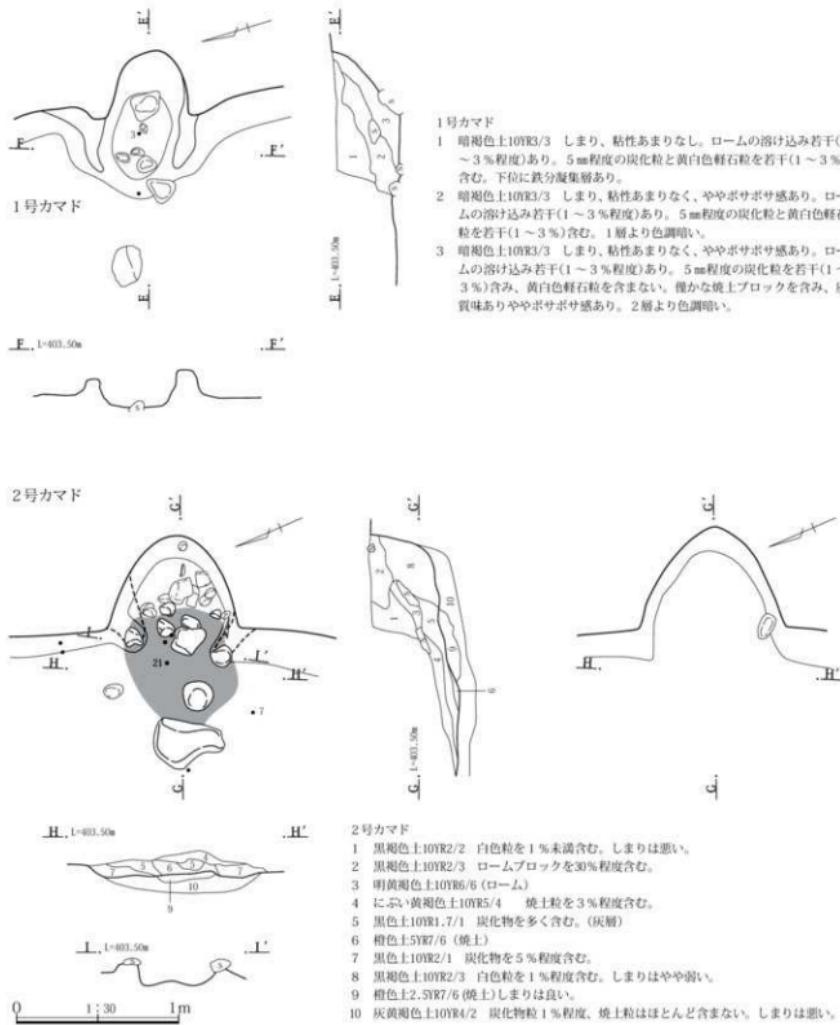
残りは良く最大で38cmを有する。壁際溝 幅10~18cm、深さ3~8cmの溝がほぼ全周する。U字形鍛錬先の掘削痕跡が溝付近に40個弱確認できた。掘 方 掘 方に伴う床下土坑がある。カマド前に1号床下土坑(1辺1.1m、深さ46cmの隅円長方形)、南入口や北側に2号床下土坑(長106cm、幅70cm、深さ20cm)がある。カマド 南東部に位置する、長さ90cm、袖幅102cm、煙道部長96cmの



- I 埋土 大形礫を多量に含む。
- II 黒褐色土10YR3/2 ローム粉少量含む。しまりは比較的良い。
- III 黒褐色土10YR3/3 ロームを15%程度含む。しまりは良い。
- IV 黑褐色土10YR3/2 全体に砂を含み、砂質。しまりはやや弱い。
- 1 暗褐色土10YR3/3 しまり、粘性あまりなし。ロームの溶け込み若干(1~3%)含む。
- 2 暗褐色土10YR3/3 1層に比して、色調暗く粘性若干強い。
- 3 暗褐色土10YR3/3 2層に比して、粘性強く、均質。
- 4 黄褐色土2.5YR4/8 しまりあまりなく、粘性ややあり。ローム溶け込み少量あり。不均質な焼土ブロック。
- 5 黑褐色土10YR3/2 しまりややあり。粘性あり。ロームブロック、長1~3mの炭化物若干含む。白色粒・黄褐色粒1%未満含む。(3号建物床相当層)
- 6 暗褐色土2.5YR7/6 (焼土) しまりは悪い。
- 7 黑褐色土10YR3/2 炭化物粒を3%程度含む。しまりは弱い。

第164図 A 3号竪穴建物平面・遺物出土状況図・土層断面図

0 1:60 2m



第165図 A 3号竪穴建物1・2号カマド平面図・土層断面図

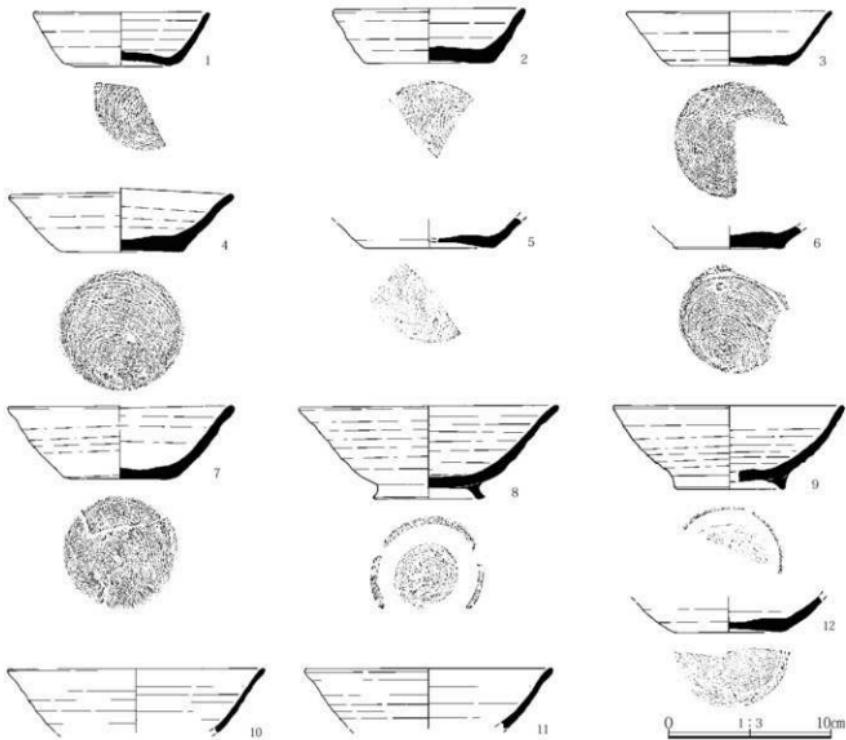
石組カマドがある。カマドは一部壊されている。平石が左右袖に6~7個立て並べその上に天井石を架構している。2個のみ天井石が遺存している。煙道が壁際を急角度で立ち上がる形態である。**柱穴他** 4本主柱穴のP.1~4が検出されている。長径42~49cm、短径37~41cm、深さ23~30cmである。**遺物出土状況** 南入口付近に須恵器杯(5・6)が、カマド左袖北側から台付土師器甕(8)が床面から出土している。カマド前小ピットP.5の中から須恵器杯(3)が出土している。カマド左袖北から、床より30cm上で須恵器杯(2)が出土している。鉄器は、刀子刃部(10)がカマド前より出土し、鉄滓がカマド左袖北側(14・16)および床下土坑西(12・13・15・17)より出土している。また、1号床下土坑より白色粘土が出土している。**遺物** 須恵器杯(1)、須恵器碗(2~6)、土

師器甕(7)、土師器台付甕(8)が出土している。うち5は、墨書で「矢」と書かれている。鉄器は、鐵頭・莖部片(9)、小型刀子刃部(10)、鉄滓(11~17)が出土している。

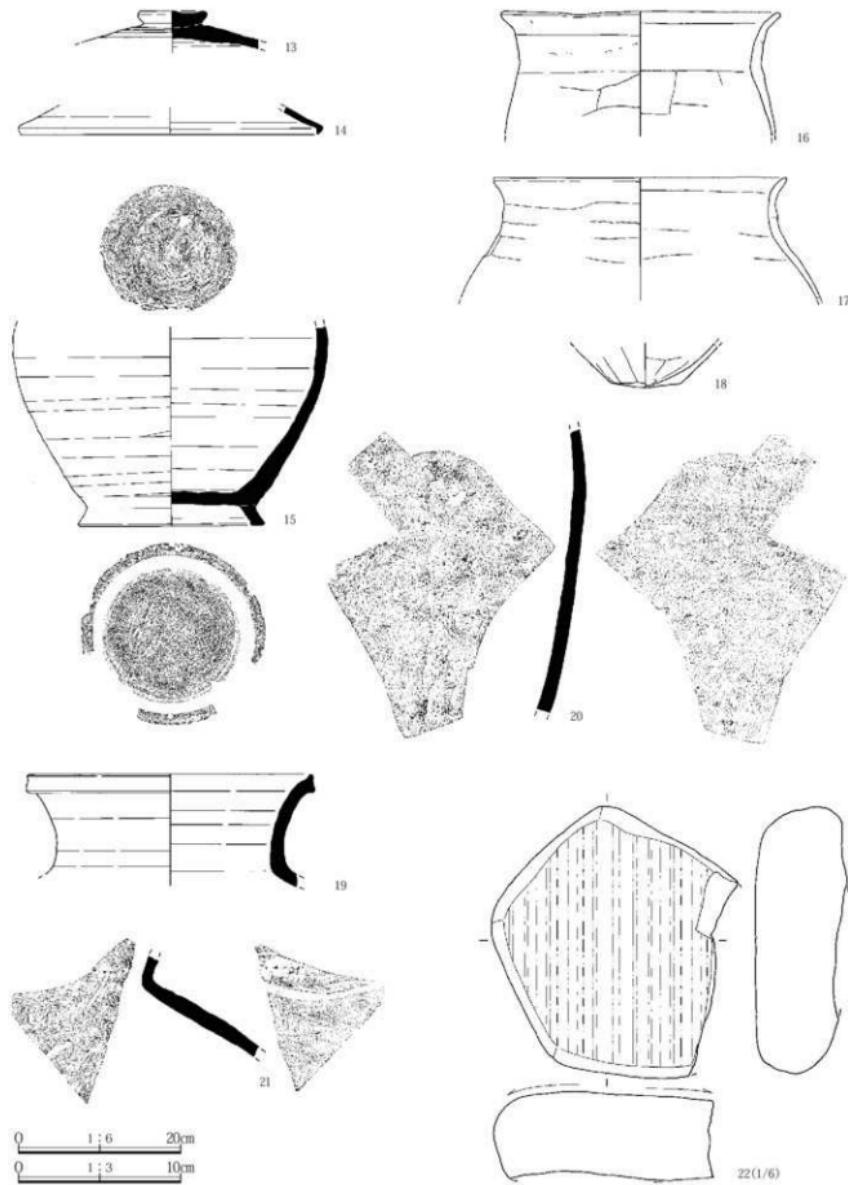
時期 土器より9世紀後半期に比定される。

C 3号竪穴建物(第171~173図 P.L. 113~115・186)

位置 C区西部南側に位置する。東15mにC2号竪穴建物が建つ。座標値 X=60937~60941 Y=-92691~-92696 **遺存状況・重複** 竪穴建物の北部が調査対象で、全体の2/3程を調査する。**形状** 圓周方形 規模 東西 4.05m、南北 3.40+m **長軸方向** N-71°-E **床面積** 10.095+ml **床面・壁** 床面は平坦である。壁の残りは良く最大で61cmを有する。壁際溝 幅14~20cm、深さ1~7cmの溝が調査範囲内ではほぼ全周する。U字形鍬先の掘削痕跡が溝付近に14個出土した。



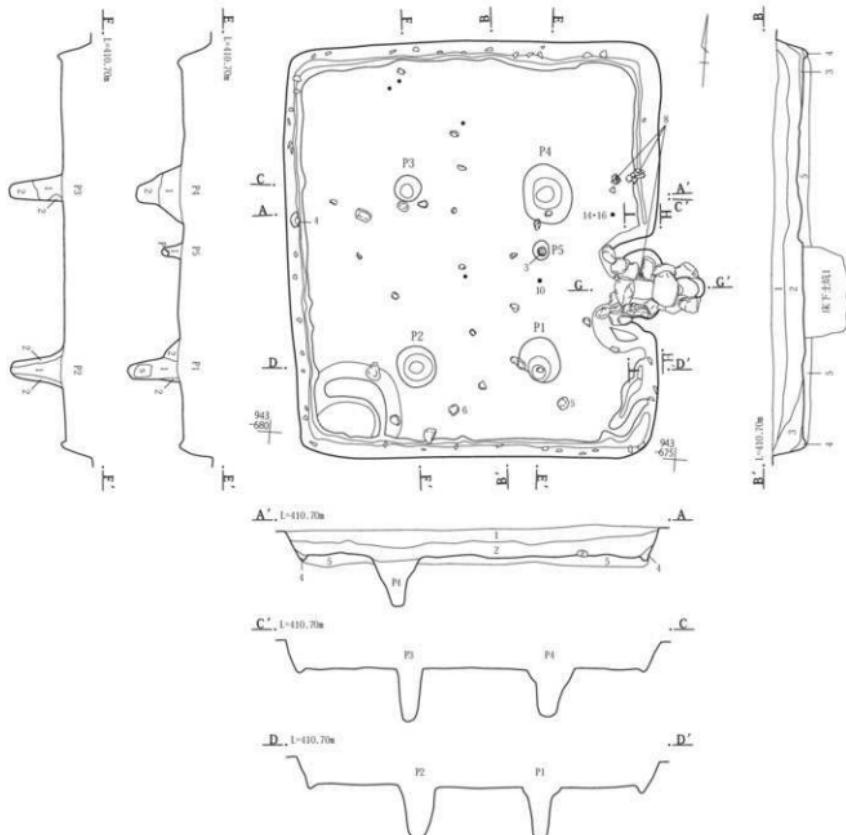
第166図 A 3号竪穴建物出土遺物図(1)



第167圖 A 3号竪穴建物出土遺物圖(2)

掘方 掘方に伴う床下土坑がある。カマド前南部に1号(長60cm、幅66cm)、2号(長48cm、幅48cm)、床中央やや北に3号(長72cm、幅63cm)、3号の南に4号(長75cm、幅5cm)がある。また、掘方面には30個弱のU字形鍛鉄先の掘削痕跡がある。カマド 南東部に位置する、

長さ140cm、袖幅80+cm、煙道部長60cmのカマドである。カマドは一部壊されている。平石がいくつか出土しているので、石を利用したカマドの可能性がある。柱穴他柱穴はP1(長径30cm、短径26cm、深さ24cm)が、カマド前やや離れて確認できた。1号土坑(径24cm、深さ8cm)



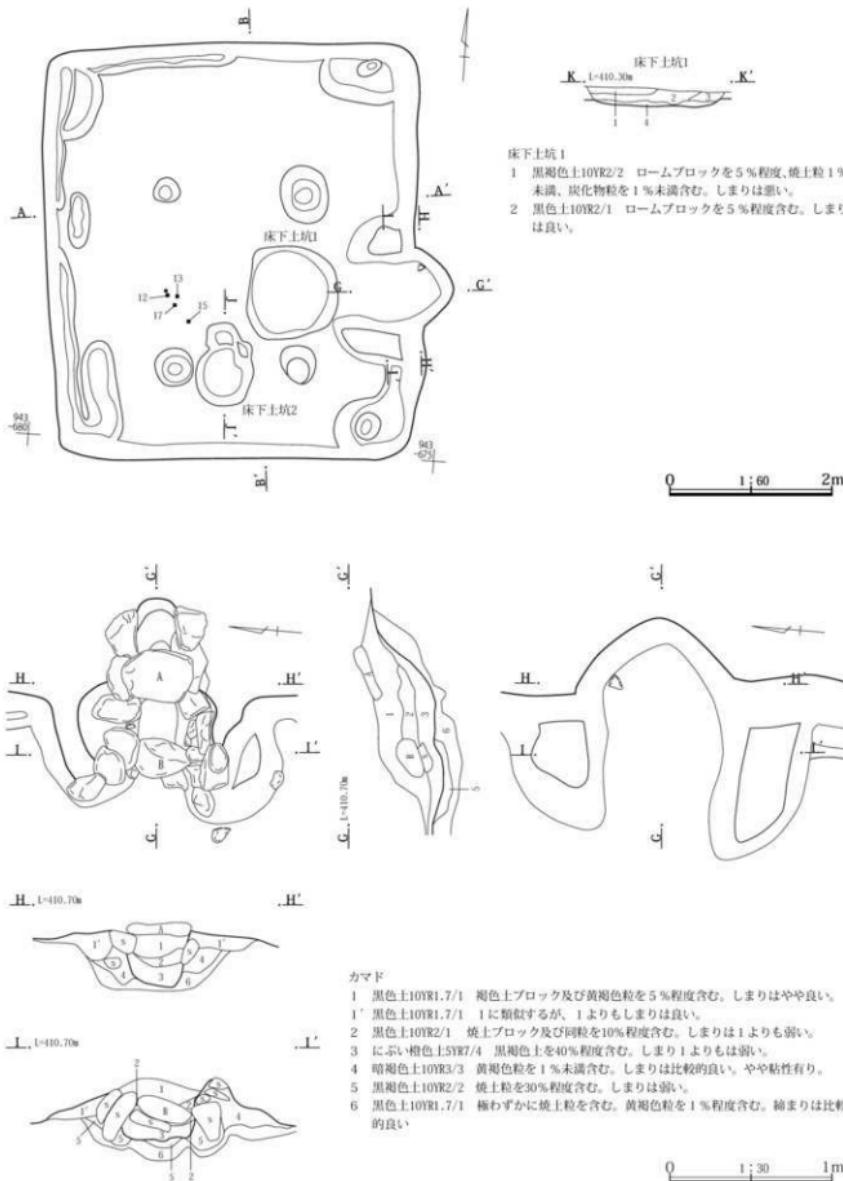
- 1 黒色土10VR1.7/1 ϕ 1~3mmの黄褐色粒を3%程度含む。しまりは弱い。やや粘性有り。
- 2 黒色土10VR2/1 ϕ 1~3mmの黄褐色粒を2%程度含む。しまりは1よりもやや良い。
- 3 黒褐色土10VR2/2 地山の暗褐色土ブロックを10%程度含む。しまりは良い。
- 4 黑褐色土10VR2/3 地山の暗褐色土粒を10%程度含む。しまりは弱い。
- 5 黑褐色土10VR2/1 ローム粒を5%程度含む。しまりは良い。

- 1 黒色土10VR2/1 ローム粒を3%程度含む。しまりは弱い。
- 2 黑褐色土10VR2/2 ロームブロックを5%程度含む。しまりは良い。
- 3 黑褐色土10VR2/1 ローム粒を1%未満含む。しまりは悪い。(須恵器群出土)
- 4 黑褐色土10VR2/1 ロームブロックを5%程度含む。しまりは良い。

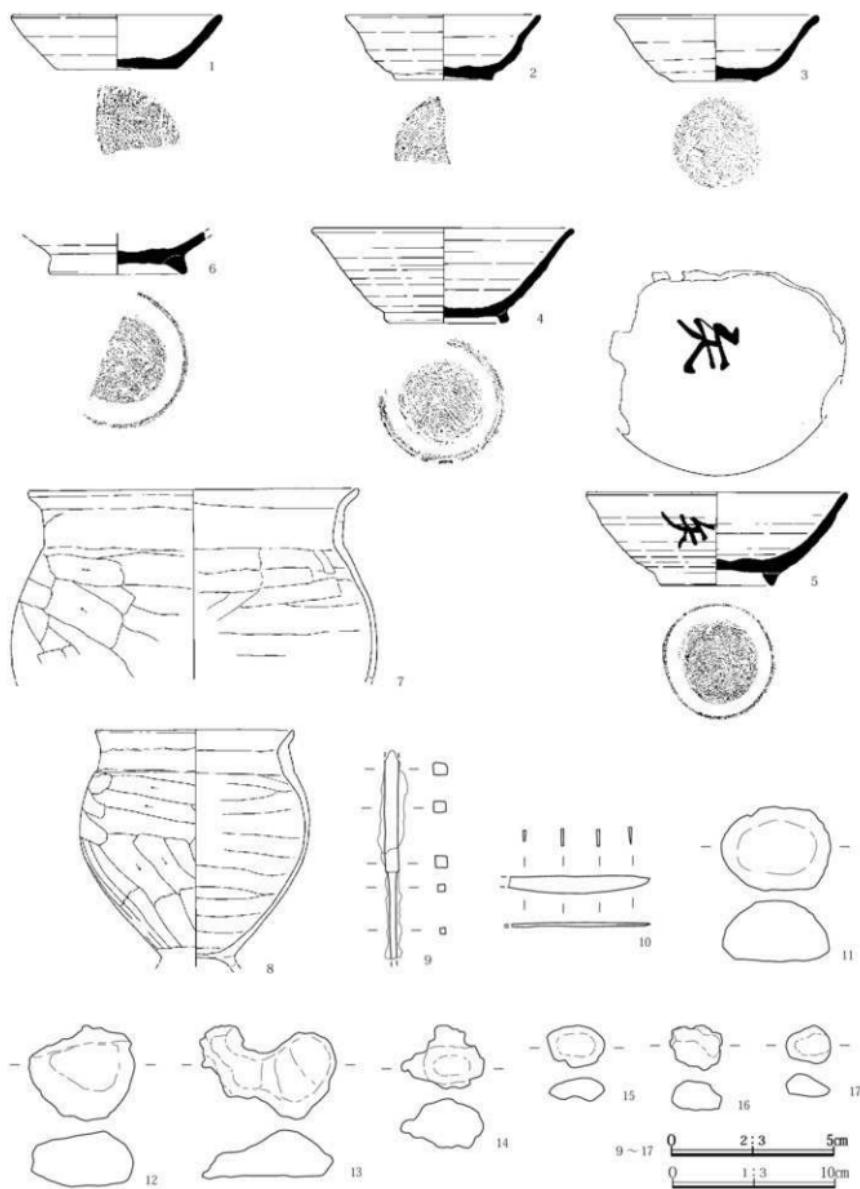
0 1:60 2m

ピット1~4

第168図 C-2号竪穴建物平面・遺物出土状況図・土層断面図



第169図 C 2号竖穴建物掘方平面・遺物出土状況図・カマド平断面図



第170図 C.2号竖穴建物出土遺物図

が検出されている。遺物出土状況 1号土坑内から須恵器杯(4)、カマド左袖や上から須恵器(1)、須恵器甕(8)が覆土上層から出土している。石皿(9)が1号土坑横から床面より出土している。また、3号床下土坑内より、須恵器(2・3)が出土している。遺物 須恵器杯(1・4)、須恵器(2・3)、須恵器甕(7・8)、土師器甕(5)、土師器台付甕(6)、石皿(9)が出土している。時期 土器より9世紀第3四半期に比定される。

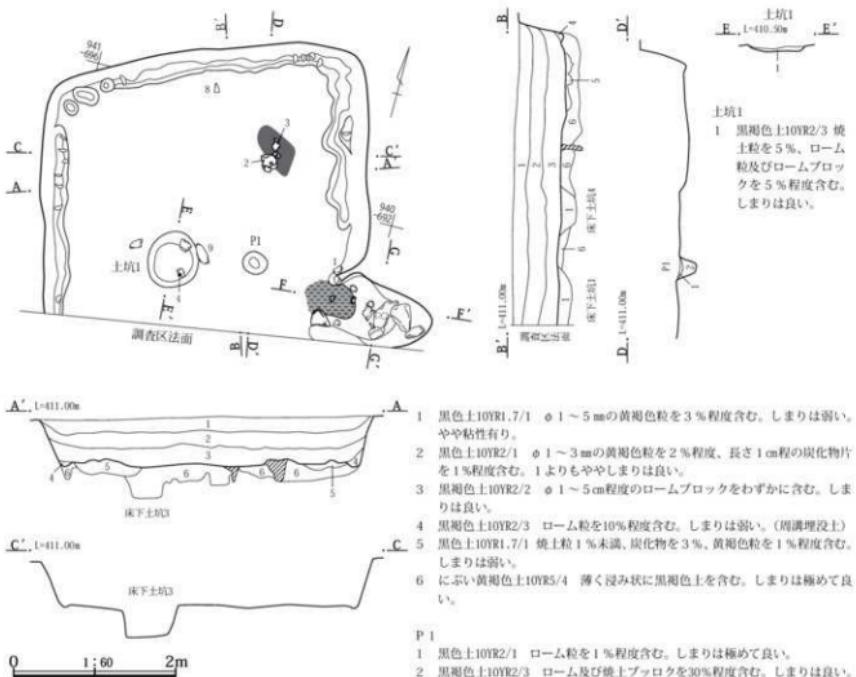
D23号竪穴建物(第174図 P.L. 116・117・186)

位置 D区中央やや東の南側に位置する。座標値 X = 60958 ~ 60959 Y = -92579 ~ -92583 遺存状況・重複 竪穴建物の北部、全体の1/3程度が調査対象となる。形状 圓円方形 規模 東西 4.27m、南北 1.40m 長軸方向 N-86°-E 床面積 2.817+ m² 床面・壁面は平坦である。壁の残りは良く最大で59cmを有する。壁際溝 幅6~24cm、深さ6~15cmの溝が調査範囲内では

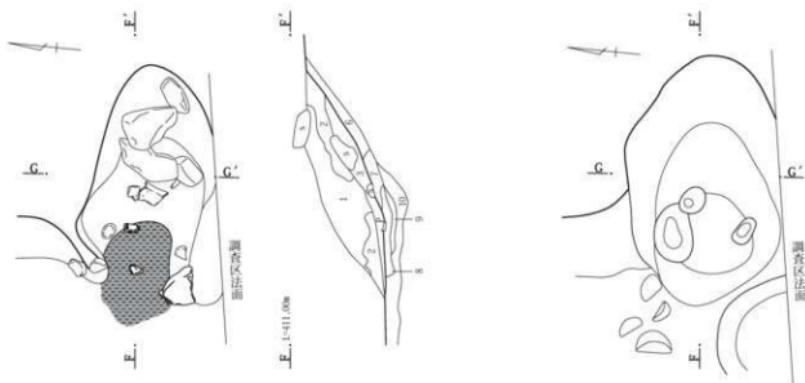
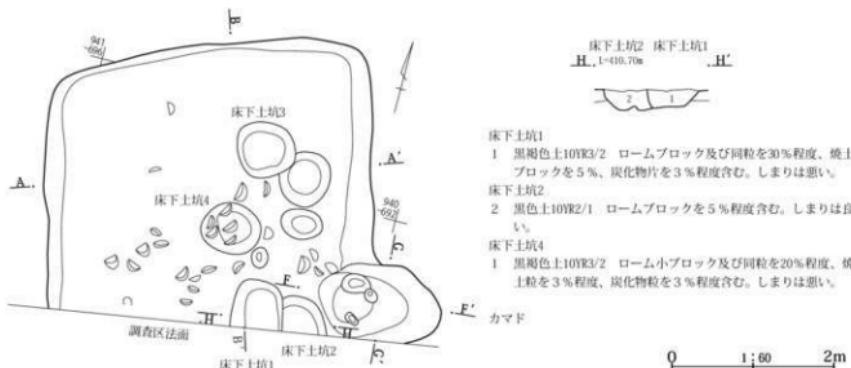
ほぼ全周する。掘方 掘方は無い。カマド 調査区外にあると想定する。柱穴他 P1 ~ P3が壁周溝外側に検出された。P1(長径35cm、短径23cm、深さ23cm)が北西隅、P2(長径40cm、短径30cm、深さ53cm)が北辺中央、P3(長径28cm、短径25cm、深さ23cm)が北東隅にある。また、床面北西部にP4(長径88cm、短径83cm、深さ37cm)が、床面北東部にP5(長径78cm、短径37cm、深さ29cm)が確認できた。遺物出土状況 P5内部から、土師器甕(7)、鉄刀子(10)が出土した。P5の際から須恵器(5)が出土している。遺物 須恵器杯(1)、須恵器(2~6)、須恵器甕(8)、須恵器(9)土師器甕(7)、茎を折り曲げた刀子(10)が出土している。時期 土器より9世紀後半に比定される。

A 5号竪穴建物(第175図 P.L. 117)

位置 D区中央やや東の南側に位置する。座標値 X = 60979 ~ 60974 Y = -92862 ~ -92866 遺存状況・重



第171図 C 3号竪穴建物平面・遺物出土状況図・土層断面図



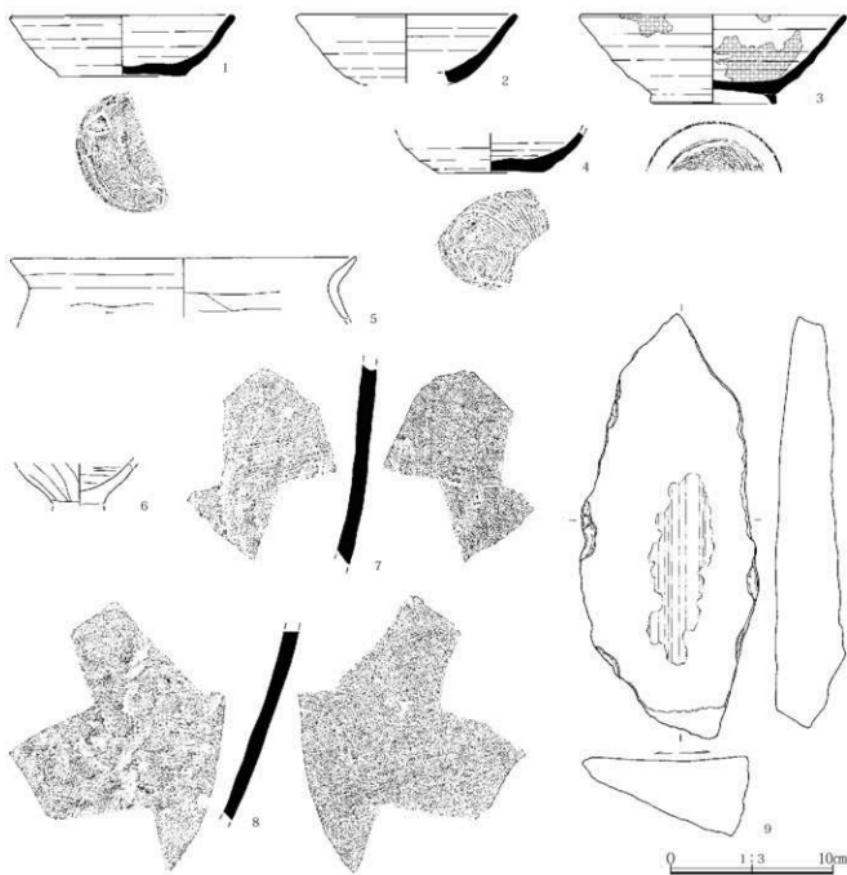
- 1 黒色土10YR2/1 焼上粒をほとんど含まない。しまりは悪い。
- 2 暗黒色土10YR3/3 焼上ブロック及び同粒を30%程度含む。しまりは弱い。
- 3 暗黒色土10YR3/3 焼上ブロック及び同粒を40%程度、炭化物粒を5%程度含む。しまりは悪い。
- 4 黒褐色土10YR3/2 ロームブロックを20%程度含む。しまりは良い。
- 5 暗黒色17.5YR3/3 7に類似するが、焼上粒を3%程度含む。
- 6 黒色土10YR1.7/1 ロームブロックを数点含む。しまりは良い。
- 7 暗褐色土17.5YR3/3 焼上粒を10%、炭化物粒を3%程度含む。しまりは悪い。
- 8 にぶい水褐色土5YR5/3 焼上小ブロック及び粒を30%程度、炭化物粒を5%程度含む。しまりは悪い。
- 9 橙褐色土2.5YR6/6 (焼上) 単一的。しまりは良い。
- 10 黑色土10YR1.7/1 ロームブロックを数点含む。しまりは良い。

0 1:30 1m

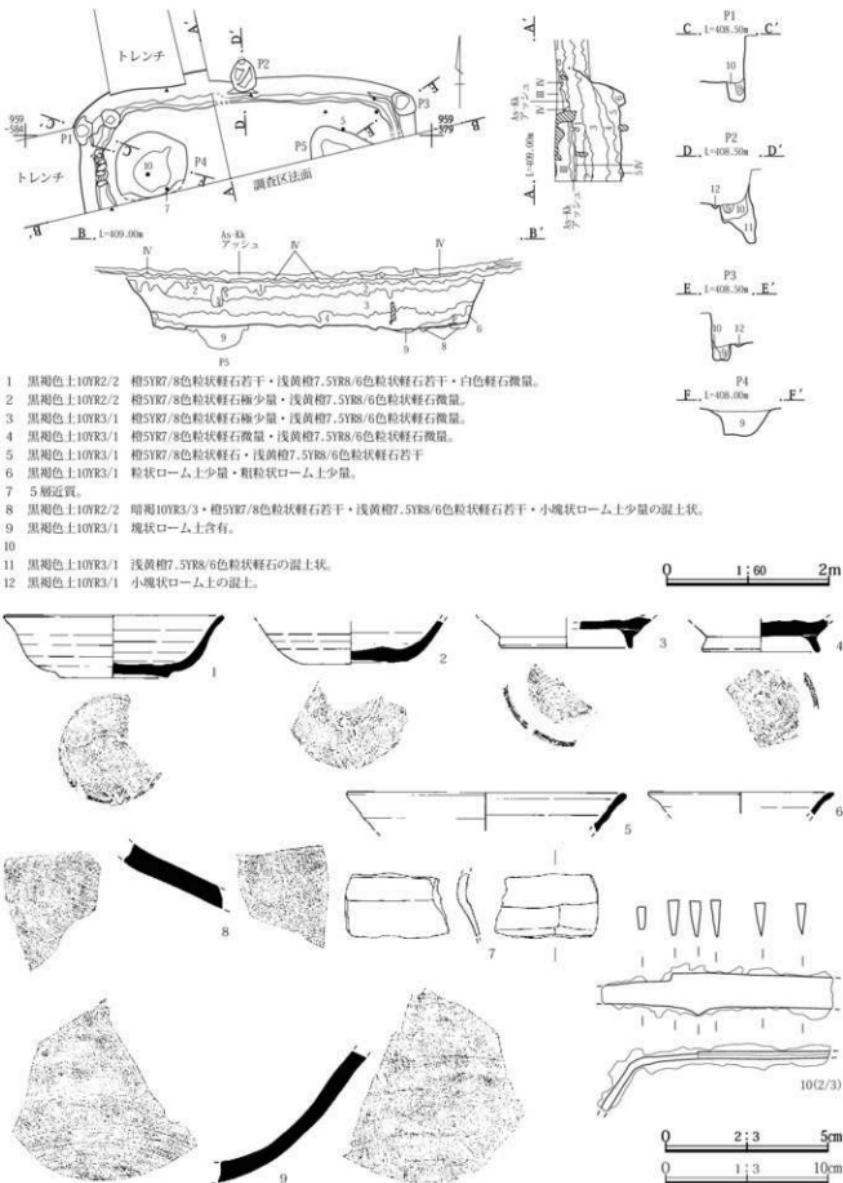
第172図 C-3号穴建物掘方平面図、カマド平面・土層断面図

複 穴建物全体が調査対象となる。形 状 圓円方形
 規 模 東西3.54m、南北3.66m 長軸方向 N-6°-
 E 床面積 12.861m² 床面・壁 床面は凹凸がある。
 下層の礫層が中央部で露出している。壁の残りは悪く、
 6~12cmである。壁際溝・掘方・カマド・柱穴他 とも
 に確認できなかった。遺 物 須恵器杯(1)、須恵器甕
 (2)が出土している。時 期 土器より9世紀代に比定
 される。

掘立柱建物



第173図 C 3号竪穴建物出土遺物図



第174図 D23号竖穴建物平面・遺物出土状況図・土層断面図・出土遺物図

できなかった。時 期 不明だがA 2号掘立柱建物からすると古代の可能性が高い。

A 2号掘立柱建物(第176図、P.L. 117)

位 置 A 3区中央やや東にある。A 1号掘立柱建物が重なる。座標値 X=60985~60988 Y=-92879~-92883 遺存状況・重複 A 1号掘立柱建物と重なるが、新古関係は不明。形 状 桁行2間×梁行1間 規 模 桁長(P 1-P 2)326cm、(P 4-P 5)348cm、西梁長288cm 柱間(P 1-P 6)142cm、柱間(P 6-P 5)146cm、東梁長284cm 柱間(P 2-P 3)142cm、(P 3-P 4)142cm 長軸方向 N-78°-W 柱 穴 P 1~P 6は長径26~37cm、短径24~28cm、深さ13~45cmである。遺 物 須恵器杯(1)が出土している。時 期 土器からすると8世紀後半である。

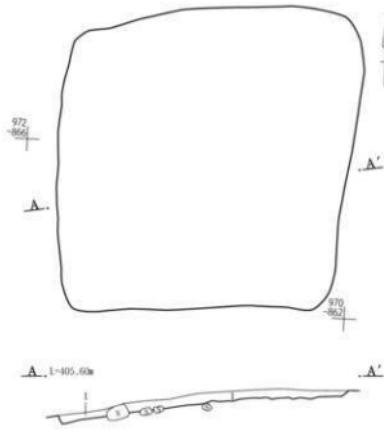
土坑群

土坑が複数重なって出土する土坑群がB区から2群検出された。

B 1号土坑群(第177図、P.L. 119・186)

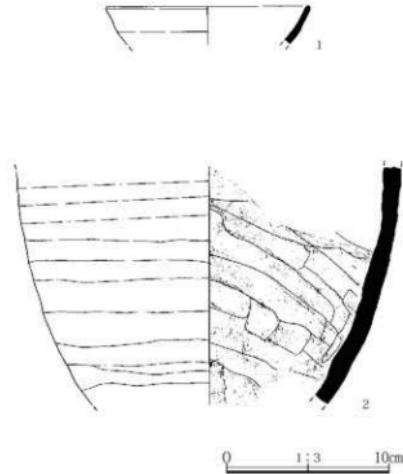
位 置 B区東部にある。B 2号土坑群が東北8mの箇

所にある。座標値 X=60948~60952 Y=-92723~-92727 遺存状況・重複 遺構全体が調査対象となる。複数の土坑の重複がある。形 状 複数の土坑が掘られており、形態は不定形である。規 模 長軸 560cm、短軸 455cm、深さ143cm 長軸方向 N-60°-E 掘 方 長径1.3~3.2m、短径1.1~2.2m、深さ34~143cmと、大きな土坑が6つ掘削され、そこに小さな掘削痕跡である土坑状の穴が10個掘られている。土坑の形状は梢円形に近い不整形である。遺物出土状況 須恵器類が土坑群南側から出土している。須恵器杯(1)、須恵器碗(3)が土坑底面直上から出土しており、須恵器碗(2)が底面やや上から出土している。性 格 大小の土坑群は、同じ箇所を数度繰り返して掘削した状況を示している。土坑の床面は粘性の強い灰黄色の粘性土である。その粘性土を採取するための土坑と推定する。遺 物 須恵器杯(1)、須恵器碗(2・3)、土師器甕(4)が出土している。須恵器碗(2)には墨書があり、「長」の異体字が底面に書かれている。覆土から龍泉窯系青磁と推定される小片(5・6)が出土している。時 期 土器から9世紀後半と推定する。



1 黒褐色土10YR2/2 白色粒1%程度含む。しまり強い。

0 1:60 2m



第175図 A 5号竖穴建物平面・土層断面図・出土遺物図

B 2号土坑群(第178図、P.L. 119・120)

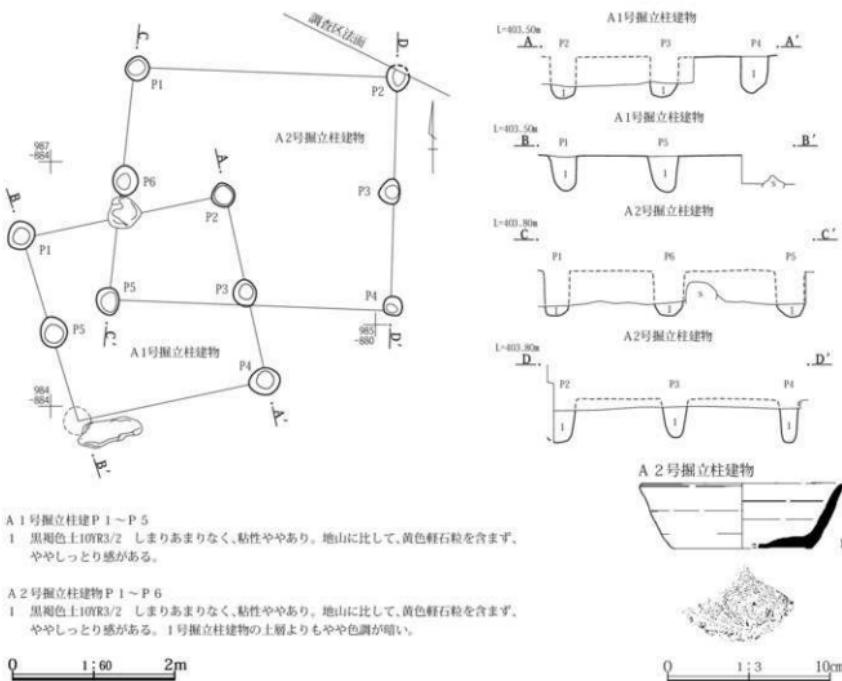
位 置 B区東部にある。B 1号土坑群が南西8mの箇所にある。**座標値** X=60951～60957 Y=-92711～-9271 遺存状況・重複 北側が調査区外となる。複数の土坑の重複がある。形 状 複数の土坑が掘られており、形態は不定形である。**規 模** 長軸 800+cm、短軸 600+cm、深さ 108cm **長軸方向** N~55°-E **掘 方** 長径0.9~3.5m、短径0.6~2.2m、深さ0.3~1.3mの大小の土坑群で、楕円形に近い不整形に掘削されている。**性 格** B 1号土坑群と同様、同じ箇所を複数回にわたり掘削しており、床面の粘性土の状況からみるとB 1号土坑群同様、粘土探査坑と想定する。**遺 物** 出土遺物は無い。**時 期** 時期は遺物が無く不明であるが、B 1号土坑群と同じ古代と推定する。

土坑(第179・180図、P.L. 120・121・186)

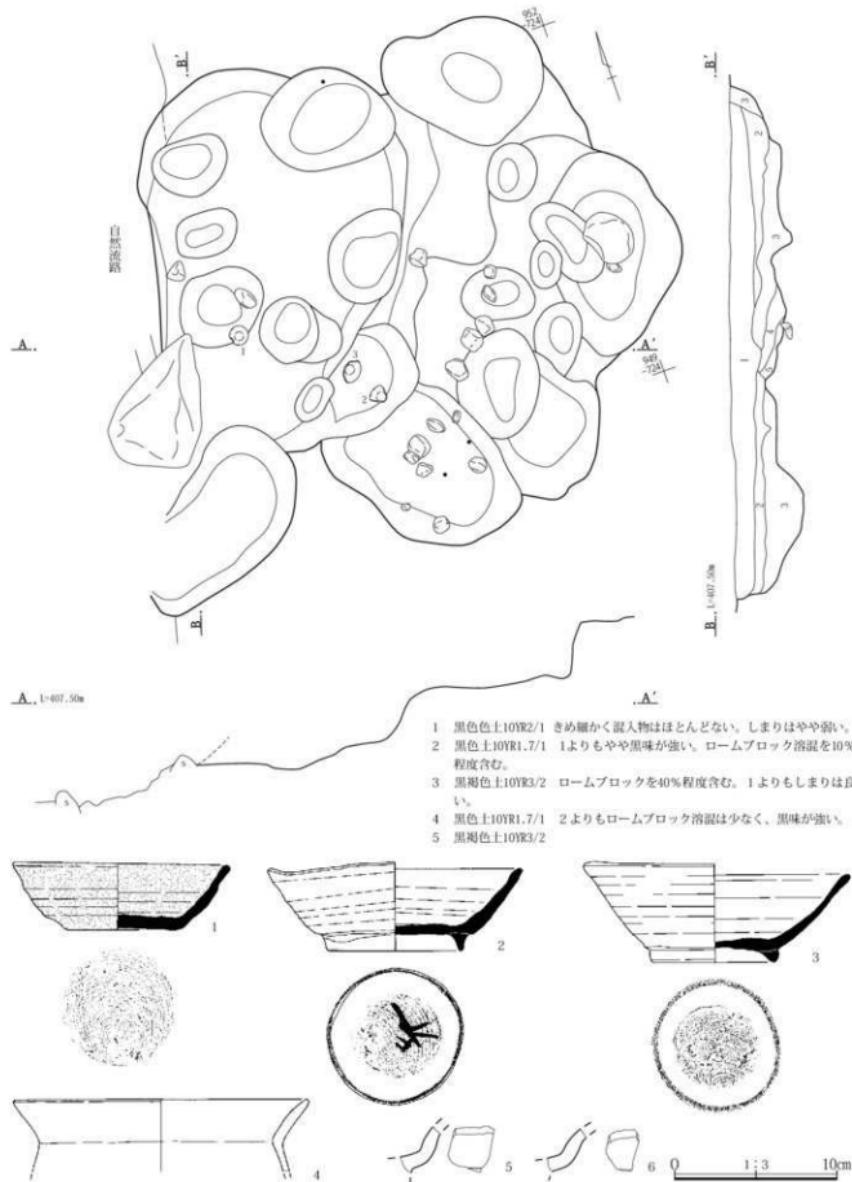
位 置 A 3区中央から東部にかけて検出されている。1～3号溝、A 1～5号竪穴建物周辺から検出される。**形 状・規 模** 長方形状の土坑(A-5・9～14号土坑、長207～640+cm、幅47～108cm、深さ15～44cm)が7基検出されている。他に、円形・楕円形の土坑(A 4・6～8・1長径55～118、短径49～114、深さ25～39cm)がある。**遺 物** A 5号土坑から須恵器杯(1)、A 6号土坑から須恵器碗(2)が出土した。**時 期** 古代に比定される。

A 15号土坑(第179図、P.L. 120・186)

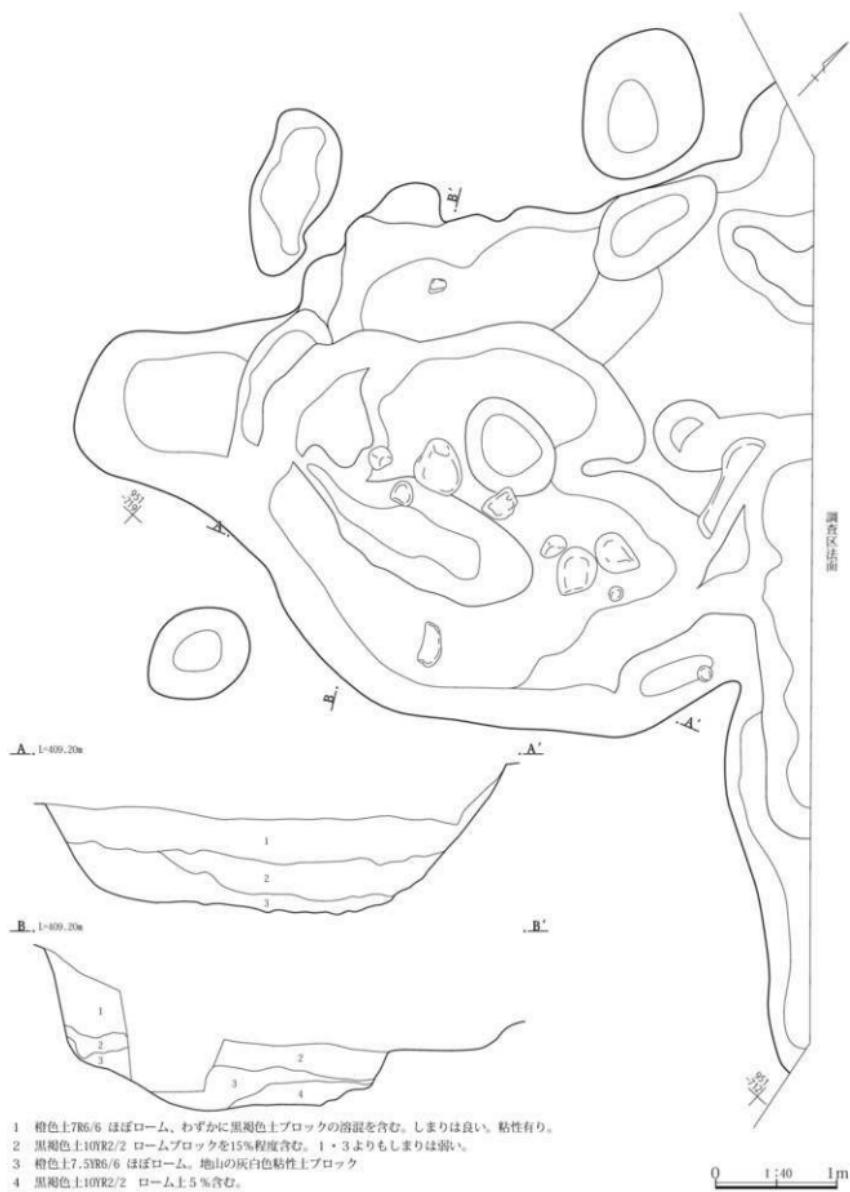
位 置 A 3区中央部にある。**座標値** X=60981～60983 Y=-92878～-9288 遺存状況・重複 遺構全体



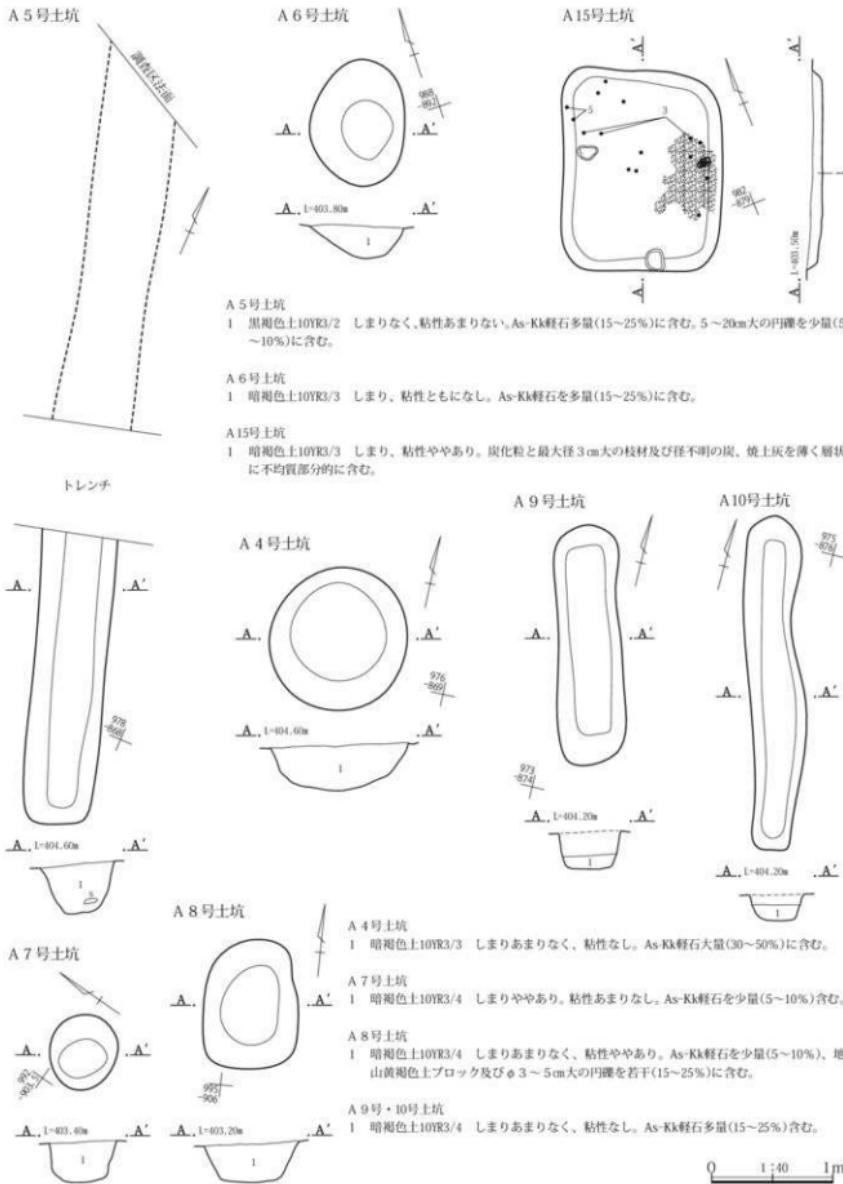
第176図 A 1・2号掘立柱建物平面図・断面図・出土遺物図



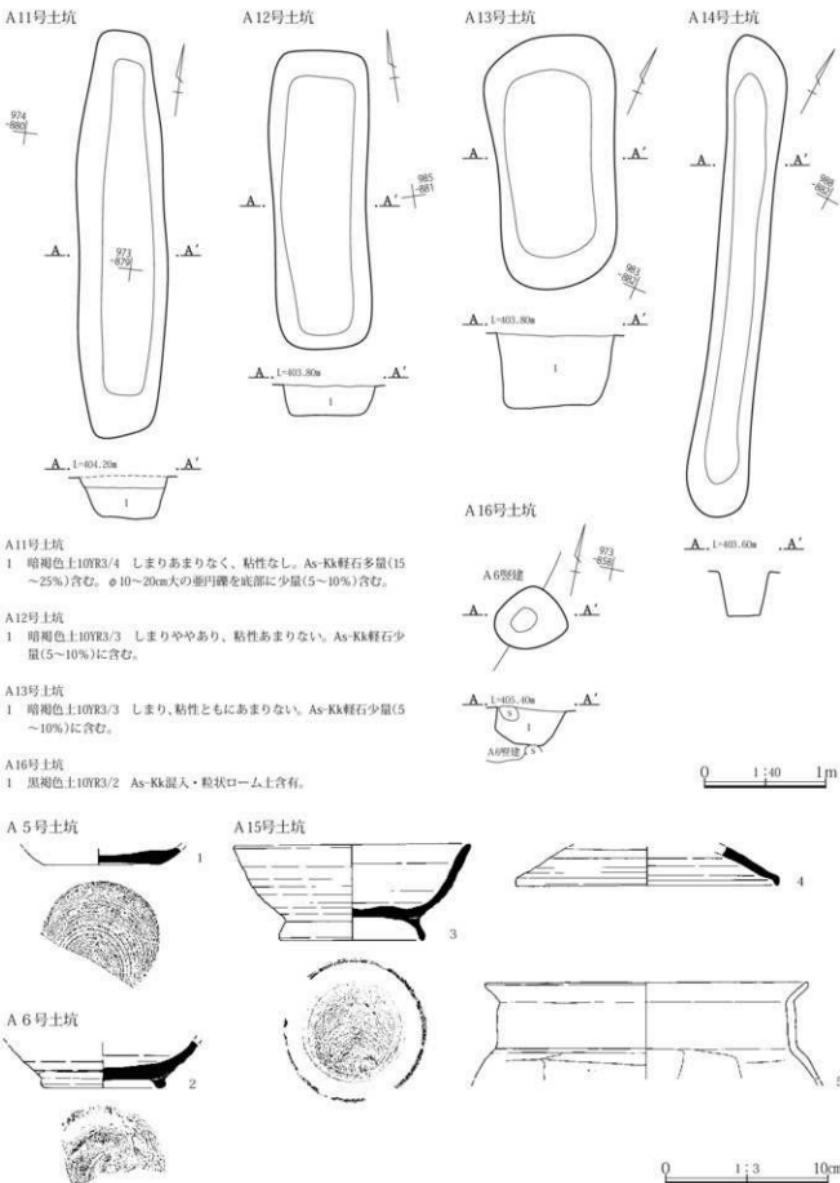
第177図 B-1号土坑群平面・遺物出土状況図・土層断面図・出土遺物図



第178図 B 2号土坑群平面図・土層断面図



第179図 A 4~10・15号土坑平面図・遺物出土状況図・土層断面図



第180図 A11~14・16号土坑平面図・土層断面図・土坑出土遺物図

が調査対象となる。A 1・2溝の下から検出された。形状 圓円長方形 規 模 長軸 166cm、短軸 131cm、深さ 15cm 長軸方向 N-22°-E 遺 物 床面や上から、須恵器楕(3)、土器器表(5)、覆土中より須恵器杯蓋(4)が出土している。時 期 土器より 8世紀後半と推定する。

ピット(第181図、P.L. 121)

位 置 A・C区から確認されている。C区は、C区中央北側、C 2号竪穴建物の北側にある。D区では、東側全体から検出されている。A区より 1基(A 4号)、C区より 4基(C 207・235・236・246号)が検出された。形 状・規 模 平面形は、円形・楕円形で、径が30cm前後ものが多く、深さは、10~20cmに入るものが多い。遺 物 ピットからの遺物の出土は無い。時 期 遺構確認面などから古代としたが、中近世以降になるものも含まれる可能性がある。

溝(第182~184図、P.L. 122~125)

A区東部に調査区北側から南側に向けて流れる溝が3本検出された。上下に重なり新旧関係にある。

A 3号溝(第182図、P.L. 122)

位 置 A 3区東部にある。座標値 X=60982~60986 Y=-92877~9287 遺存状況・重複 溝南北が調査区外となる。A 1・2号溝の下から検出された。A 15号土坑により壊される。規 模 長さ3.45+m、幅 0.4m、最大深さ0.11cm 走流方向 N-28°-E 遺 物 須恵

器杯(1) 時 期 溝内より出土した杯は9世紀後半に比定されるが、溝内出土の為大まかに古代と推定する。

A 2号溝(第182図、P.L. 122)

位 置 A 3区東部にある。座標値 X=60961~60987 Y=-92876~9288 遺存状況・重複 溝南北が調査区外となる。上から A 1号溝、下から A 3号溝が検出された。規 模 長さ26.88+m、幅 1.2~1.8m、最大深さ 1.16cm 走流方向 N-10°-W~N-5°-E~N-35°-W~N-17°-E 時 期 遺物の出土なく不明。A 1号溝より古く、古代と推定した。

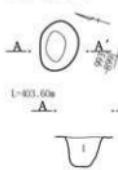
A 1号溝(第183図、P.L. 123)

位 置 A 3区東部にある。座標値 X=60961~60988 Y=-92875~9288 遺存状況・重複 溝南北が調査区外となる。下から A 2・3号溝が検出された。規 模 長さ27.12+m、幅 1.2~3.36m、最大深さ 54cm 走流方向 N-7°-W 時 期 遺物の出土なく不明。A 2号溝より新しく、古代以降と推定した。

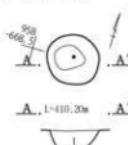
C 2号・D 32号溝(第184図、P.L. 124・125)

位 置 A 3区東部にある。すぐ南に D 1号墳がある。座標値 X=60942~60946 Y=-92623~9266 遺存状況・重複 溝北東部が途切れる。南西部端は南壁にあたり調査区外となる。規 模 長さ 32.58+m、幅 0.60m、最大深さ 0.12cm 走流方向 N-63°-E 形 状 幅60cmと細長い溝であるが、北東部で途切れていることなどから、本来はもう少し幅があったが、上部削平で幅が狭くなっているものと思われる。時 期 As-Kk層の下面から出土したので古代と判断した。

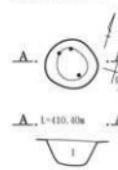
A 4号ピット



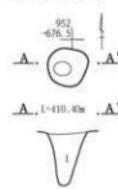
C 207号ピット



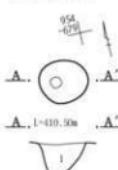
C 235号ピット



C 236号ピット



C 246号ピット



A 4号ピット

1 剛褐色土10YR3/4 しまりややあり。粘性あまりなし。As-Kk層石多量(15~25%)含む。

C 235号ピット

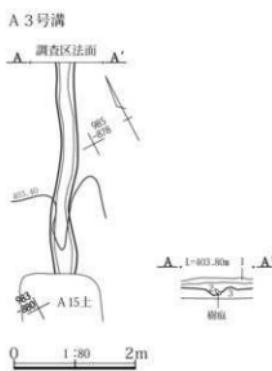
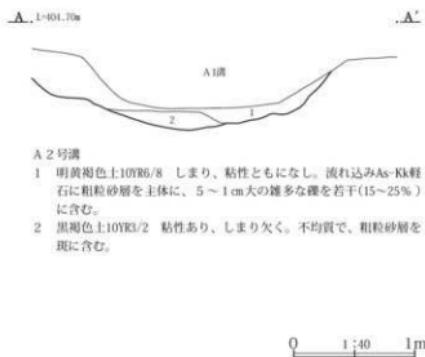
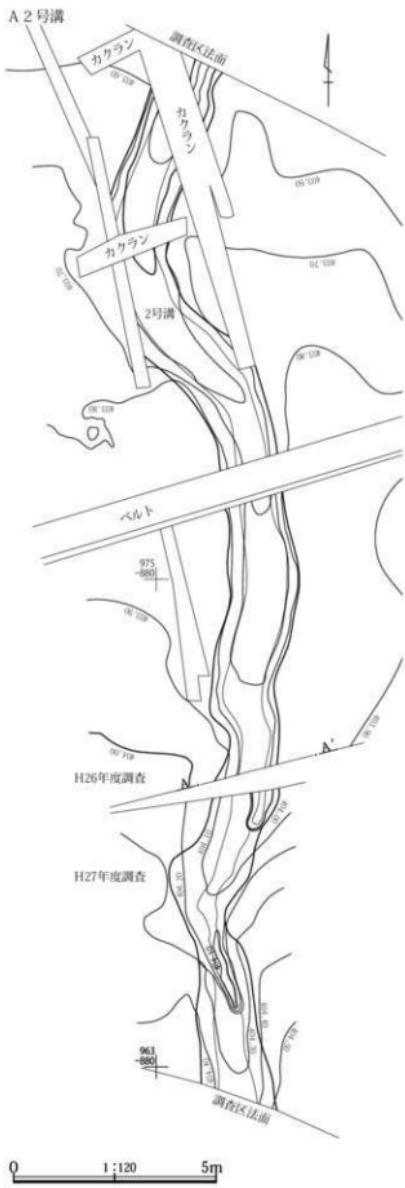
1 黒色土10YR2/1 白色粒1%、黄褐色粒1%強含む。しまりはやや弱い。

C 207・236・246号ピット

1 黒褐色土10YR2/2 白色粒1%程度、黄褐色粒1%程度含む。地山暗褐色上ブロックを10%程度含む。C 235号ピットは良い。



第181図 A 4、C 207・235・236・246号ピット平面図・土層断面図

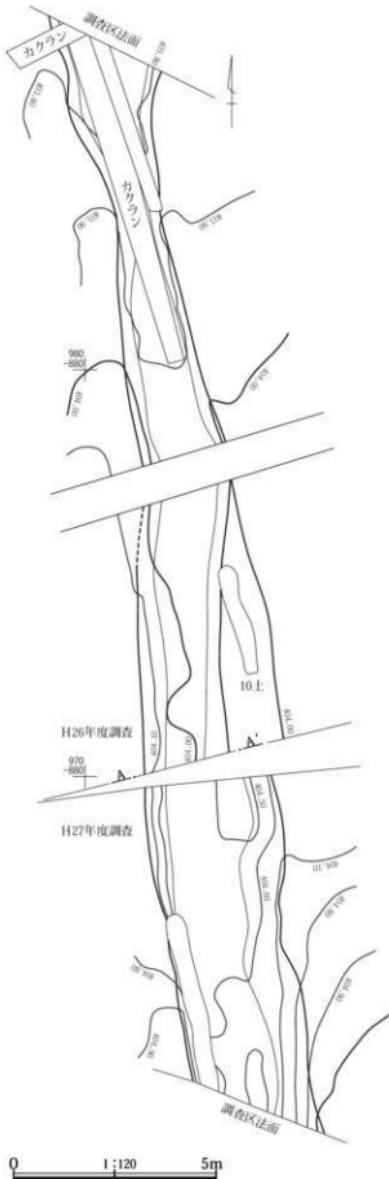


- A 3号講

 - 1 黒褐色土10YR3/1 しまりなく、粘性あり。(乾燥すると、しまり頭著で、びく削れる。)炭化鉄、軽石粒含まない。
 - 2 暗褐色土10YR3/3 しまりなく、粘性あり。1層に比べて、色調くすみ、5mmの大炭化鉄、3~5mmの白色・褐色土軽石を極僅か含む。
 - 3 にぶい黄褐色土10YR4/3 しまりあまりなく、粘性ややあり。(15土切がるが、黄褐色範囲不明)



第182図 A 2・3号溝平面図・土層断面図・出土遺物図



焼土集中(第185・186図、P.L. 126・186)

焼土集中は、A区に集中して検出された。A1区に1基(A1号焼土)、A3区に7基(2~8号焼土)ある。

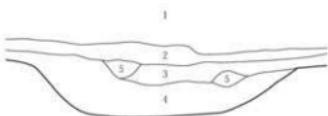
A3号焼土(第185図、P.L. 126)

位 置 A3区中央部や東、北壁付近にある。西隣にA1号窯穴建物がある。座標値 X=60984・60985 Y=-92875・-9287 遺存状況 完存 形状 不定形 規 模 長軸 107cm、短軸 103cm、深さ15cm 焼土の状況 焼土が、平面的に括がっている。底面は浅い土状である。下位の段丘礫層が露出する。遺 物 須恵器杯(1・2)、須恵器楕(3)、須恵器甕(5)、土師器小型甕(4)が出土した。時 期 土器より9世紀前半に比定される。

A8号焼土(第185図、P.L. 126)

位 置 A3区中央部、北壁付近にある。東4mにA5号焼土がある。座標値 X=60989 Y=-92884・-9288 遺存状況 完存 形状 不定形 2つに分かれている。規 模 西側長軸 30cm、短軸 15cm、深さ4cm 東側長軸 13cm、短軸 8cm、深さ1cm 焼土の状況 東西の焼土ともに焼土が平面的に括がっている。底面は浅い土坑状である。遺 物 須恵器杯蓋(6)、土師器鉢(7)、土師器甕(8)が出土した。時 期 土器より9世紀前半に比定される。

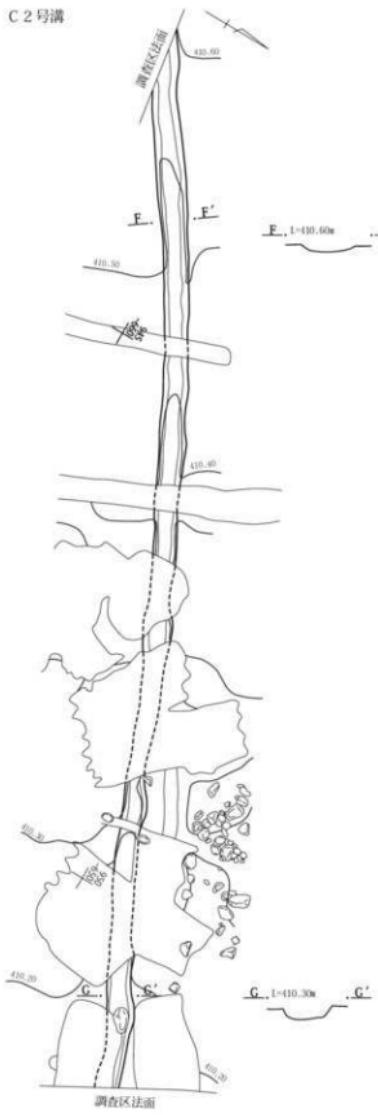
A-A' L=405.20m



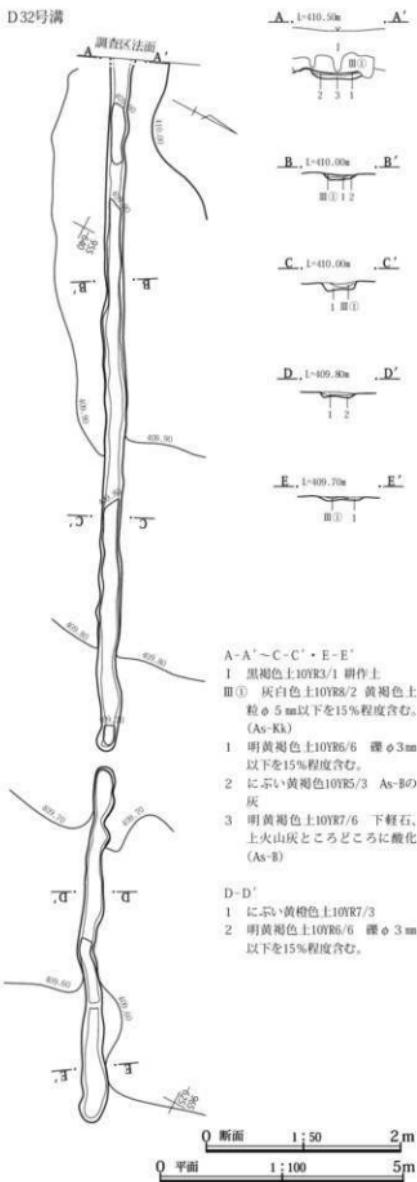
- 1 黒褐色土10YR3/2 しまり、粘性ともにあまりない。As-Kk軽石多量(15~25%)に含む。
- 2 黒褐色土10YR3/3 しまり、粘性ともになし。As-Kk軽石少量(5~10%)に含む。1層よりも色調暗い。
- 3 喰褐色土10YR3/3 しまりなく粘性ややあり。As-Kk軽石多量(15~25%)に含む。1層よりも色調暗く、流れ込みと思われる粗粒砂層ブロック少量(5~10%)含み、段分凝集層を斑に含む。
- 4 喰褐色土10YR3/3 しまりややあり、粘性なし。As-Kk軽石大量(30~50%)に含む2次堆積軽石層ブロック。

第183図 A1号溝平面図・土層断面図

C 2号溝

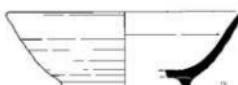
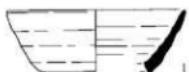
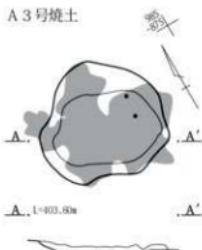


D 32号溝



第184図 C 2、D 32号溝平面図・土層断面図

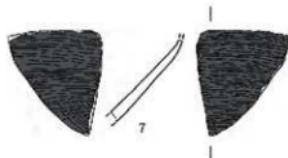
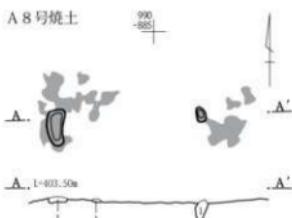
A 3号焼土



1 明赤褐色土2.5YR5/6 しまり、粘性あまりない。 ϕ 2~30mm大の炭を不均質に若干含む。



A 8号焼土

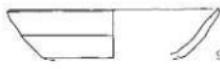
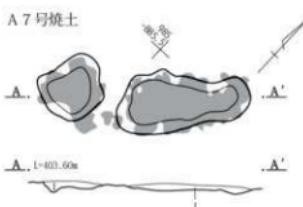


1

7

1 明赤褐色土2.5YR5/8 しまり、粘性あまりない。地山黒褐色土を不均質に少量含む。

A 7号焼土



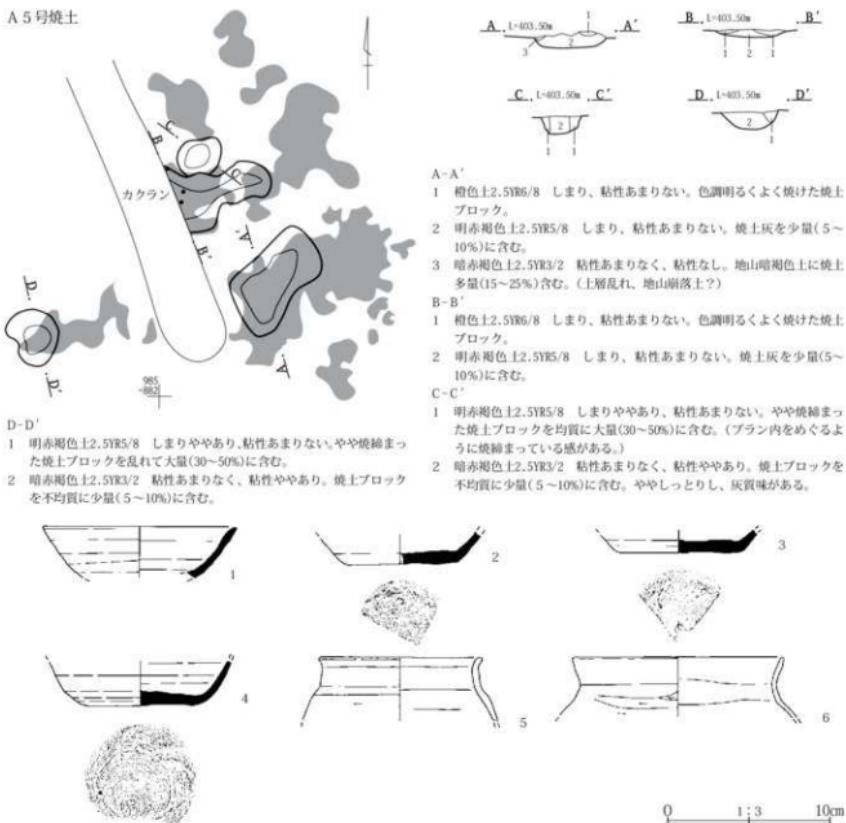
1 明赤褐色土2.5YR5/6 しまり、粘性あまりない。不均質で、地山黒褐色土を含む乱れた焼土痕。

0 1:40 1m

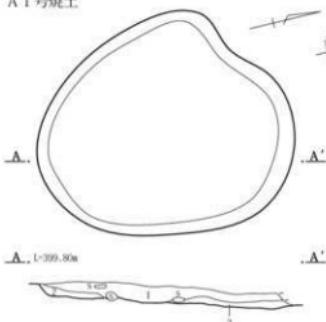
0 1:3 10cm

第185図 A 3・7・8号焼土平面図・土層断面図・出土遺物図

A 5号焼土



A 1号焼土



A 2号焼土



第186図 A 1・2・5号焼土平面図・土層断面図・出土遺物図

A 7号焼土(第185図、P.L. 126)

位 置 A 3区中央部、北寄りにある。北4mにA 8号焼土がある。座標値 X=60984・60985 Y=-92884～-92886 **遺存状況** 完存 **形 状** 不定形 2つに分かれている。規 模 西側長軸55cm、短軸53cm、深さ10cm 東側長軸112cm、短軸54cm、深さ7cm **焼土の状況** 東西の焼土とともに焼土が平面的に拡がっている。深さ5cmほどの焼土層が形成される。底面は浅い土坑状である。

遺 物 土師器杯(9)が出土した。時 期 土器より9世紀後半に比定される。

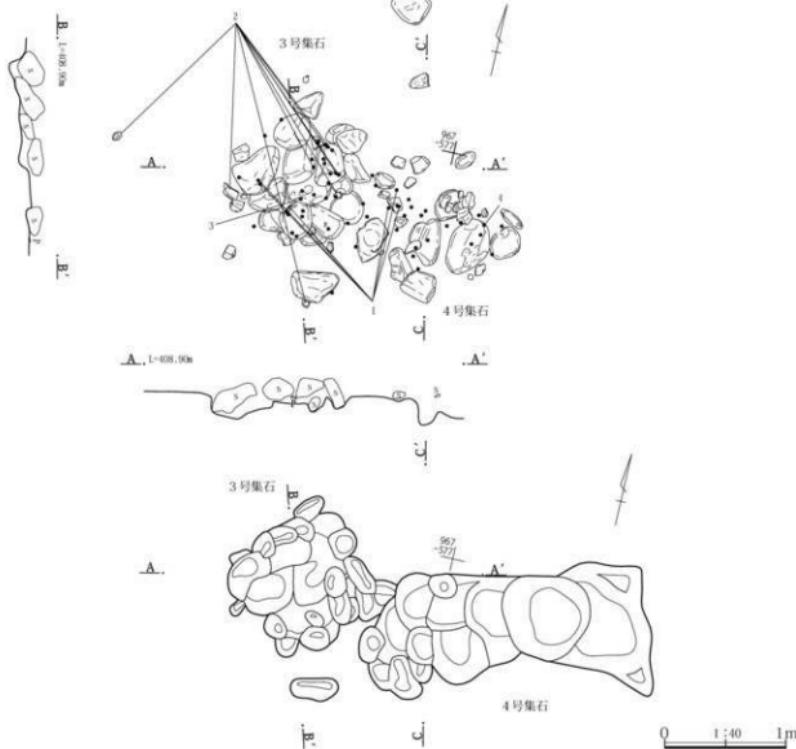
A 5号焼土(第186図、P.L. 126・186)

位 置 A 3区中央部や東、北壁付近にある。西4mにA 8号焼土がある。座標値 X=60984～60987 Y=-92879～-92883 **遺存状況** 一部カクランにより壊され

ている。形 状 不定形 3つに分かれている。規 模 全体の長軸315cm、短軸315cm、深さ16cm **焼土の状況** 3つに区分したが全体的に焼土が平面的に拡がっている。深さ5cmほどの焼土層が形成される。底面は浅い土坑状である。遺 物 須恵器杯(1～4)、土師器甕(5・6)が出土した。時 期 土器より9世紀後半に比定される。

A 2号焼土(第186図、P.L. 126)

位 置 A 3区中央部にある。座標値 X=61001 Y=-9290 **遺存状況** 北側残り悪い **形 状** 不定形 **規 模** 長軸69cm、短軸31cm、深さ12cm **焼土の状況** 焼土は少ない。時 期 遺構確認面がAs-B下面のため、古代に比定される。



第187図 D 3号集石平面・遺物出土状況図・断面図・掘方図

A 1号焼土(第186図、P.L. 126)

位 置 A 1 区西部やや南側にある。座標値 X = 61013～61015 Y = -92953～-9295 遺存状況 完存 形 状 楕円形 規 模 長軸 212cm、短軸 183cm、深さ15cm 焼土の状況 焼土は少ないが、木炭片が覆土に含まれている。下位の段丘疊層が露出する。時 期 遺構確認面より古代に比定される。

集石(第187・188図、P.L. 127・187)

集石は、D区から検出された。2基が並列しているように見える。

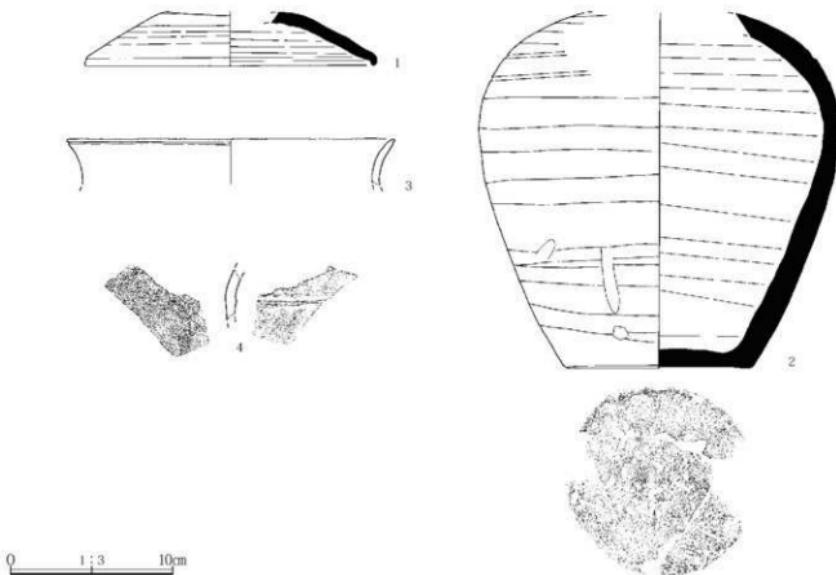
D 3号集石(第187・188図、P.L. 127・187)

位 置 D区中央部部やや西、南側にある。南西8mの箇所にD23号竪穴建物がある。D 4号集石が東に隣接する。座標値 X = 60965 Y = -92577～-9257 遺存状況 完存 形 状 不定形 規 模 長軸172cm、短軸120cm、深さ4～7cm 集石状況 現状では2段の石積みが残る。柔らかくした土の上に石を据え置いているのか、石

を置いた痕跡が良く残っている。一部石の下を掘くぼめている。遺物出土状況 須恵器壺(2)、土師器壺(3)が、集石の中から破碎した状況で出土している。須恵器蓋杯(1)は、3号、4号の両集石の中から破片で出土している。遺 物 須恵器蓋杯(1)、須恵器壺(3)、土師器壺(3)が出土した。時 期 土器より9世紀に比定される。

D 4号集石(第187図、P.L. 127)

位 置 D区中央部部やや西、南側にある。南西8mの箇所にD23号竪穴建物がある。D 3号集石が西に隣接する。座標値 X = 60965～60967 Y = -92575～-9257 遺存状況 完存 形 状 不定形 規 模 長軸135cm、短軸125cm深さ4～8cm 集石状況 現状では石は寄せ集められているが、石積みは無い。一部石の下を掘くぼめている。遺物出土状況 土師器壺(4)、3号、4号の両集石の中から破片で出土している須恵器蓋杯(1)が、集石の中から破碎した状況で出土している。遺 物 須恵器蓋杯(1)、土師器壺(4)が出土した。時 期 土器より9世紀に比定される。



第188図 D 3号集石出土遺物図

畠(第189・190図、P.L. 128・129・186)

畠は、A3区中央部～東部にA11・9・10号と検出されている。As-B下から、最大径8mm程度の植物由来と想定される空洞があり、作物の痕跡と想定された跡が確認された。

A11号畠(第189図、P.L. 128・186)

位 置 A3区中央部北側にある。北西2mの箇所にA2号焼土、西にA7・8号土坑がある。座標値 X=60985～60997 Y=-92980～-9290 遺存状況 上部は削平され、さくの一部が線状に残存している。形 状 短冊形の畠である。10～13cmのさく幅で、N-13°-Wの方向で耕されている。面 積 75.7+m² 遺物出土状況

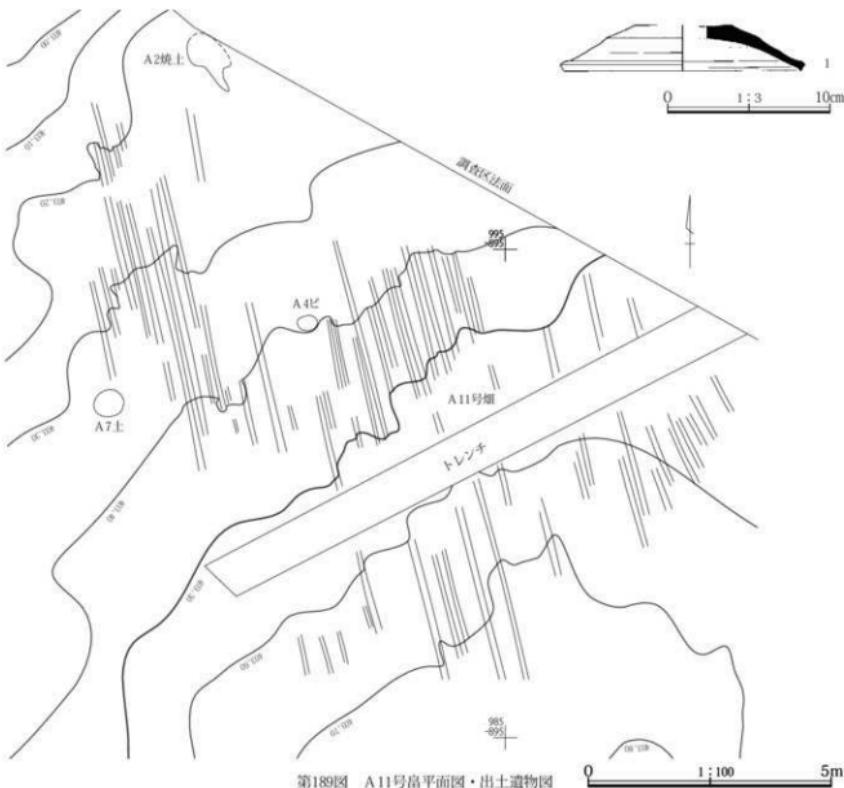
須恵器杯蓋(1)が畠上面から出土している。時 期 須恵器杯蓋は9世紀に比定される。

A9号畠(第190図、P.L. 129)

位 置 A3区東部にある。南4mの箇所にA10号畠がある。西にA5号土坑がある。座標値 X=60977～60981 Y=-92866～-9286 遺存状況 上部は削平され、さくの一部が線状に残存している。形 状 短冊形の畠である。20～23cmの歛幅で、歛長は2.40+m、である。歛条数は4+本である。主軸方向 N-20°-Wの方向で耕されている。面 積 4.767+m² 時 期 As-B下の遺構確認面から古代以降とする。

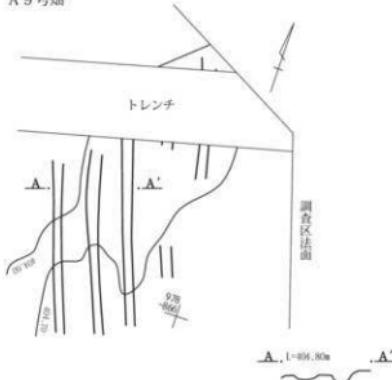
A10号畠(第190図、P.L. 129)

位 置 A3区東部にある。北4mの箇所にA9号畠

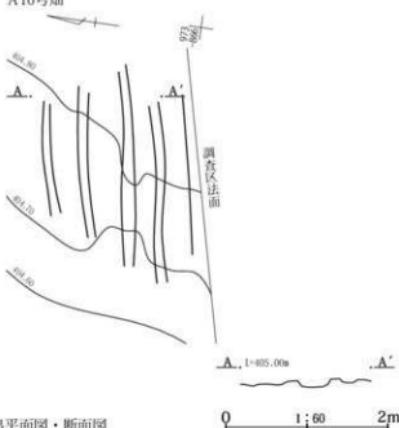


第189図 A11号畠平面図・出土遺物図

A 9号烟



A 10号烟



第190図 A 9・10号扇平面図・断面図

0 1:60 2m

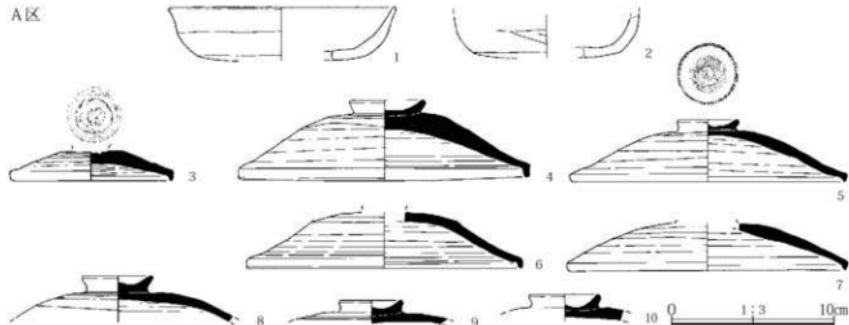
がある。西に A 5 号土坑がある。座標値 X = 60972 ~ 60974 Y = -92866 ~ -9286 遺存状況 上部は削平され、さくの一部が線状に残存している。形 状 短冊形の扇である。20 ~ 42cm の戸幅で、戸長は 2.40m である。戸条数は 4 + 本である。主軸方向 N=80° ~ E の方向で耕されている。面 積 4.067+ni 時 期 遺構確認面から古代以降と推定する。

遺構外遺物(第191~196図 P L. 187・188)

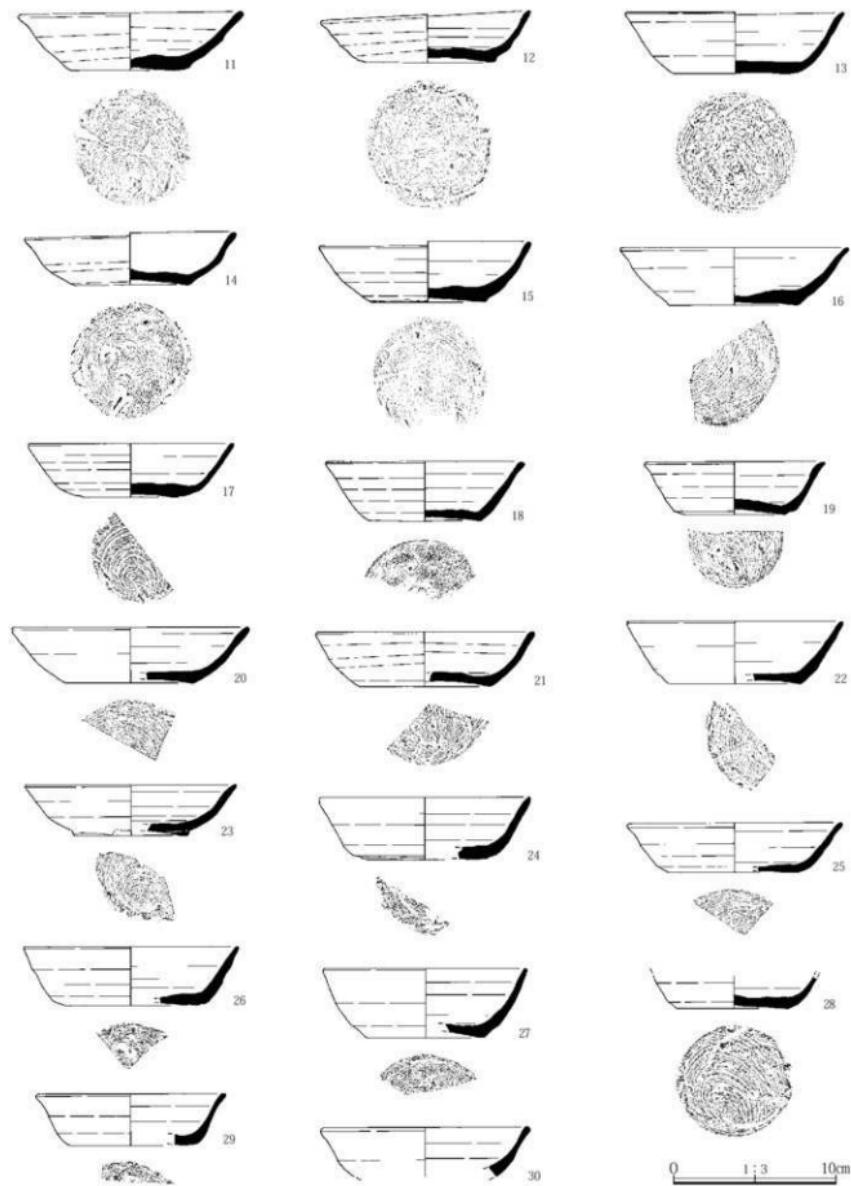
A ~ D 区まで遺構外遺物の出土を見るが、特に A 区からの出土が多い。(第191~195図)

A区(第191~195図) 須恵器杯蓋(3 ~ 10)、須恵器杯(11 ~ 43)、須恵器椀(44 ~ 58、60 ~ 62)、須恵器盤(59)、

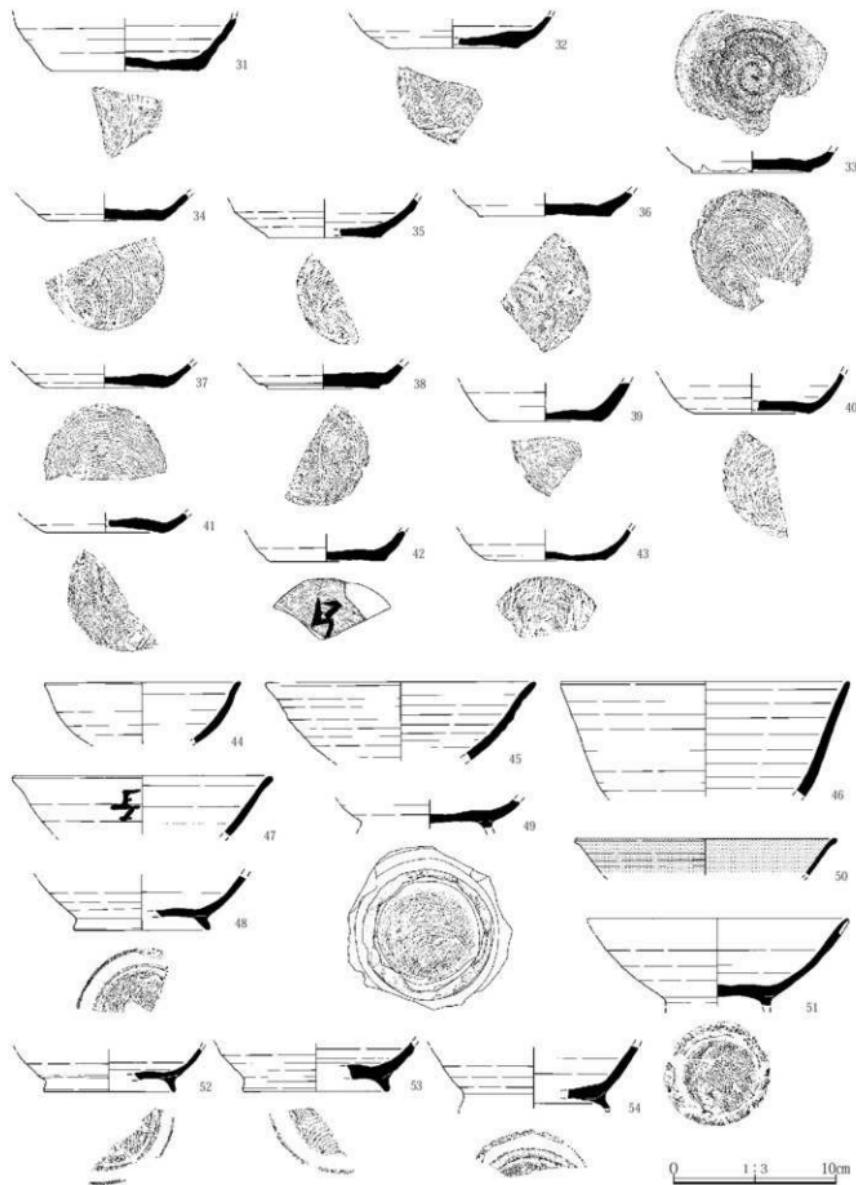
A区



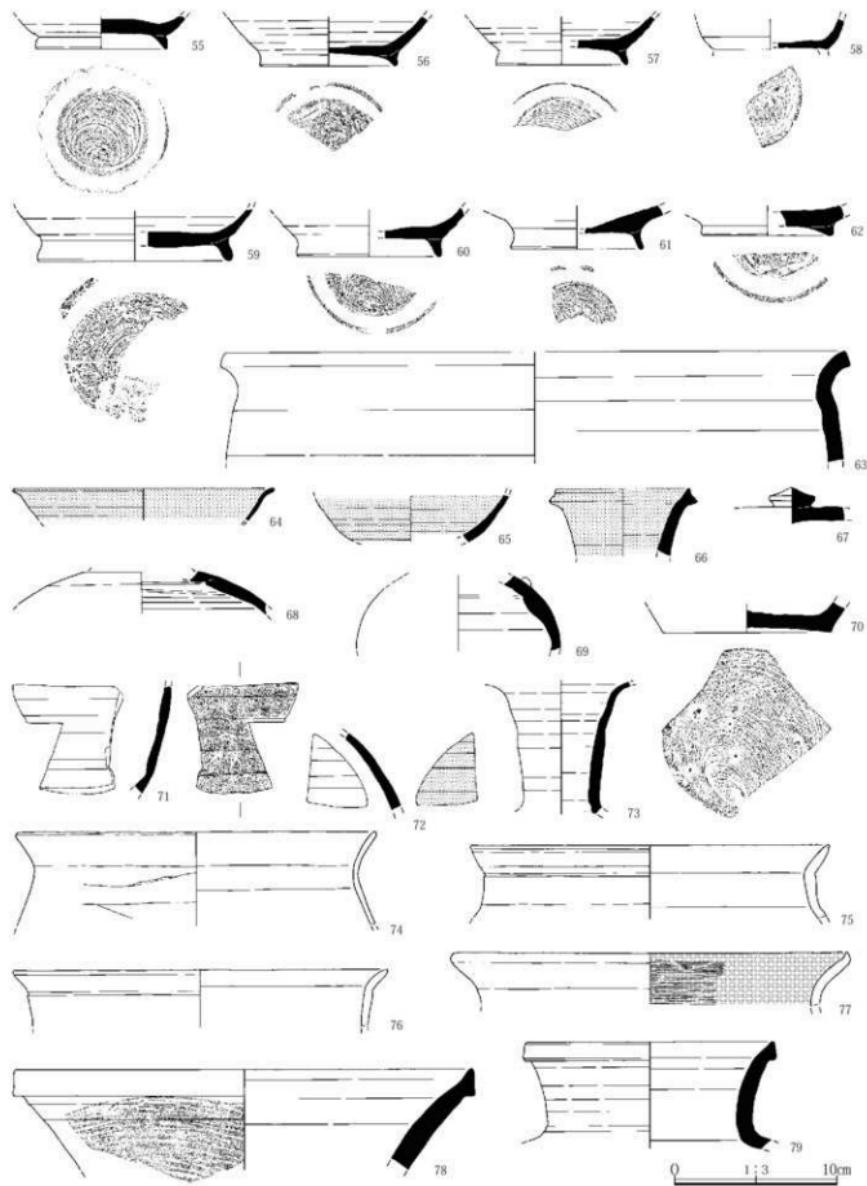
第191図 A区遺構外出土遺物図(1)



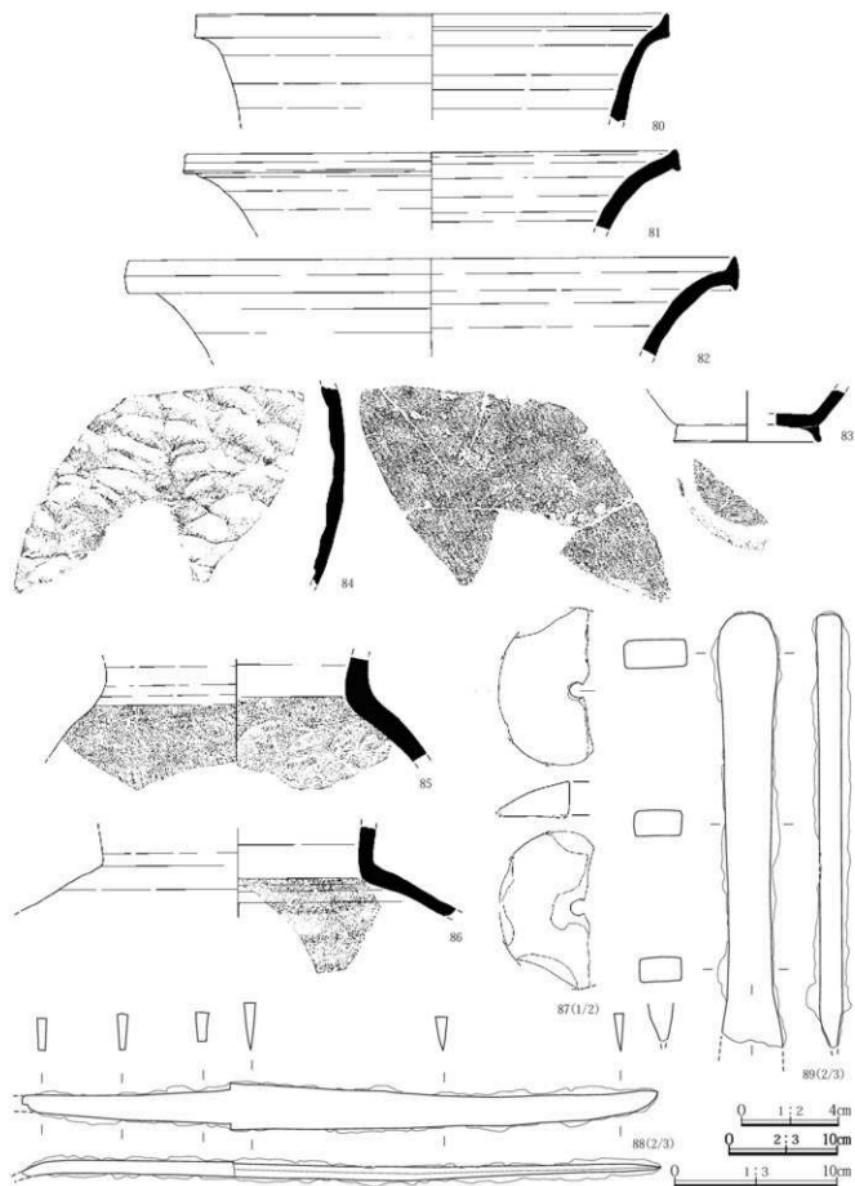
第192図 A区遺構外出土遺物図(2)



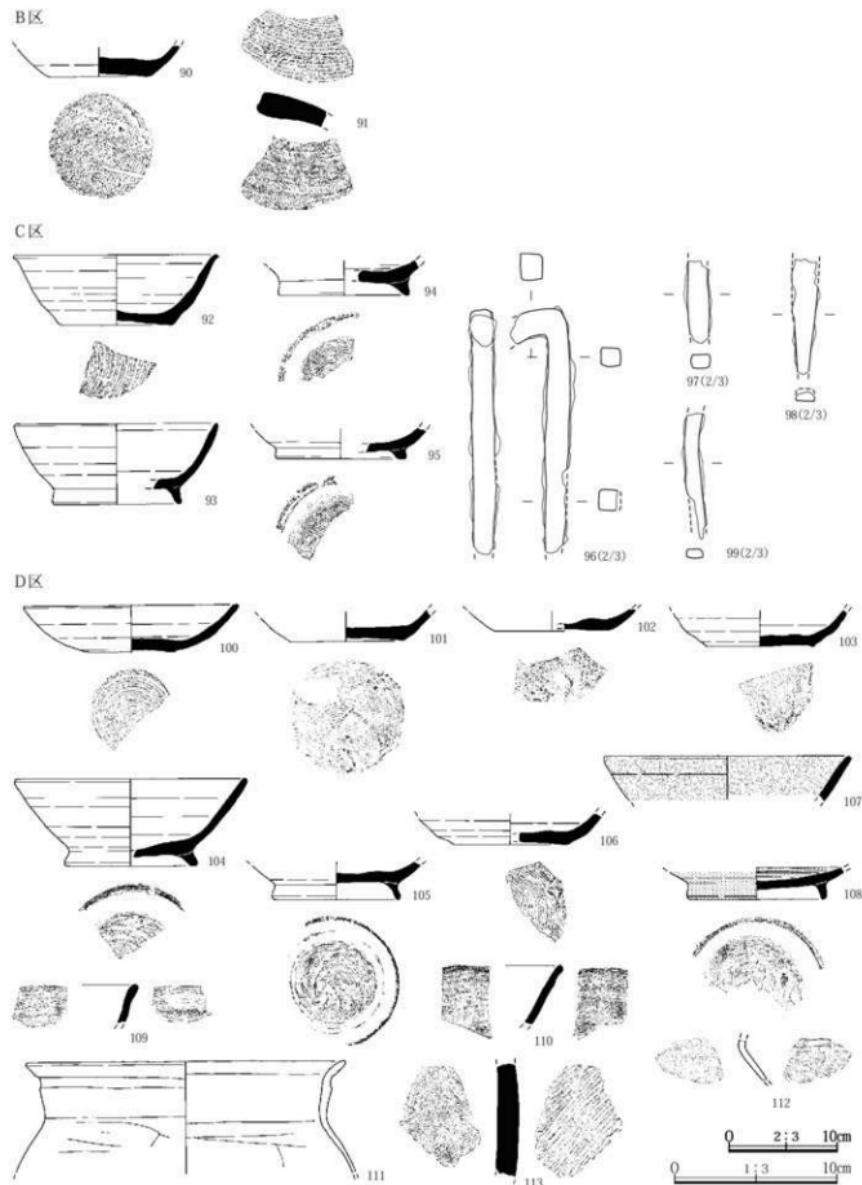
第193図 A区遺構外出土遺物図(3)



第194図 A区遺構外出土遺物図(4)



第195図 A区遺構外出土遺物図(5)



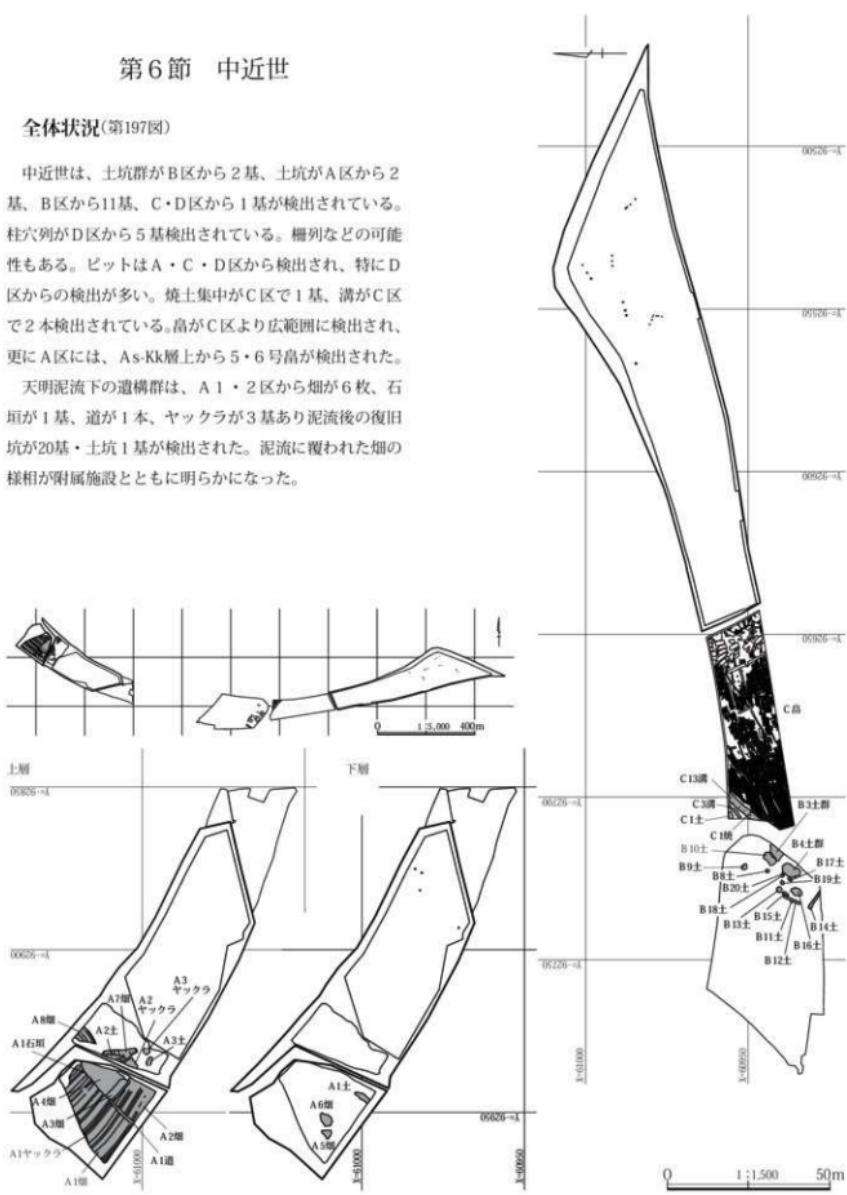
第196図 B～D区遺構外出土遺物図

第6節 中近世

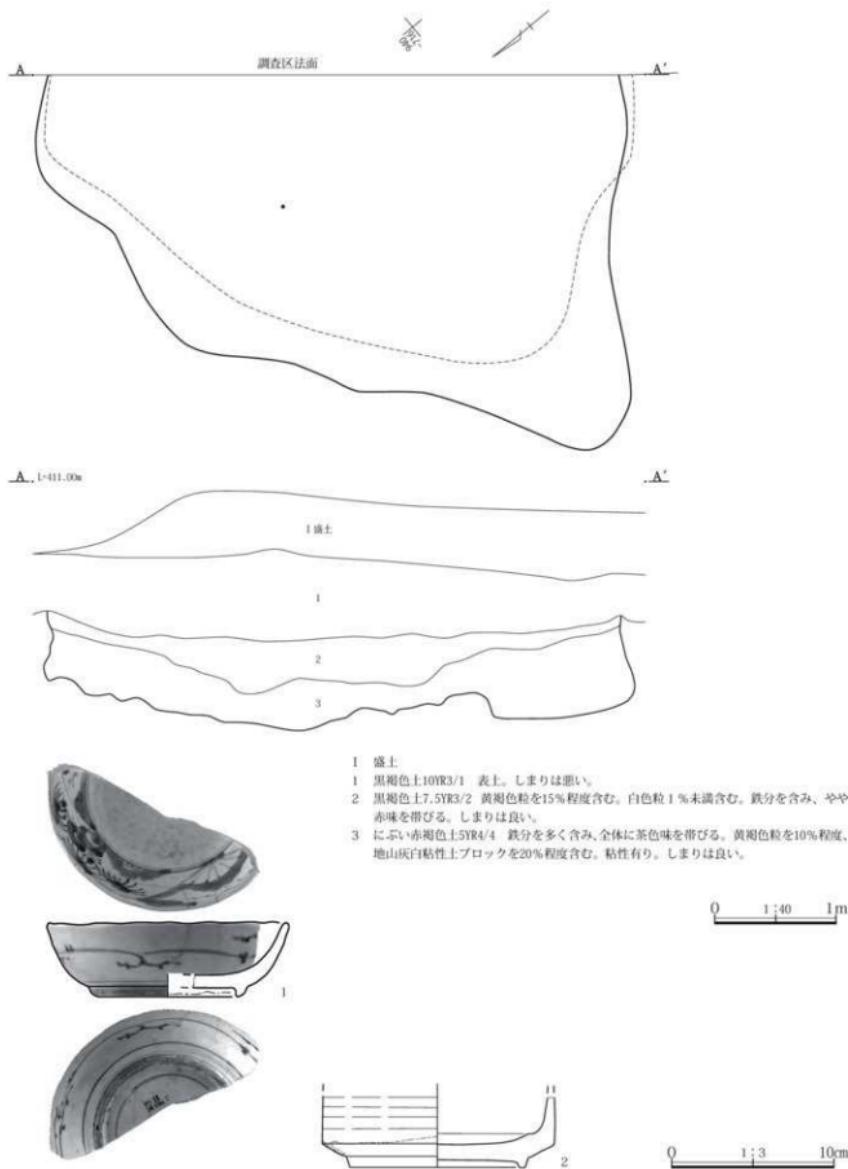
全体状況(第197図)

中近世は、土坑群がB区から2基、土坑がA区から2基、B区から11基、C・D区から1基が検出されている。柱穴列がD区から5基検出されている。柵列などの可能性もある。ピットはA・C・D区から検出され、特にD区からの検出が多い。焼土集中がC区で1基、溝がC区で2本検出されている。畠がC区より広範囲に検出され、更にA区には、As-KK層上から5・6号畠が検出された。

天明泥流下の遺構群は、A1・2区から畠が6枚、石垣が1基、道が1本、ヤックラが3基あり泥流後の復旧坑が20基・土坑1基が検出された。泥流に覆われた畠の様相が附属施設とともに明らかになった。



第197図 中近世遺構分布図



土坑群

土坑が複数重なって出土する土坑群がB区から2基検出された。

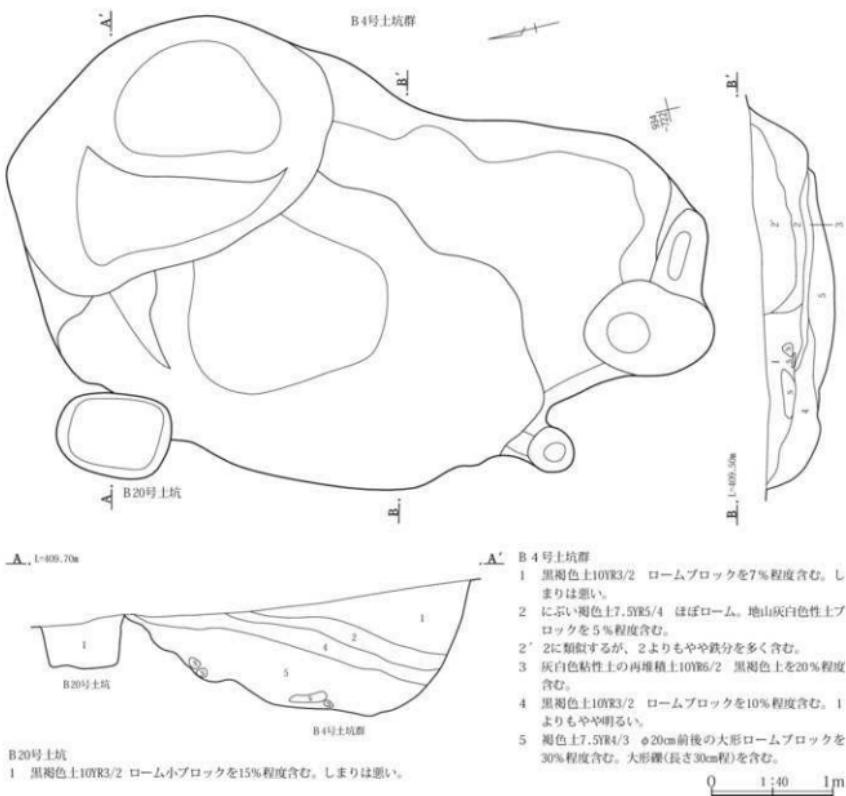
B 3号土坑群(第198図 P.L. 129・188)

位 置 B区南東部端に位置し、東壁と接する。南西3mにB 4号土坑群がある。座標値 X=60938~60943 Y=-92714~-92719 **遺存状況** 土坑東側は調査区外である。**形 状** 不整形 **規 模** 東西3.08m、南北5.22m **長軸方向** N-59°-E **掘 方** 床面は凹凸が激しく、複数の土坑が掘削された様相を示す。残存壁高58~90cmある。**遺物出土状況** 肥前磁器の染付皿が床面

やや上から出土している。**性 格** 大小の土坑群が掘削されていることなどや、土坑の床面は灰白色粘土であり、この粘土を採掘するための土坑と推定する。**遺 物** 肥前磁器の染付皿(1)、非掲載だが、瀬戸・美濃陶器丸碗が出土している。**時 期** 肥前磁器の染付皿の年代が17世紀末から18世紀中葉であり、少なくともこの時期以降である。

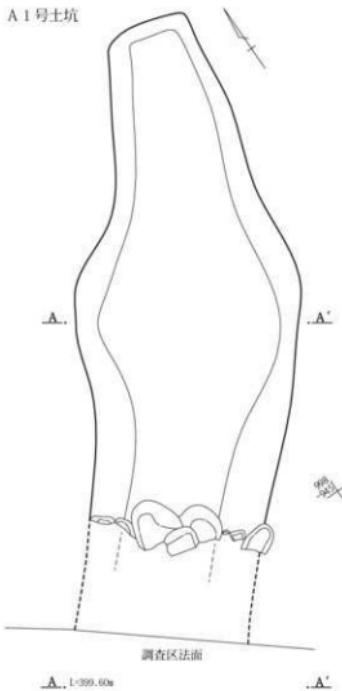
B 4号土坑群(第199図 P.L. 129)

位 置 B区南東部に位置し、東壁に近い。北東3mにB 3号土坑群がある。座標値 X=60933~60939 Y=-92720~-92724 **遺存状況** 遺構全体が調査対象となる。**形 状** 不整形 **規 模** 東西3.45m、南北5.95m



第199図 B 4号土坑群平面図・土層断面図

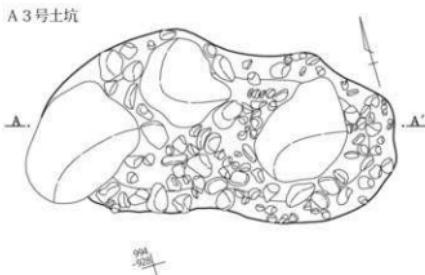
A 1号土坑



調査区法面



A 3号土坑



A 3号土坑



長軸方向 N-27°-E 挖 方 大きな土坑が南北方向に掘削された後に、南西部や北東部にやや小さめの土坑を掘削した痕跡がある。床面は凹凸が激しく、複数の土坑が掘削された様相を示す。残存壁高42~98cmある。
性 格 B 3号土坑群と同様、大小の土坑群が掘削されていることなど、土坑の床面は灰白色粘土であり、この粘土を採掘するための土坑と推定する。**時 期** 近くに所在するB 3号土坑群と地形的にも近似するので、ほぼ同時期と推定する。

土坑

A区には、礫が多く、覆土に含む土坑群がある。畑作中に出た礫を入れている。

A 1号土坑(第200図 P.L. 130)

位 置 A 1区南東部にある。座標値 X=60997~61002 Y=-92943~-92947 遺存状況 南部は調査区外となる。天明泥流下の面から出土している。形 状 不整長楕円形 規 模 長軸 512cm、短軸 188cm、深さ 56cm 長軸方向 N-27°-E 性 格 磂が多く覆土に含まれており、畑開墾時に出てきた礫を埋めた土坑と想定する。時 期 天明泥流下の畑の下層から検出されたので、18世紀後半以前と推定する。

A 3号土坑(第200図 P.L. 130)

位 置 A 3区南部にある。座標値 X=60996~60997 Y=-92932~-92935 遺存状況 全体が調査対象である。天明泥流下の畑の下層面から出土している。形 状 不整長楕円形 規 模 長軸290cm、短軸153cm、深さ28cm 長軸方向 N-74°-W 性 格 磂が多く覆土に含まれており、畑開墾時に出てきた礫を埋めた土坑と想定する。時 期 天明泥流下の畑の下層から検出されたので、18世紀後半以前と推定する。

A 1号土坑

I 暗褐色土10IR3/3 $\phi 10\sim50\text{cm}$ 大の複数の円錐を大量に含む。

A 3号土坑

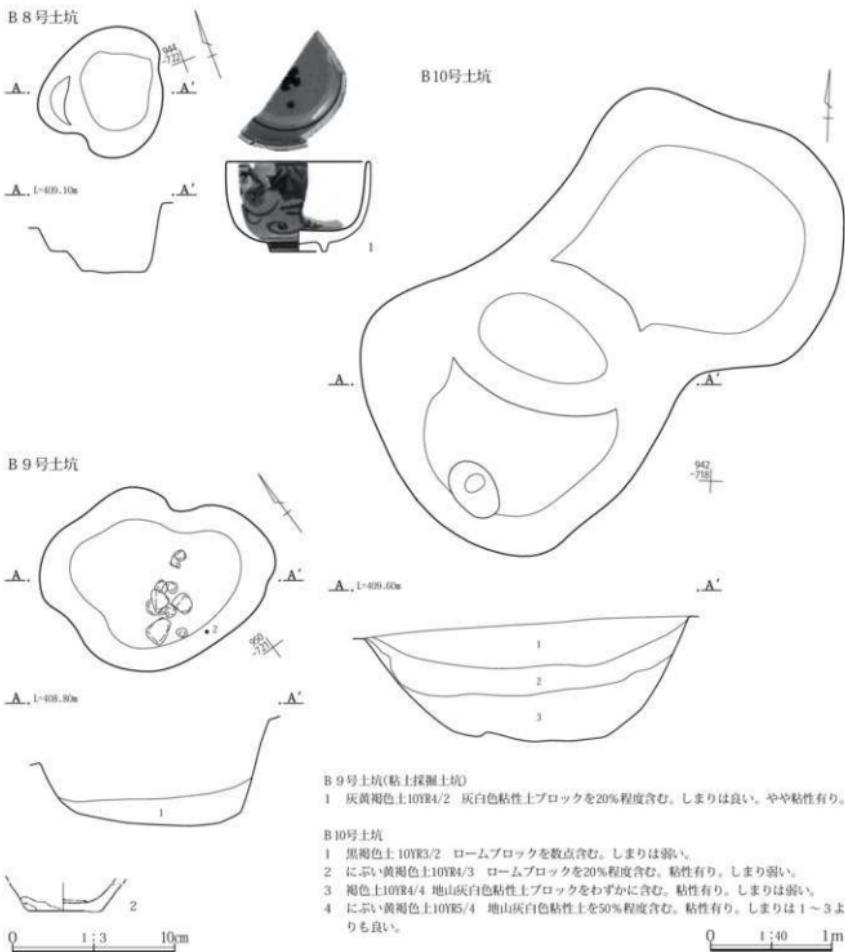
I 暗褐色土10IR3/3 $\phi 5\sim20\text{cm}$ 大の複数の円錐を大量(30~50%)に含む。加えて、70cm近い大礫3個を含む。

0 1:40 1m

第200図 A 1・3号土坑平面図・土層断面図

B区土坑 B 3・4号土坑群の西側から、11基の土坑が検出された。うち、B 10号土坑(長軸432cm、短軸253cm、深さ120cm)は、灰白色粘土を地山として、複数の土坑が掘削された様子を示しているので、粘土探査坑の可能性がある。B 12・14号土坑のように溝状に長い土坑もある。それ以外は不定形の土坑である。遺物は、B 8号土坑よ

り肥前磁器染付小丸碗(第201図1)、B 9号土坑より土師器小型壺底部(第201図2)、B 11号土坑より瀬戸・美濃陶器丸壺底部(第202図1)、B 19号土坑より、肥前磁器染付筒型碗(第203図1)が出土している。18世紀後葉から18世紀初頭にかけての遺物(肥前染付小丸碗、肥前染付筒型碗)が多い。

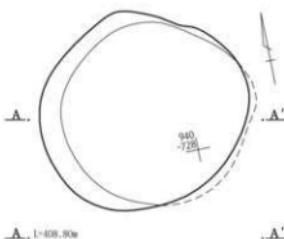


第201図 B 8・9・10号土坑平面図・土層断面図・出土遺物図

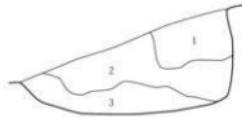
C区土坑(第205図 P.L. 131)

C区土坑は1基あり、C区北西部端にあり、北側は調査区外である。不整形で、長軸214cm、短軸151cm、深さ45cmである。

B13号土坑



A. 1-408.80m



A'. 1-408.72m

B11・12号土坑

- 1 黒色土10YR2/1 2よりもやや黒味が強い。As-Kk極多量に含む。しまりは悪い。
- 2 黒褐色土10YR2/2 1よりもやや明るい。As-Kk極多量に含む。しまりは悪い。

B13号土坑

- 1 にぶい黄褐色土10YR4/3 暗褐色土を30%程度含む。粘性有り。
- 2 黑褐色土10YR2/2 黄褐色粒1%未満、白色粒1%未満、ロームを5%程度含む。しまりは弱い。
- 3 黑褐色土10YR3/2 ロームを15%程度含む。1、2よりもややしまりは良い。

B14号土坑

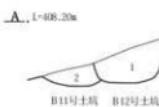
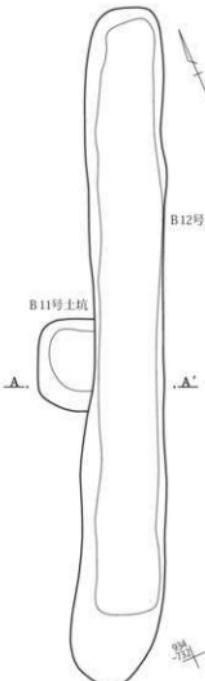
- 1 にぶい黄褐色土10YR5/4 ローム小プロックを3%程度、赤褐色粒1%程度、φ10~30cm塊を多量に含む。粘性有り。しまりは悪い。



D区土坑(第205図)

D区土坑は1基、D区西部にある。径42cm、深さ64cmである。この周辺にあるピットなども中世の可能性が高い。

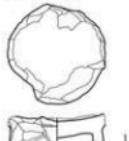
B11号・12号土坑



A. 1-408.20m

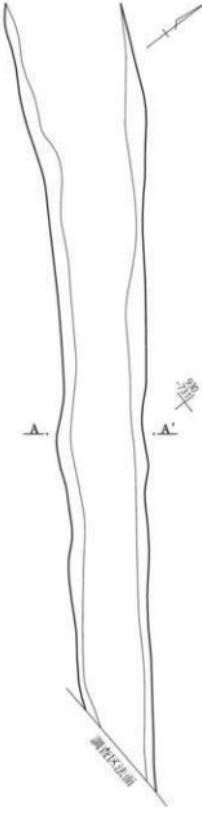
A'. 1-408.00m

B11号土坑



A. 1-408.20m

B14号土坑

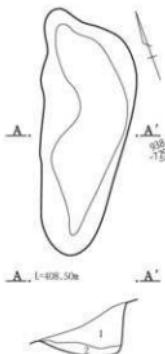


A. 1-409.00m

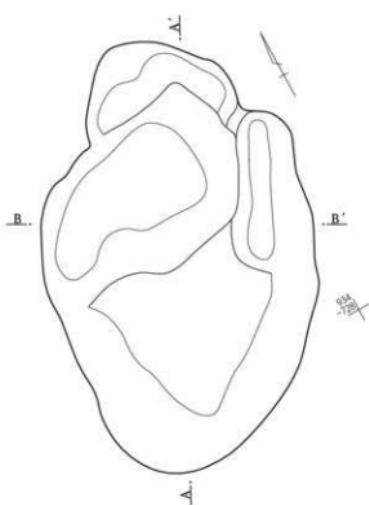
A'. 1-409.00m

第202図 B11~14号土坑平面図・土層断面図・出土遺物図

B15号土坑



B16号土坑



B17号土坑



B15号土坑

- 1 黒褐色土10YR2/3 ローム小ブロックを10%程度含む。しまりは悪い。
- 2 にぶい黄褐色土10YR4/3 ほぼローム。黒褐色土を10%程度含む。しまりは悪い。粘性有り。

B17号土坑

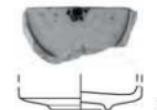
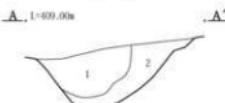
- 1 黒褐色土10YR3/2 ローム小ブロックを15%程度含む。しまりは悪い。
- 2 黒褐色土10YR3/2 φ 10cm程の礫を20%程度、ロームを10%程度含む。しまりは悪い。

B18号土坑

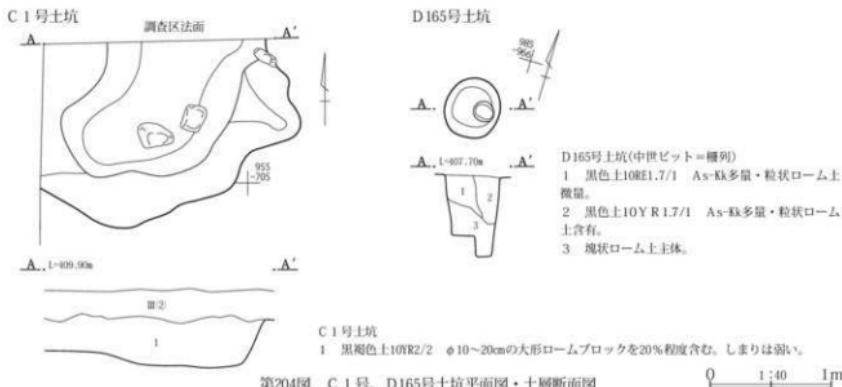
- 1 黒褐色土10YR3/2 ローム小ブロックを15%程度含む。しまりは悪い。

B19号土坑

- 1 黒褐色土10YR3/2 φ 10cm程の礫を20%程度、ロームを10%程度含む。しまりは悪い。
- 2 灰黃褐色土10YR4/2 ロームを30%程度含む。しまりは悪い。粘性有り。



第203図 B15～19号土坑平面図・土層断面図・出土遺物図



柱穴列

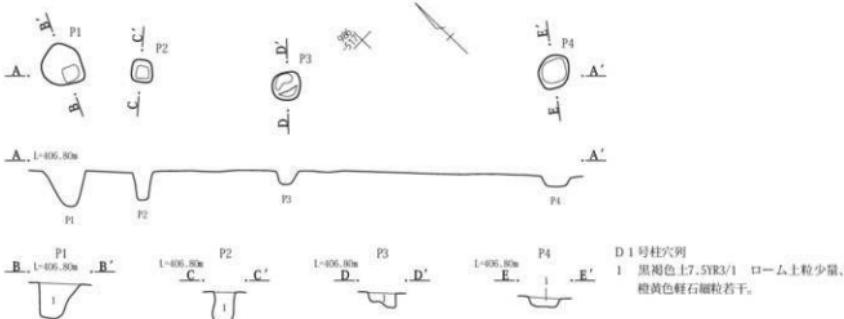
D区には柱穴列と想定したいいくつかの遺構群がある。

D 1号柱穴列(第205図、P.L. 133)

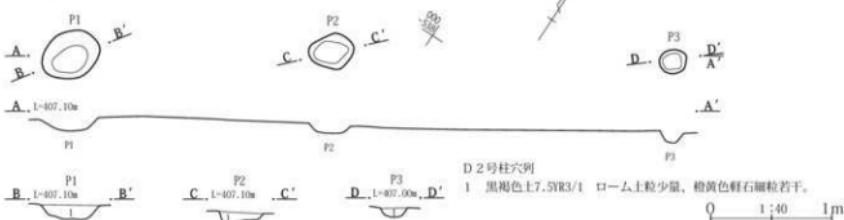
位 置 D区東端中央部にある。座標値 X=61003～

61023 Y=-92935～-92965 遺存状況 直線状に4つの柱穴が並ぶ 規 模 全長(P 1-P 4)404cm、柱間(P 1-P 2)64cm、(P 2-P 3)120cm、(P 3-P 4)220cm 長軸方向 N-50°-W 柱 穴 P 1～P 4は長径18～34cm、短径12～32、深さ8～28cmである。

D 1号柱穴列

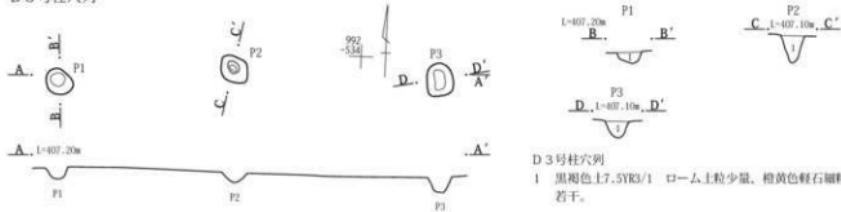


D 2号柱穴列

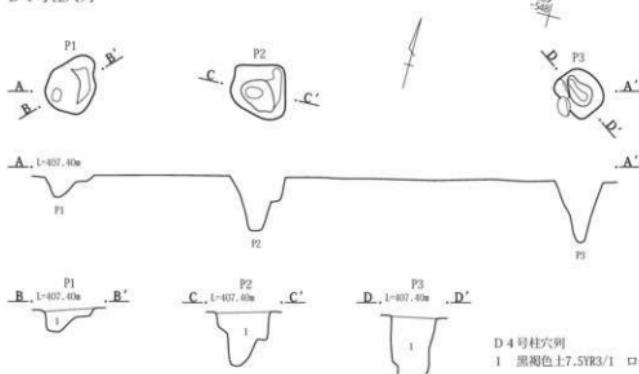


第205図 D 1・2号柱穴列平面図・土層断面図

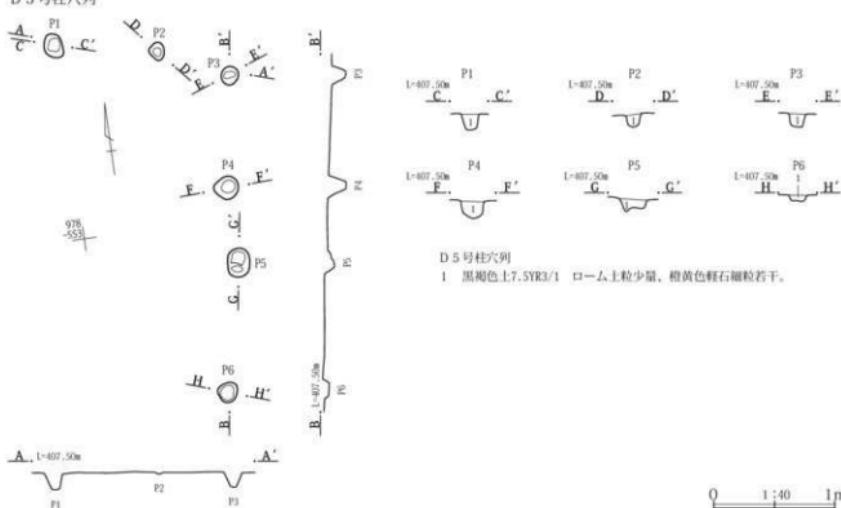
D 3号柱穴列



D 4号柱穴列



D 5号柱穴列



D 3号柱穴列

1 黒褐色土7.5YR3/1 ローム土粒少量、橙黄色軽石細粒若干。

D 4号柱穴列

1 黒褐色土7.5YR3/1 ローム土粒少量、橙黄色軽石細粒若干。

D 5号柱穴列

1 黒褐色土7.5YR3/1 ローム土粒少量、橙黄色軽石細粒若干。

0 1:40 1m

第206図 D 3～5号柱穴列平面図・土層断面図・断面図

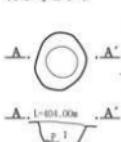
D 2号柱穴列(第205図、P.L. 133)

位 置 D区東端北部にある。座標値 X=60999~

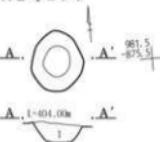
61008 Y=-92942~-92952 遺存状況 直線状に3つ

の柱穴が並ぶ 規 模 全長(P 1~P 3)492cm、柱

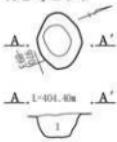
A 1号ピット



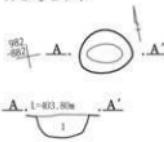
A 2号ピット



A 3号ピット



A 5号ピット



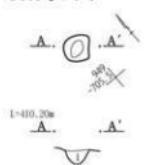
A 1・2号ピット

1 暗褐色土10YR3/3 しまり、粘性ともにあまりない。As-Kk軽石多量(15~25%)に含む。

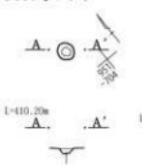
A 3・5号ピット

1 暗褐色土10YR3/4 しまりややあり。粘性なし。As-Kk軽石多量(15~25%)含む。

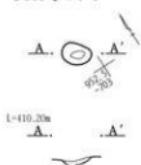
C303号ピット



C304号ピット



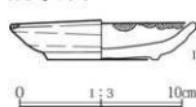
C305号ピット



C306号ピット



A 1号ピット



C303~306号ピット

1 黒色土10YR1.7/1 白色粒1%程度、黄褐色粒2%程度含む。しまり弱い。

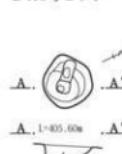
D408号ピット



D409号ピット



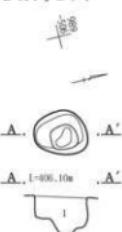
D410号ピット



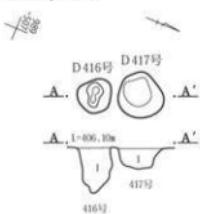
D412号ピット



D414号ピット



D416号ピット



D418号ピット

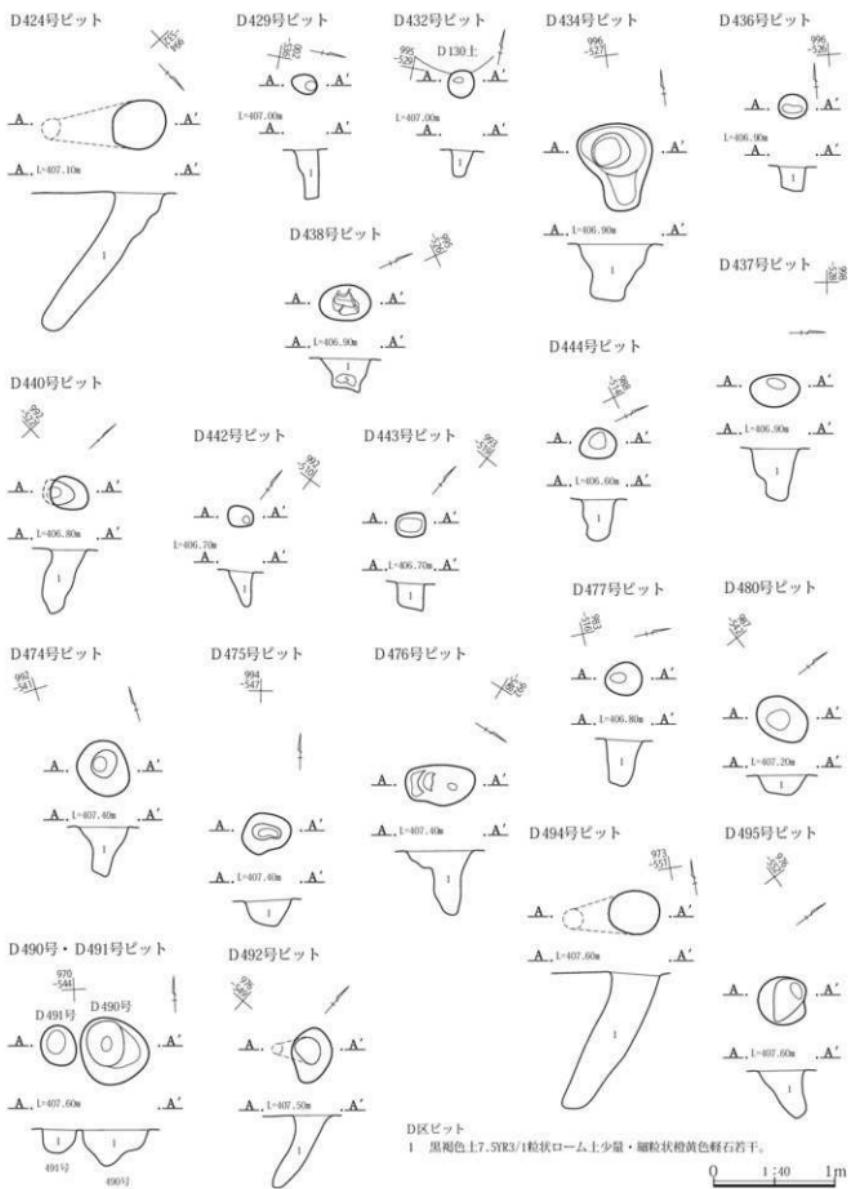


D区ピット

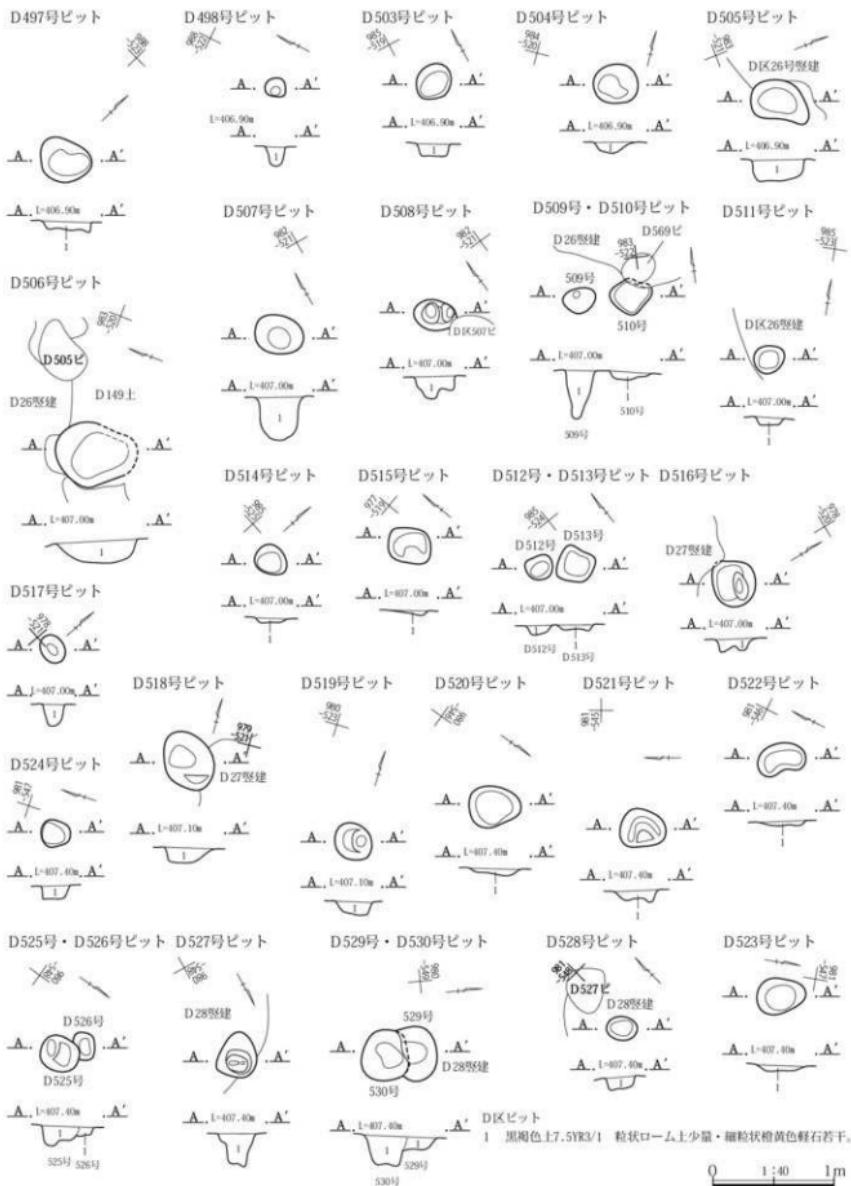
1 黒褐色土7.5YR3/1 粒状ローム土少量、細粒状褐黄色軽石若干。



第207図 A・C区、D区(1)ピット平面図・土層断面図

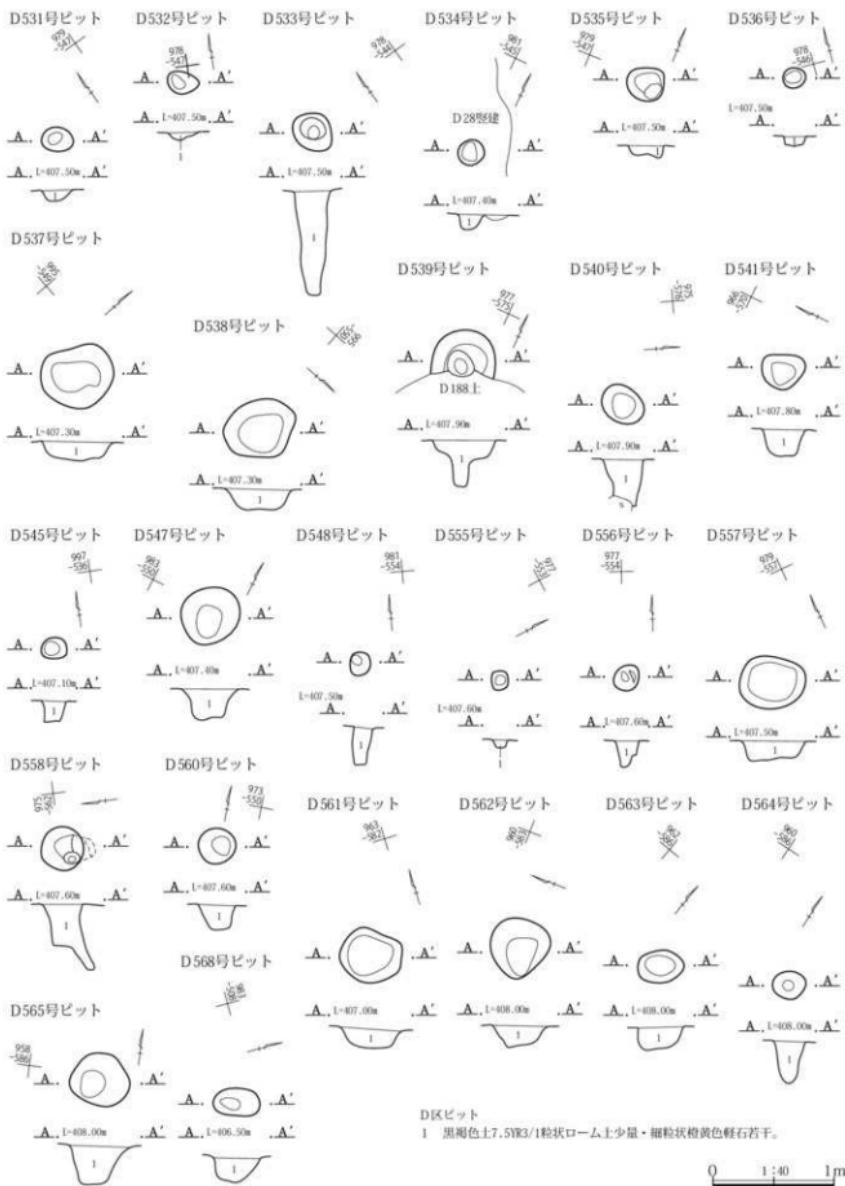


第208図 D区ピット平面図・土層断面図(2)

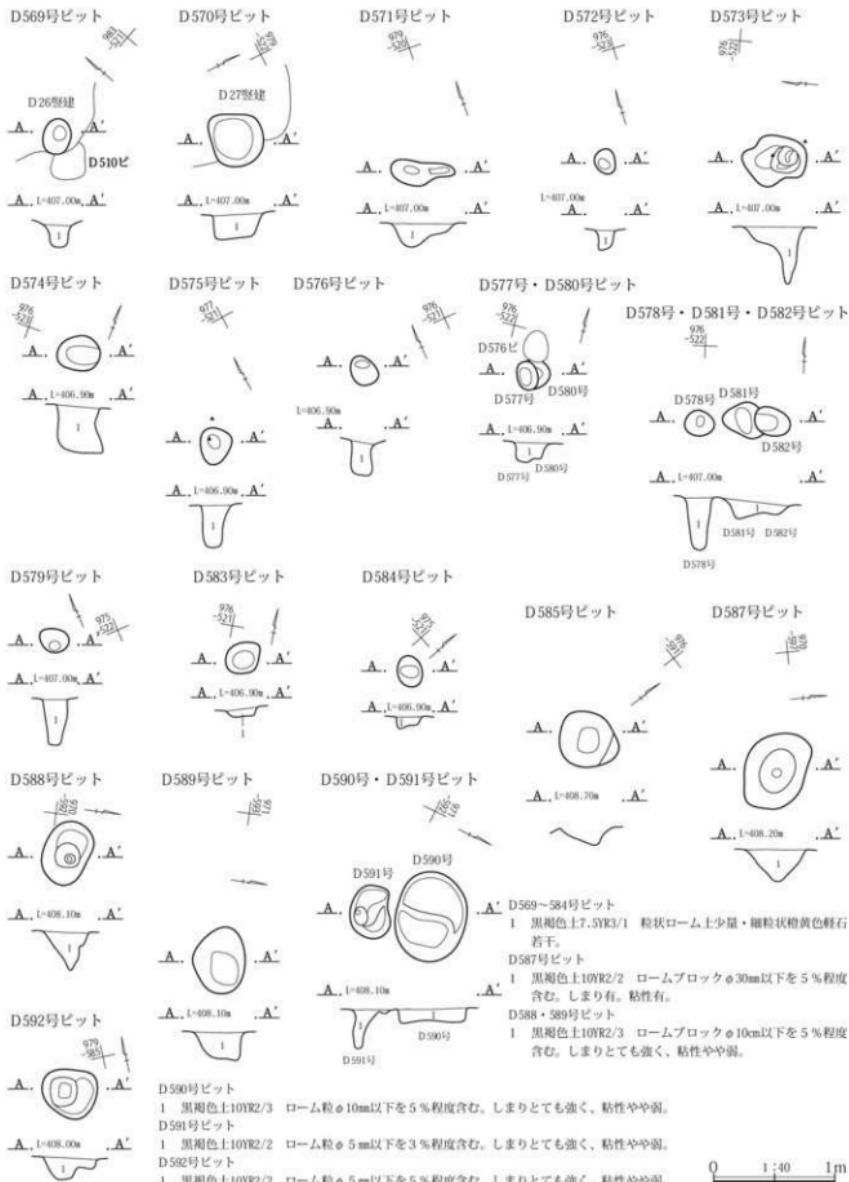


第209図 D区ビット平面図・土層断面図(3)

第5章 発見された遺構と遺物



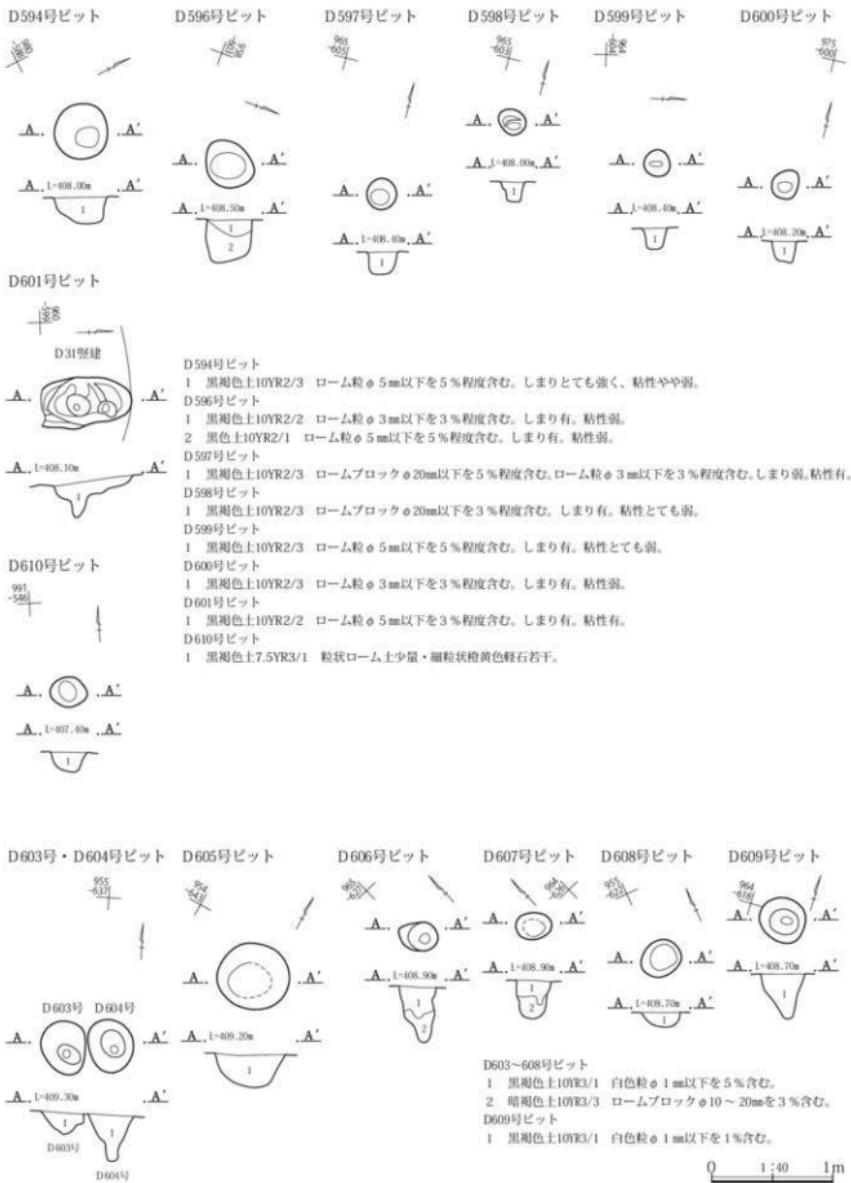
第210図 D区ピット平面図・土層断面図(4)



第211図 D区ピット平面図・土層断面図(5)

0 1:40 1m

第5章 発見された遺構と遺物



第212図 D区ピット平面図・土層断面図(6)

D 3号柱穴列(第206図、P.L. 133)

位置 D区東端中央部にある。北にD 2号柱穴列、南にD 1号柱穴列がある。座標値 X=60999~61008 Y=-92942~ -92952 **遺存状況** 直線状に3つの柱穴が並ぶ。**規模** 全長(P 1-P 3)316+cm、柱間(P 1-P 2)144cm、(P 2-P 3)168cm **長軸方向** N-58°-W **柱穴** P 1~P 3は長径22~26cm、短径18~20cm、深さ12~15cmである。

D 4号柱穴列(第206図、P.L. 133)

位置 D区東部中央部にある。東にD 3号柱穴列、南にD 5号柱穴列がある。座標値 X=60999~61008 Y=-92942~ -92952 **遺存状況** 直線状に3つの柱穴が並ぶ。**規模** 全長(P 1-P 3)432+cm、柱間(P 1-P 2)164cm、(P 2-P 3)268cm **長軸方向** N-58°-W **柱穴** P 1~P 3は長径38~48cm、短径32~44cm、深さ16~48cmである。

D 5号柱穴列(第206図、P.L. 133)

位置 D区東部中央部にある。北にD 4号柱穴列がある。座標値 X=60999~61008 Y=-92942~ -92952 **遺存状況** L字状に6つの柱穴が並ぶ **規模** 全長(P 1-P 6)408cm 東西長(P 1-P 2)148+cm、南北長(P 3-P 6)260+cm 柱間(P 1-P 2)84cm、(P 2-P 3)64cm、(P 3-P 4)94cm、(P 4-P 5)60cm、(P 5-P 6)106cm **長軸方向** N-58°-W **柱穴** P 1~P 6は長径12~24cm、短径10~18cm、深さ6~16cmである。**時期** 以上の柱穴列は遺構確認面から古代~中近世までの可能性がある。

ピット(第207~212図、P.L. 134~139)

位置 A・C・D区から確認されている。A 3区東部から4基(A 1~3・5号)、C区はC 1号溝内部から4基(C 303~306号)検出されている。D区からの検出が多い。D区では、東側全体125基(D 408~410、412~414、416~418、424~429、432~434、436~438、440~442、444~474~477、480~490~492、494~495~497~498、503~541、545~547~548~555~556~558~560~565~568~585~587~592~594~596~601~603~610号)が検出された。**形状・規模** A区出土ピットは、長径43~50cm、短径35~43cm、深さ16~21cmである。C区出土ピットは、長径12~20cm、短径8~20cm、深さ5~11cmである。D区ピットは、径が30cm前後ものが多く、深さは10~20cmに入るものが多い。平面形は、円形・楕円形である。**遺物** A 1ピットの底面や上から、瀬戸・美濃陶器志野丸皿(1)が出土した。**時期** 志野丸皿は17世紀中葉に比定される。D区ピットはAs-Kkを多く含むものが多いことなどから中世以降と判断した。

焼土**C 1号焼土(第213図、P.L. 134)**

位置 C区西端部C 1号溝の立ち上がり部にある。座標値 X=60948~60949 Y=-92704 **遺存状況** C 1号溝により一部壊されている。**形状** 不定梢円形 **規模** 長軸90cm、短軸68cm、深さ36cm **焼土の状況** 焼土が覆土に全体的に入る。**時期** C 1号溝より古く、遺構確認面から中近世の時期と判断した。

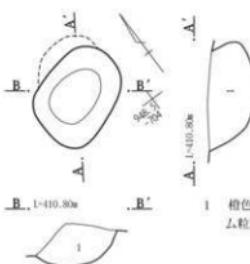
溝(第214~215図、P.L. 140~188)

C区では北東側から南西側に向けてC 1号、C 3号溝が検出された。

C 1号溝(第214~215図、P.L. 140~188)

位置 C区西端部にある。C 3号溝が西に並走する。**座標値** X=60945~60955 Y=-92698~ -92707 **遺存**

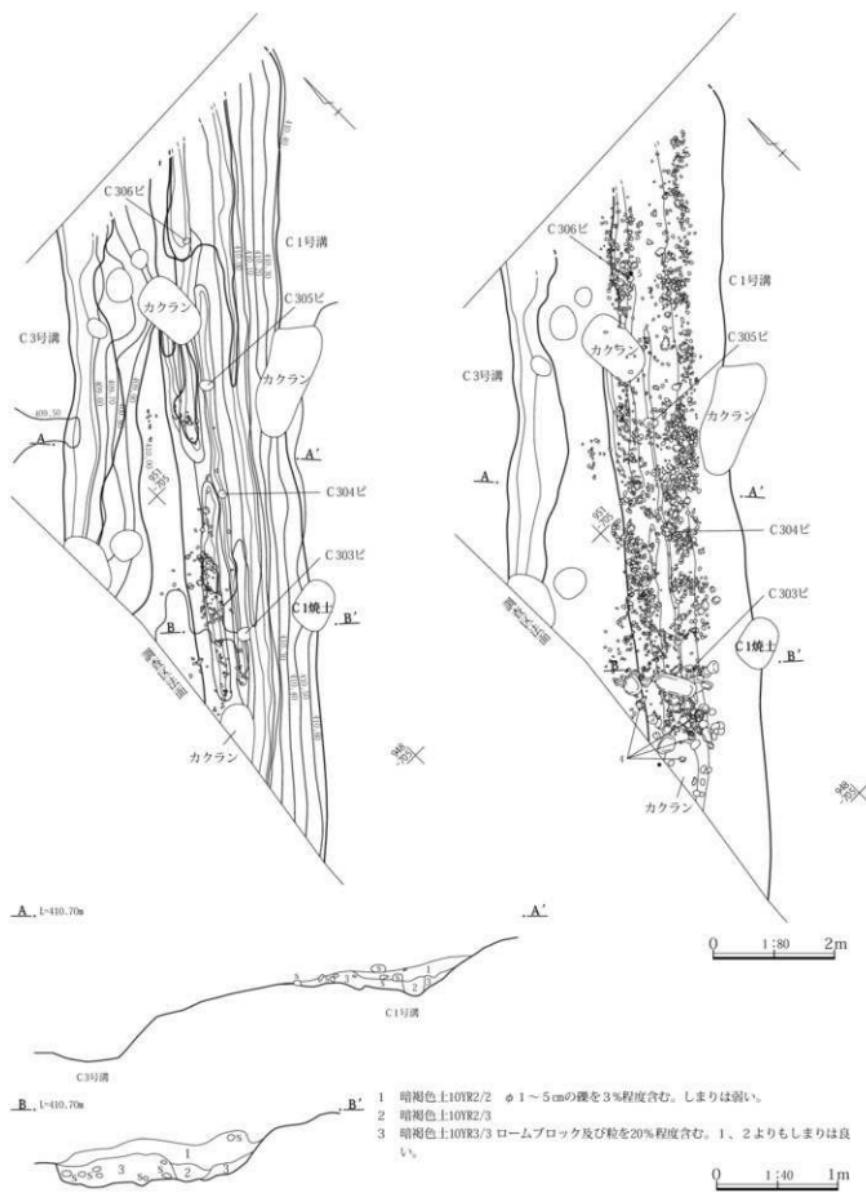
C 1号焼土



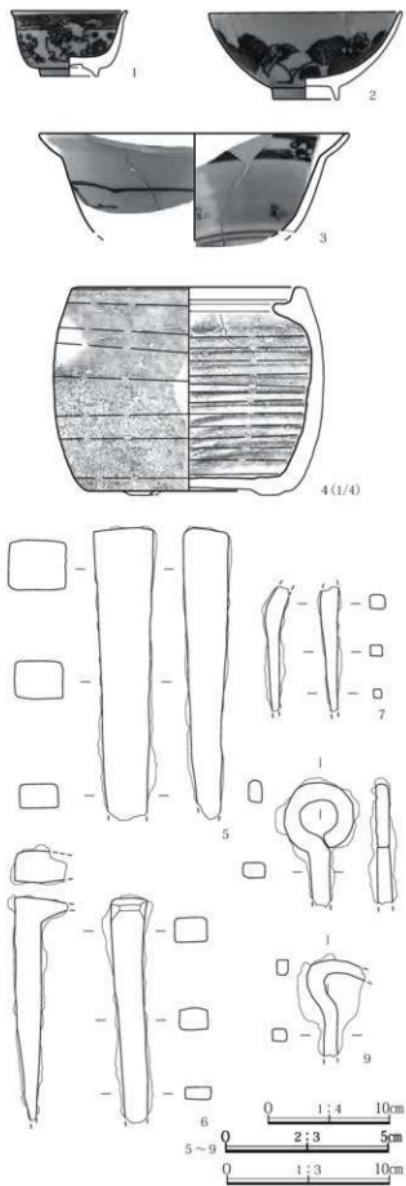
1 棕色土7.5YR6/6 全体に焼けており、赤味を帯びる。焼土粒を1%程度含む。ローム粒及びロームブロックを20%程度含む。しまりは良い。

0 1:40 1m

第213図 C 1号焼土平面図・土層断面図



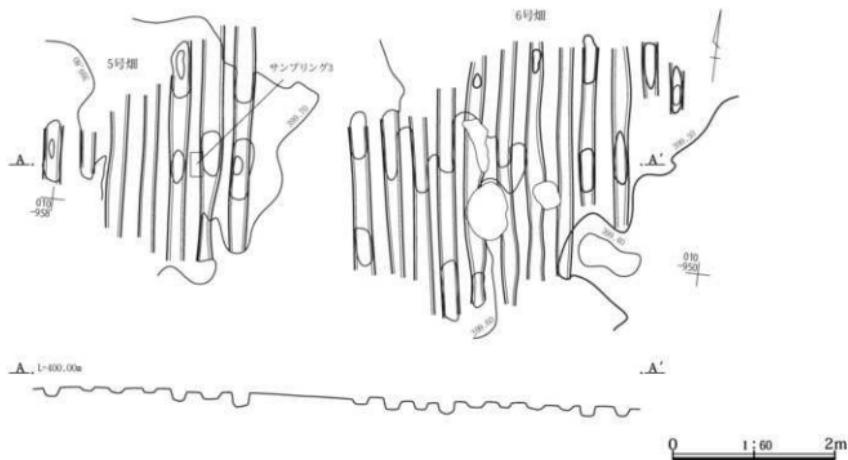
第214図 C1・3号溝 平面・遺物出土状況図・土層断面図



第215図 C 1号溝出土遺物図



第216図 C 1号烟平面図



第217図 A 5・6号窯平面図・断面図

状況・重複 溝南北が調査区外となる。規 模 長さ 13.20+m、幅 0.6m、最大深さ 0.61cm 走流方向 N-41°-E 遺 物 瀬戸・美濃陶器染付小碗(1)、磁器平碗(2)、肥前磁器青磁付鉢(3)、在地系土器火消壺(4)、鉄製品として、鑿(5)、大型釘(6)、小型釘(7)、引手状製品(8・9)が出土した。時 期 肥前磁器青磁染付鉢は18世紀のもので、それ以外は近現代に入る。18世紀以降～近現代とする。

C 3号溝(第214図、P.L. 140)

位 置 C 区西端部にある。C 1号溝が東に並走する。座標値 X=60952～60956 Y=-92702～-92706 遺存状況・重複 溝南北が調査区外となる。規 模 長さ 5.50+m、幅 0.9m、最大深さ 0.25cm 走流方向 N-46°-E 時 期 遺物の出土が無いため難しいが、C 1号溝と並走していることなどから、C 1号溝とほぼ同時の18世紀以降～近現代と推定する。

窯(烟)(第216・217図、P.L. 141)

窯(烟)は、C 区全面と、A 1 区で検出された。

天明泥流下から検出された烟は周辺の烟関連施設とともに後述する。

C区窯(第216図、P.L. 141)

C 区には、ほぼ全面にわたり、サクの痕跡が線状に残っている 1 号窯がある。ほとんど窪みはないが、幅 20

～30cmほどのサクの痕跡と想定できるラインが、主軸方向 N-64°-E～N-82°-E で、遺存している。

A区窯(第217～222図、P.L. 141～143)

A 区には、5・6号の窯が 2 枚検出された同一の窯の可能性もある。

A 5号窯(第217図、P.L. 141)

位 置 A 1 区西南部にある。西に 1 m に A 6 号窯がある。上層に天明泥流下の A 1 号窯がある。座標値 X=61009～61012 Y=-92955～-92958 遺存状況 上部は削平されるも、歓・さくの一部が残存している。形 状 短冊形の窯である。20～24cmの歓幅で、歓長は 2.85+m である。歓条数は 3+本である。主軸方向 N-4°-W の方向で耕されている。面 積 4.784+m² 時 期 As-Kk より上面から検出され、中世以降と推定する。

A 6号窯(第217図、P.L. 141)

位 置 A 1 区西南部にある。東に 1 m に A 5 号窯がある。上層に天明泥流下の A 1 号窯がある。座標値 X=61009～61012 Y=-92950～-92954 遺存状況 上部は削平されるも、歓・さくの一部が残存している。形 状 短冊形の窯である。20～23cmの歓幅で、歓長は 3.35+m、である。歓条数は 6+本である。主軸方向 N-7°-W の方向で耕されている。面 積 9.064+m² 時 期 As-Kk より上面から検出され、中世以降と推定する。

天明泥流直下の遺構群

(第218~222図、P.L. 142・143)

天明の大噴火に伴う泥流により埋まった、畑・道・石垣・ヤッカラなどで構成された一群の遺構がA1・2区で検出された。泥流が起こった1783年8月の直前の時期である。

畑(第218~222図、P.L. 142・143)

畑はA区西端部のA1・2区から検出された。歓冊の走向方向や耕作の有無などにより畠は6枚に区分される。

A1号畠(第218・219図、P.L. 142・143)

位置 A1区西部にある。北側は段丘崖により急激に落ち込んでいる。A1号道を挟んで東側南部にA2号畠、A1号石垣をはさんで東部北側にA3・4号畠がある。**座標値** X=61003~61023 Y=-92935~92965
遺存状況 浅間天明泥流により30~40cm覆われて遺存状況は良好である。西・南側は調査区外で不明である。**形状** 短冊形の畠である。歓長西端部の狭小地点では、2.1~6.0m、A1号ヤッカラとA1号道により区画された幅広の南側地点で、12.10~12.75mを有する。歓幅は16~21cmである。深さは4~6cmである。歓条数は49+本である。**主軸方向** N-50°-Wの方向で耕されている。

面積 278.8+m²

A2号畠(第218・220図、P.L. 142・143)

位置 A1区西部にある。A1号道を挟んで西側にA1号畠、A1号道、A1号石垣をはさんで北側にA3号畠がある。**座標値** X=60999~61008 Y=-92942~-92952
遺存状況 浅間天明泥流により30~40cm覆われて遺存状況は良好である。東側はカクランで、南側は調査区外で不明である。**形状** 短冊形の畠である。いずれも北側の狭小部を除いた、東南側がカクランで壊されていて歓長は不明のものが多い。北側狭小部で、歓長1.65~3.6mである。東南側の現状長は、5.1+~9.2+mである。歓幅は30~45cmとA1号畠より幅広い。深さは深さは4~6cmである。**主軸方向** N-58°-Wの方向で耕されている。**面積** 50.07+m²

A3号畠(第218・220図、P.L. 142・143)

位置 A1区西部にある。A1号石垣をはさんで西に

A1号畠、境界をはさん北にA2号畠、A1号石垣とA1号道をはさんで南にA2号畠がある。東側はA2号ヤッカラである。**座標値** X=61004~61011 Y=-92939~-92945
遺存状況 浅間天明泥流により30~40cm覆われて遺存状況は良好である。**形状** 畑の耕作痕跡が認められ無い。休耕地と推定する。A1号畠と石垣により、区分けられるが、A1号畠に比して40cmほど下段の耕作面となる。また、南のA1号道とも石垣による区分けされるが、30~40cm A3号畠の耕作面が低くなる。地形が北方向に向けて下がってきており、地形の変化に応じて、石垣を築いて、高低差を活かした耕作地の確保をしている。**主軸方向** N-47°-Wの方向で耕されている。**面積** 15.034m²

A4号畠(第218・220図、P.L. 142・143)

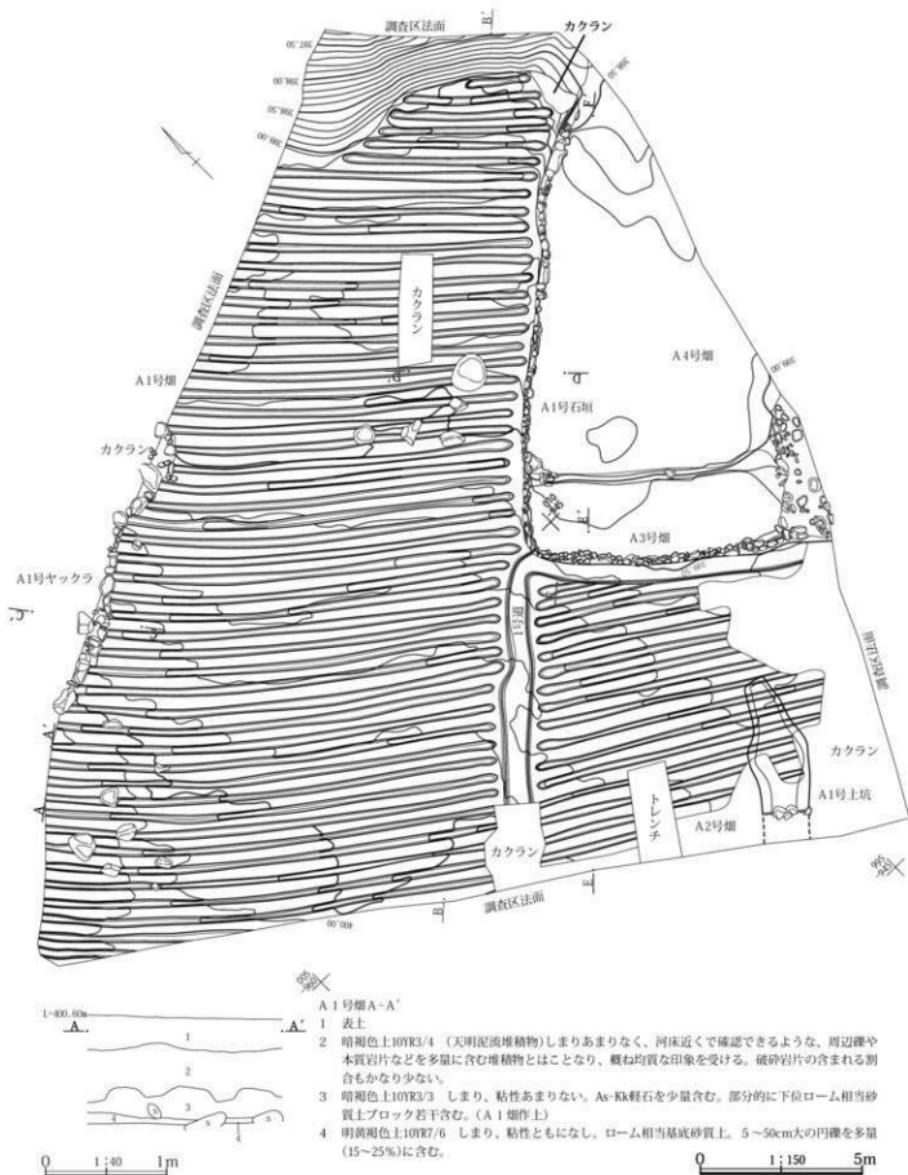
位置 A1区西部にある。南に境界をはさんでA3号畠、西にA1号石垣をはさんで、A1号畠がある。**座標値** X=61007~61018 Y=-92934~-92945
遺存状況 浅間天明泥流により30~40cm覆われて遺存状況は良好である。北から北東部は調査区外で不明である。**形状** 畑の耕作痕跡が認められ無い。休耕地と推定する。A1号畠と石垣により、区分けされるが、A1号畠に比して40cmほど下段の耕作面となる。A3号畠同様、高低差を活かした耕作地確保である。**主軸方向** N-45°-Wの方向で耕されている。**面積** 54.467+m²

A7号畠(第221・222図、P.L. 143)

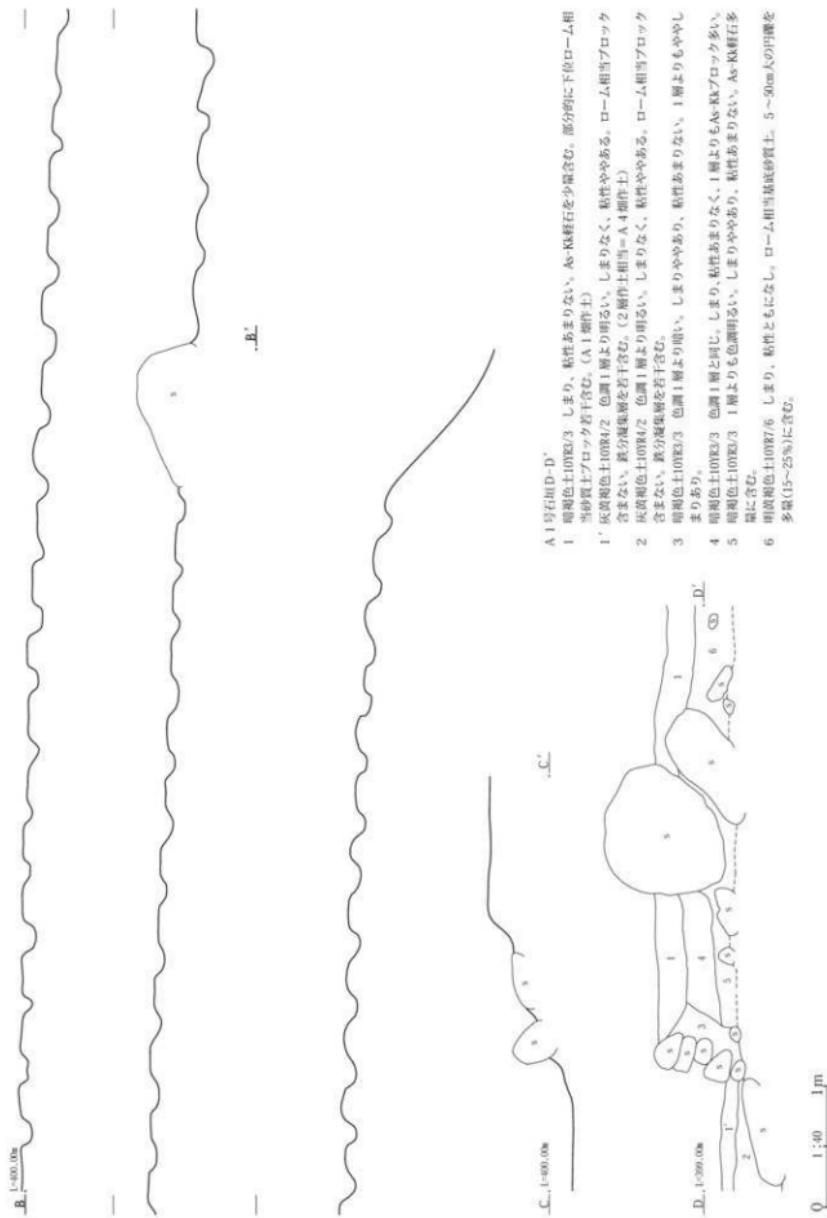
位置 A2区中央部にある。南にA2号ヤッカラがある。**座標値** X=61001~61012 Y=-92430~-92434
遺存状況 浅間天明泥流により30~40cm覆われている。北側は復旧坑により掘削され、中央部はA2号土坑により掘削されている。**形状** 短冊形の畠である。残存部からの歓長では、1.1+~6.1+mである。歓幅は12~30cmである。深さは4~6cmである。歓条数は24+本である。**主軸方向** N-76°-Eの方向で耕されている。**面積** 14.43+m²

A8号畠(第221・222図、P.L. 143)

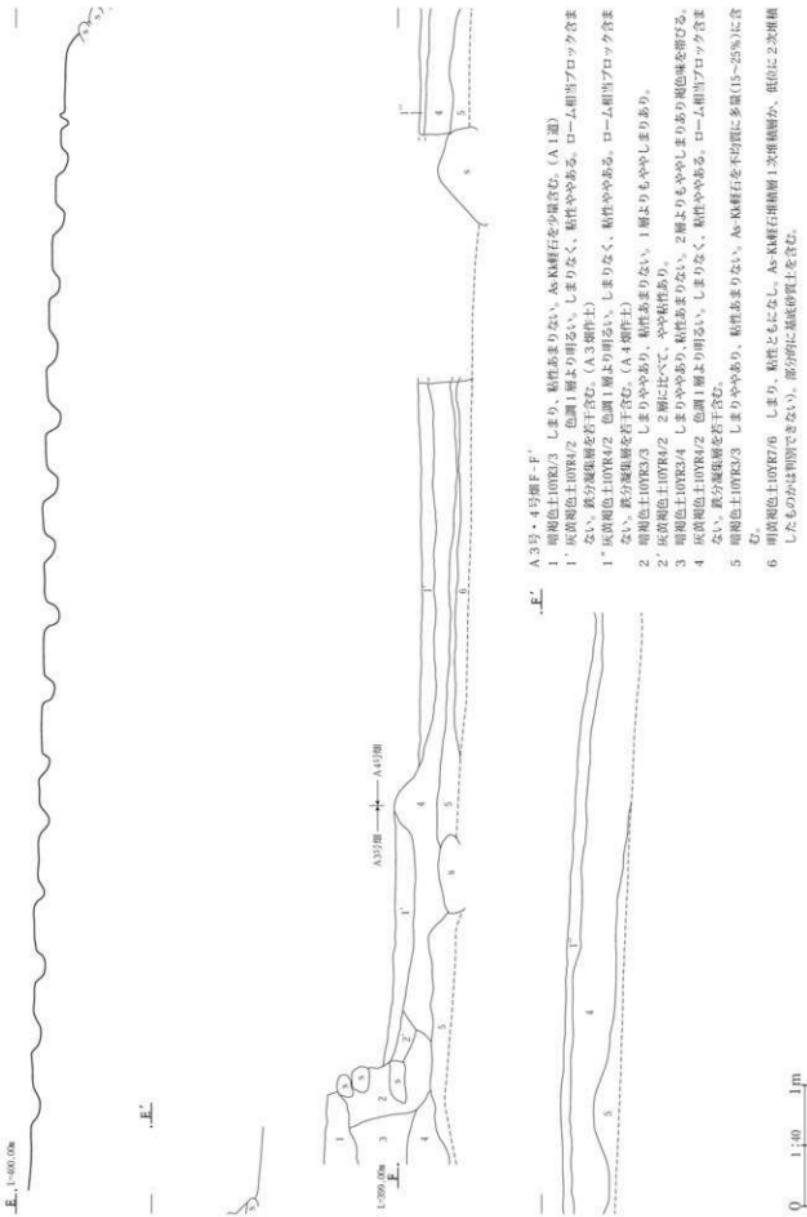
位置 A2区北端部にある。南4mにA8号畠がある。西南部7mにA4号畠がある。**座標値** X=61054~61020 Y=-92924~-92929
遺存状況 浅間天明泥流により30~40cm覆われている。東側は復旧坑により掘削されている。西南部は、残りが悪く畠は確認できない。



第218図 “A 1～4 号烟、A 1 号道、A 1 号石垣、A 1 号ヤックラ平面図、A 1 号烟土層断面図”



第219図 A 1号烟、A 1号ヤツクラ、A 1号石炭断面図



形 状 短冊形の島である。残存部からの歓長では、1.9~6.2+mである。歓幅は13~26cmである。深さは4~6cmである。歓条数は9+本である。**主軸方向** N-35°-Wの方向で耕されている。**面 積** 14.7+mf

A 1号道(第218図、P.L. 143)

位 置 A 1区西部南側にある。A 1号烟とA 2号烟の間を北上して、A 1号石垣の所で90度東に屈曲して、そのまま東に向かって道が延びる。**座標値** X=61003~61009 Y=-92940~-92952 **遺存状況** 南側は調査区外で不明である。東へ屈曲した後に、東のA 2区にはいると残りが悪くA 1号道の続きは確認できない。**形 状** 道幅47~75cmで、A 1号石垣の箇所で、直角に東に曲がる。道の総延長は、16.18+mである。道路面は硬化している。**主軸方向** S-47°-W~N-45°-Wの走向方向である。

A 1号石垣(第218図、P.L. 144)

位 置 A 1区西部北側にある。A 1号烟とA 3・4号烟の境界及び、A 2号烟とA 3号烟の境界のための施設である。間を北上して、A 1号石垣の所で90度東に屈曲して、そのまま東に向かって道が延びる。**座標値** X=61003~61009 Y=-92940~-92952 **遺存状況** 南側は調査区外で不明である。東へ屈曲した後に、東のA 2区にはいると残りが悪くA 1号道の続きは確認できない。**形 状** 地形が北方向に標高が下がるので、耕作地を維持するために、高さ23~67cmの石垣を築いて、A 1号、A 2号烟に対して、高さが平均で40cmほど低い耕作面を有するA 3・4号烟を確保するための石垣である。石は地山の石をそのまま利用している。石垣の総延長は22+mで、南北方向の石垣の長さは14.0+m、東西方向の石垣の長さは8.0+mである。**主軸方向** 南北方向は、S-50°-E、東西方向は N-50°-Wである。

ヤックラ(第218・221図、P.L. 145)

ヤックラは3ヶ所にある。A 1号烟中央西側にあるA 1号ヤックラ(X=61016~61020 Y=-92951~-92959)、A 7号烟南部にあるA 2号ヤックラ(X=61001~61007 Y=-92933~-92940)、A 7号烟南西部にあるA 3号ヤックラ(X=60997~61000 Y=-92929~-92932)である。それぞれ耕作に伴い出てきた地山の石を積み上げているものである。規模は、A 1号が長9.52+m、幅1.28+m、A 2号が長6.0m、幅4.10m、A

3号が長2.40m、幅2.10mである。

以上、烟・石垣・道・ヤックラで構成された畠地が天明泥流下から現れ、当時の畠地の様相を知ることができた。

泥流後の復旧にともなう遺構群

(第221~223図、P.L. 146・189)

泥流後、いくつかの復旧にともなう復旧坑や土坑などの遺構が検出された。

復旧坑(第221・222図、P.L. 146)

位 置 A 2区中央部にある。**座標値** X=60999~61019 Y=-92935~-92945 **遺存状況** 北部及び東部が調査対象外である。**形 状** 圓内長方形、調査区内では18基の復旧坑を検出した。**規 模** 長軸1.1~11.90m、短軸0.75~1.50m、深さ20~42cm **長軸方向** N-52°~66°-E **性 格** 天明泥流に覆われた層を掘り抜き、泥流に伴い流されてきた砂礫を坑内に埋めたものである。**時 期** 天明泥流下の烟を壊して検出されたので、天明泥流の年代より新しいと推定する。

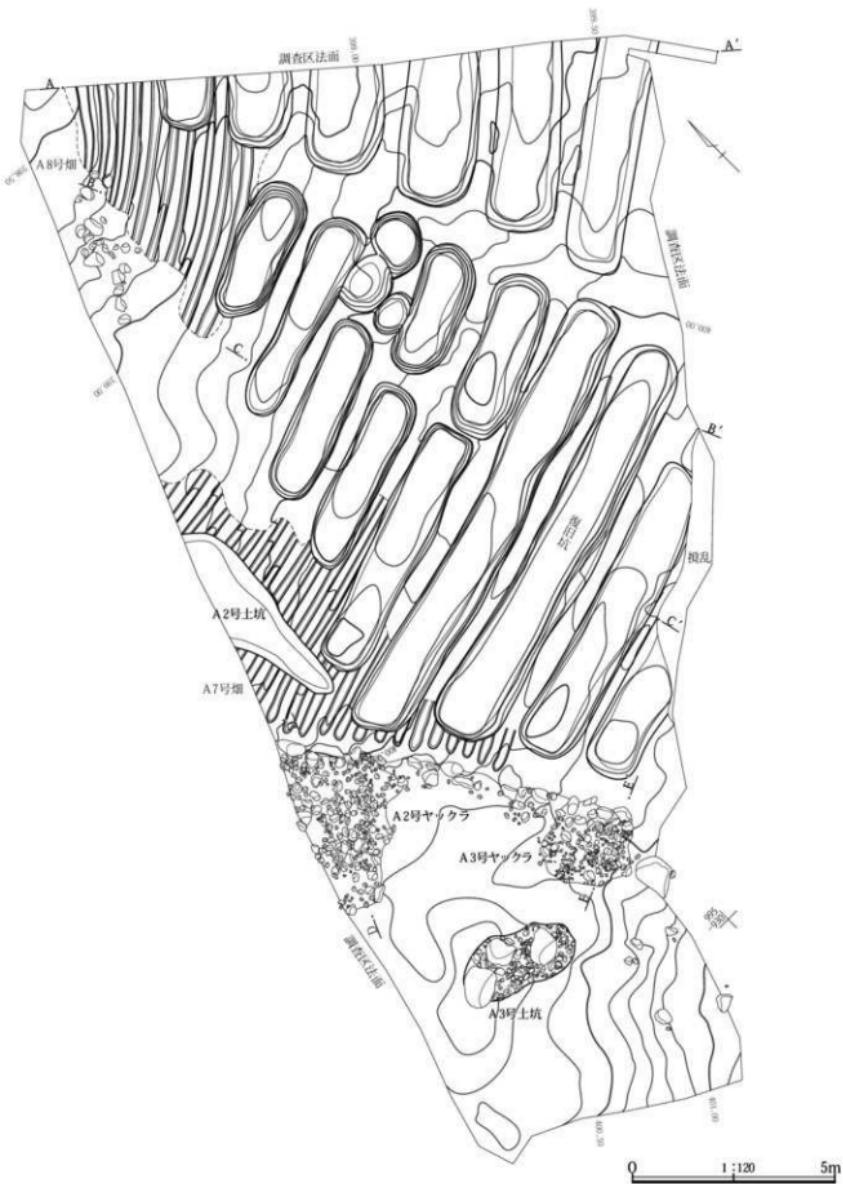
A 2号土坑(第223図、P.L. 146・184)

位 置 A 3区中央部西側にある。**座標値** X=61005~61011 Y=-92932~-92933 **遺存状況** 西北部が調査対象外である。天明泥流下烟を壊している。**形 状** 不整長楕円形 **規 模** 長軸540+cm、短軸160+cm、深さ52cm **長軸方向** N-0° **性 格** 天明泥流に伴う礫が多く覆土に含まれており、泥流で流された礫を穴を掘つて埋めたものと想定する。**遺 物** 柄部は細板状で、下部に平たい面を有する鉄器(1)が出土した。**時 期** 天明泥流下の烟を壊して検出されたので、天明泥流の年代より新しいと推定する。

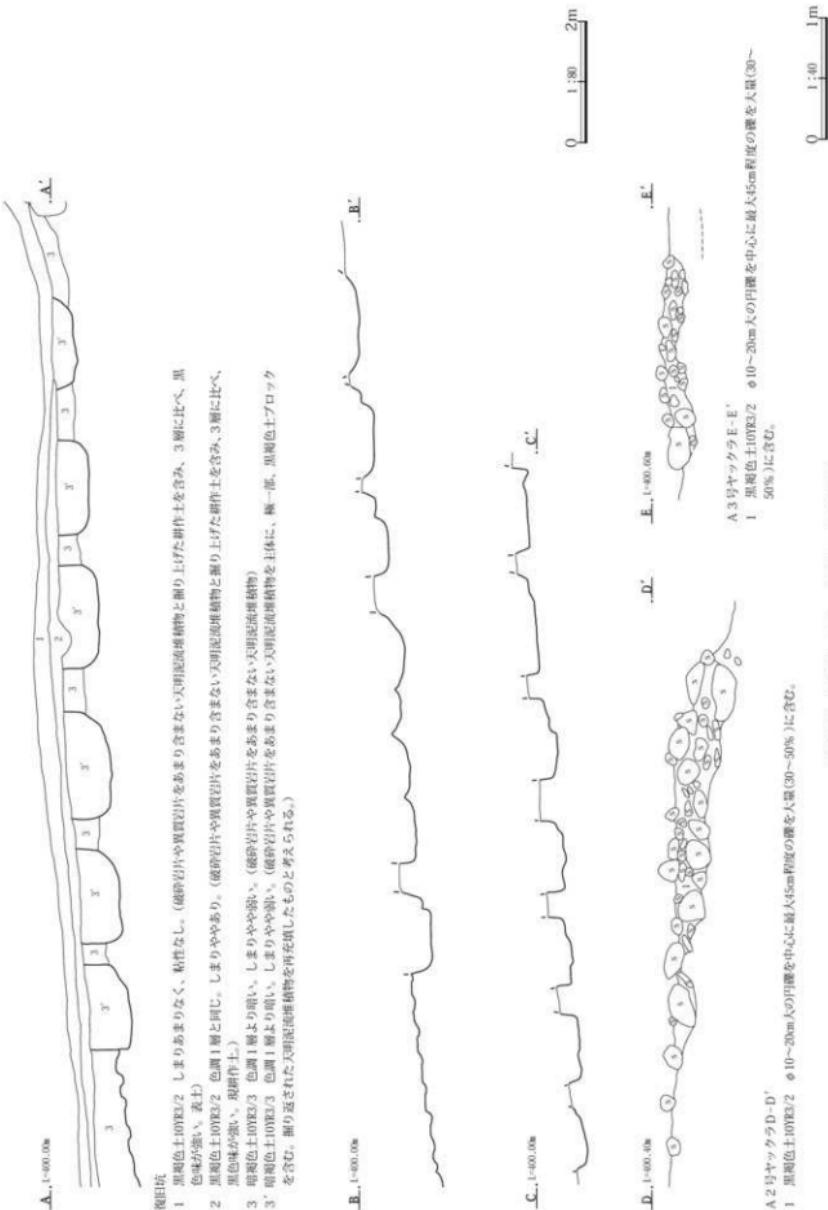
遺構外出土遺物(第224・225図、P.L. 189)

A~D区まで遺構外からも中近世遺物が出土している。

A区(第224図、P.L. 189) 龍泉窯系の青磁碗(1・2)、肥前陶器異器手碗(3)、肥前磁器染付碗(4)、肥前磁器異器手碗(5)、瀬戸・美濃陶器尾呂碗(6)、在地系土器片口鉢(7)、在地系土器天神人形(9)、在地系土器箱庭道具植物(8)、寛永通寶(10)が出土した。

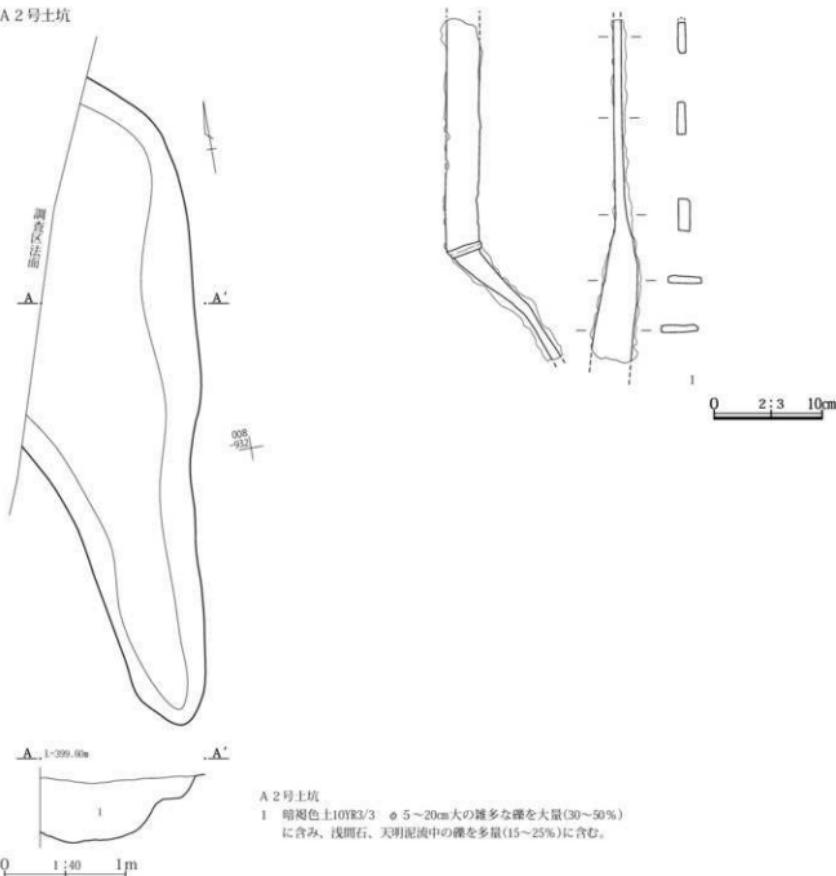


第221図 A 7・8号烟・復旧坑・A 2・3号ヤックラ・A 2号土坑平面図



第222図 復旧坑、A・2・3号ヤツクラ断面図

A 2号土坑



第223図 A 2号土坑平面図・土層断面図・出土遺物図

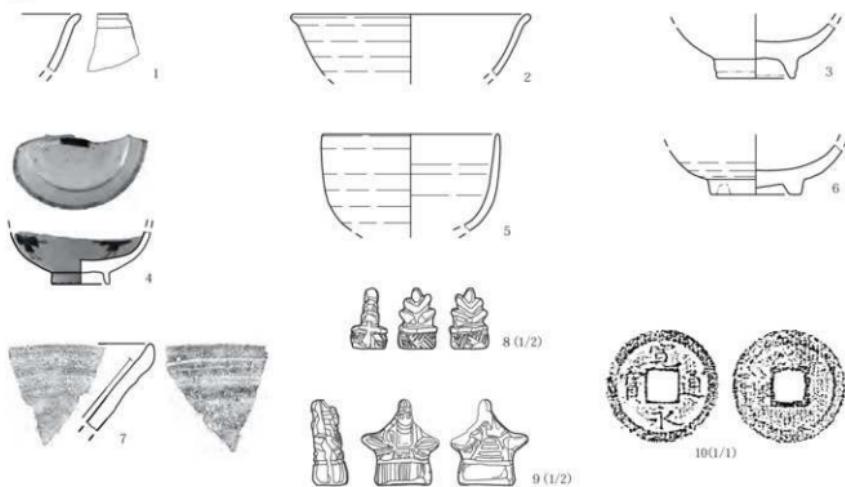
B区(第224図、P L. 189) 肥前陶器染付小広東碗(11)、肥前磁器染付小皿(12)、製作地不詳赤絵小碗(13)、製作地不詳磁器染付鉢(14)、瀬戸・美濃陶器染付小杯(15)、瀬戸・美濃陶器灯火皿(16)、青銅製毛抜き(17)が出土した。

C区(第225図、P L. 189) 瀬戸・美濃陶器仏飯器(18)、肥前磁器青磁鉢(皿)(19)、青銅製煙管(20)、鉄製引手状製品(21)、鉄製釘(22~26)、鉄滓(27~28)が出土した。

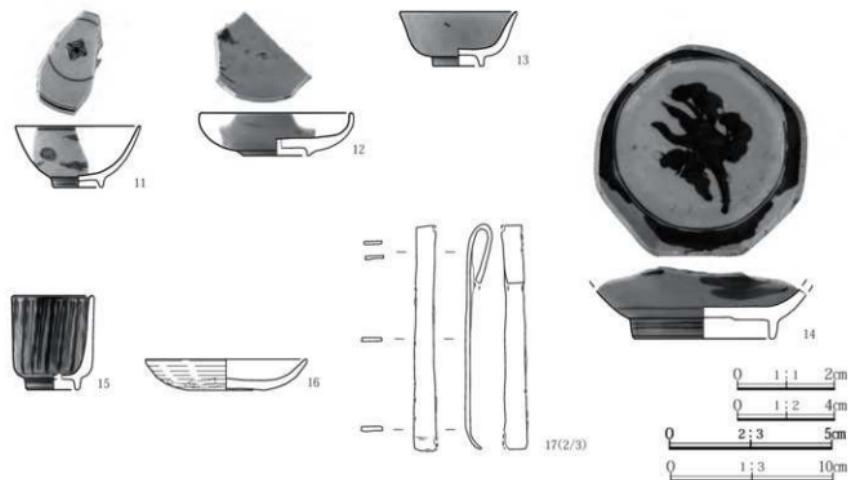
D区(第225図)瀬戸・美濃陶器碗(29)が出土した。

区不明(第225図、P L. 189)鉄製鐵莖(30)、鉄製棒状品(31)が出土した。

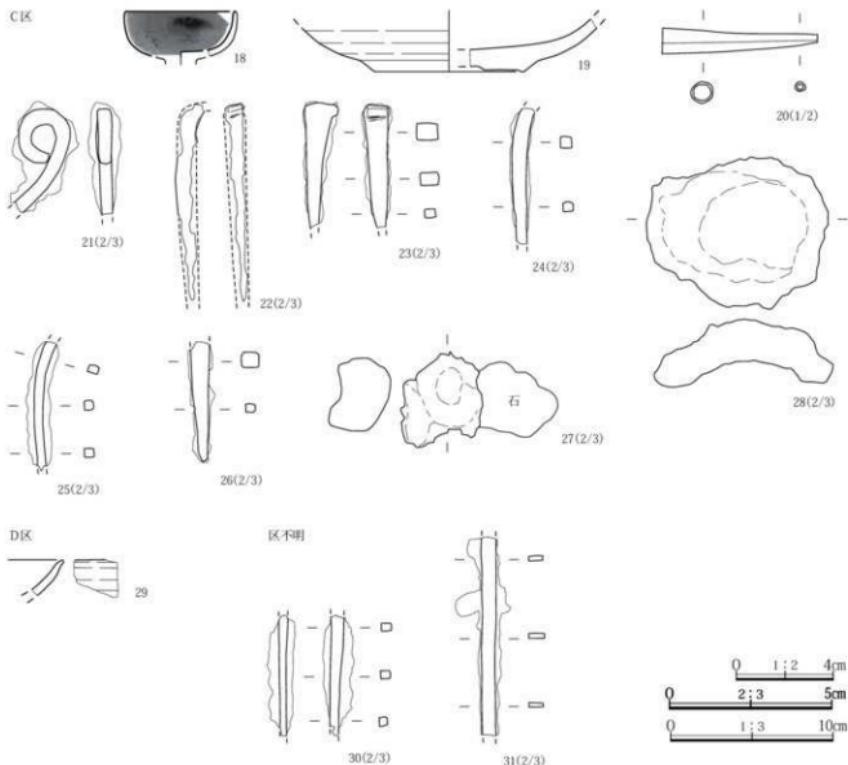
A区



B区



第224図 A・B区遺構外遺物



第225図 C区遺構外遺物

第7節 まとめ

各時代の状況(付図1~5)

新井遺跡の今回の調査で明らかとなった各時代の概要を述べる。

旧石器時代の遺物・遺構がある可能性が2次堆積ローム上の存在から考えられたので、試掘・確認調査を行った。A・C・D区でトレンチを設定し調査した結果、旧石器時代の遺物は一切出土せず、旧石器時代の遺物・遺構とともに新井遺跡では確認できないことが分かった。

縄文時代の竪穴建物は、総数24棟が出土している。遺跡地の東方C・D区に偏在する。地形的な要因からA・B区には居住しなかったものと推定する。時代的に古い順に建物を並べて見ると、縄文早期が3棟(中葉C6、後葉D26・C19)、前期が11棟(前葉C16・D32・C8・D33・C17・C14、中葉D29・D30・C13・C10、後葉C15)となる。中期は2棟(中葉～後葉C9、後葉～後期初頭C11)、後期は1棟(初頭C18)、晚期は無い。時期不明の建物が7棟(C5・C7・C20・D27・D28・D31・D34)である。以上の時期的及び地区での変遷を追うと、C区が中心であり、早期～後期にかけて継続している。D区は、早期～前期にかけて建物が建てられるが、中期以降は、時期不明のものを除き確認できない。遺跡全体としては、早期後葉から前期中葉にかけてが総数で12棟あり最盛期と捉えられる。他に、竪穴状遺構がD区より1棟出土している。土坑は総数168基があり、C区で65基、D区で103基ある。土坑も早期から後期まであり、特に前期が多い。他に、焼土集中2基、集石・配石・列石が1基ずつある。

弥生時代の竪穴建物は、D区より中期後半の建物2棟(D24、D25)、C区より後期の建物1棟(C4)の計3棟が検出されている。また、後期の竪穴状遺構がD区で1棟(D1竪状)出土した。

中期後半の竪穴建物は、いずれも焼失住居で土器や有機質遺物が炭化して残りが良く、分析・考察編で紹介する、種実からの年代測定、炭化米塊から想定される米の調理法など様々な情報が提供された。

墓は、D区の後期後半に比定されるD1号円形周溝墓

や、後期に比定されるD2号方形周溝墓1基、D2号円形周溝墓1基が検出されている。いずれも一部溝が途切れるもので、主体部が隅円長方形で長辺が短いものである。D1号円形周溝墓からは、主体部土坑上層から高杯と壺が出土し、D2号方形周溝墓からは、主体部からベンガラが床直上から出土している。また、周溝からガラス玉が出土した。D2号円形周溝墓からは主体部から菅玉1個、ガラス玉6個が出土した。後期の土壙墓と推定されるC4号土坑よりは長剣が出土している。副葬品が豊富なことが特徴である。他にもC区で後期の土坑1基が検出された。

弥生時代中期後半～後期にかけて、遺跡の東側C・D区に竪穴建物・墓が少数出土しており、少ないながらも弥生時代の中期後半～後期にかけて人々が住んでいた。

古墳時代の竪穴建物は、A区より前期の建物が1棟(A6)、C区西側より5世紀後半の建物が1棟(C1)の計2棟のみが検出されている。居住域は新井遺跡では西部に限定されていた可能性がある。D区には方形周溝墓2基と古墳3基が集中する。方形周溝墓は、D区中央やや東にD1号方形周溝墓があり、西に50mの箇所にD4号方形周溝墓がある。土器などから前期と推定する。D1号方形周溝墓からは2つの主体部が調査された、中央の第1主体部からは、短剣が副葬品として納められていた。D4号方形周溝墓からは2基の主体部が調査された。中心主体である第2主体部からは、ヒスイ製勾玉、石英製算盤玉3点、ガラス玉18点などが出土した。第1主体部からは玉髓製纈玉、ガラス玉が7点出土している。ヒスイ・石英といった貴重な石材を使用しての玉類が出土したことは重要である。方形周溝墓から出土したガラス玉は、大賀克彦氏による同定で、弥生時代のD2号方形周溝墓・D2号円形周溝墓出土例が、銅着色のカリガラス製(GroupP II)で、D4号方形周溝墓出土例がコバルト着色カリガラス製(GroupP I)で、素材が異なっている。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期に盛行するものである。また、C1号集石から、4世紀後半と推定される土器及び鉄製品が出土し、墓である可能性がある。

D区には、方形周溝墓に続いて3基の古墳が構築される。D1号古墳は、D区東側に位置し、弧状の周溝の北側一部のみの調査であるが、周溝内側の立ち上がりに葺石が葺かれている。周溝内側の立ち上がり部に葺石が葺

第5章 発見された遺構と遺物

かれる例は少ないが、類例は、遠見山古墳例、前二子古墳例、7世紀代の総社古墳群例などがある。時期的には、5世紀後半から6世紀代に比定されるものである。

D2号墳は、D3号墳の西側45mに位置し、古墳北側のみが調査され、主体部の北側下部の一部が調査された。埴輪が2片周堀より出土している。周堀の側線が直線状であり、コーナー部の屈曲も急であり、方形を意識したものと考えた。復元長は、一辻17.4mの方墳と推定した。また主体部であるが、平石を敷石状に敷設している状況などを検討した結果、横穴式石室の基底部の可能性が高い。つまり、一辻17mほどの方墳で横穴式石室と少量の埴輪を有する古墳と推定した。また、埴輪は温川を挟んだ四戸古墳群とは異なり、藤岡産では無いことが肉眼観察や剥片成形土分析で分かった。埴輪產地の比定がこれから課題である。年代は6世紀代と推定する。

D3号墳はD区西端に位置しており、周堀の北東部隅の一部と葺石が確認できた。須恵器が周堀より出土している。この古墳も側線が直線状に近いことや、コーナー部の屈曲の角度が急なことなど方墳の可能性がある。D1～3号墳を古墳とした根拠は、考察でも述べるが、葺石の存在することや、周堀の幅・深さなどが、方形周溝墓と比べて規模が大きいことを根拠としている。

D2・3号古墳は、葺石・埴輪・須恵器などから、6世紀代と推定する。D区は基本的に古墳時代前期より後期にかけて墓域として利用された地区である。

古代の遺構群は、A～D区まで展開する。その中で特にA3区とC区に遺構が多い。古代の竪穴建物は、8世紀後半から9世紀にかけての7棟の建物が検出された。8世紀第四半世期(A2)、9世紀第二四半期(A1)、9世紀第三四半期(A3・C2・C3)、9世紀後半(D23)と継続的に竪穴建物が建てられた。他に9世紀代の建物としてA5号竪穴建物があり、9世紀代がこの遺跡での古代における最盛期である。掘立柱建物は、A区に、A1・2号掘立柱建物が8世紀第四半期の可能性のある建物として検出された。B区には9世紀後半の複数の土坑の掘削痕跡が集中するなど粘土採掘坑と想定される土坑群が2ヶ所ある。いずれも粘性の強い灰黄色粘土を採掘したものと推定される。土坑は、他にA区にある。ピットがA・C区にある。溝はA区のA1～3号竪穴建物のすぐ西側に3本あり、用水路などの用途が推定される。また、

A区には焼土集中遺構が6基、D区には集石遺構が2基ある。焼土遺構には、土器が伴うことが多く、9世紀前半～9世紀後半の9世紀代が中心である。焼土とともに土器が出土する在り方から、今後遺構の性格を想定する必要がある。集石遺構は、西隣の四戸の古墳群から古代の遺構として多くの例が調査され、一部の遺構からは人骨の可能性が高い骨が検出された。墓の可能性を四戸の古墳群では考えたが、新井遺跡でも集石遺構が2基検出され、この遺構も墓の可能性を考慮する必要があるだろう。耕作地としての畠が、A3区の9～11号畠がAs-B下から検出された。歴史の残りが悪いものもあるが、植物を植えたと思われる空洞が確認された。A3区の溝をはさんで西側に耕作地である畠があり、溝の東側に居住域である竪穴建物や掘立柱建物があつたことが分る。

中近世は、土坑群がB区から2基、土坑がA区から3基、B区から11基、C・D区から1基が検出されている。土坑群は、古代の粘土採掘坑と推定した土坑群の南側にあり、同じような灰黄色粘土を採掘した可能性を考えている。D区には柱穴列が5基確認できた。ピットはA・C・D区から検出されている。特にD区からのピットが多く、先ほどの柱穴列が柵列などとすれば、中世城館などとの関連性も考慮する必要があるだろう。焼土集中がC区で1基、溝がC区で3本、D区で1本検出されている。畠はC区全面及び、A1区には、As-KK上から5・6号畠が、が検出された。A区では、古代から連続して、中近世の古段階から一部を耕作地として継続して使用されていたことが分る。

天明泥流下の遺構群は、A1・2区から畠6枚、石垣1基、道1本、ヤックラ3基、土坑2基が検出された。地形的に、北東側に下がり、段丘崖となるので、その地形の変化に応じて、石垣を築き、畠に段差を設けて耕作地としている。A1・2号畠が高位面にあり、低位面に休耕畠であるA3・4号畠がある。石垣を築き、更に道を設けることで、段差を利用した土地利用を行っているのである。

天明泥流後、復旧を行ったのは、北東部の一部で、そこに復旧畠が20基、土坑が1基検出されている。泥流に覆われた後に復旧を行うも、全体とまではいかず、一部のみ復興を行ったものと思われる。

第6章 自然科学分析

第1節 分析の目的と成果

新井遺跡では、様々な分析を行うことが必要な遺物群が出土した。以下、各種分析の目的と得られた成果について簡単に記す。詳細なデータ・結果については次節以降の分析報告を参照いただきたい。

1. 火山灰検出同定分析(第2節)

目的：層位や年代が不明な土層・テフラ粒子について、その地質調査を行い、火山灰同定を行うものである。

分析方法：新井遺跡D区において、現地での地質調査により、土層やテフラ層の記載を行う。また、分析試料を採取し、実験室でテフラ検出(テフラ検出分析及び火山ガラスの屈折率測定)を行い、指標テフラとの検出同定を行う。

分析結果：新井遺跡D区での、現地地質調査及びテフラ分析により以下のことが分かった。

① 厚い二次堆積ローム層を認めることができ、河岸段丘面を二次堆積ローム層が覆っていることが判明した。この二次堆積ローム層の形成には、地震など比較的広範囲に及ぶ事変が関係している可能性がある。

② 二次堆積ローム土の上の腐植質土壤の中に浅間Bテフラ(As-B、1108年)と浅間柏川テフラ(As-Kk、1128年)の一次堆積層が確認できた。

③ 同じ腐植質土壤の中に浅間C軽石や、Hr-FAに由来する可能性が高いテフラ粒子を検出した。

成 果：温川を挟んで対岸にある四戸遺跡での火山灰同定調査では、二次堆積ローム層と河岸段丘面の層位関係は不明確であったが、今回の調査で、河岸段丘面を二次堆積ロームが覆っている可能性が高いことが判明した。また、古墳時代以降のHr-FA、As-Cのテフラ粒子の確認や、As-BとAs-Kkの一次堆積層を明確にできた。

2. 炭化種実試料の加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定(第3節)

目的：弥生時代中期後半とされるD24・25号竪穴建物から良好な炭化した種実が出土しており、この炭化種実を試料として、弥生中期後半の放射性炭素年代測定により群馬

における弥生時代中期後半の実年代について資料を得る。

分析方法：D24号竪穴建物から出土した土器内のクリ炭化子葉2点、床面から出土したアズキ炭化種子1点、25号竪穴建物から出土したイネ炭化種子2点の計5点を試料とする。試料を超音波洗浄した後に、加速器質量分析計を用いて測定する。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正後、¹⁴C年代、曆年代を算出する。

分析結果：曆年較正の結果のうち、2σ曆年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。

① D24号竪穴建物出土の土器内から採取されたクリ炭化子葉は、クリ子葉①が151-131cal B C (4.93%)、121cal B C-15cal A D (90.52%)、クリ子葉②が、149-136cal B C (2.58 %)、112cal B C-18cal A D (92.87 %)、である。

② D24号竪穴建物出土の床面出土アズキ炭化種子試料は、334-331cal B C (0.72%)、197-183cal B C (4.01%) 179-51cal B C (90.72%)である。

③ D25号竪穴建物のイネ炭化種子は、イネ種子①が、161-40cal B C (91.64%)、イネ種子②が、167-46cal B C (95.4%)である。

成果：以上の結果を見ると、いずれも弥生時代中期中葉から後期初頭におさまる曆年代である。加速度質量分析による曆年代のデータとして、群馬県内の試料として今までなかった年代データを得ることができ、想定される弥生時代中期後半の年代とも整合している。

3. 炭化種実同定(第4節)

目的：D24・25号竪穴建物は焼失建物で、建物の中から当時の人々が利用した多くの種実が出土した。当時の種実利用を明らかにできる重要な試料として、どのような種実が利用されていたかを明らかにするために種実の同定を行う。

分析方法：肉眼及び実体顕微鏡下で、抽出・同定・計測を行う。破片で計数が困難な分類群は計量し、完形個体の重量から完形個体換算数を求めた。

分析結果

① D24号竪穴建物からは、土器内からクリ果実と子葉

が多く得られ、完形個体に換算すると。果実が27点強相当、子葉が381点強相当である。イネ炭化種子とアズキ炭化種子もわずかに得られた。

②D25号竪穴建物からは、イネの炭化種子塊が得られ、塊の重量から完形個体に換算すると、1422点強である。
成 果：D24号竪穴建物から土器内から出土したクリは、縄文時代の大型化したクリではない、小型の野生のクリと考えられる。このように多くのクリが弥生時代から出土した例はこれまでにほとんど無い。吾妻地域でのクリ利用を知ることができる重要な資料である。

床から出土したアズキは、袋に保管していたアズキが、火災にともない床に散らばったものと推定される。

25号竪穴建物から見つかった炭化米塊は、膨脹と変形が著しく、端面が平坦に潰れている状況から炊かれた米と判断している。編組製品の一部がコメに付着しているので、かご類に入れられたご飯であった可能性も想定された。この炭化米塊についての詳しい分析は、考察編の炭化米塊のCT画像解析の項で行っている。

4. 炭化材樹種同定(第5節)

目的：D24・25号竪穴建物は焼失建物で、建物の中から多くの炭化建築部材が出土した。当時の木材利用を明らかにできる重要な試料として、樹種利用の実態を明らかにするために炭化材の樹種の同定を行う。

分析方法：現地での資料採取時に形状の確認とサイズ計測を行う。採取した試料は、乾燥後、実体顕微鏡で観察大分類を行う。分類群の中から電子顕微鏡観察試料の抽出を行い、試料の3断面を割り出して、固定後、走査型電子顕微鏡で樹種同定及び写真撮影を行う。

分析結果：広葉樹のカツラとケンボナシ属、ケヤキ、クリ、ブナ属、ハンノキ銀ヤシブシ亞属、ハンノキ属ハノキ亞属、カバノキ属、ヤナギ属、カエデ属、キハダ、トネリコ属シオジ節の12分類群と、單子葉類のイネ科草本があり、計13分類群が確認された。

成果：D24号竪穴建物の建築部材は、ケヤキ48点、クリ23点、ヤナギ属とキハダが各2点、ケンボナシ属とイネ科が各1点であった。

D25号竪穴建物の建築部材は、クリ53点、ケヤキ11点、ケンボナシ属4点、シオジ節2点、カツラとブナ属、ヤシブシ亞属、ハンノキ亞属、カエデ属が各1点である。

D24号竪穴建物は、ケヤキが最も多く利用され、次に

クリであるが、D25号竪穴建物は、クリが最も多く利用され次にケヤキが利用される。群馬県渋川周辺では、古墳時代の建築部材でクリの利用が多く確認されているが、西に吾妻川を廻った新井遺跡でもクリを利用することが分かった。さらにあまり利用例が無いケヤキを多用する例として挙げることができた。

D24号竪穴建物で織具が出土しているが、その材はカバノキ属であることが分かった。古墳時代以降の農工具の材としては利用されることが多いが弥生時代ではあまり見られないものである。

D25号竪穴建物の炭化米塊に付着していた編組製品はイネ科の草本であることが分かった。試料は幅2mm、厚さ0.3mm程度で、元の素材を2~3分割に裂いてヒゴ状にしたものと想定している。編組製品ではタケ亜科のササ類が多く確認され、イネ科草本の類例は少ない。

5. ガラス玉・石製管玉の蛍光X線分析(第6節)

目的：新井遺跡D2・4号方形周溝墓、D2号円形周溝墓、D2号古墳、C4号竪穴状遺構、遺構外から出土したガラス玉40点、石製管玉2点(同一個体)について、蛍光X線分析によりその素材を同定する。

分析方法：蛍光X線分析機器により、測定対象の物質に一定以上のX線を放射して、元素固有の蛍光X線が出ることから元素の比定を行うことができる。標準試料として計測したデータを使用し、定量を行う。

分析結果：ガラス玉40点のうち、大賀克彦氏の同定により、№1~3、7、10~14などは、0.7~1.0%程度のCuOと若干のPbOが検出され、銅着色のカリガラス(Group P II)に比定される。№4、24、25、27~30、35~37、42は、1%程度のMnが検出され、CuOやPbOが含まれていないので、コバルト着色のカリガラス(Group P I)と推定される。石製管玉の№8・9・15は碧玉質で、NaOとCaOが多く含まれ、SiO₂が若干含まれる組成である。

成果：ガラス玉の素材はカリガラスを中心にしており、銅着色のカリガラス(Group P II)とコバルト着色のカリガラス(Group P I)が含まれることが分かった。

6. 赤色顔料分析(第7節)

目的：赤色顔料には水銀朱が主成分となる朱と、赤色の酸化鉄を主成分とするベンガラがある。ベンガラには鉄鉱石を中心とする鉱物系のベンガラ、水田の礫みなどで

形成されるパイプ状の鉄細菌を焼成して造られる生物系のベンガラの2種がある。さらに金井東裏遺跡において120個以上の「赤玉」が出土し、ベンガラの素材としたものは、県内のほぼ同時期のベンガラについても比較のため分析をした結果、含明礬石ベンガラ(不定形)と仮称する淡赤色を呈するものであることが分かった。ベンガラに3種類あることが判明したのである。新井遺跡の場所は金井東裏遺跡から19km吾妻川を遡った地点にあり、どの素材のベンガラを使用したのか、弥生時代中期後半～古墳時代後期の試料を分析して明らかにする。

分析方法：目視及び実体顕微鏡で直接観察後、赤色顔料を採取する。資料は弥生時代中期後半から古墳時代中期後半の試料8点から、極少量(耳かき1杯未満)の資料を採取する。実体顕微鏡及び生物顕微鏡で、パイプ状の有無などの観察を行い、主成分元素を知るために蛍光X線分析を行う。朱はHgが、ベンガラはFeが検出される。一部試料では、X線回折で更に詳細な主成分元素の比定を行う。

分析結果：弥生中期後半の土器の資料2点、後期の土器の試料2点、古墳時代前期の墓・土器に使用された試料3点、古墳時代5世紀後半の試料1点の計8点のうち、古墳時代5世紀後半の試料を除き、パイプ状の鉄細菌を焼成して赤化したパイプ状ベンガラであることが分かった。古墳時代5世紀後半の資料は、含明礬石ベンガラ(不定形)である。

成果：今までの群馬県内の弥生時代～古墳時代の赤彩土器・赤彩埴輪は全てベンガラであることが分かっている。特に弥生時代～4世紀後半ではパイプ状ベンガラが多いのが特徴で、今回の分析でも弥生中期後半から後期、古墳時代の前期まではその傾向の中にあり、パイプ状ベンガラである。興味深いのは、古墳時代5世紀後半のC1号竪穴建物の土坑より出土したベンガラが、含明礬石ベンガラ(不定形)であることである。このベンガラが群馬に特徴的なものであり、特に5世紀後半から7世紀代まで使用されていることが分かっており、ベンガラの生産が群馬で行われていることを示す資料である。

7. 土器・埴輪の薄片作製胎土分析(第8節)

目的：D24・25号竪穴建物から出土の弥生時代中期後半土器、A区グリッド出土の弥生時代後期土器、D1号方形周溝墓出土の古墳時代前期土器、C1号竪穴建物出

土の古墳時代5世紀後半の土器、D2号墳出土の埴輪、C2号竪穴建物の土器について、どのような土を使用して作製したのか明らかにする。

分析方法：土器・埴輪の薄片試料の一部を岩石カッターで切断し、0.02mmの厚さに研磨する。薄片を偏光顕微鏡により観察し、胎土中に含まれる微化石類(放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など)、岩石、鉱物、大型砂粒の特徴、その他の混和物について観察・記録して、それぞれの薄片の胎土の特徴を明らかにする。

分析結果：①薄片資料で特徴的な淡水種の珪藻類の微化石が3～7の資料から多く検出された。②会津系とした、1の弥生中期後半の壺は、淡水生の微化石や堆積岩、凝灰岩からなる砂粒の特徴がある。③S字状口縁台付甕は沼沢地生成の粘性土を原料とした他の土器の材料に近い。④内斜口縁杯・須恵器模倣杯は淡水生の粘土ではなく、堆積岩と凝灰岩類からなる砂粒で構成される。⑤円筒埴輪は、淡水成の粘土を材料としていない大型輝石類や角閃石類が目立ち、分析した土器に近似する。西隣の四戸の古墳群の埴輪から出した藤岡産の片岩類は含まれない。

成果：会津系とした弥生時代中期後半の土器、古墳時代前期のS字状口縁台付甕、古墳時代5世紀後半の内斜口縁杯や須恵器模倣杯などの搬入品の可能性がある土器群は在地産の可能性が高い。D2号墳から出土した円筒埴輪は、他の土器の胎土と近似し、少なくとも西隣の四戸の古墳群の埴輪で明らかとなった片岩類を多く含む藤岡産では無い。埴輪産地比定が今後の課題である。

8. 繩文早期土器のX線CT撮影(第9節)

9. 炭化米塊のX線CT撮影(第10節)

目的：上述のCTスキャニングは、それぞれ土器の製作技法、炭化米塊の内部構造を解明するための基礎データを得るために行う。

分析方法：X線CTにより内部構造や断面形状を明らかにする。

分析結果：早期土器、炭化米塊とともに内部構造が明らかになった。

成果：早期土器においては、紐のもので巻き上げた成形方法ではないことが分かった。炭化米塊は、内部のイネの状況及びその変形の様子が分かった。考察編でそれぞれ詳述する。

第2節 火山灰検出同定分析

1.はじめに

関東地方北西部に位置する吾妻川流域には、榛名や浅間など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ(町田・新井, 2011)などに収録されており、考古遺跡などで調査分析を行って年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古学的な遺物や構造の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

東吾妻町新井遺跡の発掘調査でも、層位や年代が不明な土層やテフラ粒子が認められたことから、地質調査を行って土層やテフラ層の層序を記載とともに、高純度の分析試料を探取し、実験室内でテフラ分析(テフラ検出分析および火山ガラスの屈折率測定)を行い、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を実施することになった。調査分析の対象はD区深掘トレチおよびD区南壁の2地点である。

2. 調査地点の土層層序

(1) D区深掘トレチ

D区深掘トレチでは、いわゆる二次堆積ローム層(層厚235cm, X層)を認めることができた(図1)。そのマトリクスは黄色砂質土で、黄褐色細粒火山灰を多く含む黄色軽石層(軽石の最大径20mm)のブロックや、橙色軽石の濃集部(軽石の最大径17mm)、それに褐色火山灰上のブロックが認められる。また、粗粒の黄色軽石(最大径61mm)や橙色軽石(最大径22mm)も含まれている。黄色軽石の中には、やや気泡が大きめでよく発泡した斑晶が少ないもの(軽石C)、風化がやや進み斑晶鉱物が多いもの(軽石D)が含まれている。ブロック状に含まれる黄色軽石層には、軽石Bが非常に多く含まれている。なお、この堆積物の下部40cmには最大径が1mを超える亜円礫が多く含まれ

ている。

この二次堆積ローム層の上位には、下位より黄色や橙色の軽石を多く含むやや灰色がかった黄色土(層厚14cm、軽石の最大径21mm, IX層)、黄色軽石(軽石A、最大径23mm)や橙色軽石(最大径12mm)を少し含む灰褐色土(層厚18cm, VII層)、黄色や橙色の軽石を含む暗褐色土(層厚19cm, VII層)、黒褐色土(層厚14cm, VI層)、白色粒子混じり黒色土(層厚14cm, V層)が認められる。

(2) D区南壁

D区南壁では、下位より灰褐色土(層厚7cm、暗褐色土(層厚16cm)、赤褐色軽石(最大径11mm)を少し含む黄色軽石(最大径11mm)混じりで色調が暗い暗褐色土(層厚20cm)、黒色土(層厚14cm)、黒灰色土(層厚12cm)、成層したテフラ層(層厚2cm)、灰色砂層(層厚2cm)、やや色調が明るい黒色土(層厚4cm)、黄灰色土(層厚8cm)、軽石の最大径29mm、石質岩片の最大径6mm)、暗灰色土(層厚24cm)が認められる(図2)。このうち、成層したテフラ層は、下部の粗粒の褐色軽石混じり褐色細粒軽石層(層厚1cm)、軽石の最大径24mm、石質岩片の最大径10mm)と、上部の黄灰色砂質細粒火山灰層(層厚1cm)からなる。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

D区深掘トレチにおいて、二次堆積ローム層(X層)に含まれる3種類の黄色軽石のうちの軽石Cと軽石D、その上位の土層(X層)中の軽石A、そして二次堆積ローム層の上位の腐植質土壤から採取された試料の合計10試料を対象に、テフラ粒子の特徴を明らかにするためにテフラ検出分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 軽石試料に関しては適量を軽く粉碎。
- 2) 土壌試料について、電子天秤により試料8gを秤量。
- 3) 超音波洗浄装置を用いて泥分を除去。
- 4) 恒温乾燥器により80°Cで恒温乾燥。
- 5) 実体顕微鏡下で観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。軽石Dはスポンジ状に発泡しており、不透明鉱物以外の重鉱物として斜方輝石や角閃石が多く含まれている。軽石Cは、スポン

ジ状または纖維束状に発泡しており、不透明鉱物以外の重鉱物として斜方輝石や單斜輝石が含まれている。軽石Aは、スponジ状に発泡しており、不透明鉱物以外の重鉱物として斜方輝石や單斜輝石が含まれている。

腐植質土壌の試料には、いずれにおいても分厚い中間型ガラス(無色透明～淡灰色)が比較的多く含まれており、ほかに少量のスponジ状軽石型ガラスも認められる。試料4(VI層)～試料5(VI層)では、さらに灰色のスponジ状軽石型ガラスが認められる。これらの試料には、重鉱物として斜方輝石や單斜輝石のほかに、ごく少量の角閃石が含まれている。

試料4(VI層)には、灰白色のスponジ状軽石型ガラスや、中間型ガラス(無色透明～淡灰色)が比較的多く含まれている。また、試料2には、暗褐色軽石(最大径3.1mm)や、淡灰色、淡褐色、褐色、灰白色、白色スponジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれている。これらの試料に含まれる不透明鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石、單斜輝石、角閃石がある。

4. 屈折率測定(火山ガラス)

(1) 測定試料と測定方法

テフラ検出分析の対象試料のうち、二次堆積ローム層(X層)中の軽石Dのガラス部の屈折率測定を実施した。測定は温度変化型屈折率測定法(壇原, 1993)で、測定対象はテフラ検出分析後に篩別して得た1/8～1/16mm粒子中の火山ガラスである。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。この表には、群馬県域の後期旧石器時代以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて示した。二次堆積ローム層(X層)中の軽石Dのガラス部(32粒子)の屈折率(n)は、1.502～1.505である。

5. 考察

(1) テフラの起源について

二次堆積ローム層(X層)に含まれる軽石のうち、屈折率測定の対象になった軽石Dは、本遺跡の位置や鉱物組成から榛名系テフラと考えられる。風化がやや進んでいるために、約5万年前以前に榛名火山から噴出した榛名

八崎軽石(Hr-HP, 新井, 1962, 町田・新井, 2011など)と比較すると、火山ガラスの屈折率の値はやや重なるものの、今回の軽石はやや低い傾向にある。詳細は不明であるが、Hr-HPの噴火の際に発生した白川軽石流堆積物(新井, 1962)に由来するのかもしれない。榛名火山では、ほかにも中期更新世や後期更新世に火碎流が発生していることから、今後も調査分析を継続する必要がある。

軽石Cについては、岩相から約2.2万年前に浅間火山から噴出した榛名白糸軽石(As-Sr, 町田ほか, 1984, 町田・新井, 1992など)に由来すると考えられる。また、軽石Bについては、その岩相から浅間火山の軽石流期(荒牧, 1968)のテフラと考えられる。本遺跡周辺では、この時期のテフラとして浅間草津軽石(As-K, 町田・新井, 1984, 1992など)の堆積がよく知られているが、この軽石が多く含まれるテフラブロック中に細粒火山灰も混在していることから、As-Kの噴火に先行する約1.5～1.65万年前の浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992など)の一部、あるいはそれに関係する浅間小諸1火碎流堆積物(町田・新井, 1992)やAs-YP火山泥流堆積物(早田, 未公表資料)に由来するのかもしれない。

二次堆積ローム層を覆う風成堆積物に含まれるテフラのうち、IX層中の軽石Aに関しては、岩相から軽石Bと起源を同じく可能性があるが、黄色部と灰色部からなる矯状軽石が認められることなどから、約1.2万年前に浅間火山から噴出した浅間総社軽石(As-Sj, 早田, 1990, 1996など)に由来するのかもしれない。なお、橙色の軽石は、色調から、約2.4～2.9万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 早田, 2016など)に由来すると考えられる。

テフラ検出分析により、試料4(VI層上部)や試料2(V層)で少量認められた灰白色スponジ状軽石型ガラスは、岩相から3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 1992, 2003, 坂口, 2010)に由来する可能性がある。また、V層中で発掘調査担当者により認められた白色粒子については、本試料中に白色のスponジ状軽石型ガラスが認められ、下位の試料より角閃石が多い傾向にあること、それに本遺跡の位置とテフラの分布傾向を合わせると、6世紀初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979,

坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992など)に由来すると思われる。

D区南壁で認められた2層のテフラのうち、下位の成層したテフラ層は、層相や軽石の岩相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 1991, 2003, 2011)に、また、上位の軽石層は、層相や軽石の岩相から1128(大治3)年に浅間火山から噴出した浅間柏川テフラ(As-Kk, 早田, 1991, 1996, 2004)に同定される。D区における発掘調査では、これら2層のテフラ層のうち、下位のAs-B直下で調査が実施されていることから、D区深掘の最上位の5層中に混在するテフラ粒子のうち、暗褐色軽石や、淡灰色、淡褐色、褐色のスボンジ状軽石型ガラスは、何らかの攪乱作用により上位より5層に混入したAs-Bと考えられよう。

なお、D区南壁においてAs-Bより下位の土層の中に認められた黄色や赤褐色の軽石に関しては、縄文時代の浅間系テフラに由来するように思われる。吾妻川流域における縄文時代の研究では、浅間系テフラを十分に活用できていないことから、今後その産状と遺物包含層との層位関係などに注意が払われると良い。

(2) 二次堆積ローム層について

新井遺跡D区における深掘では二次堆積ローム層の基底を確認できなかったものの、その下部に亜円礫が多く含まれていることが判明した。のことから、二次堆積ローム層の下位に河川性堆積物のある可能性が考えられる。近接する四戸遺跡における調査では、二次堆積ローム層と四戸遺跡が位置する河岸段丘面との層位関係は不明確であったものの(火山灰考古学研究所, 既報告)、今回の調査分析により河岸段丘面を二次堆積ローム層が覆っている可能性が高いことがわかった。のことから、本遺跡周辺の地形形成史に、二次堆積ローム層が大きく関わっている可能性がてきた。

これまでの調査研究により、榛名火山の南を流れる烏川流域では、後期更新世末期から完新世中期にかけて、複数回の泥流が発生したことが知られている(古環境研究所, 2000, 早田, 2011など)。のことから、地震など比較的広範囲に及ぶ地変が関係している可能性があり、広い地域の自然史また環境変遷史を語る上で重要と

考えられる。今後、二次堆積ローム層のより明確な層位把握と、二次堆積現象の原因の解明が期待される。

6. まとめ

東吾妻町新井遺跡D区において、地質調査とテフラ分析(テフラ検出分析・火山ガラスの屈折率測定)を実施した。その結果、厚い二次堆積ローム層を認めることができた。また、その上位の腐植質土壤の中に浅間Bテフラ(As-B, 1108年)と浅間柏川テフラ(As-Kk, 1128年)の一次堆積層のほか、浅間C軽石やHr-FAに由来する可能性が高いテフラ粒子を検出することができた。

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノジオの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫(1979)関東地方北西側の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, №53, p.41-52.
- 新井房夫(1993)温度変化型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」。東京大学出版会, p.138-149.
- 荒牧義重(1968)浅間火山の山地質。地団研報録, №14, p.1-45.
- 堀原 駿(1993)温度変化型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」。東京大学出版会, p.149-158.
- 古環境研究所(2000)中里見遺跡群の地質とテフラ。群馬県教育委員会・群馬県理文化財調査事業団・日本鉄道建設公団編「中里見遺跡群」, p.270-280.
- 町田 洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス」。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラス」。東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・遠藤邦彦・小田静夫・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学—考古学に関する保存科学と人文・自然科学』, p.865-928.
- 早田 勉(1990)群馬の自然と風上群馬県史編さん室編「群馬県史通史編『原始古代』」, p.37-129.
- 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち。佐久考古通信, №53, p.2-7.
- 早田 勉(1996)関東地方・東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上のテフラについて—。名古屋大学加速器質量分離計業績報告書, 7, p.256-267.
- 早田 勉(2004)火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史—とくに平安時代の噴火について—。かみつけの里博物館編「1108・浅間火山―中世への脈動」, p.45-56.
- 早田 勉(2011)榛名地域の自然環境とその歴史。榛名町誌編さん委員会編「榛名町誌通史編上巻『原始古代・中世』」, p.7-56.
- 早田 勉(2014)渋川市有馬寺遺跡の土蔵とテフラ。渋川市教育委員会編「有馬寺遺跡」, p.197-211.

表1 新井遺跡におけるテフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			おもな重鉱物 (不透明鉱物以外)
		量	色調	最大径	量	形態	色調	
D区深掘トレンチ	2	暗褐色	3.1	pm (sp. fb), md	淡灰、淡灰、淡褐色	褐色、灰白、白	opx, cpx, am	
	4			pm (sp), md	灰白、淡灰	無色透明	opx, cpx, am	
	6			md, pm (sp)	無色透明	淡灰、白、灰	opx, cpx, (am)	
	8			md, pm (sp)	無色透明	淡灰、白、灰	opx, cpx, (am)	
	10			md, pm (sp)	無色透明	淡灰、灰、白	opx, cpx, (am)	
	12			md, pm (sp)	無色透明	淡灰、白	opx, cpx, (am)	
	14			md, pm (fb)	無色透明	淡灰、白	opx, cpx, (am)	
軽石A	(軽石を粉碎)			pm (sp)	白		opx, cpx	
軽石C	(軽石を粉碎)			pm (fb, sp)	白		opx, cpx	
軽石D	(軽石を粉碎)			pm (sp)	白		opx, am	

:多くに多い、:多い、:中程度、:少ない、最大径の単位は、mm。

bw:バブル型、pm:軽石型、md:中間型、sp:スポンジ状、fb:織維束状、opx:斜方輝石、cpx:单斜輝石、am:角閃石、0:量が少ないことを示す。

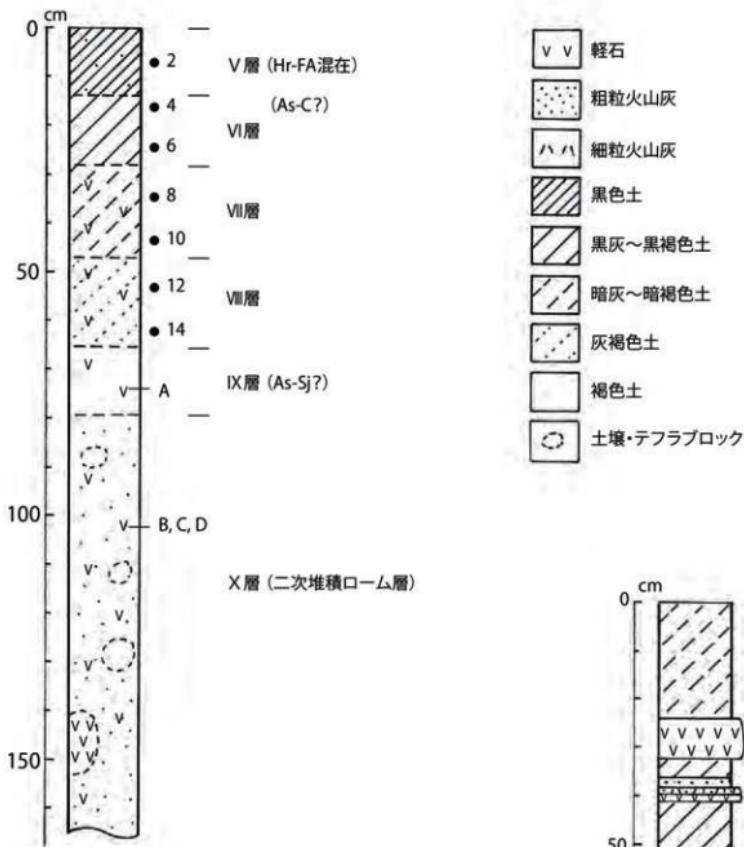
表2 組折率測定結果

地点・テフラ	試料	火山ガラス		備考
		屈折率(n)	測定数	
新井遺跡D区深掘トレンチ	軽石D	1.502-1.505	32	本報告
<北関東地方の後期更新世後半以降の指標テフラ>				
浅間A(As-A, 1783年)		1.507-1.512		1)
浅間B(As-B, 1108年)		1.524-1.532		1)
桙名二ツ岳伊香保(Hr-FP, 6世紀中葉)		1.501-1.504		1)
桙名二ツ岳渋川(Hr-FA, 6世紀初頭)		1.500-1.502		1)
		1.498-1.505		3)
浅間C(As-C, 3世紀後半)		1.514-1.520		1)
浅間D(As-D, 約5,000年前)		1.513-1.516		1)
鬼界アカホヤ(K-Ah, 約7,300年前)		1.506-1.513		1)
浅間緑社軽石(As-Sj, 約1.2万年前)		1.504-1.518		5)
浅間板谷黃色(As-YP, 約1.5~1.65万年前)		1.501-1.505		1)
浅間大窪沢1(As-Oki1, 約2万年前)		1.500-1.502		1), 4)
浅間白糸軽石(As-Sr, 約2.2万年前)		1.506-1.510		1), 4)
浅間板谷褐色(群)	上部	1.515-1.520		1), 4)
(As-BP Group, 約2.4~2.9万年前)	中部	1.508-1.511		1), 4)
	下部	1.505-1.515		1), 4)
姶良Tn(AT, 約2.9~3万年前)		1.499-1.500		1), 4)
桙名箱田(Hr-HA, 約3万年前)				2)
桙名八崎(Hr-HP, 約5万年前)		1.505-1.508		1)
大山倉吉(DKP, 約5.5万年前以前)				1)
阿蘇4(Aso-4, 約8.5~9万年前)		1.509-1.510		1)

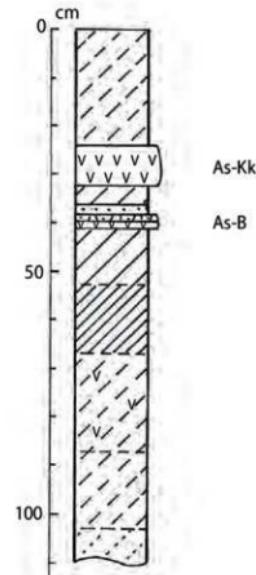
本報告・3) : 温度変化型屈折率測定法(増原, 1993)、1)・2) : 温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)。

1) : 町田・新井(2011)、2) : 早田(1996)、3) : 早田(2014)、4) : 早田(2016)、5) : 早田(未公表)。

*: 放射性炭素(¹⁴C)年代。



1図 D区深堀トレンチの土層柱状図
 ● : テフラ分析試料の層位、数字 : テフラ分析の試料番号。



2図 D区南壁の土層柱状図



写真1 D区深掘トレンチ・軽石D(透過光)
中央・中央右下: スポンジ状軽石型ガラス。
軽石の中でも発泡の程度が異なる。

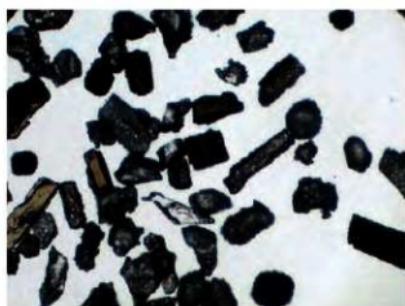


写真2 D区深掘トレンチ・軽石D(透過光)2
中央・中央上など(有色鉱物): 角閃石。
中央右など(有色鉱物): 斜方輝石。

第3節 炭化種実試料の(AMS法)による放射性炭素年代測定

1.はじめに

群馬県吾妻郡に所在する新井遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、24号竪穴建物から出土した土器内のクリ炭化子葉が2点(PLD-33213, 33214)と、同じく24号竪穴建物の床面から出土したアズキ炭化種子が1点(PLD-33217)、25号竪穴建物から出土したイネ炭化種子が2点(PLD-33215, 33216)の、合計5点である。調査所見から、遺構の時期は弥生時代中期後半と推測されている。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンバクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に

従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、暦年較正結果を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33213	遺構名: 24号竪穴建物 位置: 上器内	種類: 炭化種実(クリ子葉①) 状態: dry	超音波洗浄 酸+アルカリ+鹼洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-33214	遺構名: 24号竪穴建物 位置: 上器内	種類: 炭化種実(クリ子葉②) 状態: dry	超音波洗浄 酸+アルカリ+鹼洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-33217	遺構名: 24号竪穴建物 位置: 床面	種類: 炭化種実(アズキ種子) 状態: dry	超音波洗浄 酸+アルカリ+鹼洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-33215	遺構名: 25号竪穴建物	種類: 炭化種実(イネ種子①) 状態: dry	超音波洗浄 酸+アルカリ+鹼洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-33216	遺構名: 25号竪穴建物	種類: 炭化種実(イネ種子②) 状態: dry	超音波洗浄 酸+アルカリ+鹼洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)

表2 放射炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	' ${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-33213 24号竪穴 クリ子葉①	-22.76 \pm 0.23	2056 \pm 22	2055 \pm 20	98-69 cal BC (27.53%) 58-37 cal BC (23.93%) 14 cal BC- 4 cal AD (16.81%)	151-131 cal BC (4.93%) 121 cal BC- 15 cal AD (90.52%)
PLD-33214 24号竪穴 クリ子葉②	-25.87 \pm 0.20	2053 \pm 20	2055 \pm 20	95-73 cal BC (22.53%) 56-37 cal BC (25.35%) 14 cal BC- 4 cal AD (20.39%)	149-136 cal BC (2.58%) 112 cal BC- 18 cal AD (92.87%)
PLD-33217 24号竪穴 アズキ種子	-29.72 \pm 0.22	2116 \pm 21	2115 \pm 20	169-101 cal BC (61.93%) 67- 59 cal BC (6.34%)	334-331 cal BC (0.72%) 197-183 cal BC (4.01%) 179- 51 cal BC (90.72%)
PLD-33215 25号竪穴 イネ種子①	-26.23 \pm 0.24	2075 \pm 20	2075 \pm 20	146-140 cal BC (3.82%) 107- 45 cal BC (64.45%)	161-40 cal BC (91.64%) 10 cal BC- 1 cal AD (3.81%)
PLD-33216 25号竪穴 イネ種子②	-27.94 \pm 0.21	2090 \pm 20	2090 \pm 20	149-134 cal BC (11.61%) 115- 51 cal BC (56.66%)	167-46 cal BC (95.45%)

4. 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち 2σ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目して結果を整理する。なお、弥生時代の暦年代については小林(2009)を参照した。

24号竪穴建物出土の土器内から採取されたクリ炭化種子は、クリ子葉①(PLD-33213)が151-131 cal BC (4.93%)および121 cal BC- 15 cal AD (90.52%)、クリ子葉②(PLD-33214)が149-136 cal BC (2.58%)および112 cal BC- 18 cal AD (92.87%)であった。これは、弥生時代中期中葉～後期初頭に相当する暦年代である。また、24号竪穴建物の床面から出土したアズキ炭化種子(PLD-33217)は、334-331 cal BC (0.72%)および197-183 cal BC (4.01%)、179- 51 cal BC (90.72%)であった。これは、弥生時代中期中葉～後葉に相当する暦年代である。

25号竪穴建物出土のイネ炭化種子は、イネ種子①(PLD-33215)が161-40 cal BC (91.64%)および10 cal BC- 1 cal AD (3.81%)、イネ種子②(PLD-33216)が167-46 cal BC (95.45%)であった。

いずれも弥生時代中期中葉～後期初頭におさまる暦年代で、24号竪穴建物と25号竪穴建物の出土炭化種実にははっきりした時期差は確認できなかった。調査所見による遺構の推定時期である弥生時代中期に対しては整合的であった。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 小林謙一(2009)近畿地方以東の地域への拡散。西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 55-82, 雄山閣。
- 中村俊太(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代編集委員会編「日本先史時代の ${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代」: 3-20, 日本国第四紀学会。
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capone, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reing, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62 (4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

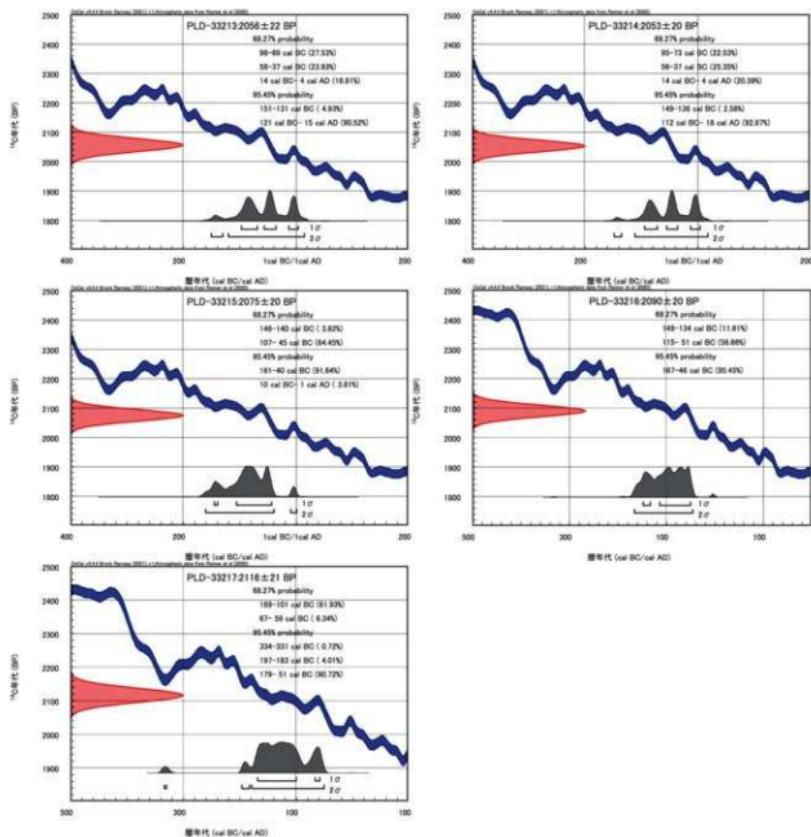


图1 历年校正结果

第4節 炭化種実同定

1.はじめに

群馬県吾妻郡東吾妻町厚田に所在する新井遺跡は、吾妻川右岸の段丘上に立地する、弥生時代中期後半の集落跡である。ここでは、弥生時代中期後半の竪穴建物から出土した炭化種実の同定を行い、当時の利用植物について検討した。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている(第3節参照)。

2. 試料と方法

試料は、24号竪穴建物と25号竪穴建物から肉眼で確認・採取された炭化種実である。年代測定の結果、炭化種実は弥生時代中期中葉～後葉に相当する年代を示した。両竪穴建物共に焼失住居である。

抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。破片で計数が困難な分類群は計量し、完形個体の重量から完形個体換算数を求めた。試料は、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3. 結果

同定の結果、木本植物ではクリ炭化果実・炭化子葉(塊含む)の1分類群、草本植物ではイネ炭化種子(塊含む)とアズキ炭化種子の2分類群の、計3分類群が得られた。同定結果を表1に示す。

以下に、出土傾向について遺構別に記載する。

24号竪穴建物：土器内(No.5；長径9.88cm、短径8.98cm、厚さ2.36cmの範囲内)から塊状のクリ果実と子葉が多く得られ、完形個体は果実が3点、子葉が52点得られた。クリの破片は、完形個体に換算すると、果実が27点強相当、子葉が381点強相当であった。イネ炭化種子とアズキ炭化種子がわずかに得られた。

25号竪穴建物：イネの炭化種子塊が得られ、塊の重量から完形個体に換算すると、1422点強であった。

次に、炭化種実の記載を示し、図版に写真を掲載して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は、米倉・榎田(2003-)に準拠し、APG IIIリストの順とした。

(1)クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化果実・炭化子葉 ブナ科

果実は、側面觀は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。底面にある殻斗着痕はざらつく。果皮内面にはいわゆる渋皮が厚く付着する。高さ18.3mm、幅19.3mm、厚さ12.1mm。子葉は、完形ならば側面觀が広卵形で、表面一面に縱方向のしわ状の溝がある。しわ以外の面は平坦でやや光沢があり、硬質。計測可能なクリ子葉52点の大ささは、高さ10.4～16.3(平均13.6±1.5)mm、幅9.6～18.3(平均14.6±1.7)mm、厚さ5.4～18.6(平均8.8±2.7)mm、厚さ5.4～18.6(平均8.8±2.7)mm(表2)。1図-4には中央部に棒で穴をさしたような穴が空いている。

(2)イネ *Oryza sativa* L. 炭化種子(穎果)・炭化種子(穎果)塊 イネ科

種子は、上面觀が両凸レンズ形、側面觀は橢円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縱方向の2本の浅い溝がある。種子塊の大きさは、長径6.43cm、短径4.47cm、

表1 新井遺跡から出土した炭化種実(括弧内は破片数)

分類群	遺構 時期	24号竪穴建物		25号竪穴建物	
		採取方法	現地採取	採取方法	現地採取
クリ	炭化果実	3	≥27 ^①	4.46g	
	炭化子葉	52	≥381 ^②	214.20g	
イネ	炭化種子塊			≥1422 ^③	11.21g
	炭化種子	1			
アズキ	炭化種子	1	(8)		

①クリ炭化果実1個体の重量0.162g(約半分の重量0.081g)からの完形個体換算数

②クリ炭化子葉10個体の重量(5.62g)からの完形個体換算数

③イネ炭化種子10個体の重量(0.79g)からの完形個体換算数

厚さ2.30cm。種子塊内の粒は変形している。種子塊の底面は湾曲し、側面には割り裂いた素材を用いた編組製品の一部が残る。種子1点の大きさは、長さ4.6mm、幅3.0mm（1図-8）と長さ5.2mm、幅2.9mm（1図-9）。

(3)アズキ *Vigna angularis* (Willd.) Ohwi et H.Ohashi var. *angularis* 炭化種子 マメ科

上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い梢円形。臍は全長の半分から2/3ほどの長さで、片側に寄ると推定されるが、残存していない。初生葉は中央に向かって伸びる。完形個体の大きさは、長さ6.2mm、幅4.4mm、厚さ4.3mm。半割れの個体の大きさは、長さ5.4mm、幅4.1mm。小畠(2008)に示された現生種と大きさを比較すると、栽培種の大きさである。

4. 考察

弥生時代中期中葉～後葉の竪穴建物と考えられる遺構から出土した炭化種実を同定した結果、栽培植物や野生植物で利用可能な種実が得られた。

24号竪穴建物からは、野生植物のクリと栽培植物のイネ(いわゆる炭化米)とアズキが得られた。クリは土器内からまとまって出土しており、果実や果皮が大量に含まれるため、子葉の状態で取り上げられた個体も埋没時には果実の状態であったと推定される。すなわち、クリは殻斗(いわゆるイガの部分)を取り除き、果実の状態で土器内に保管され、焼失に伴って炭化したと考えられる。弥生時代にクリが大量に出土した例はこれまでにほとんどなく、また50点を超える計測値は報告されていないが、東北地方の縄文時代のいくつかの遺跡ではクリの炭化子葉が計測されている。吉川(2011)で計測された数値の平均値と比較すると、新井遺跡のクリ炭化子葉の大きさは、高さが平均 13.6 ± 1.5 mm、幅が平均 14.6 ± 1.7 mmで、縄文時代前期から晚期の5遺跡よりも小さく、標準偏差も小さかった。吉川(2011)では、縄文時代晚期には現在の栽培種と比較してもかなり大きいクリから前期と同じような小さいクリまで様々なサイズが存在していたと指摘されているが、弥生時代中期中葉～後葉の新井遺跡ではかなり小さいクリが利用されており、縄文時代に大型化したクリが引き継がれているような様相は見られなかつた。

また、24号竪穴建物の床面にはアズキの大種子が一定

の箇所に散在しており、一部について同定をしたところ、アズキがほとんどでイネも1点含まれていた。袋などに保管されていたマメが火災に伴って、床面に散らばった可能性などが考えられる。

25号竪穴建物からは、イネ炭化種子塊が得られた。全て種子(いわゆる炭化米)であり、膨張と変形が著しく、端面は平坦に潰れている状況から炊かれた米と判断した。側面には編組製品の一部がコメに付着して残存しており、かご類に入れられたご飯であった可能性がある。これまで、かご類に入れられたご飯やおにぎりは、山梨県笛吹市前付遺跡の古墳時代前期の竪穴建物(山梨文化財研究所、2015)や神奈川県横浜市北川表の上遺跡の古墳時代後期の竪穴建物から出土した例(佐々木ほか、2009)が古いが、弥生時代の例は知られていない。本例は、編組製品に調理中または調理後の米が入れられた可能性があり、食品をどのような容器に入れていたのかを示す好例といえよう。

今回検討したのは肉眼で確認され、取り上げられた炭化種実であったが、栽培植物か、もしくは野生植物でも利用可能な植物のみで、穀類とマメ類、堅果類が確認され、遺存状態も良好であった。今後、土壤中に含まれている微細な種実もあわせて検討すれば、当時の食生活や周辺の植生について、より具体的な様相が明らかになると考えられる。

引用文献

- 小畠弘己(2008)マメ科種子同定法。小畠弘己編「東北先史古代の穀物3」：225-252。熊本大学。
- 佐々木由香・パンダリス・スダルシャン・米田恭子・村田健太郎・小石川 篤(2009)北川表の上遺跡出土炭化種実同定および炭化種実塊のX線CT画像解析による検討。財团法人 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編「港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告42」北川表の上遺跡」：423-435。横浜市教育委員会。
- 山梨文化財研究所(2015)前付遺跡・大寺寺跡、330p。笛吹市教育委員会、吉川純子(2011)縄文時代におけるクリ果実の大きさの変化。植生史研究18-2, 57-63。
- 米倉浩司・柳田 忠(2003-) BG Plants 和名一学名インデックス(YList), <http://ylist.info>

表2 クリ炭化子葉の大きさ（単位mm）

	高さ	幅	厚さ	図版番号
クリ52点	16.0	16.5	11.0	
	14.9	18.3	9.8	
	15.6	13.9	8.2	
	15.8	15.6	8.8	
	14.2	14.9	8.5	
	14.6	13.7	9.5	
	12.6	14.9	6.1	
	14.7	16.2	10.3	
	16.3	17.9	9.2	1図-3
	15.0	14.6	8.5	
	15.4	14.3	8.0	
	11.8	16.7	7.1	
	14.7	16.1	7.5	
	14.4	17.1	8.5	
	13.0	12.6	7.2	
	13.1	14.6	7.6	
	15.8	15.1	9.9	
	10.8	14.2	8.0	
	13.5	14.4	9.0	
	11.4	14.2	7.1	
	13.5	15.3	9.3	
	16.0	14.3	8.5	
	12.6	14.2	7.3	
	11.5	14.7	6.8	
	13.3	14.7	8.8	
	14.4	15.4	7.5	
	10.7	13.5	6.3	
	11.3	13.2	9.2	
	10.4	12.6	5.8	
	12.4	14.8	7.1	
	13.3	17.4	10.0	
	13.1	18.3	8.3	
	12.0	12.9	7.5	
	14.6	14.4	9.7	
	14.2	14.4	8.5	
	15.1	(14.1)	15.6	
	14.2	13.7	18.6	
	13.0	15.9	8.4	
	(11.3)	11.1	6.1	
	12.8	12.1	8.2	
	14.3	13.6	10.2	
	13.1	13.3	16.2	
	12.7	13.4	8.1	
	15.0	15.5	(8.2)	1図-4
	15.4	14.5	(8.0)	
	13.9	15.1	(6.7)	
	13.1	15.7	7.8	
	14.7	13.8	15.9	
	11.3	15.3	7.6	
	14.0	12.9	6.7	
	12.3	(13.7)	5.4	
	13.1	9.6	7.3	
最小	10.4	9.6	5.4	
最大	16.3	18.3	18.6	
平均	13.6	14.6	8.8	
標準偏差	1.5	1.7	2.7	

括弧は破片値で、統計には含めていない



1. クリ炭化果実・炭化子葉塊(24号竪穴建物)、2. クリ炭化果実(24号竪穴建物)、3・4. クリ炭化子葉(24号竪穴建物)、5. クリ炭化子葉(24号竪穴建物、PLD-33213)、6. クリ炭化子葉(24号竪穴建物、PLD-33214)、7. イネ炭化種子塊(25号竪穴建物)、8. イネ炭化種子塊(25号竪穴建物、PLD-33216)、9. イネ炭化種子塊(25号竪穴建物、PLD-33215)、10. アズキ炭化種子(24号竪穴建物)、11. アズキ炭化種子(24号竪穴建物、PLD-33217)

1図 新井遺跡から出土した炭化種実

第5節 炭化材樹種同定

1. はじめに

群馬県吾妻郡東吾妻町厚田に位置する新井遺跡から出土した炭化材について、樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、24号竪穴建物と25号竪穴建物から出土した建築部材の炭化材162点と、24号竪穴建物から出土した木器1点、25号竪穴建物出土の炭化米に付着していた編組製品1点の、合計164点である。調査所見によると、遺構の時期は弥生時代中期後半と推定されており、放射性炭素年代測定でも推定時期に対して整合的な結果が得られた(第3節参照)。

樹種同定は、現場での試料採取時に形状の確認とサイズ計測を行った。試料は、乾燥させた後、実体顕微鏡で観察して大まかに分類群に分けた。各分類群から電子顕微鏡観察試料を抽出し、カミソリまたは手で3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、直径1cmの真鍮試験台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、広葉樹のカツラとケンボナシ属、ケヤキ、クリ、ブナ属、ハンノキ属ヤシャブシ亞属(以下、ヤシャブシ亞属)、ハンノキ属ハンノキ亞属(以下、ハンノキ亞属)、カバノキ属、ヤナギ属、カエデ属、キハダ、トネリコ属シオジ節(以下、シオジ節)の12分類群と、單子葉類のイネ科草本があり、合計13分類群が確認された。結果の一覧を表3に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図1~3に示す。

(1) カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Siebold et Zucc. ex Hoffm. et Schult. カツラ科 図1 1a-1c(25竪建-3)

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で30段程度となる。放射組織は1~3列幅で、平伏細胞と方形細胞からなる異性である。

カツラは暖帯から温帯に分布する落葉高木である。材は軽軟で韌性があり、加工は容易である。

(2) ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科 図1 2a-2c (24竪建-21)

やや大型の道管が年輪はじめに配列し、晩材部では厚壁で小型の道管が単独もしくは2~3複合して散在する

表1 遺構と器種別の樹種別同定結果

樹種	道構名 器種	24号竪穴建物		25号竪穴建物		計
		建築部材	木器	建築部材	編組製品	
カツラ				1		1
ケンボナシ属		1		4		5
ケヤキ		48		11		59
クリ		32		33		85
ブナ属				1		1
ハンノキ属ヤシャブシ亞属				1		1
ハンノキ属ハンノキ亞属				1		1
カバノキ属			1			1
ヤナギ属		2				2
カエデ属				1		1
キハダ		2				2
トネリコ属シオジ節				2		2
イネ科草本		1			1	2
同定不可		1				1
総計		87	1	75	1	164

環孔材である。道管の穿孔は單一である。放射組織は異性で、1～3列幅である。

ケンボナシ属は暖帯から温帯に分布する落葉高木で、ケンボナシとケケンボナシの2種がある。材は重さおよび堅さは中庸で、切削加工は容易で狂いや割れはない。
(3)ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科
図1 3a-3c (25堅建-1)

大型の道管が年輪のはじめに1列に並び、晩材部では小道管が集團をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は單一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は3～5列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や溪畔によく生育する。材は重硬だが、加工はそれほど困難ではなく、保存性が高い。

(4)クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科
図1 4a-4c (24堅建-19)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は單一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。
(5)ブナ属 *Fagus* ブナ科 図1 5a-5c (25堅建-28)

小型で単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減する散孔材である。道管の穿孔は單一のものと階段状の2種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は、堅硬および緻密で、韌性があるが保存性は低い。

(6)ハンノキ属 ヤシャブシ亜属 *Alnus* subgen. *Alnaster* カバノキ科 図1・2 6a-6c (25堅建-50)

小型の道管が、放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状もしくは散在状となる。道管の穿孔は10～20段程度の階段状である。放射組織は単列で、同性である。

ヤシャブシ亜属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ミヤマハンノキやヤシャブシなど4種がある。

材の硬さと重さは中庸である。

(7)ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus* subgen. *Alnus* カバノキ科 図2 7a-7c (25堅建-68)

小型の道管が放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状もしくは散在状となる。道管の穿孔は10～20段程度の階段状である。放射組織は単列同性で、集合放射組織が存在する。

ハンノキ亜属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ハンノキやヤマハンノキなど7種がある。材は全般に硬さおよび重さが中庸で、加工は容易である。

(8)カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図2 8a-8c (24堅建-26)

やや小型で丸い道管が、ほぼ単独でまばらに分布する散孔材である。道管の穿孔は10～20段程度の階段状である。放射組織はほぼ同性で1～3列幅である。道管相互壁孔は交互状で極めて小さく、密に分布する。

カバノキ属は温帯から亜寒帯に分布する落葉高木または低木で、カバノキやミズメなど11種がある。材は全般的にやや重厚で、切削および加工は中庸である。

(9)ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図2 9a-9c (24堅建-44)

やや小型の道管が、単独もしくは数個複合してやや密に分布する散孔材である。道管の穿孔は單一となる。放射組織は単列で、異性である。

ヤナギ属は暖帯から寒帯に広く生育する落葉高木または低木で、ケショウヤナギやコゴメヤナギ、シダレヤナギなど、日本では90種程がある。材は全般に軽軟で、強度は低いが韌性があり、切削加工は容易である。

(10)カエデ属 *Acer* ムクロジ科 図版2 10a-10c (25堅建-14)

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において木部組織の壁厚の違いによる雲紋状の模様がみられる。道管の穿孔は單一で、道管壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織はほぼ同性で、1～5列幅である。

カエデ属は主に温帯に分布する落葉高木で、オオモミジやハウチワカエデ、イタヤカエデなど26種がある。材は全体的に緻密で韌性がある。

(11)キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. ミカン科 図2・3 11a-11c (24堅建-68)

大型で丸い道管が早材部に配列し、晩材ではごく小型で薄壁の小道管が集団をなして帯状～斜線状に配列する環孔材である。道管に赤褐色の樹脂が見られ、穿孔は單一である。放射組織はほぼ同性、1～6列幅できれいな紡錘形となる。

キハダは温帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で加工容易だが、水湿に強い。

(12)トネリコ属シオジ節 *Fraxinus sect. Fraxinaster*
モクセイ科 図3 (25号建-11)

年輪のはじめに大型の道管が数列ぶる環孔材で、晩材部では厚壁の小道管が単独もしくは放射方向に2～3個複合して散在する。道管の穿孔は單一である。放射組織は同性で、1～3列幅である。

シオジ節は温帯に分布する落葉高木で、シオジとヤチダモがある。材はやや重硬で粘りがあり、加工性および保存性は中庸である。

(13)イネ科草本 Poaceae 図3 13a (25号建-76)

柔細胞と維管束で構成される單子葉類である。維管束が柔細胞中に散在する不齊中心柱で、維管束を囲む維管束鞘は薄い。稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。小径で、維管束鞘が薄いため、草本と判断した。

4. 考察

遺構と器種別の樹種同定結果を表1、建築部材の木取りを表2に示す。建築部材は、24号竪穴建物ではケヤキが48点、クリが32点、ヤナギ属とキハダが各2点、ケンボナシ属とイネ科が各1点であった。なお、試料が消滅して採取できなかった同定不能が1点ある。木取りでは、ケヤキとクリは柵目が多く、その他に板目と角材、割材、丸木も見られた。ケンボナシ属は柵目、キハダは柵目と板目、ヤナギ属は柵目と角材であった。25号竪穴建物ではクリが53点、ケヤキが11点、ケンボナシ属が4点、シオジ節が2点、カツラとブナ属、ヤシャブシ亜属、ハンノキ亜属、カエデ属が各1点であった。クリは柵目が多く、板目と角材、追柵目もみられた。ケヤキは柵目が多く、板材と割材もある。その他の樹種では、ケンボナシ属は柵目と板目、シオジ節は丸木と柵目、カツラとヤシャブシ亜属は板目、ハンノキ亜属とカエデ属は角材であった。

24号竪穴建物と25号竪穴建物の結果を比較すると、樹種構成は比較的類似しているが、24号竪穴建物ではケヤ

キが最も多くクリが2番目で、25号竪穴建物ではクリが最も多くケヤキが2番目であった。関東地方における弥生時代中期～古墳時代の建築部材にクヌギ節やコナラ節が多く利用される傾向があるが、群馬県の渋川市周辺では古墳時代の建築部材でクリの利用が多く確認されている(高橋、2012)。群馬県内の弥生時代中期の建築部材や炭化材で樹種同定された分析事例は確認できなかったが、新井遺跡周辺では弥生時代にもクリが多用されていた可能性がある。しかし、弥生時代の建築部材でケヤキを多用する事例は関東地方では確認できなかった。遺跡周辺に生育していた樹木が活用されたと推測される。ケヤキは重硬だが加工はそれほど困難ではなく、保存性も高い有用な材である。

24号竪穴建物出土の木器はカバノキ属で、木取りは横木取りであった。カバノキ属は群馬県では古墳時代以降の農工具に比較的多く見られるが、弥生時代以前ではあまり使用が確認されていない(伊東・山田編、2012)。カバノキ属は比較的重硬で緻密な材であり、近世の江戸周辺では挽物木地として利用されている(伊東・山田編、2012)。

25号竪穴建物出土の炭化米に付着して残存していた編組製品は、イネ科の草本であった。試料は幅2mm、厚さ0.3mmで、元の素材を2～3分割程に割裂いてヒゴ状にしたと思われる。本試料は調理後の米が入れられた可能性があり(炭化種実同定の項参照)、容器として利用されていたと推測される。弥生時代の編組製品の出土例はあまり多くないが、比較的タケ亜科のササ類が多く確認されている(佐々木、2015)。イネ科草本の出土例は少ないが、タケ亜科などに比べて残存しにくいことも一因として考えられる。

参考・引用文献

- 平井信二(1996)木の大百科、394p、朝倉書店。
- 伊東隆大・山田昌久編(2012)木の考古学－出土木製品用材データベース－、449p、海青社。
- 佐々木由香(2015)穂文・弥生時代の編組製品製作技法の特徴と時代差、あみもの研究会講演シンポジウム論文・弥生時代の編組製品研究の新展開－植物資源利用・技法・用途－要旨集：27-34、あみもの研究会、高橋 敦(2012)北関東・甲信・茨城県・栃木県・群馬県・山梨県・長野県－、伊東隆大・山田昌久編「木の考古学－出土木製品用材データベース－」：157-178、海青社。

第6章 自然科学分析

表2 建築部材の樹種と木取り

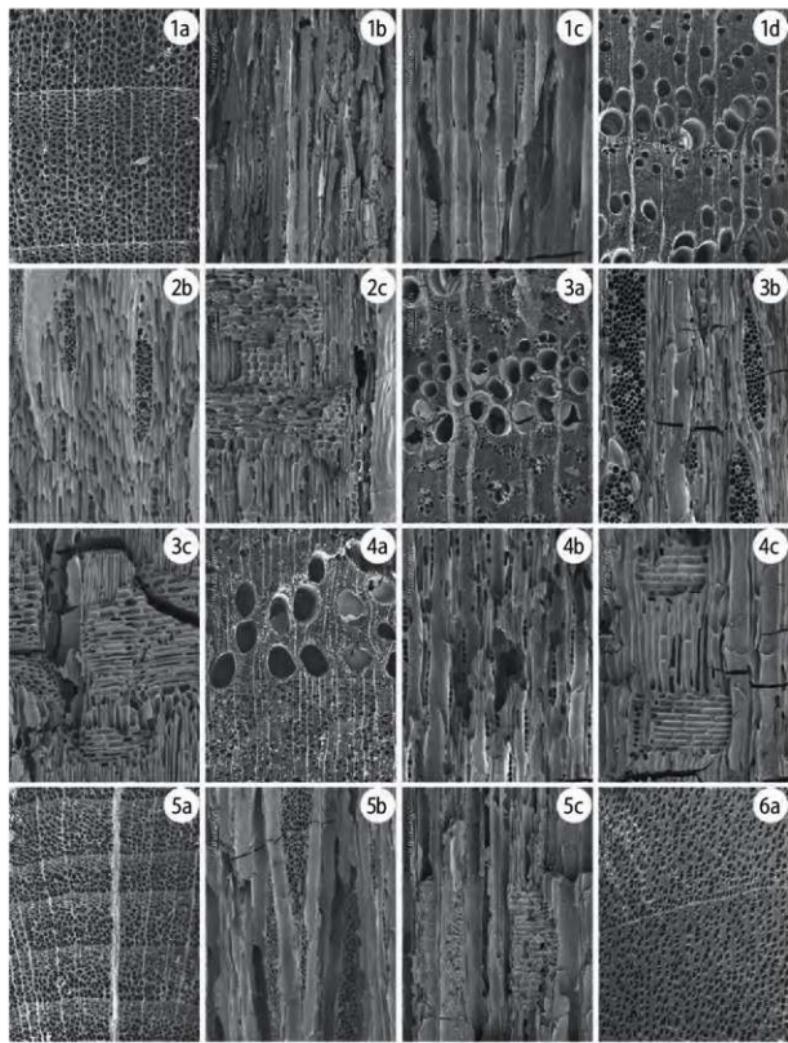
樹種	24号壁穴建物							25号壁穴建物											
	丸木	板目	板目	角材	削材	不明	丸木	板目	板目	角材	削材	不明	計						
カツラ													1						
ケンボナシ属		1						1				3	5						
ケヤキ	1	34	(1)	(1)	6	(2)	(1)	2				1	1	59					
クリ	1	10		4	8	(2)	2	(2)	3		23	3	10	16	(1)	85			
ブナ属												1			1				
ハンノキ属ヤシャブシ亞属												1			1				
ハンノキ属ハンノキ亜属												1			1				
ヤナギ属		1			1										2				
カエデ属												1			1				
キハダ		1		1											2				
トネリコ属シオジ節												1	1		2				
総計	2	47	(1)	5	(1)	15	(4)	2	(3)	5	2	33	3	16	18	(1)	1	1	160
																	括弧内は形状が不明確(?)付き		

表3 樹種同定結果一覧

遺構	試料No	器種	サイズ(cm)			木取り	樹種
			長	幅	厚		
24号壁穴建物	24壁建-1	建築部材	29	10	3	角材	クリ
24号壁穴建物	24壁建-2	建築部材	60	12.5	4.5	角材	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-3	建築部材	50	14	2.3	角材	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-4	建築部材	95	16	8	丸木	クリ
24号壁穴建物	24壁建-5	建築部材	15	17	4.5	板目	クリ
24号壁穴建物	24壁建-6	建築部材	16	4.5	0.8	削材?	クリ
24号壁穴建物	24壁建-7	建築部材	22	6	1.8	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-8	建築部材	22	6	1.8	板目	クリ
24号壁穴建物	24壁建-9	建築部材	26	4.5	1.5	削材	クリ
24号壁穴建物	24壁建-10	建築部材	37	4.7	2.8	角材	クリ
24号壁穴建物	24壁建-11	建築部材	18	5	2.3	角材	クリ
24号壁穴建物	24壁建-12	建築部材	60	5	4.3	角材	クリ
24号壁穴建物	24壁建-13	建築部材	21	8	3.8	板目	クリ
24号壁穴建物	24壁建-14	建築部材	19	3	1.2	削材?	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-15	建築部材	12	12	3.7	角材	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-16	建築部材	11.5	13	2.3	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-17	建築部材	21	19	4.3	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-18	建築部材	21	19	4.3	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-19	建築部材	17	5	3.5	角材	クリ
24号壁穴建物	24壁建-20	建築部材	29	4.5	4	角材	クリ
24号壁穴建物	24壁建-21	建築部材	4.5	5	2	板目	ケンボナシ属
24号壁穴建物	24壁建-22	建築部材	15	6	2.8	板目	クリ
24号壁穴建物	24壁建-23	建築部材	8	4.5	2.4	板目	クリ
24号壁穴建物	24壁建-24	建築部材	75	8	5	角材?	クリ
24号壁穴建物	24壁建-25	建築部材	13	6.5	2.4	板目	クリ
24号壁穴建物	24壁建-26	木器	13	6	1	板木取り	カバノキ属
24号壁穴建物	24壁建-27	建築部材	17	5	3	板目?	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-28	建築部材	14	12	3	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-29	建築部材	8	3	2.6	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-30_1	建築部材	4.5	4	3	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-30_2	建築部材	Φ 5mm				イネ科
24号壁穴建物	24壁建-31	建築部材	9	5	1.8	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-32	建築部材	13	10	3.5	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-33	建築部材	114	6	4.7	角材	ヤナギ属
24号壁穴建物	24壁建-34	建築部材	20	4.5	1	板目	キハダ
24号壁穴建物	24壁建-35	建築部材	15	3.5	1	削材	クリ
24号壁穴建物	24壁建-36	建築部材	30	13	2.5	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-37	建築部材	2.3	9	1.5	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-38	建築部材	16	10.5	2.3	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-39	建築部材	13	4.5	1.5	角材	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-40	建築部材	19	8	2.5	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-41	建築部材	28	13	1.8	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-42	建築部材	40	12	2.7	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-43	建築部材	29	7	2	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-44	建築部材	9	11	2	板目	ヤナギ属
24号壁穴建物	24壁建-45	建築部材	7	12	2.4	板目	ケヤキ
24号壁穴建物	24壁建-46	建築部材	12	5	4.8	丸木	ケヤキ

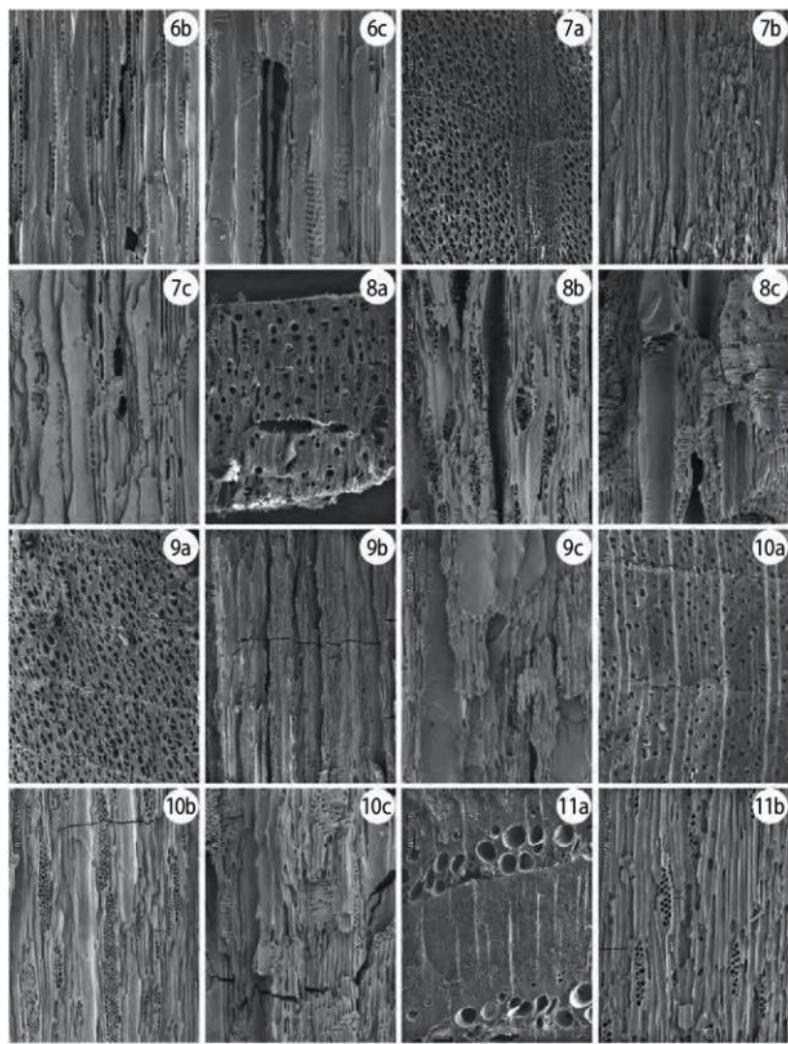
遺構	試料No	器種	サイズ(cm)			木取り	樹種
			長	幅	厚		
24号竪穴建物	24型建-47	建築部材	19	8	4	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-48	建築部材	9	9	4	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-49	建築部材	15	9	3	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-50	建築部材	8	3.2	1.6	角材	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-51	建築部材	14	5	7	板目	クリ
24号竪穴建物	24型建-52	建築部材	25	3	1.6	角材?	クリ
24号竪穴建物	24型建-53	建築部材	6	3	2.5	角材?	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-54	建築部材	11	6	3.7	角材	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-55	建築部材	3	10	3	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-56	建築部材	10	6.5	2.3	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-57	建築部材	12	3	1.8	角材	クリ
24号竪穴建物	24型建-58	建築部材	6	3	1	筋材?	クリ
24号竪穴建物	24型建-59	建築部材	4	2	1.2	不明	クリ
24号竪穴建物	24型建-60	建築部材	7	7	6	不明	クリ
24号竪穴建物	24型建-61	建築部材	25	14	2.5	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-62	建築部材	6	9	2.5	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-63	建築部材	7	6	1	板目	クリ
24号竪穴建物	24型建-64	建築部材	61	18	4	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-65	建築部材	2.5	2	1.5	不明	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-66	建築部材	18	6	2	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-67	建築部材	12	8	3	板目?	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-68	建築部材	12	13	3	柾目	キハダ
24号竪穴建物	24型建-69	建築部材	-	-	-	-	-
24号竪穴建物	24型建-70	建築部材	25	9	2.5	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-71	建築部材	31	9	3	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-72	建築部材	45	24	3.5	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-73	建築部材	2	1.5	2	不明	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-74	建築部材	5	5	1.8	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-75	建築部材	5	4.5	1.4	板目	クリ
24号竪穴建物	24型建-76	建築部材	18	8	2.8	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-77	建築部材	87	11	3.4	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-78	建築部材	26	5	2.4	角材?	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-79	建築部材	13	8	4.7	柾目	クリ
24号竪穴建物	24型建-80	建築部材	28	7	3.8	柾目	クリ
24号竪穴建物	24型建-81	建築部材	(15)	(8)	(3.2)	不明	クリ
24号竪穴建物	24型建-82	建築部材	8	5	4.5	角材	クリ
24号竪穴建物	24型建-83	建築部材	6	4	0.8	柾目	クリ
24号竪穴建物	24型建-84	建築部材	19	7	4.5	柾目	クリ
24号竪穴建物	24型建-85	建築部材	40	21	3	柾目	ケヤキ
24号竪穴建物	24型建-86	建築部材	40	8	2	柾目	クリ
24号竪穴建物	24型建-87	建築部材	19	9	3.5	柾目	ケヤキ
25号竪穴建物	25型建-1	建築部材	70	11	3.4	柾目	ケヤキ
25号竪穴建物	25型建-2	建築部材	65	16	2.5	追柾目	クリ
25号竪穴建物	25型建-3	建築部材	49	17	6	板目	カツラ
25号竪穴建物	25型建-4	建築部材	78	18	1.5	柾目	クリ
25号竪穴建物	25型建-5	建築部材	8	10	5	板目	クリ
25号竪穴建物	25型建-6	建築部材	6	4	1.5	柾目	クリ
25号竪穴建物	25型建-7	建築部材	55	8	1	柾目	クリ
25号竪穴建物	25型建-8	建築部材	8	5	0.5	板目	クリ
25号竪穴建物	25型建-9	建築部材	17	7	1	柾目	ケヤキ
25号竪穴建物	25型建-10	建築部材	7	6	1.2	柾目	クリ
25号竪穴建物	25型建-11	建築部材	15	4.5	1.2	柾目	トネリコ属シオジ節
25号竪穴建物	25型建-12	建築部材	7	7	2.5	柾目	ケヤキ
25号竪穴建物	25型建-13	建築部材	8	4	2	板目	ケヤキ
25号竪穴建物	25型建-14	建築部材	36	7	3.5	角材	カエデ属
25号竪穴建物	25型建-15	建築部材	15	10	3	柾目	ケヤキ
25号竪穴建物	25型建-16	建築部材	42	10	2	柾目	ケヤキ
25号竪穴建物	25型建-17	建築部材	42	7	3	柾目	クリ
25号竪穴建物	25型建-18	建築部材	5	4.5	1	柾目	ケヤキ
25号竪穴建物	25型建-19	建築部材	43	9	3.4	柾目	ケヤキ
25号竪穴建物	25型建-20	建築部材	-	-	-	不明	ケヤキ
25号竪穴建物	25型建-21	建築部材	18	6	2.4	柾目	クリ
25号竪穴建物	25型建-22	建築部材	8	8	2	柾目	ケヤキ
25号竪穴建物	25型建-23	建築部材	14	9	3	柾目	クリ
25号竪穴建物	25型建-24	建築部材	9	6	1	追柾目	クリ
25号竪穴建物	25型建-25	建築部材	25	9	2	柾目	クリ
25号竪穴建物	25型建-26	建築部材	44	4	3.5	角材	クリ
25号竪穴建物	25型建-27	建築部材	6	5	1.2	板目	クリ

造構	試料No.	器種	サイズ(cm)			木取り	樹種
			長	幅	厚		
25号盤穴建物	25型建-28	建築部材	23	5	1.5	丸木	ブナ属
25号盤穴建物	25型建-29	建築部材	13	12	2	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-30	建築部材	20	12	1.5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-31	建築部材	20	9	4.5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-32	建築部材	8	5	1.2	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-33	建築部材	11	7	3.5	崩材	ケヤキ
25号盤穴建物	25型建-34	建築部材	25	3	3	丸木	トネリコ属シオジ節
25号盤穴建物	25型建-35	建築部材	11	5	3.5	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-36	建築部材	9	4	2	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-37	建築部材	25	12	3.5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-38	建築部材	37	15	3.5	迫板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-39	建築部材	9	5	5	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-40	建築部材	13	5	4.5	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-41	建築部材	28	7	5	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-42	建築部材	9	8	2.5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-43	建築部材	22	7	3.5	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-44	建築部材	11	7	2.4	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-45	建築部材	40	24	1.5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-46	建築部材	8	12	2.5	板目	ケンボナシ属
25号盤穴建物	25型建-47	建築部材	24	7	2	板目	ケンボナシ属
25号盤穴建物	25型建-48	建築部材	17	11	2	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-49	建築部材	31	14	2.4	板目	ケンボナシ属
25号盤穴建物	25型建-50	建築部材	20	12	4	板目	ハンノキ属ヤシャブシ亜属
25号盤穴建物	25型建-51	建築部材	26	11	3.5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-52	建築部材	5	6	1.5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-53	建築部材	13	12	3.5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-54	建築部材	21	4	1.5	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-55	建築部材	73	17	3.5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-56	建築部材	12	10	3	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-57	建築部材	52	8	3.5	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-58	建築部材	40	9	5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-59	建築部材	48	10	3	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-60	建築部材	17	6	2.8	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-61	建築部材	25	8	1.5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-62	建築部材	12	7	3.5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-63	建築部材	12	8	0.5	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-64	建築部材	9	5	2.5	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-65	建築部材	24	6	2.8	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-66	建築部材	7	2.5	2	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-67	建築部材	15	4	2.5	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-68	建築部材	4	4	3.5	角材	ハンノキ属ハンノキ亜属
25号盤穴建物	25型建-69	建築部材	14	8	3	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-70	建築部材	15	6	4.5	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-71	建築部材	46	9	2	角材?	クリ
25号盤穴建物	25型建-72	建築部材	9	5	2	板目	クリ
25号盤穴建物	25型建-73	建築部材	18	12	2	板目	ケンボナシ属
25号盤穴建物	25型建-74	建築部材	7	4	3	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-75	建築部材	6	6	2.5	角材	クリ
25号盤穴建物	25型建-76	編組製品	—	0.5	—	崩裂	イネ科



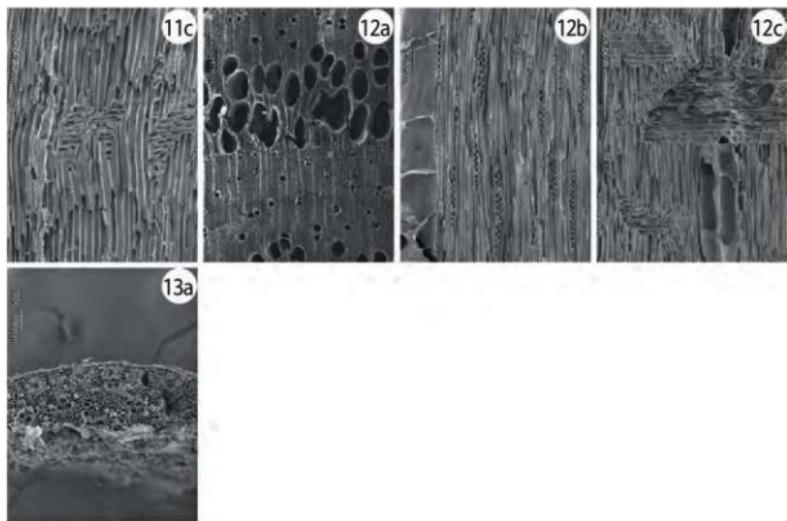
1a-1c カツラ (25堅建-3)、2a-2c ケンボナシ属 (24堅建-21)、3a-3c ケヤキ (25堅建-1)、4a-4c クリ (24堅建-19)、
5a-5c ブナ属 (25堅建-28)、6a ハンノキ属ヤシャブシ亜属 (25堅建-50)
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

図1 新井遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)



6b-6c ハンノキ属ヤシャブシ亜属 (25堅建-50)、7a-7c ハンノキ属ハンノキ亜属 (25堅建-68)、8a-8c カバノキ属 (24堅建-26)、9a-9c ヤナギ属 (24堅建-44)、10a-10c カエデ属 (25堅建-14)、11a-11b キハダ (24堅建-68)
a: 横断面, b: 接触断面, a: 放射 断面

図2 新井遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)



11c キハダ (24堅建-68)、12a-12c トネリコ属シオジ節 (25堅建-11)、13a イネ科 (25堅建-76)
a:横断面、b:接線断面、c:放射 断面

図3 新井遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(3)

第6節 ガラス玉・石製管玉の蛍光X線分析

【測定装置】

蛍光X線分析装置(XRF、日立ハイテクサイエンス製エレメントモニタSEA1200VX)

【測定条件】

- 使用管球：ロジウム
- 加速電圧+
1次フィルタ：15 kV+フィルタなし(Na～Sの測定に使用)、
50kV+Pbフィルタ(Mn～Y,Hf～Uの測定に使用)、
50kV+Cd (Zr～Baの測定に使用)
- ビーキングタイム：1.0 μ sec
- コリメータ： $\phi 1\text{mm}$
- 雰囲気：真空(13Pa以下) 30min
- 測定時間：300s (フィルタごと)

【解析方法】

ガラス試料の解析にはNIST-620 Soda-Lime Flat Glassを標準試料として計測したデータを適用し、ガラス以外の試料の解析には装置に搭載されている汎用的な標準試料のデータを適用し、ファンダメンタルバラメータ法による定量を行った。

【コメント】

表2に検出された元素と割合を、表3に元素を単一の酸化物と仮定し再計算したものを示した。

Coに関して、CoのK α 線はFeのK β 線、Znのエスケープピークと重なる点からCoのK β 線から計算を行った。

表1 奈良文化財研究所(以後、奈文研とする)標準試料XRF分析結果

試料	奈文研標準試料
濃度	Wt%
SiO ₂	52.73
Na ₂ O	11.65
K ₂ O	7.89
CaO	11.17
MgO	4.52
Al ₂ O ₃	3.70
Fe ₂ O ₃	0.33
MnO	0.33
Sb ₂ O ₅	0.20
PbO	0.19
CuO	0.22
CoO	0.05
BaO	0.06
TiO ₂	0.53
SnO ₂	0.02
SrO	0.03
Rb ₂ O	0.00
V ₂ O ₅	0.03
Cr ₂ O ₃	0.00
NiO	0.03
ZnO	0.05
ZrO ₂	0.00
Ag ₂ O	0.00
Bi ₂ O ₃	0.00
P ₂ O ₅	5.74
Cl	0.23
SiO ₃	0.29

※参考：奈文研標準試料

SiO ₂	55.24
Na ₂ O	1.32
K ₂ O	11.46
CaO	15.05
MgO	4.09
Al ₂ O ₃	5.43
Fe ₂ O ₃	0.50
MnO ₂	0.57
Sb ₂ O ₅	0.96
PbO	0.27
CuO	0.40
CoO	0.02
BaO	0.33
TiO ₂	0.40
SnO ₂	0.13
SrO	0.05
Rb ₂ O	0.01
Li ₂ O	0.01
V ₂ O ₅	0.02
Cr ₂ O ₃	0.00
NiO	0.06
ZnO	0.10
ZrO ₂	0.01
Ag ₂ O	0.01
Bi ₂ O ₃	0.00
P ₂ O ₅	4.02
Cl	0.40
SO ₂	0.30

※参考は、奈文研での標準試料の測定データである。群馬大の機器で測定した、奈文研より貸与された標準試料の測定データと比較する意味で提示する。なお、XRF分析ではLiの検出ができないので、表1ではLiの記載は無い。

表2 新井遺跡から出土ガラス玉・玉類のXRF分析結果(検出された元素)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
玉種類	ガラス玉	管玉	管玉	ガラス玉	ガラス玉						
玉色調	淡紺	淡紺	紺	紺	淡紺	紺	淡紺	灰緑色	灰緑色	淡紺	淡紺
区分	C区	C区	C区	C区	D区	D区	D区	D区	D区	D区	D区
出土遺構名	4号竪状	4号竪状	4号竪状	遺構外	2号土坑	2号填土部	2号方形容溝跡	2号円形容溝跡	2号円形容溝跡	2号円形容溝跡	2号円形容溝跡
図番号	119図6	119図7	119図8	157図7	154図3	125図1	126図1	同一個体	126図2	126図3	
Na	9.63	11.01	9.81	11.58	10.39	9.44	10.92	9.82	8.89	12.13	10.20
Mg	2.31	2.71	1.90	2.24	2.43	2.30	2.48	2.58	2.33	2.46	2.65
Al	3.56	3.17	3.12	2.82	2.99	2.57	3.38	5.60	6.61	3.31	3.62
Si	62.28	58.68	70.36	59.88	63.42	64.25	62.10	68.66	64.08	62.37	62.71
P	1.81	1.69	1.94	1.63	2.01	2.00	1.68	2.07	2.03	2.06	1.80
K	13.74	15.03	6.41	13.48	4.70	3.25	14.95	2.45	3.31	11.21	13.74
Ca	1.07	1.96	1.29	2.22	3.50	10.41	0.85	5.19	6.69	0.89	1.01
Ti	0.42	0.34	0.45	0.40	0.15	0.71	0.41	0.66	0.75	0.34	0.40
Mn	0.02	0.04	0.01	2.85	0.08	0.25	0.02	0.02	0.10	0.02	0.02
Fe	1.31	0.99	0.90	2.63	0.49	3.73	0.76	2.18	4.28	0.77	0.91
Co	0.20	0.23	0.22	0.19	0.14	0.20	0.15	0.03	0.03	0.21	0.15
Cu	2.66	2.85	2.35	0.03	1.39	0.31	1.70	0.01	0.00	2.59	1.96
Rb	0.13	0.07	0.12	0.02	0.04	0.00	0.07	0.03	0.04	0.14	0.08
Sr	0.00	0.01	0.00	0.02	0.02	0.12	0.00	0.69	0.85	0.01	0.00
Zr	0.04	0.03	0.04	0.01	0.03	0.05	0.05	0.00	0.00	0.06	0.04
Pb	0.82	1.18	1.07	0.00	8.22	0.40	0.47	0.01	0.01	1.44	0.70

表3 新井遺跡から出土ガラス玉・玉類のXRF分析結果(元素を単一の酸化物と仮定し再計算したもの)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
玉種類	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉	管玉	管玉	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉
玉色調	淡紺	淡紺	淡紺	紺	淡紺	紺	淡紺	灰緑色	灰緑色	淡紺	淡紺
区分	C区	C区	C区	C区	D区	D区	D区	D区	D区	D区	D区
出土遺構名	4号竪状	4号竪状	4号竪状	遺構外	2号土坑	2号填土部	2号方形容溝跡	2号円形容溝跡	2号円形容溝跡	2号円形容溝跡	2号円形容溝跡
図番号	119図6	119図7	119図8	157図7	154図3	125図1	126図1	同一個体	126図2	126図3	
Na ₂ O	9.62	11.06	9.74	11.55	10.48	9.28	11.03	9.87	8.83	12.15	10.27
MgO	2.49	2.93	1.99	2.42	2.64	2.45	2.67	2.74	2.50	2.61	2.86
Al ₂ O ₃	4.07	3.65	3.45	3.23	3.42	2.91	3.85	6.18	7.44	3.72	4.12
SiO ₂	72.06	69.21	77.31	70.06	73.39	73.36	71.40	73.98	71.21	71.17	71.86
P ₂ O ₅	1.80	1.73	1.75	1.63	2.03	1.93	1.64	1.84	1.93	2.01	1.75
K ₂ O	6.84	7.72	2.92	6.85	2.24	1.59	7.32	1.09	1.57	5.45	6.71
CaO	0.56	1.06	0.65	1.19	1.85	5.67	0.43	2.61	3.55	0.46	0.52
TiO ₂	0.26	0.22	0.26	0.25	0.09	0.42	0.25	0.37	0.44	0.21	0.24
MnO	0.01	0.02	0.01	1.35	0.04	0.11	0.01	0.01	0.05	0.01	0.01
Fe ₂ O ₃	0.68	0.53	0.44	1.37	0.25	1.86	0.39	1.04	2.14	0.40	0.47
CoO	0.09	0.11	0.09	0.08	0.06	0.08	0.07	0.01	0.01	0.10	0.07
CuO	1.16	1.28	0.97	0.01	0.61	0.13	0.73	0.00	0.00	1.13	0.85
Rb ₂ O	0.04	0.02	0.04	0.01	0.01	0.00	0.03	0.01	0.02	0.05	0.03
SrO	0.00	0.00	0.00	0.01	0.01	0.05	0.00	0.25	0.31	0.00	0.00
ZrO ₂	0.02	0.01	0.02	0.00	0.01	0.02	0.02	0.00	0.00	0.02	0.02
PbO	0.29	0.43	0.36	0.00	2.85	0.14	0.17	0.00	0.00	0.50	0.25

No.	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
玉種類	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉	管玉片	ガラス玉						
玉色調	淡紺	淡紺	淡紺	碧	淡紺						
区分	D区										
出土遺構名	河内丹波周溝原 河内丹波周溝原										
回収番号	126図4	126図5	126図6	126図7	144図13	144図14	144図16	144図17	144図15	144図19	
Na	10.57	10.94	12.41	26.18	11.83	10.84	10.11	10.84	11.70	10.56	11.14
Mg	2.59	2.16	1.95	0.00	2.30	1.94	1.88	2.23	2.55	2.43	2.08
Al	4.75	3.37	3.28	4.00	3.01	3.16	4.40	2.79	3.05	3.14	3.22
Si	56.91	62.61	63.04	12.76	64.21	61.95	62.35	63.49	62.53	61.69	66.07
P	1.95	1.71	2.93	3.70	1.99	1.57	2.03	1.59	1.46	1.80	2.23
K	14.87	13.94	11.61	0.49	9.91	14.79	12.57	13.41	13.43	13.69	9.59
Ca	1.33	0.82	1.12	41.35	0.99	0.95	1.28	0.85	0.88	1.33	1.10
Ti	0.48	0.42	0.22	2.90	0.35	0.37	0.56	0.41	0.42	0.41	0.41
Mn	0.03	0.02	0.02	1.59	0.04	0.01	0.02	0.02	0.01	0.02	0.02
Fe	1.61	0.96	0.71	6.30	1.01	0.86	1.25	0.70	0.72	0.87	0.76
Co	0.34	0.17	0.15	0.23	0.22	0.24	0.21	0.21	0.19	0.24	0.16
Cu	3.52	1.84	1.37	0.20	2.73	2.43	2.27	2.34	2.00	2.78	2.19
Rb	0.08	0.12	0.14	0.00	0.13	0.08	0.08	0.09	0.09	0.10	0.09
Sr	0.00	0.00	0.00	0.24	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00
Zr	0.03	0.04	0.06	0.00	0.05	0.04	0.03	0.03	0.05	0.06	0.03
Pb	0.94	0.87	0.97	0.03	1.24	0.78	0.96	1.01	0.92	0.87	0.90

No.	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
玉種類	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉	管玉片	ガラス玉						
玉色調	淡紺	淡紺	淡紺	碧	淡紺						
区分	D区										
出土遺構名	河内丹波周溝原 河内丹波周溝原										
回収番号	126図4	126図5	126図6	126図7	144図13	144図14	144図16	144図17	144図15	144図19	
Na2O	10.57	11.01	12.54	27.34	11.78	10.87	10.13	10.87	11.77	10.57	11.13
MgO	2.81	2.33	2.07	0.00	2.43	2.09	2.02	2.39	2.73	2.61	2.19
Al2O3	5.48	3.84	3.69	5.29	3.37	3.61	5.01	3.17	3.45	3.58	3.60
SiO2	67.24	71.94	71.28	18.55	72.71	71.85	71.55	72.93	71.66	71.50	73.94
P2O5	2.03	1.67	2.79	5.49	1.91	1.55	1.99	1.55	1.42	1.79	2.09
K2O	7.77	6.81	5.51	0.37	4.77	7.36	6.18	6.55	6.56	6.83	4.51
CaO	0.73	0.42	0.57	34.45	0.52	0.50	0.67	0.44	0.45	0.70	0.56
TiO2	0.31	0.25	0.13	2.50	0.21	0.23	0.34	0.25	0.25	0.25	0.25
MnO	0.01	0.01	0.01	1.04	0.02	0.00	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
Fe2O3	0.88	0.49	0.35	4.54	0.52	0.45	0.65	0.36	0.37	0.45	0.38
CoO	0.16	0.08	0.07	0.14	0.10	0.11	0.09	0.09	0.08	0.11	0.07
CuO	1.61	0.79	0.58	0.12	1.18	1.06	0.98	1.01	0.87	1.22	0.93
Rb2O	0.03	0.04	0.05	0.00	0.04	0.03	0.03	0.03	0.03	0.04	0.03
SrO	0.00	0.00	0.00	0.13	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
ZrO2	0.02	0.02	0.03	0.00	0.02	0.02	0.01	0.01	0.02	0.02	0.01
PbO	0.35	0.31	0.34	0.02	0.43	0.28	0.34	0.36	0.33	0.31	0.31

No.	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
玉種類	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉						
玉色調	淡緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑
区分	D区	D区	D区	D区	D区						
出土遺構名	4号方形周溝墓2号主室	4号方形周溝墓2号主室	4号方形周溝墓2号主室	4号方形周溝墓2号主室	4号方形周溝墓2号主室						
図番号	144回18	144回20	144回21	144回26	144回23	144回22	144回22 観察のため表面 なし	144回33	144回36	144回31	144回30
Na	10.54	9.28	8.36	11.08	11.36	9.74	10.81	11.01	9.48	11.48	9.73
Mg	2.02	1.95	2.19	2.72	2.52	1.86	2.50	2.44	2.02	2.71	2.35
Al	3.31	2.98	2.79	3.67	2.36	2.45	2.48	2.73	3.50	4.77	3.48
Si	65.37	66.18	69.68	62.81	61.45	64.84	66.14	63.17	62.70	66.62	63.17
P	1.94	1.89	2.04	1.99	1.55	1.90	1.99	1.65	1.64	2.13	1.58
K	12.22	8.34	5.27	12.37	12.16	13.36	8.93	10.74	14.23	5.58	14.21
Ca	0.95	3.20	2.78	0.94	2.34	1.91	2.35	2.67	1.16	1.40	0.99
Ti	0.44	0.37	0.50	0.47	0.35	0.31	0.38	0.40	0.45	0.47	0.40
Mn	0.01	2.36	2.94	0.02	3.33	1.65	2.15	2.58	0.01	0.03	0.01
Fe	0.79	3.25	3.27	0.92	2.41	1.84	2.13	2.37	0.88	1.08	0.96
Co	0.15	0.12	0.07	0.17	0.07	0.08	0.06	0.13	0.21	0.22	0.20
Cu	1.70	0.03	0.03	1.99	0.03	0.02	0.03	0.03	2.43	2.20	1.92
Rb	0.07	0.03	0.04	0.09	0.03	0.02	0.02	0.02	0.10	0.11	0.11
Sr	0.00	0.02	0.03	0.00	0.02	0.02	0.02	0.02	0.00	0.00	0.00
Zr	0.04	0.01	0.00	0.03	0.01	0.00	0.01	0.01	0.04	0.04	0.04
Pb	0.42	0.00	0.00	0.73	0.00	0.00	0.01	0.01	1.13	1.14	0.84

No.	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
玉種類	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉	ガラス玉						
玉色調	淡緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑	緑
区分	D区	D区	D区	D区	D区						
出土遺構名	4号方形周溝墓2号主室	4号方形周溝墓2号主室	4号方形周溝墓2号主室	4号方形周溝墓2号主室	4号方形周溝墓2号主室						
図番号	144回18	144回20	144回21	144回26	144回23	144回22	144回22 観察のため表面 なし	144回33	144回36	144回31	144回30
Na ₂ O	10.60	9.15	8.18	11.15	11.29	9.76	10.76	10.95	9.51	11.45	9.78
MgO	2.16	2.08	2.32	2.91	2.71	2.00	2.65	2.61	2.18	2.85	2.54
Al ₂ O ₃	3.73	3.37	3.11	4.13	2.69	2.79	2.77	3.09	4.02	5.24	3.98
SiO ₂	73.77	74.94	77.35	71.43	71.35	74.33	74.26	72.36	72.66	72.92	72.69
P ₂ O ₅	1.83	1.78	1.86	1.92	1.53	1.80	1.85	1.59	1.63	1.96	1.54
K ₂ O	5.80	4.01	2.45	5.99	6.10	6.45	4.22	5.27	7.05	2.57	6.96
CaO	0.48	1.67	1.44	0.48	1.25	0.98	1.20	1.41	0.61	0.71	0.51
TiO ₂	0.26	0.22	0.30	0.28	0.21	0.18	0.23	0.24	0.28	0.28	0.24
MnO	0.01	1.07	1.32	0.01	1.57	0.74	0.97	1.19	0.01	0.01	0.00
Fe ₂ O ₃	0.39	1.63	1.61	0.47	1.24	0.91	1.05	1.20	0.46	0.54	0.49
CoO	0.06	0.05	0.03	0.08	0.03	0.03	0.02	0.06	0.09	0.10	0.09
CuO	0.72	0.01	0.01	0.85	0.01	0.01	0.01	0.01	1.06	0.93	0.83
Rb ₂ O	0.02	0.01	0.01	0.03	0.01	0.01	0.01	0.01	0.04	0.04	0.04
SrO	0.00	0.01	0.01	0.00	0.01	0.01	0.01	0.01	0.00	0.00	0.00
ZrO ₂	0.02	0.00	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.00	0.02	0.02	0.01
PbO	0.15	0.00	0.00	0.26	0.00	0.00	0.00	0.00	0.40	0.39	0.30

No.	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
玉種類	ガラス玉									
玉色調	紺	紺	紺	紺	淡紺	淡紺	淡紺	淡紺	紺	紺
区分	D区									
出土遺構名	4号方舟周溝Ⅱ号主室									
図番号	144回29	144回24	144回32	144回34	144回25	144回28	144回27	144回35	144回37	144回38
Na	11.11	12.95	9.52	9.64	10.49	10.28	10.86	10.23	11.93	11.00
Mg	2.54	2.66	2.09	1.80	2.43	2.48	2.16	2.07	2.57	2.47
Al	3.33	2.63	2.55	2.51	3.23	3.37	3.32	3.51	2.32	3.48
Si	62.07	60.89	72.20	71.70	69.46	63.47	64.07	63.96	64.14	62.25
P	1.56	3.69	2.27	2.17	2.44	1.76	1.80	2.03	1.78	2.22
K	13.72	11.49	2.52	3.08	6.93	13.48	12.38	13.45	8.37	13.50
Ca	0.87	1.75	3.07	3.09	1.03	0.90	0.94	0.82	2.86	0.79
Ti	0.41	0.46	0.50	0.48	0.47	0.43	0.39	0.44	0.41	0.42
Mn	0.01	1.57	2.51	2.66	0.01	0.01	0.01	0.03	2.29	0.01
Fe	0.72	1.69	2.60	2.63	0.72	0.88	0.78	0.77	3.11	0.70
Co	0.19	0.10	0.07	0.13	0.14	0.18	0.17	0.15	0.13	0.22
Cu	2.23	0.01	0.03	0.04	1.95	1.80	2.03	1.63	0.03	2.17
Rb	0.10	0.05	0.02	0.02	0.08	0.11	0.07	0.11	0.02	0.07
Sr	0.00	0.03	0.03	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.00
Zr	0.07	0.01	0.02	0.01	0.03	0.04	0.05	0.03	0.02	0.04
Pb	1.07	0.00	0.00	0.01	0.60	0.81	0.95	0.77	0.00	0.67

No.	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
玉種類	ガラス玉									
玉色調	紺	紺	紺	紺	淡紺	淡紺	淡紺	淡紺	紺	紺
区分	D区									
出土遺構名	4号方舟周溝Ⅱ号主室									
図番号	144回29	144回24	144回32	144回34	144回25	144回28	144回27	144回35	144回37	144回38
Na2O	11.18	13.05	9.34	9.44	10.48	10.35	10.90	10.31	11.80	11.07
MgO	2.73	2.84	2.18	1.88	2.56	2.67	2.31	2.22	2.71	2.64
Al2O3	3.78	2.96	2.79	2.76	3.55	3.83	3.76	3.99	2.59	3.94
SiO2	71.45	69.27	79.32	78.22	75.86	72.56	72.90	72.91	72.68	71.27
P2O5	1.54	3.53	1.98	1.92	2.18	1.70	1.73	1.94	1.69	2.16
K2O	6.75	5.53	1.13	1.39	3.13	6.53	5.96	6.46	4.05	6.59
CaO	0.45	0.90	1.55	1.57	0.51	0.46	0.48	0.41	1.51	0.41
TiO2	0.25	0.28	0.29	0.28	0.27	0.26	0.23	0.26	0.25	0.25
MnO	0.01	0.71	1.10	1.17	0.01	0.01	0.00	0.02	1.05	0.01
Fe2O3	0.37	0.84	1.25	1.27	0.35	0.45	0.40	0.39	1.57	0.36
CoO	0.08	0.04	0.03	0.05	0.06	0.08	0.08	0.07	0.06	0.10
CuO	0.97	0.01	0.01	0.01	0.80	0.77	0.87	0.69	0.01	0.94
Rb2O	0.03	0.02	0.01	0.01	0.03	0.04	0.03	0.04	0.01	0.02
SrO	0.00	0.01	0.01	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00
ZrO2	0.03	0.00	0.01	0.00	0.01	0.02	0.02	0.01	0.01	0.02
PbO	0.38	0.00	0.00	0.00	0.20	0.28	0.33	0.27	0.00	0.24

第7節 赤色顔料分析

志賀智史(九州国立博物館)

1. はじめに

群馬県吾妻郡東吾妻町大字厚田字新井にある新井遺跡から出土した赤色顔料について分析調査を行った。

古墳の埋葬施設や埴輪、特殊な形態の土器等は赤彩がなされているものが多いことから、考古学においては赤色は祭祀や儀礼と密接に関わる色と考えられている。この赤色は、赤色鉱物の粉末によるもので、考古資料としては赤色顔料と呼ばれる。古墳時代以前の赤色顔料は、これまでの調査によって水銀を主成分とする朱(化学組成はHgS、鉱物名は辰砂(Cinnabar))と、赤色の酸化鉄を主成分とするベンガラ(化学組成は α -Fe2O3、鉱物名は赤鉄鉱(Hematite)等)の二種類が知られている。

2. 調査資料

調査資料は8点。赤色顔料の可能性が高いものとして土壤とともに取り上げられていたものと、赤く塗られた土器がある。資料の所属時期は、弥生時代中期後半が3点、同後期が2点、古墳時代前期が2点、古墳時代中期後半が1点である(第1表)。

3. 調査方法

赤色顔料か否かは、実体顕微鏡観察、生物顕微鏡観察および蛍光X線分析の結果から判断した。また、より詳しい調査としてX線回折を行った。

(1)顕微鏡観察

顕微鏡観察は赤色物の有無、付着状況、二種類の赤色顔料や遺跡土壤の混在状況、粒子形態、有機物の有無等を知るために行った。調査前に資料を自然乾燥させた。実体顕微鏡観察(7~100倍)では、白色光に近い光で資料を直接観察した。赤色顔料が単体で塊状に遺存する場合、朱はショッキングピンク色~オレンジ色に、ベンガラは暗赤色等に見える。

生物顕微鏡観察(50~1000倍)では、サンプリングして合成樹脂オイキットを用いてプレパラートに封入した資

料を、側射光及び透過光を用いて観察した。側射光では朱はルビー色の樹脂状光沢を持つ透き通った粒子に、ベンガラは暗赤色等の微粒子で、直径約1 μmのパイプ状、螺旋状、不定形等の粒子が観察される。

(2)蛍光X線分析(XRF)

主成分元素を知るために行った。朱はHg(水銀)が、ベンガラはFe(鉄)が検出される。測定は、資料調整を行わずにいたため、土壤や土器に含まれるFeも検出されている可能性がある。測定には、据置型のHORIBA XGT-5200 (Rh, 50kV, 100 s, SDD, 測定径約100 μm, 検出器付近真空、検出元素Na-U)を用いた。第1表には、赤色顔料に関連すると思われる元素のみを記載した。

(3)X線回折(XRD)

結晶構造を知るために行った。朱は辰砂(Cinnabar, HgS)が、ベンガラは赤鉄鉱(Hematite, α -Fe2O3)が同定される。微量のものは測定を行っていない。測定は、資料で資料調整を行わずにいたため、土壤に含まれる鉱物も検出されている可能性がある。測定機器は、RIGAKU RINT Ultima III (Cu, 40kV, 40mA, 平行法)を用いた。第1表には、赤色顔料に関連すると思われる鉱物のみを記載した。

4. 調査結果のまとめと考察

調査結果を第1表に示す。特徴的な写真とスペクトルを第1~3図に示す。

(1)赤色顔料の種類

8点の赤色物はすべて実体顕微鏡観察で土壤や胎土よりも明確に赤く、明らかに赤色顔料と判断できるもののほか、これまでの群馬県内の調査から赤色顔料として使用例のある淡赤色のものであった。

赤色顔料の種類は、すべてベンガラであった。X線回折では、微量の資料7を除いて赤鉄鉱を同定した(第3図)。

(2)ベンガラの細分

今回検出したベンガラについては、ベンガラ粒子の形態から、ベンガラ(P)とベンガラ(不定形)の2種類に細

表1 新井遺跡出土の赤色顔料分析結果一覧

資料	区	遺構名	出土位置	状態	時代	各結果			赤色顔料の種類	觀察所見、備考
						蛍光X線分析	X線回折			
1	D	25号竪穴建物	赤色顔料1	単体	弥生中期後半	ベンガラ(P)	Fe	赤鉄鉱	ベンガラ(P)	赤色系統色のベンガラ小塊あり(最大径約3mm)。
2	D	25号竪穴建物	赤色顔料2	単体	弥生中期後半	ベンガラ(P)	Fe	赤鉄鉱、磁赤鉄鉱	ベンガラ(P)	赤色系統色のベンガラ小塊あり(最大径約2mm)。
3	A3	3号竪穴建物	覆土	焼に塗布	弥生中期後半	ベンガラ(P)	Fe,As	赤鉄鉱	ベンガラ(P)	遺物番号020007
4	D	1号円形周溝墓	2区	高杯に塗布	弥生後期	ベンガラ(P)	Fe	赤鉄鉱	ベンガラ(P)	遺物番号020631
5	5	60G		高杯に塗布	弥生後期	ベンガラ(P)	Fe	赤鉄鉱	ベンガラ(P)	遺物番号030174
6	D	4号方形周溝墓	ブロック	単体	古墳前期	ベンガラ(P)	Fe	赤鉄鉱	ベンガラ(P)	赤色系統色のベンガラ小塊あり(最大径約7mm)。
7	D	4号方形周溝墓	2号主室部床面	単体	古墳前期	ベンガラ(P)	Fe	-	ベンガラ(P)	赤色系統色のベンガラ小塊あり(最大径約1mm)。
8	C	1号竪穴建物	3号上坑	単体	古墳5世紀後半	ベンガラ(不定形)	Fe,As	赤鉄鉱、石英、明礬石	ベンガラ(不定形)	1.5×1.5×0.2mmの板状のベンガラ小塊(群?)。透明・白色粒子が混在し全体として淡赤色。

分できた。

①ベンガラ(P)

直径約1 μmのパイプ状粒子(第1図3,7)を含むものである。このパイプ状粒子については、湖沼等に棲む鉄細菌Leptothrixに由来するものと考えられている(岡田1997)。これを含む黄褐色の沈殿物を採取、焼成、赤化したものがベンガラとして使用されたと想定される。日本列島では、ベンガラ(P)の採用が一般的で、縄文時代草創期から認められる。

本遺跡の資料は、8点中7点(資料1~7)がベンガラ(P)であり、ほとんどがベンガラ(P)であった。

蛍光X線分析では、Fe以外に特徴的な元素は確認できないものが多かったが(第2図1,2,4~6)、資料3のみ砒素(As)を検出した(第2図3)。X線回折では赤鉄鉱以外のベンガラ由来と考えられる鉱物は同定できなかった(第3図1~6)。

ベンガラ(P)に含まれる砒素については、鉄細菌が水生のため砒素を含む温泉地から得られた鉄細菌がベンガラ素材となったのであれば十分理解可能である。将来的には砒素の有無によるベンガラ(P)のさらなる細分が可能となるかもしれない。ただし、これまで全国各地のベンガラ(P)の調査においては、明瞭な砒素のピークを確認した事例は少なく、現状では砒素を含むベンガラ(P)を積極的に評価することは難しい。

②ベンガラ(不定形)

通常のベンガラ(不定形)は、不定形粒子だけで構成され、特徴的な元素や鉱物を含まないものが一般的である。このベンガラ(不定形)は、鈴山から採掘された鉄鉱石(褐鉄鉱、赤鉄鉱、磁赤鉄鉱、磁鐵鉱等)が原料になったと推定され、これをそのまま、もしくは焼成、赤化したものがベンガラとして使用されたと想定される。日本列島では、ベンガラ(P)の採用が一般的であるものの、時期や地域によってはベンガラ(不定形)が採用されることが明らかになっている。

本遺跡の資料では、資料8のみがベンガラ(不定形)であったが、上述のような鉄鉱石素材のものではなく、筆者が「含明礬石ベンガラ(不定形)」と仮称している淡赤色を呈するものであった(志賀2021b)。この含明礬石ベンガラ(不定形)は、火碎岩の酸性熱水変質作用によって生成された赤鉄鉱が原料と考えられ、淡赤色の要因である透明や白色系統色の鉱物が多数含まれ(第1図7)、蛍光X線分析では、Fe以外に微量のAsが特徴的に含まれ、X線回折(第3図7)では、赤鉄鉱(α -Fe₂O₃)以外に石英(SiO₂)と明礬石(KAl₃(SO₄)₂(OH)₆)が同定されるという特徴を持つ。

同様なベンガラは、群馬県の縄文時代前期~古代に一定数見られ、特に古墳時代中期、後期に顕著に採用されている(志賀2019a,2021a,2021b)。

(3)ベンガラの遺存状況

①赤彩土器(資料3～5)

弥生時代中期後半の楕が1点(資料3)、と後期の高杯(資料4・5)が2点。赤色顔料はいずれもベンガラ(P)であった。本遺跡の対岸にある四戸の古墳群から出土した弥生時代後期後半の赤彩土器6点もベンガラ(P)が採用されていた(志賀2020)。

ベンガラの塗布範囲は、楕は土器外面および内面、高杯は土器外面と楕部の内面であり、使用時に見える部分にのみ赤彩が施されている。赤彩後に器面にヘラミガキが行なわれており、土器焼成前にベンガラを塗布し、ベンガラを焼き付けた土器、いわゆる焼成前塗彩の土器と考えられる。丹塗土器とも呼ばれる須玖式土器、バレススタイプ土器、箱清水式土器などの一般的な赤彩土器は、ベンガラの焼成前塗彩である。

②単体で出土した資料(資料1, 2, 6～8)

弥生時代中期後半の2点(資料1、2)と古墳時代前期の2点(資料6、7)がベンガラ(P)、古墳時代中期後半の1点(資料8)は含明礬石ベンガラ(不定形)であり、これでも主にベンガラ(P)が採用されていた。

ベンガラ(P)は、直徑数mmの赤色系統色(赤、橙、紫、焦茶など)で完全に粉にならないベンガラ小塊がみられる(第1図1, 5)。中には磁性のあるものもみられる。X線回折では、赤鉄鉱以外に磁赤鉄鉱を同定したものがある。色調の差や赤鉄鉱以外の酸化鉄の存在は、ベンガラ焼成時の焼き斑によるものと思われる。

含明礬石ベンガラ(不定形)は、 $1.5 \times 1.5 \times 0.2\text{cm}$ で板状を呈していた。この中にも完全に粉にならない小塊がみられたが、全体で一つの小塊なのか、小塊の集合体であるのか十分確認できなかった。

以上のような小塊を含み未完成品とも思えるベンガラの遺存状況は、埴墓などのベンガラの使用の場においても一般的なものである。

単体で出土したベンガラの用途については、4号方形周溝墓2号主体部床面の資料(資料7)が、遺骸頭部が推定される位置から出土したものであれば、遺骸に施されたものである可能性が考えられる。その場合遺骸に施される赤色顔料は朱であることが多い(本田1988, 1995)ので、本資料のベンガラは朱の代用であったと考えられよう。その他、遺構や遺物との関係が明確であれば、ベンガラの用途が推定できる可能性があるが、多くの場合は

用途の推定は困難である。

5. おわりに

本遺跡では二種類の赤色顔料のうち、ベンガラの採用が明らかになった。ベンガラは、ベンガラ(P)と含明礬石ベンガラ(不定形)の二種類みられ、ベンガラ(P)の採用が主体であった。このベンガラ(P)の採用は、日本列島全域の特徴である。

また、群馬県内のベンガラは上記以外に、鉄細菌の螺旋状粒子を素材としたベンガラ(R)や蛇紋岩由来の暗赤色土を素材とした含滑石ベンガラ(不定形)が知られている(志賀2015, 2019a, 2021b)が、主体となるのはベンガラ(P)と含明礬石ベンガラ(不定形)である。本遺跡のベンガラは、群馬県内のベンガラの使用動向と一致するものであった。

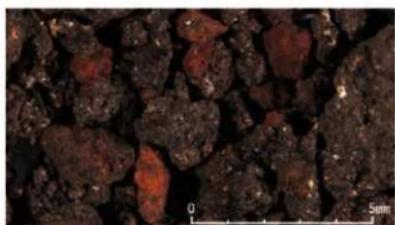
<謝辞>

本研究は、九州国立博物館が群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた受託研究として行われました。研究を実施するにあたり、群馬県埋蔵文化財調査事業団ならびに同所属の杉山秀宏氏には大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

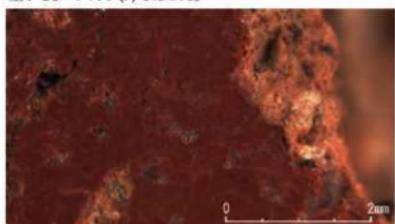
また、本研究は、科研費 基盤研究(C) 21K00967の研究成果を含みます。

<引用・参考文献>

- 岡田文男1997「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会
 志賀智史2015「ベンガラ粒子の形態からみた北関東の前期古墳出土の丹塗土器について」『日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集』
 志賀智史2019a「金井東裏遺跡から出土した赤色顔料について」『金井東裏遺跡(古墳時代編)』理学分析編・考察編『群馬県埋蔵文化財調査事業団
 志賀智史2019b「金井東裏遺跡出土1号車の赤色顔料について』『金井東裏遺跡(古墳時代編)』理学分析編・考察編『群馬県埋蔵文化財調査事業団
 志賀智史2020「赤色顔料分析」『四戸の古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 志賀智史2021a「赤色顔料分析」『前橋0107遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 志賀智史2021b「赤色顔料分析」『金井下新田遺跡から出土した赤色顔料について』『金井下新田遺跡(古墳時代以降編)分析・論考編』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 本田光子1988「弥生時代の埴墓出土赤色顔料-北九州地方にみられる使用と変遷」『九州考古学』62,九州考古学会
 本田光子1995「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』第31・32号(合併号),日本文化財科学会



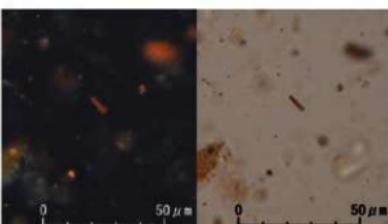
1. 資料2のベンガラ小塊(7.5倍)
D区25号堅穴建物出土。素材の形状を残すベンガラ小塊が見られる。小塊は、焼成時の焼き斑により赤色や橙色を呈する。ベンガラ(P)であった。



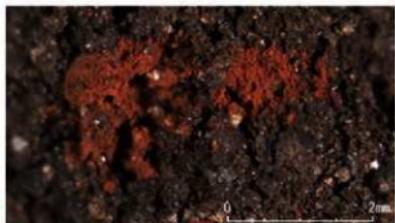
3. 資料3の表面拡大(15倍)
赤色層は明瞭に赤く、土器胎土の色調とは異なる。



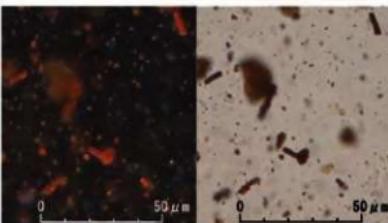
2. 資料3の表裏面(2/3倍)
A3区 3号堅穴建物覆土出土。焼ため、外面が赤い。



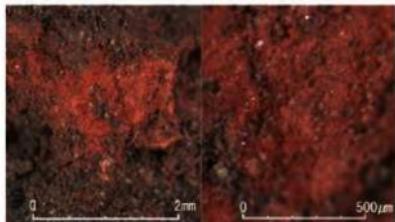
4. 資料3のベンガラ粒子(500倍,左:側射光,右:透過光)
ベンガラ(P)であった。



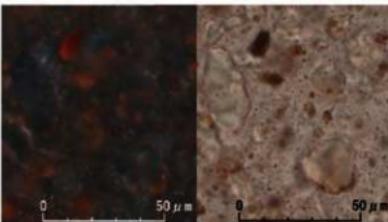
5. 資料7のベンガラ小塊(15倍)
D区 4号方形周溝墓2号主体部床面出土。素材の形状を残す赤色や橙色のベンガラ小塊が見られる。



6. 資料7のベンガラ粒子(500倍,左:側射光,右:透過光)
ベンガラ(P)であった。

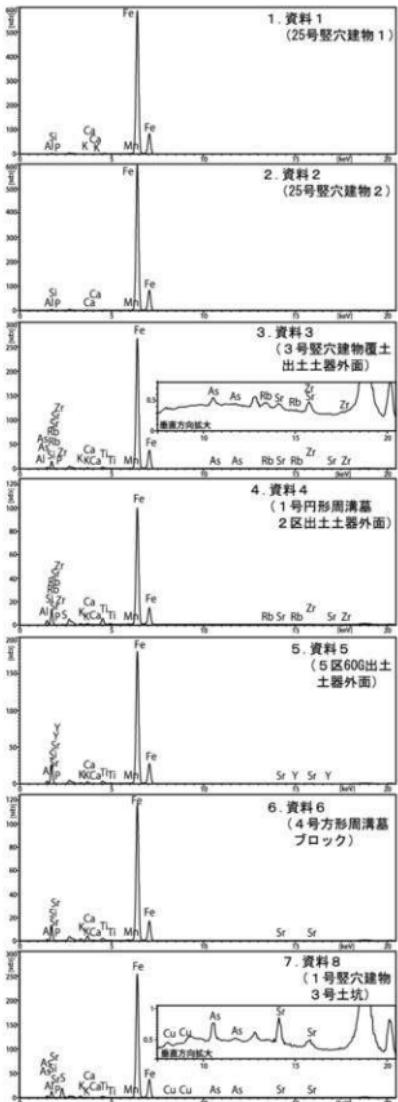


7. 資料8のベンガラ小塊(左:15倍,右:50倍)
C区 1号堅穴建物3号土坑出土。素材の形状を残す淡赤色のベンガラ小塊が見られる。拡大すると小塊の中に白色や半透明鉱物が混在している。



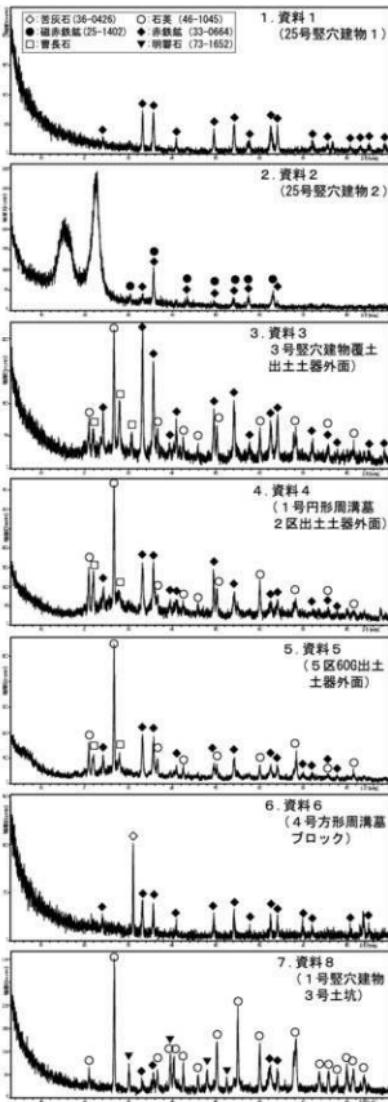
8. 資料8のベンガラ粒子(500倍,左:側射光,右:透過光)
ベンガラ(不定形)であった。透明、半透明鉱物は、ベンガラに含まれる不純物で、石英を中心に明礬石もある。(第3図7を参照)

1図 赤色顔料の顕微鏡写真



2図 蛍光X線スペクトル図

生物顕微鏡観察の結果と合わせFe(鉄)はベンガラに由来するものと考えられるが、土壤や土器胎土由來の鉄も含まれている。



3図 X線回折図

資料が微量のため測定しなかった資料7以外は、ベンガラ由來と考えられる赤鉄鉱を同定した。

第8節 土師器・埴輪の薄片作製胎土分析

1.はじめに

土器などの焼物は、基本材料として粘土と砂粒などの混和物で構成されるが、粘土材料は比較的良質と思える粘土層から採取された状況が、粘土探査坑の調査から推察される(藤根・今村, 2001)。また、粘土自体に珪藻化石や放散虫化石が混在している場合があり、使用した粘土の堆積環境を推定できる。

縄文土器や弥生土器などの焼物材料としては、粘土が重要である。焼物の粘土として利用できる粘土材料は、固結していない地層、すなわち、およそ第三紀中新統以降の地層堆積物、第四紀鮮新統へ更新統の段丘堆積物中の粘土質堆積物、そして断層粘土に限定できると考えられる(藤根, 1998; 藤根・小坂, 1997)。

土器胎土中の砂粒物は、これらの粘土質堆積物に付随する砂粒の可能性が高いが、祭祀用とされる土器では、意図的に混和している場合も考えられる。例えば、東海地域の弥生時代後期の赤彩されたパレススタイル土器では、パレススタイル土器のうち3分の1程度に砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている(藤根, 1998)。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層由来と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について、岩石・鉱物のほか微化石類やテフラなどの記載が重要であり、粘土や砂粒物、混和物の特徴について調べたうえで、周辺地質と比

表1 分析試料の詳細

分析No	器種	分析試料	遺物番号	区	遺構名	出土位置	遺構の時期	備考
1	壺(会津系)	胴部破片	20578	D区	24号竪穴建物		弥生時代中期後半	外来土器?
2	小型甕	口辺部破片	20590	D区	24号竪穴建物		弥生時代中期後半	
3	大型甕	胴部破片	20596	D区	24号竪穴建物		弥生時代中期後半	
4	甕	胴部破片	20610	D区	25号竪穴建物	8区	弥生時代中期後半	
5	甕	口辺部破片		A3区	V・III・15	黒色土中	弥生時代後期	
6	壺	胴部破片	2	D区	1号方形周溝墓	2区	古墳時代前期	
7	S字甕	口縁部片	30258	A3区	5号竪穴建物		古墳時代前期	外来土器?
8	壺	胴部破片	30255	A3区	5号竪穴建物		古墳時代前期	
9	内斜口縁杯	口辺部破片		C区	1号竪穴建物	覆土	古墳時代中期後半	外部土器?
10	須恵器模倣杯	口辺部破片		C区	1号竪穴建物	覆土	古墳時代中期後半	外部土器?
11	甕	胴部破片		C区	1号竪穴建物	覆土	古墳時代中期後半	
12	円筒埴輪	胴部破片	30243	D区	2号埴輪	周塙	古墳時代後期	藤岡産?
13	円筒埴輪	底部破片	30244	D区	2号埴輪	周塙	古墳時代後期	藤岡産?
14	甕	胴部破片		C区	2号竪穴建物	覆土	古代(9世紀)	

較・検討する必要がある。

ここでは、群馬県吾妻郡東吾妻町大字厚田地内に所在する新井遺跡より出土した弥生時代～古代の土器や埴輪について、薄片の偏光顕微鏡観察を行い、粘土の種類と砂粒組成等の特徴を調べ、土製品の胎土材料について検討した。

2. 試料と方法

分析試料は、弥生時代～古代の土器12点と、埴輪2点の、合計14点である(表1)。

試料は、岩石カッターを用いて切断整形し、全体にエボキシ系樹脂を含浸させて固化処理を行った。精密岩石薄片作製機で整形し、研磨フィルムを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。最後に、仕上げとしてコーティング剤を塗布した。

薄片試料は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面に含まれる微化石類(放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など)、鉱物、大型砂粒の特徴、その他の混和物等について、観察と記載を行った。微化石類は、全体を300倍で観察した後、1500倍(油浸)で観察した。

なお、ここで採用した微化石類や岩石、鉱物の各分類群の特徴は、以下の通りである。

【放散虫化石】

放散虫は、放射板足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊性珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10~数百 μm 程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉(1988)や安藤(1990)は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石(海水種、淡水種)を分類した。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状である。海綿動物の多くは海水産であるが、淡水産も23種ほどが知られ、湖や池、川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

[植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10~50 μm 前後である。一般にプラント・オバールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

[胞子化石]

胞子は、直径約10~30 μm 程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壤中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難な場合が多く、一括して扱う。

[長石類]

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(バーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との混晶(微文像構造といふ)である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)によく見られる。バーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化す

ると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

[輝石類]

主として斜方輝石と單斜輝石がある。斜方輝石(主に紫蘇輝石)は、肉眼ではビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。單斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼では緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類や、ケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石があり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃綠岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類、火山岩類に産出する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス(バブル・ウォール型: 記載ではバブル型と略す)や、小さな泡をたくさんもつガラス(軽石型)などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物(テフラ)である。なお、凝灰岩類中においても含まれる。

[緑れん石]

緑色~淡緑色のサイコロ状鉱物で、屈折率が高く、異常干涉色を示す。緑色片岩に特徴的に含まれる。

[ザクロ石]

無色透明の屈折率の高いサイコロ状鉱物である。変成岩中にごく普通に産出し、火山岩中にも含まれる。

[片理複合石英類]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩や粘板岩、千枚岩と考えられる。

[複合石英類]

複合石英類は、石英が集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、粒径が0.01mm未満の粒子を微細、0.01~

0.05mmの粒子を小型、0.05~0.10mmの粒子を中型、0.10mm以上の粒子を大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

〔砂岩質・泥岩質〕

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

[斑品質・完品質]

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。直交ニコルの観察において結晶度が高い岩石片である。

〔流紋岩質〕

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、主に流理構造を示す岩石である。

〔凝灰岩質〕

ガラス質で斑品質あるいは完品質構造を持つ粒子のう

ち、直交ニコルの観察において結晶度が低く、全体的に暗い岩石片である。

〔不明粒子〕

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

3. 結果および考察

偏光顕微鏡による各薄片の観察結果を述べる。粒子組成については、微化石類や岩石片・鉱物を記載するために、プレパラート全面を精査した。以下では、粒度組成や、0.1mm前後以上の岩石片・鉱物の砂粒組成、微化石類などの記載を示す。なお、表2における不等号は、量比の概略を示す。また、表3の記号については、●は極めて多い、○は非常に多い、○は多い、△は検出、一は不検出を示す。

以下に、粘土材料の分類、砂粒組成による分類、器種と
胎土材料の特徴、周辺の地質環境、胎土材料の地域性、

表2 試料の粘土中の微化石類と砂粒組成の特徴記載

その他の特徴について述べる。

3. 1. 粘土材料の分類

土器の薄片の全面を観察した結果、微化石類(珪藻化石、骨針化石)が検出された。微化石類の大きさは、珪藻化石が10~数100μm、骨針化石が10~100μm前後である(植物珪酸体化石は10~50μm前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9~62.5μm、砂が62.5μm~2mmである(地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。主な堆積物の粒度分布と表3 胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表

分類	基準	胎土中の特徴										胎土中の特徴										その特徴		
		細粒	粗粒	有機物質	有機物質	有機物質	有機物質	有機物質	有機物質	有機物質	有機物質	有機物質	有機物質	有機物質										
1 淡水種	淡水底	△	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	大型鮮紅色・無鉛の細粒白泥、淡褐色ガラス持続、褐色鉄記録のガラス、赤鉄氧化物
2 小型帶	淡水底	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3 大型帶	淡水底	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4 帶	淡水底	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5 熱	淡水底	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
6 熱	淡水底	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
7 S/P帶	淡水底	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
8 熱	淡水底	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9 混合帶	淡水底	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10 混合帶	淡水底	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11 混合帶	淡水底	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12 混合帶	淡水底	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13 混合帶	淡水底	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
14 熱	淡水底	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

a)淡水成粘土(9胎土: 分析No 1、3~8、13、14)

これらの胎土中には、淡水種珪藻化石や骨針化石が含まれていた。特に、No 3~7の胎土中には、多くの淡水種珪藻化石が含まれていた。また、No 5~7の胎土中には、沼澤湿地指標種群の*Eunotia praerupta* var. *bidentis* や*Pinnularia viridis*などが特徴的に多く含まれ、沼澤湿地成の粘土を利用したと推定される。また、分析No 3とNo 4の胎土中にも淡水種珪藻化石が多く含まれていた。

b)水成粘土(2胎土: 分析No 2、10)

これらの胎土中には、骨針化石が僅かに含まれていた。

c)その他粘土(3胎土: 分析No 9、11、12)

これらの胎土中には、水成環境を指標する珪藻化石や骨針化石は含まれていなかった。

3. 2. 砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成される鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源

微化石類の大きさの関係から、微化石類は粘土中に含まれると考えられる。植物珪酸体化石以外の微化石類は、粘土の起源(粘土層の堆積環境)を知るのに有効な指標になる。植物珪酸体化石については、土器製作の場で灰質に伴って多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を必ずしも指標しない。

今回の試料の胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a)淡水成粘土、b)水成粘土、c)その他粘土、の3種類に分類された(表3)。以下では、それぞれの粘土の特徴について述べる。

岩とは直接対比できない。したがって、胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類を構成する鉱物群は粒度が大きいため、細粒質の砂粒からなる胎土の場合には、深成岩類の推定が困難な場合が多い。

ここでは、比較的大型の砂粒と鉱物群の特徴により、起源岩石の推定を行った(表3)。岩石の推定では、片理複合石英類が片岩類(A/a)、複合石英類(大型)が深成岩類(B/b)、複合石英類(微細)などが堆積岩類(C/c)、斑晶質・完晶質が火山岩類(D/d)、凝灰岩質や結晶度の低い火山岩が凝灰岩類(E/e)、流紋岩質が流紋岩類(F/f)、ガラス質がテフラ(G/g)である。

胎土中の砂粒組成は、表4の組み合わせに従って、1) Cd群またはDc群、2) Ce群またはEc群、3) Gd群の3群に分類された。以下に、分類された砂粒物の特徴について述べる。

1) 主にCd群またはDc群(3胎土: 分析No 5、7、14)

これらの胎土の砂粒は、複合石英類(微細)や砂岩質からなる堆積岩類や、斑晶質や完晶質からなる火山岩類で

構成される。これらの胎土中には、凝灰岩質からなる凝灰岩や、ガラス質からなるテフラも普遍的に含まれていた。なお、分析No14の甕胎土中には、片理複合石英類からなる片岩類が少量含まれていた。

2) 主にCe群またはEc群(10胎土: 分析No1~4、8~13)

これらの胎土の砂粒は、複合石英類(微細)や砂岩質からなる堆積岩類や、凝灰岩質からなる凝灰岩で構成される。これらの胎土中には、斑晶質や完晶質からなる火山岩類や、ガラス質からなるテフラも普遍的に含まれていた。

3) 主にGd群(1胎土: 分析No6)

この胎土の砂粒は、ガラス質(バブル型・軽石型)のテフラや、斑晶質や完晶質からなる火山岩類で構成される。この胎土中には、複合石英類(微細)や砂岩質からなる堆積岩類や、凝灰岩質からなる凝灰岩も含まれていた。

3. 器種と胎土材料の特徴

表5に、器種別の砂粒組成と粘土の種類についてまとめた。

新井遺跡から出土した土器および埴輪の胎土材料は、粘土材料において淡水成粘土9胎土、水成粘土2胎土、その他粘土3胎土を用いていた。また、砂粒組成では、主にCd群またはDc群が3胎土、主にCe群またはEc群が10胎土、主にGd群が1胎土であった。

分析No 7 のS字壺、分析No 5 や分析No14の胎土は、淡水成粘土を用い、主に堆積岩類と火山岩類からなるCd群またはDc群の砂粒で構成される。

分析No 1 の壺(会津系)、分析No 3 の大型壺、分析No 4 の壺、分析No 8 の壺、分析No13の円筒埴輪では、淡水成粘土を用い、主に堆積岩類と凝灰岩類からなるCeまたはEc群の砂粒で構成される。

分析No 2 の小型壺、分析No10の須恵器模倣杯は、水成粘土を用い、主に堆積岩類と凝灰岩類からなるCeまたはEc群の砂粒で構成される。

分析No 9 の内斜口縁杯、分析No11の壺、分析No12の円筒埴輪は、その他粘土を用い、主に堆積岩類と凝灰岩類からなるCeまたはEc群の砂粒で構成される。

分析No 6 の壺は、淡水成粘土を用い、主にテフラと火

表4 岩石片の起源と組み合わせ

岩石片 の種類 (記号)	組み合わせ						原生地層
	A	B	C	D	E	F	
a. 片岩類	Ab	Ba	Cb	Da	Ea	Fa	Ga
b. 砂岩質	Ab	Ca	Db	Eb	Fb	Gb	
c. 堆積岩類	Ac	Bc	Dc	Ec	Fc	Gc	
d. 火山岩類	Ad	Bd	Cd	Dd	Ed	Fd	Gd
e. 凝灰岩類	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	Gg
f. テフラ							

山岩類からなるGd群の砂粒からなる(表5)。

3. 遺跡周辺の地質環境

遺跡周辺の第四紀では、後期更新世～完新世の礫・砂及び泥からなる新期段丘堆積物(図1の凡例ty)や礫・砂・泥及び泥炭からなる湖成堆積物または中期更新世の凝灰質シルト及び砂(礫を作う)からなる萩生層(下司・竹内, 2012; 凡例D)、後期更新世の礫・砂・泥及び粘土からなる伊勢崎砂層など(凡例T)や安山岩岩塊・礫・砂及び泥からなる前橋泥流堆積物(凡例mm)、中期更新世の礫・砂及び泥からなる沼田湖成層(凡例N)、前期更新世の礫岩・砂岩・泥岩及び凝灰岩からなる西河原層など(凡例Nh)が分布する。この沼田湖成層の珪藻化石では、円形型の中心類に分類される *Cyclostephanos numataensis* や *Aulacoseira Subarctica*などの湖沼浮遊性の珪藻化石化が優勢である(田中・南雲, 2015)。また、第四紀の榛名火山では、火山碎岩からなる火山麓扁状地堆積物(凡例vd)、中期更新世～完新世の安山岩溶岩及び火碎岩からなる主成層火山及び側火山など(凡例Vh1)、前期中期更新世の安山岩溶岩及び火碎岩からなる鼻曲・剣の峰火山岩類など(V1)が分布する。新第三紀では、鮮新世の安山岩溶岩及び火碎岩からなる火山岩類(凡例Vp)、中期中新世の礫岩・凝灰岩・砂岩及び泥岩からなる赤坂層(凡例As)が分布する。

富岡-藤岡地域では、第四紀中期更新世の礫・砂及び泥からなる古期段丘堆積物(凡例to)が分布する。新第三紀では、後期更新世の礫岩・砂岩及びシルト岩からなる板鼻層(凡例I)、中期中新世のシルト岩及び砂岩からな

表5 器種別の砂粒組成と粘土の種類

器種	粘土	小 砂	中 砂	大 砂	沙	砾	(礫)	浮遊性 珪藻化石	有機質 珪藻化石	有機質 泥炭	鉱物	鐵
Gd/Gn	淡水成			1	2							1
Gd/Gn	淡水成		1		1	1	1				1	1
Gd/Gn	水成	1						1		1	1	1
Gd	淡水成				1				1	1	1	1
Gd	淡水成	1	1	1	4	2	1	1	1	1	2	10

る吉井層(凡例Ys)、礫岩・凝灰岩・シルト層及び泥岩からなる福島層及び赤谷層(凡例Fk)、砂岩泥岩互層からなる井戸沢層(凡例Id)、前期中新世の砂岩泥岩互層からなる小幡層(凡例Ob)などが分布する。また、閃緑斑岩からなる貫入岩類(凡例p)も分布する。

さらに、富岡-藤岡地域の古生代では、石炭紀-ジュラ紀の岩塊(凡例b)、ジュラ紀のチャート・石灰岩の岩塊を伴う含礫泥岩からなる秩父累帯万場・神吉田ユニット(凡例Ma)、玄武岩溶岩及び火砕岩からなる御荷鉢緑色岩類(凡例Mk)、石英片岩及び砂質片岩を伴う苦鉄質片岩及び泥質片岩からなる三波川變成岩類(凡例Sm)が分布する(図1:中野ほか, 1998; 須藤ほか, 1991)。

なお、片理複合石英類に近い組織を示す頁岩は、赤城火山に東側では、中生代ジュラ紀の頁岩等からなる足尾帶(足尾帶の堆積岩コンプレックス)に含まれ、広く分布する(須藤ほか, 1991)。

3. 5. 胎土材料の地域性

前述の地質環境から、遺跡周辺では、新規段丘堆積物(凡例ty)、湖成堆積物(凡例I)、前期更新世の西河原層(凡例Nh)、中期中新世の赤坂層など(凡例As)が粘土材料として利用可能である。また、これらの堆積層に間連する砂粒組成は、火山岩類、堆積岩類、凝灰岩類が優勢と考えられる。分析No14の甕を除いた土器あるいは埴輪は、これらの砂粒からなる組成を示していると考えられる。

なお、外来土器?とされる土器群が含まれているが、分析No14の甕を除いた土器あるいは埴輪は、大まかに地質学的に群馬県内の砂粒組成としても矛盾がないと思われる。

分析No14の甕は、片岩類を僅かに含む砂粒組成を示し、淡水成粘土を用いている。南側の富岡-藤岡地域では、新規段丘堆積物(凡例ty)、古規段丘堆積物(凡例to)、後期・中期・前期の板幕層(凡例H)・吉井層(凡例Ys)・福島層及び赤谷層(凡例Fk)・井戸沢層(凡例Id)・小幡層(凡例Ob)あるいは風化した堆積物が利用可能である。これらの堆積物は、中新統の海成層であり(高橋・林, 2004)、放散虫化石や海水種珪藻化石、骨針化石が特徴的である。分析No14の甕は、片岩類を僅かに含むが、放散虫化石や海水種珪藻化石は含まれず、骨針化石も少なかったため、富岡-藤岡地域の材料の特徴とは断定できない。

むしろ、片岩類とした砂粒は、石英片岩及び砂質片岩を伴う苦鉄質片岩及び泥質片岩からなる三波川變成岩類とは異なり、頁岩類の可能性がある。

分析No5の甕、分析No6の壺、分析No7のS字彫胎土中には、沼沢湿地付着生指標種群の*Eunotia praerupta v. bidens*などが特徴的に含まれ、沼沢湿地成の粘土が用いられていた。沼沢湿地成の粘土材料は、後期更新世～完新世の湖成堆積物または中期更新世の凝灰質シルト及び砂(礫を伴う)からなる萩生層(凡例I)、前期更新世の礫岩・砂岩・泥岩及び凝灰岩からなる西河原層など(凡例Nh)や赤城火山南麓の期更新世の伊勢崎砂層など(凡例T)の可能性がある。赤城火山南麓の後期更新世の伊勢崎砂層は、波志江中宿遺跡の古墳時代の粘土探査坑の調査において、榛名八崎テフラ(Hr-HP)、姶良Tnテフラ(AT)、浅間黄褐色テフラ(As-BP)が挟在する沼沢湿地成粘土層が探査対象であった(藤根・今村, 2001)。この伊勢崎砂層は、波志江中宿遺跡のほか、舞台遺跡においても粘土探査坑の探査対象の地層であった(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団, 2001)。これらの土器では、火山岩類の砂粒を含む点で共通している。さらに、波志江中宿遺跡の粘土探査坑と同時期に堆積した同様の堆積物は、東側に位置する萩原遺跡においても確認されている(東日本高速道路株式会社・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団, 2010)。この萩原遺跡は、渡良瀬川扇状地と大間々扇状地に挟まれた地域であり、河川により上流域から運ばれてきた堆積岩類起源の砂粒を含むことが考えられる。分析No.5とNo.7の砂粒組成がDc群であるが、萩原遺跡が位置する東側地域の砂粒組成と推定される。

分析No3の大型甕や分析No4の甕は、淡水種珪藻化石を多く含むが、主に堆積岩類と凝灰岩類からなるCeまたはEc群の砂粒で構成されており、前述の分析No.5～7の土器胎土の特徴とは異なると考えられる。

中期更新世の沼田湖成層(凡例N)は、円形型の中心類に分類される*Cyclostephanos numataensis*などの湖沼浮遊性の珪藻化石が優勢の湖沼成粘土であるが、今回の分析対象とした土器群には見られなかった。

吾妻郡東吾妻町大字三島地内に所在する四戸の古墳群の埴輪胎土分析では、結晶片岩を特徴的に多く含むことから、三波川变成帯が分布する地域が想定された。一方、同時期の土器は、結晶片岩を含まない砂粒組成を示し、

在地的材料の可能性が高いと推定されている。なお、一部の土器胎土中には、頁岩類の砂粒が含まれている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2020)。

3. 6. その他の特徴

分析No12の円筒埴輪では、溶融を示す発泡した粒子が見られ、焼成温度がやや高いと推定される。

4. おわりに

土器や埴輪などは、土製品の製作に必要な良質と思われる粘土材料が不可欠である。なお、調査では、古代の粘土採掘坑が検出され、灰黄色粘土が確認されている。ここで確認された土器胎土の粘土材料の特徴は、対象とした粘土層の特徴である。今後、周辺域の地層堆積物中の微化石類あるいは付随する砂粒物の特徴を調べることにより、具体的な土器材料のイメージが明らかになると考えられる。

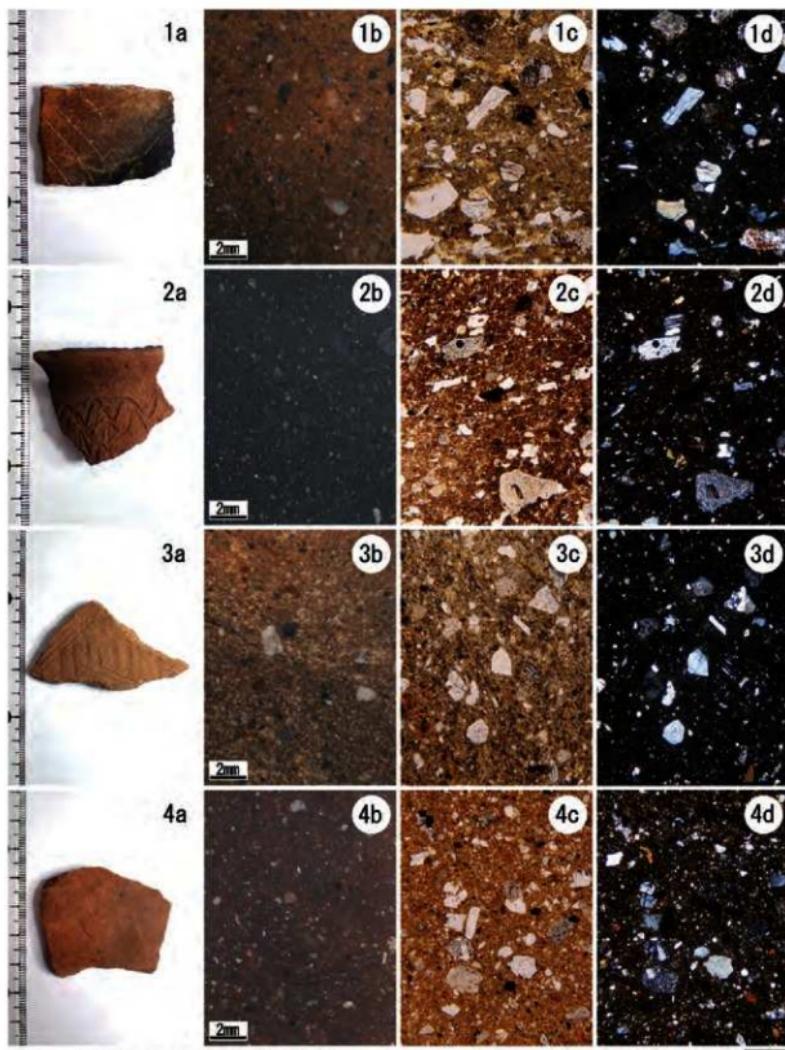
引用文献

- 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42 (2), 73-88.
- 地学団体研究会・地学事典編集委員会編(1981)増補改訂 地学事典, 1612p. 平凡社。
- 藤根 久(1998)東海地域(伊勢-三河湾周辺)の弥生および古墳土器の材料。東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編「上巣」、島が語る: 美濃の独自性「弥生から古墳へ」: 108-117. 東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会。
- 藤根 久・今村美智子(2001)第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴。群馬県埋蔵文化財調査事業団「波志江中周遺跡」: 262-277. 日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 藤根 久・小坂和夫(1997)生駒西麓(東大阪市)の礪文土器の胎土材料—断屑内物質の可能性—。第四紀研究, 36, 55-62.
- 小杉正人(1988)珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究, 27, 1-20.
- 東日本高速道路株式会社・財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(2010)「財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第500集: 萩原遺跡」、財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 中野 俊・竹内圭史・加藤祐一・酒井 利・浜崎恵志・広島俊明・駒沢正夫(1998) 20万分の1地質図幅「長野」。地質調査所。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(2020)第6節。四戸の古墳群。公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「第669集「四戸遺跡」」、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(2001)財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書282: 舞舞台跡(1), 32p. 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 下司信夫・竹内圭史(2012)榛名山地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)。産総研地質調査総合センター, 79p.
- 須藤定久・牧木 博・光男・宇野沢 明・瀧澤文教・坂本 亨・駒沢正夫・広島俊男(1991) 20万分の1地質図幅「宇都宮」。地質調査所。
- 田中宏之・南雲 保(2015)沼田湖成層(中部更新統、群馬県)から見出された珪藻群集。Bulletin of the Mizunami Fossil Museum, 41, 19-29.
- 高橋雅紀・林 宏樹(2004)群馬県富岡地域に分布する中新統の地質と複合年代序。地質学雑誌, 110, 175-194.



図1 新井遺跡と周辺の地質

(中野ほか、1998) 20万分の1地質図幅「長野」と須藤ほか、(1991) 20万分の1地質図幅「宇都宮」を編集



図版1 分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真 (1)

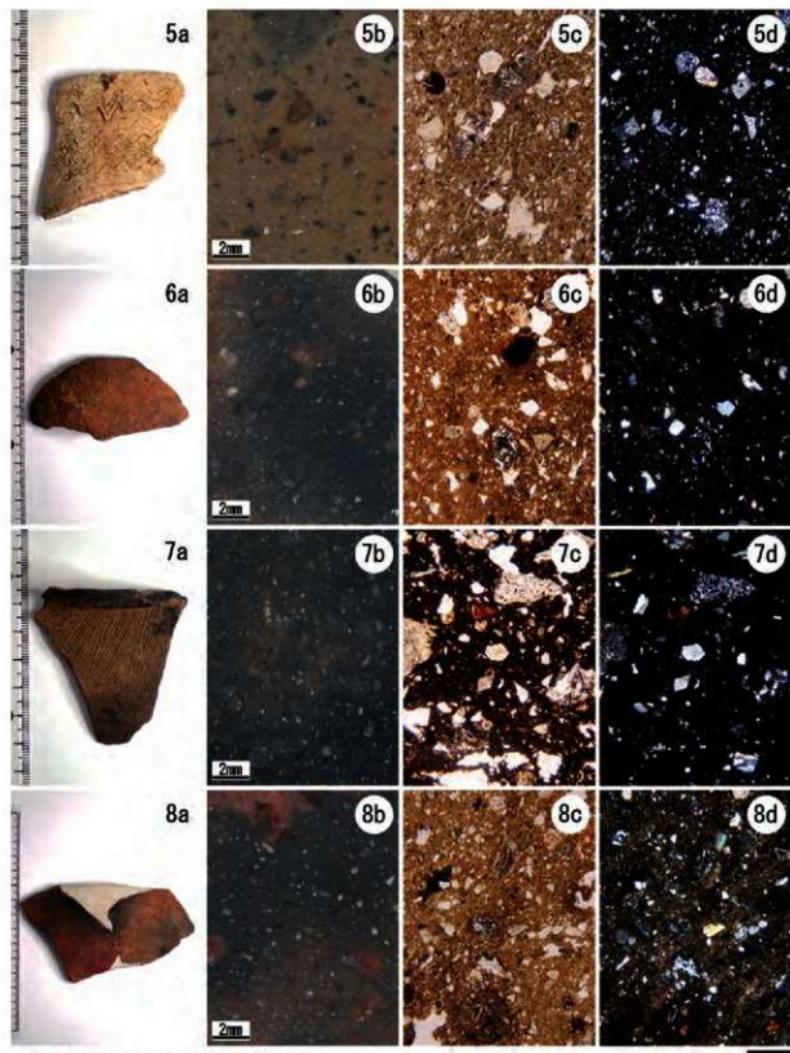
(スケール: 1c, 1d, 2c, 2d, 3c, 3d, 4c, 4d: 500 μm)

1a. 分析No. 1 1b. 分析No. 1 (断面) 1c. 分析No. 1 (解放ニコル) 1d. 分析No. 1 (直交ニコル)

2a. 分析No. 2 2b. 分析No. 2 (断面) 2c. 分析No. 2 (解放ニコル) 2d. 分析No. 2 (直交ニコル)

3a. 分析No. 3 3b. 分析No. 3 (断面) 3c. 分析No. 3 (解放ニコル) 3d. 分析No. 3 (直交ニコル)

4a. 分析No. 4 4b. 分析No. 4 (断面) 4c. 分析No. 4 (解放ニコル) 4d. 分析No. 4 (直交ニコル)



図版2 分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(2)

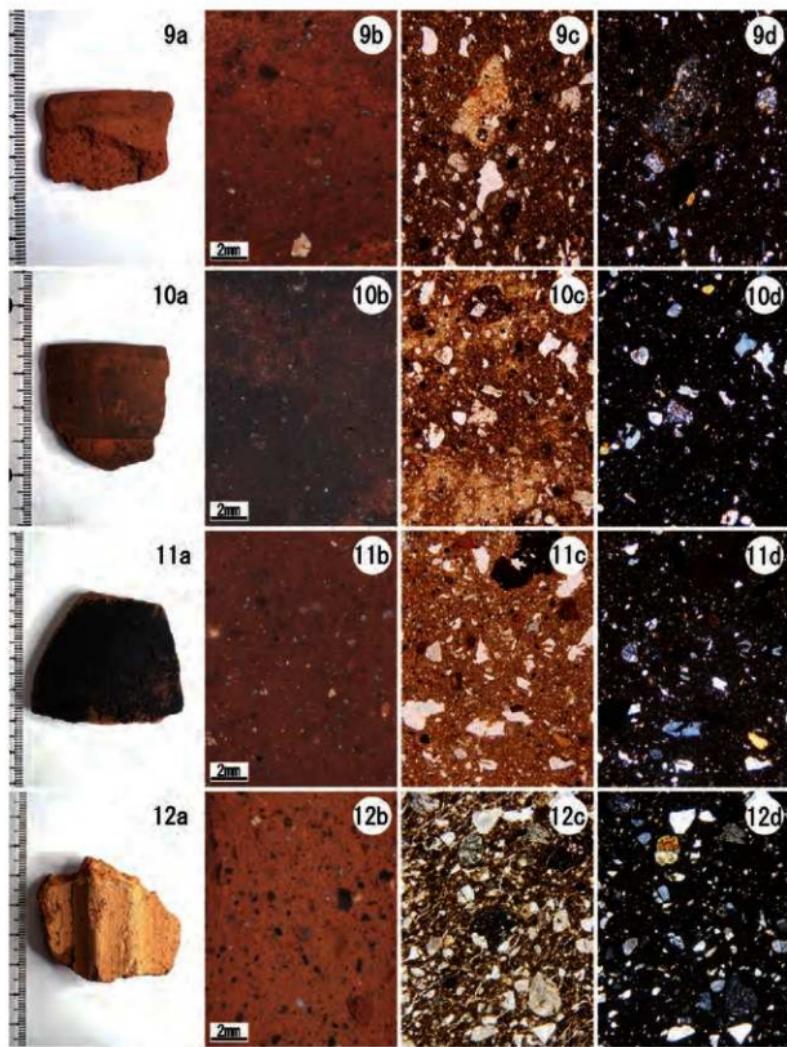
(スケール: 5c, 5d, 6c, 6d, 7c, 7d, 8c, 8d: 500 μm)

5a. 分析No. 5 5b. 分析No. 5 (断面) 5c. 分析No. 5 (解放ニコル) 5d. 分析No. 5 (直交ニコル)

6a. 分析No. 6 6b. 分析No. 6 (断面) 6c. 分析No. 6 (解放ニコル) 6d. 分析No. 6 (直交ニコル)

7a. 分析No. 7 7b. 分析No. 7 (断面) 7c. 分析No. 7 (解放ニコル) 7d. 分析No. 7 (直交ニコル)

8a. 分析No. 8 8b. 分析No. 8 (断面) 8c. 分析No. 8 (解放ニコル) 8d. 分析No. 8 (直交ニコル)



図版3 分析試料と土の偏光顕微鏡写真 (3)

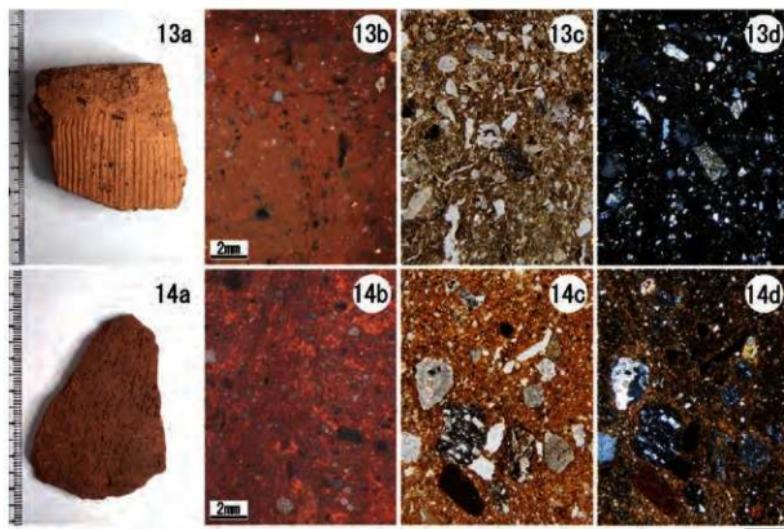
(スケール: 9c, 9d, 10c, 10d, 11c, 11d, 12c, 12d: 500 μ m)

9a. 分析No. 9 9b. 分析No. 9 (断面) 9c. 分析No. 9 (解放ニコル) 9d. 分析No. 9 (直交ニコル)

10a. 分析No. 10 10b. 分析No. 10 (断面) 10c. 分析No. 10 (解放ニコル) 10d. 分析No. 10 (直交ニコル)

11a. 分析No. 11 11b. 分析No. 11 (断面) 11c. 分析No. 11 (解放ニコル) 11d. 分析No. 11 (直交ニコル)

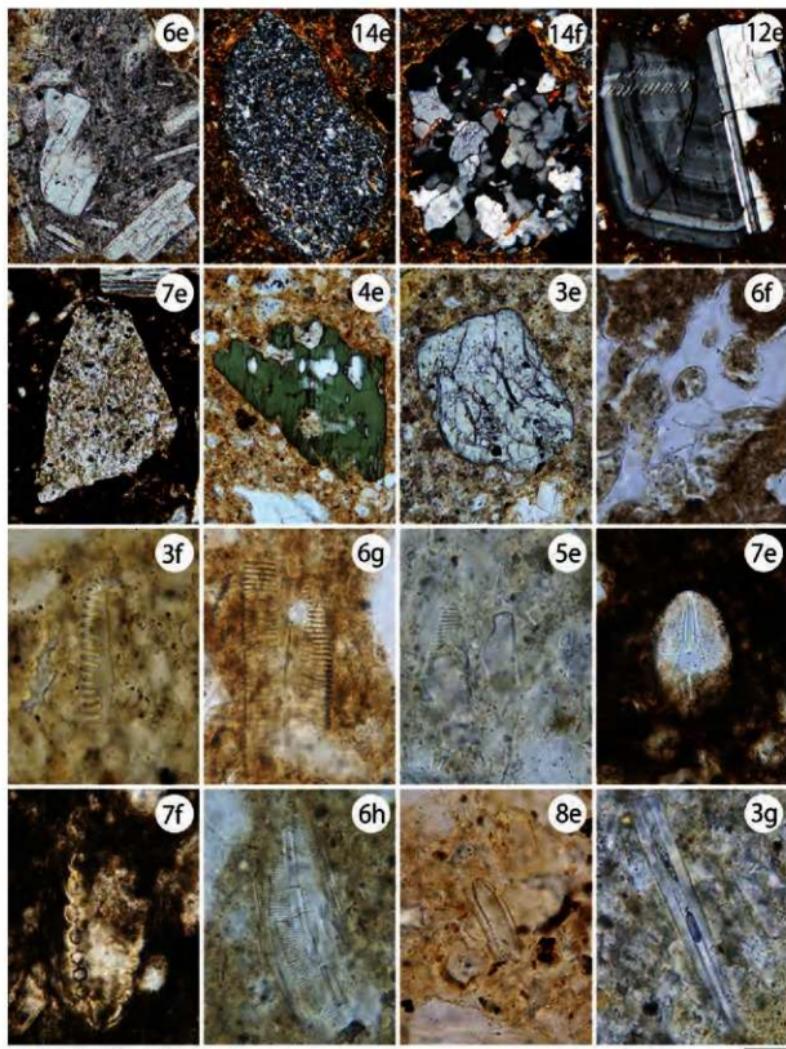
12a. 分析No. 12 12b. 分析No. 12 (断面) 12c. 分析No. 12 (解放ニコル) 12d. 分析No. 12 (直交ニコル)



図版4 分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(4)

(スケール: 13c, 13d, 14c, 14d: 500 μm)

- 13a. 分析No. 13 13b. 分析No. 13 (断面) 13c. 分析No. 13 (解放ニコル) 13d. 分析No. 13 (直交ニコル)
 14a. 分析No. 14 14b. 分析No. 14 (断面) 14c. 分析No. 14 (解放ニコル) 14d. 分析No. 14 (直交ニコル)



図版5 胎土の偏光顕微鏡写真

(スケール: 6e, 14e, 14f, 12e, 7e, 4e, 3e: 100 μm, 6f: 50 μm, 3f, 6g, 5e, 7e, 7f, 6h, 8e, 3g: 20 μm)

6e. 斑品質 14e.複合石英類(微細) 14f.複合石英類(大型) 12e.斜長石(紫帶)

7e.複合石英類(微細) 4e.角閃石類 3e.單斜輝石 6f.火山ガラス(パブル型) 3f.珪藻化石 *Pinnularia lata* 6g.珪藻化石 *Pinnularia viridis* 5e.珪藻化石 *Eunotia praerupta* var. *bidentis*

7e.珪藻化石 *Dipioneis*属 7f.珪藻化石 *Surirella*属 6h.珪藻化石 *Cymbella aspera* 8e.珪藻化石 *Hatzchia amphioxys* 3g.骨針化石

第9節 繩文早期土器のX線CT撮影

D135号土坑出土の縄文早期土器の成形技法を解明するためのデータを得るために内部構造を明らかにするX線CT撮影を行った。

撮影機器及び撮影条件

X線CT撮影は日本ベーカーヒューズ株式会社製のPhoenix v|tome|x m 240/180を使用した。最大管電圧240kVのマイクロフォーカスX線発生装置である。

早期土器1の撮像条件は管電圧を170kV、管電流を230 μ A、露光時間を250ms、投影画像取り込み数を2300枚とし、X線焦点と遺物の間に金属フィルタ0.5mm Snを設置した。再構成した3次元画像のボクセルサイズは0.0999 μ m³である。

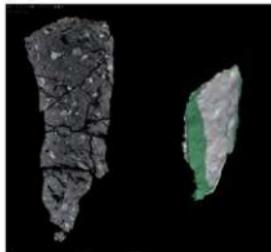
早期土器2の撮像条件は管電圧を160kV、管電流を240 μ A、露光時間を250ms、投影画像取り込み数を2300枚とし、X線焦点と遺物の間に金属フィルタ0.5mm Snを設置した。再構成した3次元画像のボクセルサイズは0.0999 μ m³である。



写真1 試料土器1・2 検査前



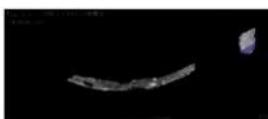
CT画像1 試料土器1 xy-plane0734



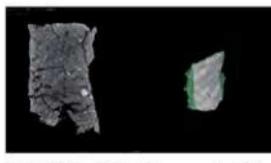
CT画像2 試料土器1 xz-plane069



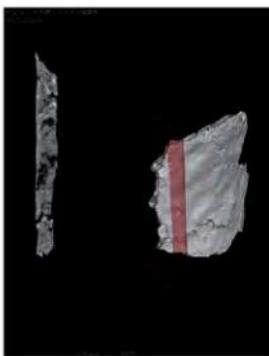
CT画像3 試料土器1 yz-plane0266



CT画像4 試料土器2 xy-plane0625



CT画像5 試料土器2 xz-plane103



CT画像6 試料土器2 yz-plane0129

第10節 炭化米塊のX線CT撮影

D25号竪穴建物出土の炭化米塊の生成過程を解明するために内部構造を明らかにするX線CT撮影を行った。

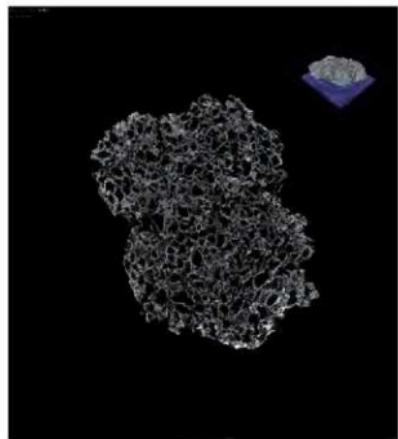
撮影機器及び撮影条件

X線CT撮影は日本ベーカーヒューズ株式会社製のPhoenix v|tome|x m 240/180を使用した。この装置は最大管電圧240kVのマイクロフォーカスX線発生装置である。

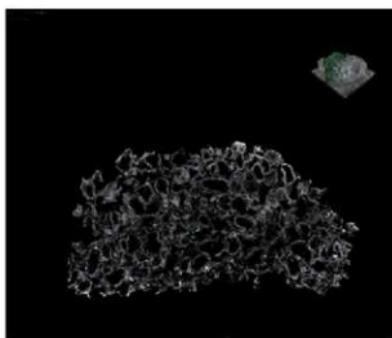
炭化米塊の撮像条件は管電圧を40kV、管電流を400 μ A、露光時間を250ms、投影画像取り込み数を2200枚とし、X線焦点と遺物の間に金属フィルタは設置しない。再構成した3次元画像のボクセルサイズは0.0381 μ m³である



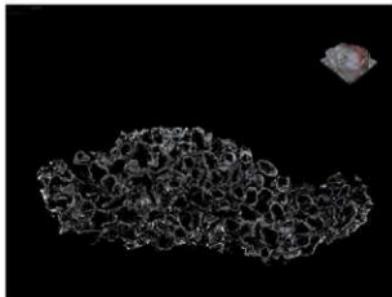
写真1 炭化米塊(上から)



CT画像1 xy-plane344



CT画像2 xz-plane0766



CT画像3 yz-plane0735

第7章 考察

第1節 繩文早期土器のX線CT画像分析による成形技法の検討

1.はじめに

対象としたD153号土坑から出土した縄文土器(第71図6)は押しつぶされた様な状態で発見された(写真1)。土器は非常に脆弱で単独での取り上げが困難と判断され、周りの土ごと硬質発泡ウレタンにより保護・梱包し取り上げを行った。本遺跡の整理作業にあたり、各破片自体が脆くそのまま接合・復元作業を行うことが困難なため、保存処理室に搬入し土器破片を強化等の保存処理を行いながら復元作業を行うことになった(写真2)。この作業を進める中で土器の断面および内側表面に溝状に延びる空洞(写真3・4・5)が見つかり、表面を精査した結果繊維の痕跡であることが判明した。またこの他に土器の縦方向断面にもまるで縄目のように捻じれた穴状の空洞(写真6・7)の存在が確認された。これらの空洞・繊維痕跡等はその後の接合・復元作業に伴い調査・観察することができなくなることから、非破壊検査であるX線CT撮影を実施し土器内部の繊維痕跡の調査を行った。

2.試料と方法

X線CT撮影は群馬県立産業技術センターに委託し下記の装置・条件にて撮影を行った。

X線CT撮影対象は縄文土器(第71図6)破片中から選別した2点(写真8)で、試料は事業団において保護養生を行ったうえでそれぞれプラスチック製密閉容器に収納・産業技術センターに搬入しその容器のままX線CT撮影する方法で行った。

X線CT撮影装置

GEセンシング&インスペクション・テクノロジーズ(株)
型式 Phoenix vltomelx m 240/180

マイクロホーカス高精度CT

試料1(写真8の右側) 試料2(写真8の左側)

管電圧 170kV	管電圧 160kV
管電流 230μA	管電流 240μA
露光時間 250ms	露光時間 250ms
取り込み数 2300	取り込み数 2300
金属フィルタ 0.5mm Sn	金属フィルタ 0.5mm Sn
ボクセルサイズ 0.0999	ボクセルサイズ 0.0999

得られた画像

試料1	試料2
Xz-plane 279枚	Xz-plane 443枚
Yz-plane 1158枚	Yz-plane 1454枚
Xy-plane 2092枚	Xy-plane 1532枚

この膨大な量の画像から、3D画像を構築し、ビューアーソフト「mayVGL」で観察が可能であるが、本稿ではその中から試料1についてPCソフトから作成した画像を用いて報告する。

CT画像は3方向(面)種類の画像を作成している。

今回のX線CT撮影の設定では

x z 土器表面に対して平行な断面画像

表面側から約0.1mm間隔で断面画像を作成

y z 土器に対し垂直断面画像

左側から縦に約0.1mm間隔で断面画像を作成

x y 土器に対し水平断面画像

下側から上に約0.1mm間隔で断面画像を作成

としている。本稿では以後便宜上 x z 画像を平面面
y z を縦断面 x y を横断面と表記する。

3. 観察結果

X線CT画像では、黒色部分は空洞(空間)となり画像が灰色から白色に代わるとともに密度が高くなる形で表示されている。土器内部に存在する空洞化した繊維痕跡は黒色に。加えて実際の土器表面の状況とCT画像を比較検討し、土器内部に細かい繊維痕跡が存在した場合その部分は細い黒色すじとして表示されることから、その色調から土器内部の繊維痕跡を推定した。

掲載したX線CT画像は画面左または下側に断層写真
画面右側にCT撮影により作成した試料の立体画像を配

し、その立体画像を横断する形で断面位置を網掛け(x zでは緑・y zでは赤・x yでは青で表現)表示している。

C T 画像 1 は土器平断面、C T 画像 2 は土器縦断面、C T 画像 3 は土器横断面で、その断面位置はそれぞれ緑・赤・青色の網掛けで表示している。C T 画像 1 の平断面の上部にはやや山形にループする空洞が見られ、C T 画像 2 の縦断面上部に上下に広がる空洞、そして C T 画像 3 の横断面中央土器表面付近に横に広がる空洞として観察できる。繊維は土器内部で水平方向に延びるばかりではなく複雑に広がっている様子がうかがえる。

C T 画像 4 は最初に見つかった空洞部分の横断面で幅 7 mm ほどの土器厚さの半分近くにおよび水平方向に 6 cm 程に延びる大きな空洞となっている。その空洞の下端の横断面画像写真 C T 画像 5 を見ると黒色の空洞から派生する斜めに伸びる細かい空洞が複数見られる。この部分を平断面で見ると写真 C T 画像 6 の中央下に横に延びる空洞から派生するように上下斜め方向にも延びる複数の細い空洞が観察される。そしてこの水平方向の空洞は土器内を一周するように延びることなく途中で消滅する(観察されなくなる)。この水平方向空洞の状況は縦断面写真 C T 画像 7・8・9・10・11 にも現れており C T 画像 7 では中央や下より断面に最初の空洞断面その下に別の空洞が見られ、C T 画像 8 ではその 2 つの空洞の下にもう一つの淡い空洞が出現するが C T 画像 9・10 では下側の空洞は薄れ C T 画像 10 では最初の水平空洞痕跡も淡くなってくる。

次に土器内部の土器表面に沿った横方向繊維の拡がりおよび分布を見てみる。平断面写真 C T 画像 1・6・12・13・14 は土器表面よりから徐々に奥側(内側)にずらしていく断面画像である。円筒状に内湾する土器を縦にスライスする形で断層画像を作成しているため画像の左右端は土器表面の状況を示すことになり、土器内を横に(水平方向)延びる空洞・繊維痕跡については斜め断面となり一枚の画像でこれを把握することが出来ないため、深さ異なる複数を比較して確認する。

C T 画像 1 は前述の様にループ状に巻いた形で空洞が存在し、C T 画像 6 では下部に最初に見つかった水平空洞から派生するように斜めに延びる細かい空洞が広がる。C T 画像 12・13 では薄い色合いであるが横方向・斜め方向に延びる細かい空洞が全体に分布する。

繊維痕跡による空洞は、一部水平方向に大きく長くなるものもあるが、その端部では厚み方向および土器面に沿った方向へもひろく広がっている様子が観察される。この試料 1 を観察したところでは、土器内部に見られる繊維痕跡(空洞)は大きいもので幅 2~5 mm 長さは 7~8 cm 程度である。この繊維痕跡は壁面に筋状の凹凸が斜めに巡り、一見すると縄・ひも状を呈する(写真 5)が、X 線 C T 画像を精査した結果、纏り等の構造は認められず、その空洞から枝分かれするように細い空洞が多数分枝周囲に延びている様子が観察された。X 線 C T 画像で土器内部をくまなく観察した結果土器内全体に幅 1 mm 前後の細い空洞が存在することが確認できたが、この空洞に特別の規則性は認められなかった。この土器内部に大量に存在する繊維(痕跡)は一部捻じれば見られるもののひも・縄状のものではなく、土器の製作時に所謂つなぎとして作業性・成形性を向上させるために付与したものと考えられる。なお、この X 線 C T 画像からは多くの微細な繊維の痕跡を観察できたものの、所謂土器の輪積み・巻き上げ等の痕跡は確認出来なかった。この土器胎土に含まれる大量の繊維は土器焼成に伴い燃焼・消失し、細かい空洞となり、一部は土器内部に大きなトンネル状の空洞(写真 6・7)として存在している。このうち土器内面付近に存在した一部の繊維は焼成に伴い土器内側表面に溝・穴となって現れ、その後土器の使用に伴い、この溝および穴内に所謂「お焦げ」と見られる炭化物が付着・残存している状況が観察された(写真 7・8)。この土器内部の「お焦げ」状の炭化物は土器口縁部より下側の内面にだけ存在しており、食材等との関係を含め新たな分析調査の可能性を持っている。

4. おわりに

近年出土遺物に対する X 線 C T 撮影による調査分析事例は大型の X 線 C T 撮影設置の増加とともにきていく。しかしその方出土遺物を直接撮影可能な大型の X 線 C T 撮影装置は全国でも数少なく、その利用機会は限定される。

今回の事例では X 線が透過しやすい繩文土器でおかつ縦横 20 cm 厚さ 1 cm 程度の小型の破片であったため、一般的な工業用 X 線 C T 撮影装置で撮影が可能となった。特殊な治具等を必要とせず、一般的なプラスチック製密

閉ケースとクッション材で梱包することで、完全非破壊で安全かつ短時間でX線CT撮影を行うことができた。その画像は高精細で肉眼観察では得られない多くの情報

を取得し、デジタルデータとして保存することが可能となった。材質・サイズ等に制約があるがこのX線CT撮影による分析・調査は今後活用が期待される手法である。



写真1 D153号土坑縄文土器の出土状況



写真2 土器の室内搬入状態



写真3 土器断面に残る溝状空洞



写真4 土器内面に残る溝状の窪み



写真5 土器断面に残る溝状空洞拡大



写真6 土器縦方向断面に見られる穴状空洞



写真7 土器縦方向断面に見られる穴状空洞拡大



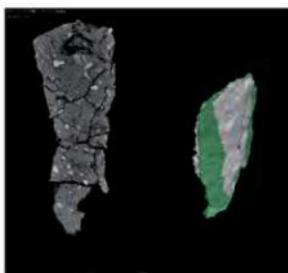
写真8 CT撮影破片、試料1(右)および試料2(左)



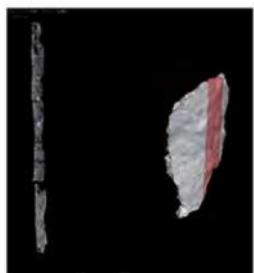
写真9 土器断面内側に見られるお焦げ状炭化物



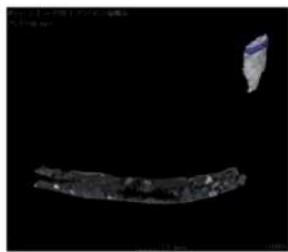
写真10 土器断面内側に見られるお焦げ状炭化物拡大



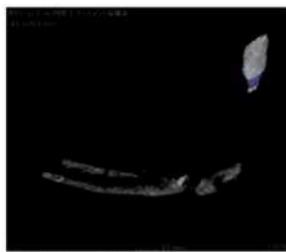
CT画像1 XZ-plane052



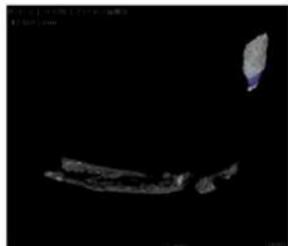
CT画像2 YZ-plane0538



CT画像3 XY-plane1839



CT画像4 XY-plane0670



CT画像5 XY-plane0660



CT画像6 XZ-plane076



CT画像7 YZ-plane0212



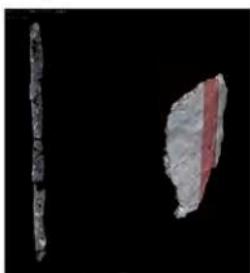
CT画像8 YZ-plane0280



CT画像9 YZ-plane0350



CT画像10 YZ-plane0415



CT画像11 YZ-plane0500



CT画像12 XZ-plane087



CT画像13 XZ-plane092



CT画像14 XZ-plane094

第2節 炭化米塊のX線CT画像解析

佐々木由香(金沢大学)・片岡 太郎(弘前大学)

1. はじめに

群馬県吾妻郡東吾妻町厚田に所在する新井遺跡は、吾妻川右岸の段丘上に立地する弥生時代中期の集落跡である。弥生時代中期後半の25号住居跡の床面からは、炭化種実塊が出土した。表面の形態観察の結果、全てがイネの炭化種子(いわゆる炭化米)と同定された。炭化種子は、膨張や変形が著しく、端面は平坦に潰れている状況から炊かれた米と判断された。さらに、編組製品の一部がコメに付着して残存しており、炊いた米がかご類に入れられた可能性が指摘された(本書第6章自然科学分析第4節炭化種実同定)。ここでは、イネ炭化種子塊のX線CT画像解析を行い、塊内部の状況から形成過程を検討した。

2. 資料と方法

資料は、D区25号住居跡から出土した炭化米塊1点である。表面の観察からイネの炭化種子のみで形成されたと推定され、完形種子の換算数は1422点強である(本書第6章自然科学分析第4節炭化種実同定)。塊の大きさは、長径6.43cm、短径4.47cm、厚さ2.30cm、種子1点の大きさは、長さ4.6mm、幅3.0mmと長さ5.2mm、幅2.9mmである。

X線CT撮影は、群馬県立産業技術センター所蔵のマイクロフォーカスX線発生装置(日本ベーカーヒューズ株式会社製のPhoenix v|tome | Xm 240/180)を使用した。CT像を再構成した3次元画像のボクセルサイズは $0.0381\mu\text{m}$ である。X線CTの撮影条件は、X線管電圧40kV、X線管電流 $400\mu\text{A}$ である。CT像の表示ならびに解析は、弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センターのX線マイクロCTスキャナー付属のCT Analyzer、CT Vox、DataViewerを使用した。CT像は、白黒の8bit(256色)のグレースケールで、白色へ近づくほど密度が高く、黒色へ近づくほど密度が低い。

3. 結果

イネ炭化種子塊の底面は緩く湾曲し、上・下長側面に

は割り裂いたヘギ材を用いた編組製品の一部が残る。湾曲を呈する面を底面として、実体像とCT画像を用いて展開図を作成した(図版1)。長側面の上下と上面の三面には編組製品と推定されるヘギ材の破片が数本見られ、特に下長側面において残り方が顕著である(図版1-2)。

塊の平面と長側面、短側面のCT断層像のいずれにもイネ炭化種子かそれ以上の大きさの楕円形の空隙が観察され、他の種実が混入している状況は観察できなかった。また、表面観察されたイネ炭化種子と同様、内部にも膨張や変形している種子状の空隙が多数確認できた。上面から底面への断層像におけるヘギ材の残りが良い面(図版2-1の右側面)にはやや密度が高い箇所が確認できた。

4. 考察

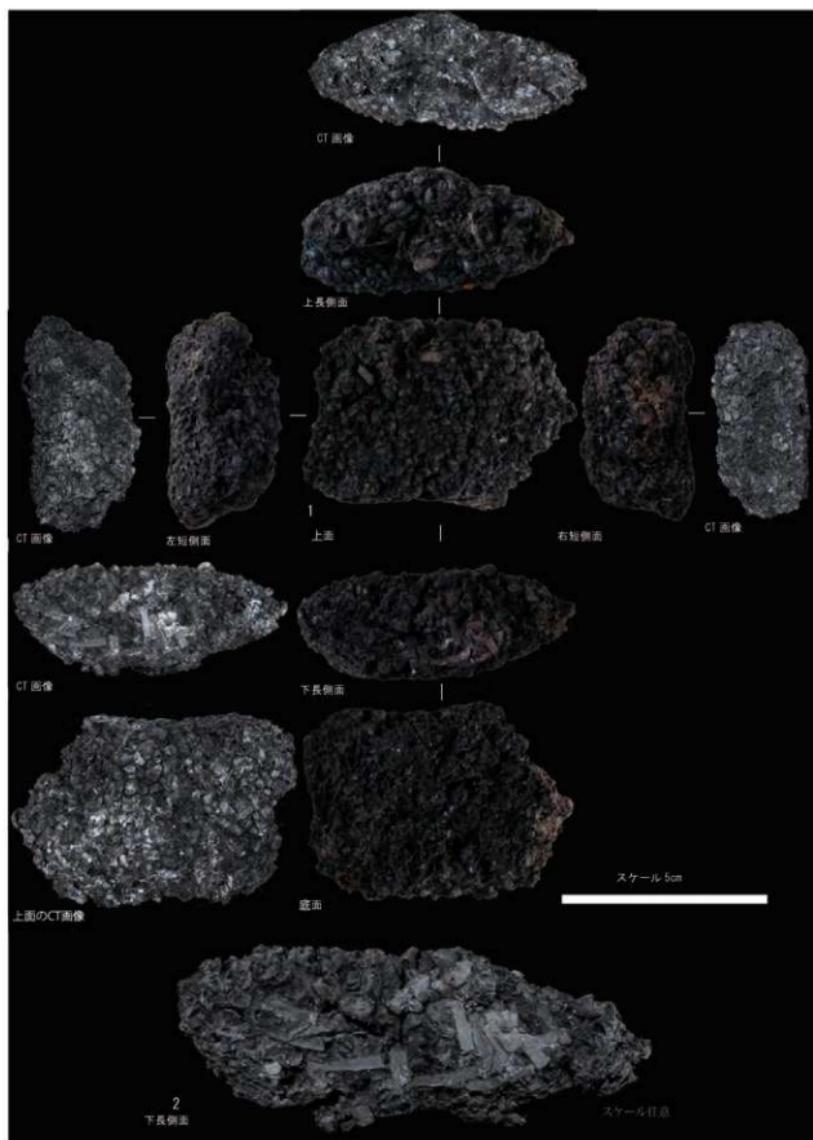
おにぎり状の炭化種実塊の場合は、炊いた種実を手で握った外周側の密度が高くなり、粒の粒径が変形する。この結果、CT画像において外周側が白色を呈する(佐々木2019)。新井遺跡の炭化米塊は、塊の底面が湾曲して米が潰れている以外は膨張・変形している米粒が多い。また、編組製品が接していた側面にはやや中実で密度が高い米がある傾向が観察されるものの、おにぎりほどの密度が高い面を構成していない。したがって、土器に底が湾曲したかご状の編組製品を入れて、米を蒸した状態で焦げて炭化した可能性や、炊いたか蒸した米を編組製品に入れた状態で炭化した可能性がある。ただし、塊に伴う土器は出土していない。

ヘギ材はタテ・ヨコ材共に平坦で、直角で隙間なく交差するように見える点から、タテ材とヨコ材に隙間のない網代で製作されたかご状の容器であった可能性がある。用途としては、蒸し器や保管容器が推定できる。

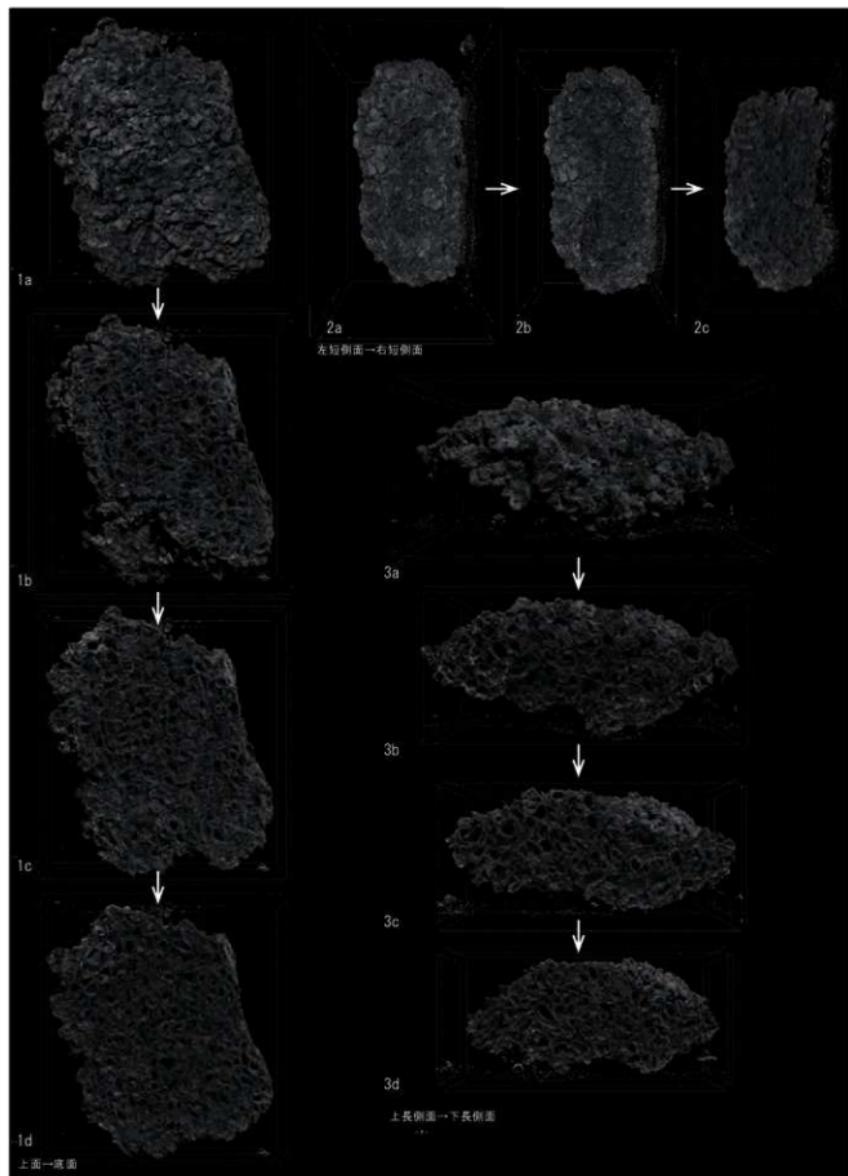
調理された状態の炭化米塊で、編組製品が付着した最も古い例は、神奈川県真田北金目遺跡から出土した弥生時代後期の炭化ごはん塊であったが(横浜市歴史博物館監修2019)、本出土例はさらに遅く、弥生時代中期中葉～後葉の年代が得られており、当時の米の調理法もしくは保管方法を示唆する例として重要である。

引用文献

- 佐々木由香2019「炭化種実塊から見た穀類利用」横浜市歴史博物館監修「おにぎりの文化史」p.114-117、河出書房新社
- パレオ・ラボ(佐々木由香・パンダ)2022「炭化種実同定」群馬県埋蔵調査事業団編「新井遺跡」p.263-266
- 横浜市歴史博物館監修2019「おにぎりの文化史」河出書房新社



図版1 新井遺跡出土炭化米塊とX線CT画像（1）（1：展開像、2：下長側面の編組製品強調画像）



図版2 新井遺跡出土炭化米塊のX線CT画像(2) (a:表面、b-d:断層像)

第3節 新井遺跡の周溝墓と古墳について

はじめに 新井遺跡からは、遺跡地東部のD区より弥生時代と想定する円形周溝墓2基、方形周溝墓1基と、古墳時代に想定される方形周溝墓2基、方墳2基、円墳1基が調査された。弥生時代後期後半から古墳時代後期に至る時期まで継続して墓域として利用されている。ここでは、吾妻川中流域では、初めて確実に調査された例として新井遺跡から検出された周溝墓と、それに引き続いて構築された方墳という特徴ある古墳を中心に、吾妻川下流域にある渋川地区も含めた周溝墓・古墳と比較検討する中でその意義づけを行う。

弥生時代の周溝墓(図1)新井遺跡では、円形周溝墓2基、方形周溝墓1基がある。

円形周溝墓で確実に弥生時代と証明できるのは、D1号円形周溝墓(4)である。内周で南北4.52m、東西3.40mあり、片側が円弧状で、もう一方がやや直線状に近いが中央部で溝が途切れている。主体部は、隅円長方形で、土坑上部で長205cm、西部幅195cm、東部幅178cmと、長辺があまり長くなく、西部がやや幅広くなっている。高坏と赤彩壺が、上より転落しているような状況で出土しており、この土器から後期後半と推定できる。

もう1基、円形周溝墓が当遺跡では調査されている。D2号円形周溝墓(5)で、円弧状の周溝が形成されるが、2箇所で溝が途切れているものである。規模は内周で南北6.0m、東西6.15mである。主体部が、D1号同様、隅円長方形で、土坑の規模は長181cm、東部幅138cm、西部幅140cmと長辺があまり長くなく、西部がやや幅広である。珪質頁岩製の管玉1、ガラス玉6点が出土し、ガラス玉は銅着色のカリガラス(GroupP II)製である。

他に、D2号方形周溝墓(第1図12)がある。規模は内周で、南北4.75m、東西5.10mあり、2~3か所で溝が途切れている。主体部が隅円長方形で、土坑の規模は長190cm、東部幅134cm、西部幅163cmと長辺があまり長くなく、西部がやや幅広である。西部の幅がやや広く、ベンガラが西にあることから西頭位の可能性があり、さらに周溝から出土したガラス玉は銅着色カリガラス(GroupP II)製である。D2号円形周溝墓とD2号方形周溝墓は、溝が切れていること、主体部の長辺が短かめ

で、西側が幅広で西頭位の可能性が高いこと、ガラス玉が銅着色のカリガラス(GroupP II)であることなどの特徴が共通しており、弥生時代後期と推定できる。

吾妻川下流域の渋川地区における円形周溝墓は、有馬遺跡II 5・6・8号墓(1~3)、中村遺跡円形周溝墓、空沢遺跡1・2号円形周溝墓(6・7)、神宮寺西遺跡円形周溝墓、金井下新田遺跡3区1号円形周溝墓(8)などが弥生時代に比定できるものである。図1に示したように比較をすると新井遺跡の円形周溝墓は小型で、主体部が土坑状を呈しているなど空沢遺跡の円形周溝墓に規模・形態ともに近似している。北部地域の特に渋川地区は円形周溝墓の出土例が多く、地域の特徴となっている。その円形周溝墓が吾妻川中流域まで分布域が増えたことは、吾妻川下流域の渋川から吾妻川中流域までの地域での墓制における共通性を示すものとして重要である。

方形周溝墓も溝が切れていることや、ガラス玉の素材、長辺が短い土壙墓などから、弥生時代の墓であることは間違いない。渋川地域では、有馬II遺跡の1~4・7・9・10・16号墓(11)、田中遺跡1号方形周溝墓(10)などの溝が切れる弥生時代の方形周溝墓が検出されている。主体部は礫床・礫廻いのものが多いのが特徴であり、新井遺跡の主体部の土壙墓とは系統が異なる。

以上、弥生時代後期の墓として円形周溝墓と方形周溝墓があることが判明した。さらに周溝を持たない長辺の短い土坑から長30cmほどの長剣が出土するC4号土坑のような土坑墓も検出され、周溝の有無や規模と副葬品の組成について今後検討すべき資料である。

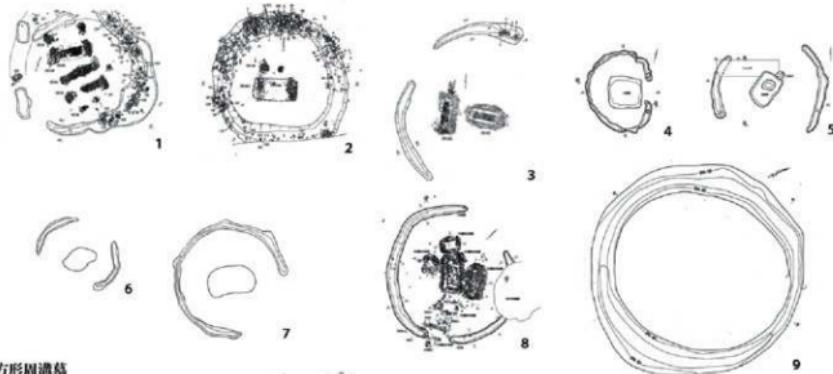
古墳時代の周溝墓と古墳(図1・2)新井遺跡では方形周溝墓2基と方墳2基・円墳1基がある。

方形周溝墓は2基あり、うち1基は完掘であるが、もう1基は南側1/3が調査区外である。

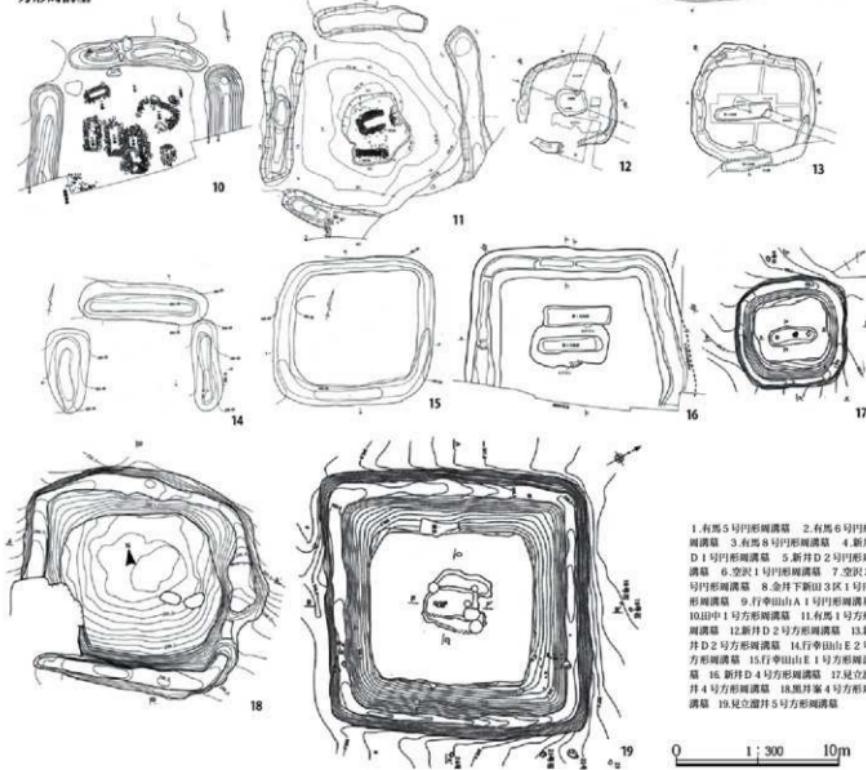
D1号方形周溝墓(第1図13)は、周溝が全周するもので、規模は内周で、南北5.28m、東西5.92mを有する。第1主体部は、墳丘中心部やや南側から、底面長318cm、東部幅75cm、西部幅54cmで、東部が幅広く、東頭位の可能性が高い。

周溝の中に第2主体部が検出され、底面が長276cm、東部幅32cm、西部幅45cmで、西部が幅広く、西頭位の可能性がある。第1主体部からは、長18cmの短剣が腰部と想定される部位から切先を西(足先)に向けて出土してい

円形周溝墓



方形周溝墓



1. 有馬5号円形周溝墓 2. 有馬6号円形周溝墓 3. 有馬8号円形周溝墓 4. 新井D1号円形周溝墓 5. 新井D2号円形周溝墓 6. 空沢1号円形周溝墓 7. 空沢2号円形周溝墓 8. 金井下新田3号1号円形周溝墓 9. 行幸山山A1号円形周溝墓 10. 山口1号方形周溝墓 11. 有馬1号方形周溝墓 12. 新井D2号方形周溝墓 13. 新井D2号方形周溝墓 14. 行幸山山E1号2号方形周溝墓 15. 行幸山山E1号2号方形周溝墓 16. 新井D4号方形周溝墓 17. 見立塚井4号方形周溝墓 18. 新井家4号方形周溝墓 19. 見立塚井5号方形周溝墓

図1 吾妻川中・下流域の周溝墓平面図

る。周溝から出土した壺から古墳時代前期と推定される。D 4号方形周溝墓(図1-16)は、南側1/3が調査区外であるが、おそらく周溝は全周していると推定している。規模は内周で、南北7.60m、東西13.60mである。主体部は、墳丘中心から2つ主体部が検出された。第2主体部が中心主体で底面は、長292cm、東部幅90cm、西部幅94cmである。木棺の痕跡から、木棺長221cm、東部幅71cm、西部幅54cmで東頭位である。パイプ状ベンガラが床面に敷かれていた。副葬品は、被葬者の頭～胸の部位から出土している。ヒスイ製勾玉、石英製算盤玉3、ガラス玉25が出土している。ヒスイ・石英といった貴重な石材の玉類を保持した被葬者である。

第1主体部は、第2主体部より新しい主体部で、第2主体部北側に並行して造られている。底面は、長360cm、東部幅96cm、西部幅98cmである。西部がほんの少し幅広である。棺上より鉢や玉飾性蜜玉が崩落した状況で出土している。他にガラス玉が7個出土している。周溝からもガラス玉2個、高环坏部、小型腰口辺部が出土しており、玉類の構成と土器の様相から前期に比定する。D 4号方形周溝墓は、玉類を中心とする副葬品が豊富で、今後副葬品の組成を考える上で重要な資料である。

上述した2基の方形周溝墓は、全周するタイプで、古墳時代に特徴的である。吾妻川下流の渋川地域にも古墳時代の溝が全周する方形周溝墓はいくつか類例がある。行幸田山E区1号墓(図1-15)、黒井峯1～4号墓(図1-18)、押手方形周溝墓、見立溜井II 1・2・4～6号墓(図1-17・19)などである。規模は、5.5mから15mまであるが、いずれも幅は狭いが深めの溝を有しているもので、墳丘部の残りの良い例からすると1.5mほどの高さがある。主体部は木棺直葬のものが多い。副葬品は黒井峯遺跡からは、菅玉・ガラス玉、見立溜井遺跡からは工具としての斧・鑿が出土している。

以上の2基の方形周溝墓は、短劍や勾玉などの時期がさかのぼる可能性のあるものが含まれるが、共伴の土器や全周する周溝などの特徴から、古墳時代の前期に比定した。渋川地域の方形周溝墓のうち、黒井峯遺跡や見立溜井遺跡例は、5世紀に入るものの、5世紀前半までのものである。古式群集墳へと移行する前の墓制として捉えることができるであろう。

古墳が3基検出された。円墳1基と方墳2基である(図

2-1・5・6)。特に方墳に関しては希少なものであり、この地で確認されたことは重要である。まず、円墳のD 1号墳は、周堀の一部しか確認できていないが、復元すると径15mとなる。この円形墓を円形周溝墓ではなく、円墳としたのは、周堀内側立ち上がりに葺石が並んでいることからである。遺物が一切出土していないので、年代の比定は難しいが、周堀の掘削が丁寧で、周堀外縁の円弧形が崩れていないことなどから、5世紀後半～6世紀の間と想定している。

D 2号墳は、南部は調査区外で未確認であるが、周堀の特に内側測線の直線状の形態や、コーナー部での屈曲の状況から方形墳と判断した。内周で、一辺が17.4mの方墳と推定している。主体部は、本文でも記述したが、横穴式石室の基底部が残っていると推定しており、周堀から出土した埴輪と併せて考えると6世紀前半から中頃にかけての古墳と推定される。

もう1基のD 3号墳は、周堀のごく一部しか出土していないが、周堀内側の側線が直線的で、そのコーナー部の屈曲が直角に近いことなどから、やはり方墳の可能性がある。周堀から須恵器が2片出土している。時期比定は難しいが6世紀代と推定する。

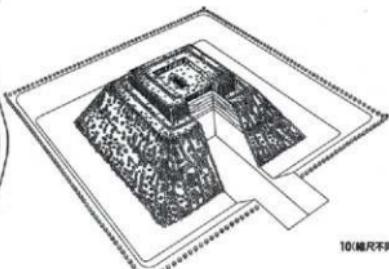
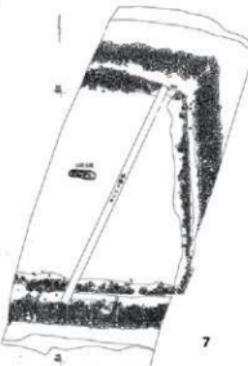
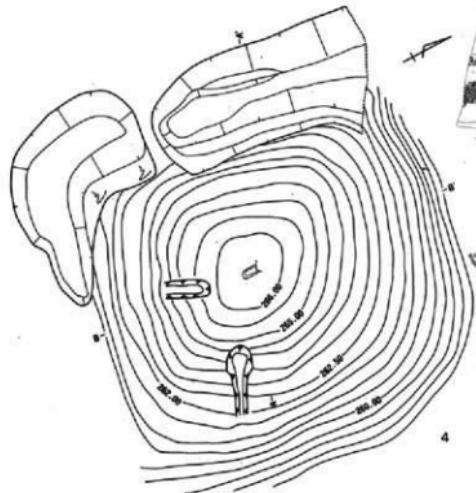
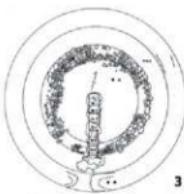
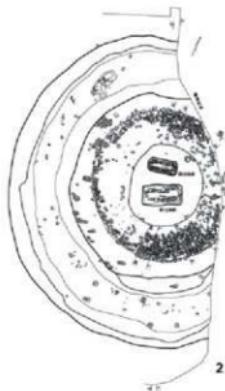
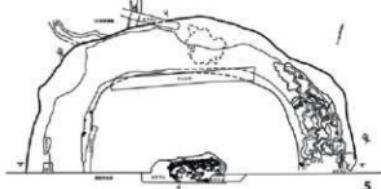
方墳は、前期に渋川地域で行幸田山A 1号古墳(図2-4)や東毛地域太田市の成塚向山第1号古墳などがある。5世紀に入ると、富岡市後賀中割7号古墳(図2-7)、高崎市下芝谷ツ古墳(図2-10)などの渡来系の古墳として積石塚とともに特徴的な墳墓として構築される。しかし、6世紀に入ると利根地域の一部のみで方形の積石塚(岩下清水1・2号古墳)が築かれる。このように限定的に構築されている方墳が、時期比定において難しい部分があるとは言え、6世紀代に比定される方墳が2基、吾妻川中流域で検出されたことが重要である。方墳の系統は5世紀においては、渡来人と関係性でとらえられている。そして、吾妻川流域では、やはり渡来人と関係が指摘されている無袖横穴式石室が多く分布しており注目されており、渡来人と関係でこの方墳を捉えることができるであろう。

このように、3基の古墳が検出されたが、年代的には、方墳は6世紀代、円墳は5世紀後半～6世紀代に比定される。方形周溝墓が前期に比定されるが、それから100年以上の間を経て古墳が築かれたことになる。弥生後期

円墳



方墳



1.新井D1号古墳 2.余井東裏1号古墳 3.中ノ家古墳 4.行幸山山A1号古墳
5.新井D2号古墳 6.新井D3号古墳 7.後致中削7号古墳 8.東町古墳
9.空印6号古墳 10.下芝谷少古墳

0 1:400 10m

図2 吾妻川中・下流域他円墳・方墳平面図

後半から古墳時代後期まで、一部間隔は聞くが、墓域として使用された遺跡として重要である。

吾妻川中・下流域の周溝墓と古墳(図3・4) 次に、この新井遺跡と周辺遺跡での墓域の変遷の様子を図3・4により紹介していく。吾妻川中流域では、今まで5世紀後半に突如、古墳が出現して6世紀に入り無袖横穴式石室があり、中頃以降に両袖横穴式石室となり、7世紀にいたるという墓の変遷が見られた。今回、新井遺跡により、図3にあるように、方形周溝墓・円形周溝墓の確実な例として弥生時代後期後半から溝が途切れる形態の周溝墓が築かれ、さらに後期の土壙墓からも長剣が出土するなど、弥生時代後期の墓制についての情報が明らかとなった。渋川地域で円形・方形周溝墓の隆盛が認められる弥生後期に、吾妻川中流域でも周溝墓の構築がなされてきたことが判明したのである。

古墳時代前期に入ても溝が全周する方形周溝墓が存続することが今回明らかとなり、今のところ前半までは、古墳の構築は無く、方形周溝墓が墓として築かれたことが判明した。対して、渋川地域では、方墳として行幸田山A1号古墳(17)が築かれており、前期後半段階において古墳の構築がなされている。もちろん溝が全周する方形周溝墓も渋川地区では継続して構築され、先述したように行幸田山E区1号墓(16)、黒井峯1~4号墓(19)、押手方形周溝墓、見立溜井II1・2・4~6号墓(18・20)などがある。これらは前期から中期の前半まで構築されているもので、古式群集墳の構築が始まる前の墳墓形態である。

先述したように、新井遺跡の古墳時代の溝が全周する方形周溝墓の出土により、渋川地域と同様に方形周溝墓という弥生時代以来の伝統的な墓制が引き継がれることを示している。吾妻川中流域でそれが古墳へと変化したのが、5世紀後半の机古墳、石ノ塔古墳である。墳丘は不分明であるが、古墳として竪穴系の石槨を主体部として持ち、石ノ塔古墳では、劍・鹿角装刀子・矛など豊富な副葬品が出土している。そして6世紀に入ると、四戸の古墳群大1号・IV号墳に見られるように無袖横穴式石室が構築される。横穴式石室の中で、両袖型に先行する小型墳での横穴式石室導入期の石室である。この無袖横穴式石室が、渋川地区と吾妻川中流域では多く確認されており、この地域の特徴となっている。今回の新井遺

跡では、先述したように、方墳と推定したD2号墳(25)において、横穴式石室の構築は確認されたが、横穴式石室の形態までを明らかにできなかった。埴輪などから見ると6世紀前半~中頃と推定できるものである。また、もう1基の方墳と推定したD3号墳(26)は周堀の外縁部の形態から6世紀代と推定している。円墳としたD1号墳は、出土遺物が全く無いが周堀の外縁形態などから、5世紀後半~6世紀代とする。

D2・3号墳は方墳と推定されるが、先述したように、今まで明らかとなつた前期の方墳としての成塚向山1号古墳や、行幸田山A1号古墳(17)などの方墳とは異なる系統で、渡来人の関係性が想定される。富岡市後賀中割遺跡7号古墳(21)や、下芝谷ツ古墳(24)の方形墳の系統と考えたい。渋川地区では、やはり渡来人の関係性が想定される方形の積石塚として、東町古墳(23)、坂下古墳群などがあり、5世紀後半に比定されている。これらの方形墳の流れを受け継いで、吾妻川中流域に新井遺跡の方形墳が築かれたものと想定している。

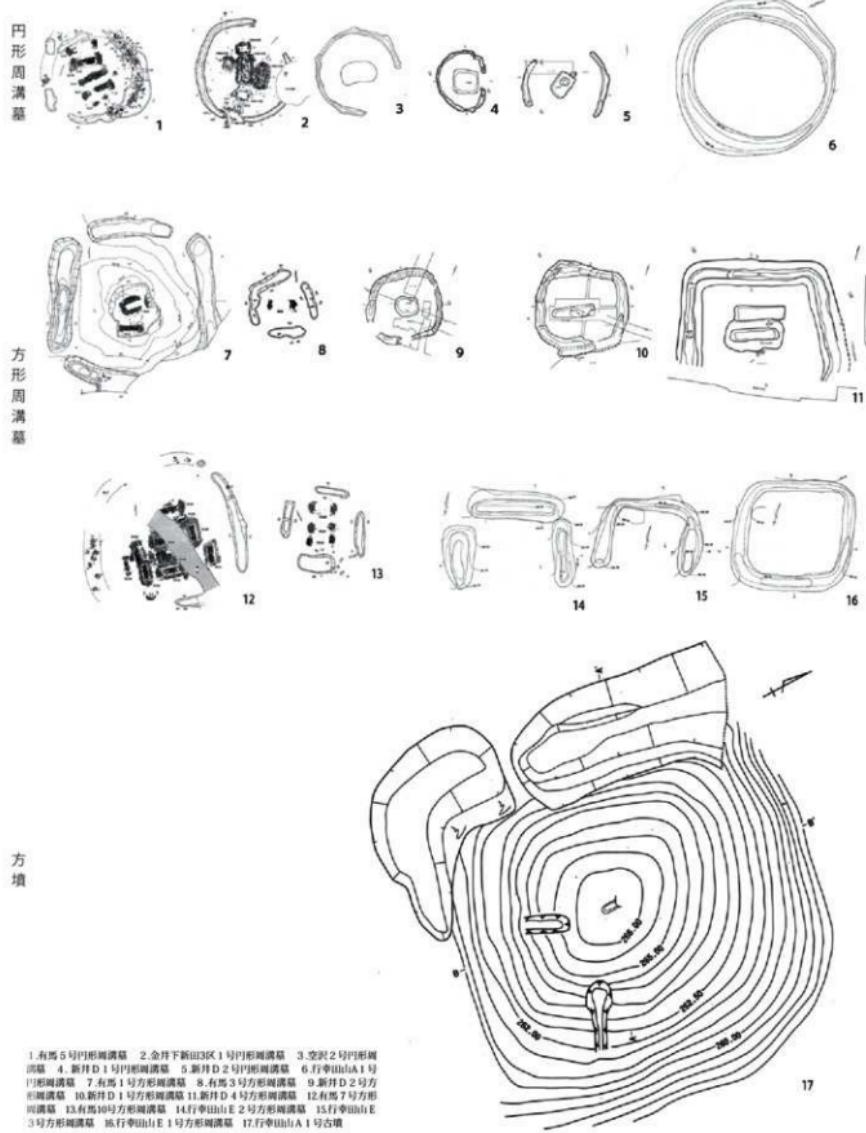
また、特異な馬具と素環頭大刀を出土した下郷7号墳や、同じく馬具を出土したとされる四戸古墳群群大1号墳などから馬の飼育に係る集団の存在の可能性が想定される。大規模な馬牧を展開した白井牧が、Hr-FPにより壊滅すると、それに代わる牧場の展開を吾妻川中流域に求めた可能性がある。それが後世の市城の牧などに繋がっていく想定をしている。そこに渡来人の開拓があつたと考えることができ、方形墳の築造という現象が生まれたと想定している。

6世紀後半以降は、両袖横穴式石室が隆盛し、7世紀代も引き続き横穴式石室が構築され続ける。その中で、初期官衙に関する遺構群や、金井廐寺などの初期寺院がこの地に展開するのは、以上述べた様な、先進的な知識・技術を持つ渡来系の集団がこの吾妻川中流域に存在し、彼らの力を活かして土地開発及び馬・鉄器生産を行う中でこの中之条盆地周辺が一大拠点となり繁栄したことを見せるものである。その要因としては、新井遺跡のあるこの地を含めた周辺全体が、長野・新潟と榛名山の北麓、南西麓を通じて関東平野に通じる重要な交通拠点であったことが大きいと推定する。

※参考文献は、表1の下段に掲載した。

弥生時代後期

古墳時代前期



1.有馬5号円形周溝墓 2.金井下新田3区1号円形周溝墓 3.空洞2号円形周溝墓
4.新井D1号円形周溝墓 5.新井D2号円形周溝墓 6.行幸山山A1号
円形周溝墓 7.有馬1号方形周溝墓 8.有馬3号方形周溝墓 9.新井D2号方
形周溝墓 10.新井D1号方形周溝墓 11.新井D4号方形周溝墓 12.有馬7号方
形周溝墓 13.有馬10号方形周溝墓 14.行幸山山E2号方形周溝墓 15.行幸山山E
3号方形周溝墓 16.行幸山山E1号方形周溝墓 17.行幸山山A1号古墳

图3 吾妻川中・下流域他周溝墓・方墳編年図(1)

0 1:400 10m

400 古墳時代中期

500 古墳時代後期

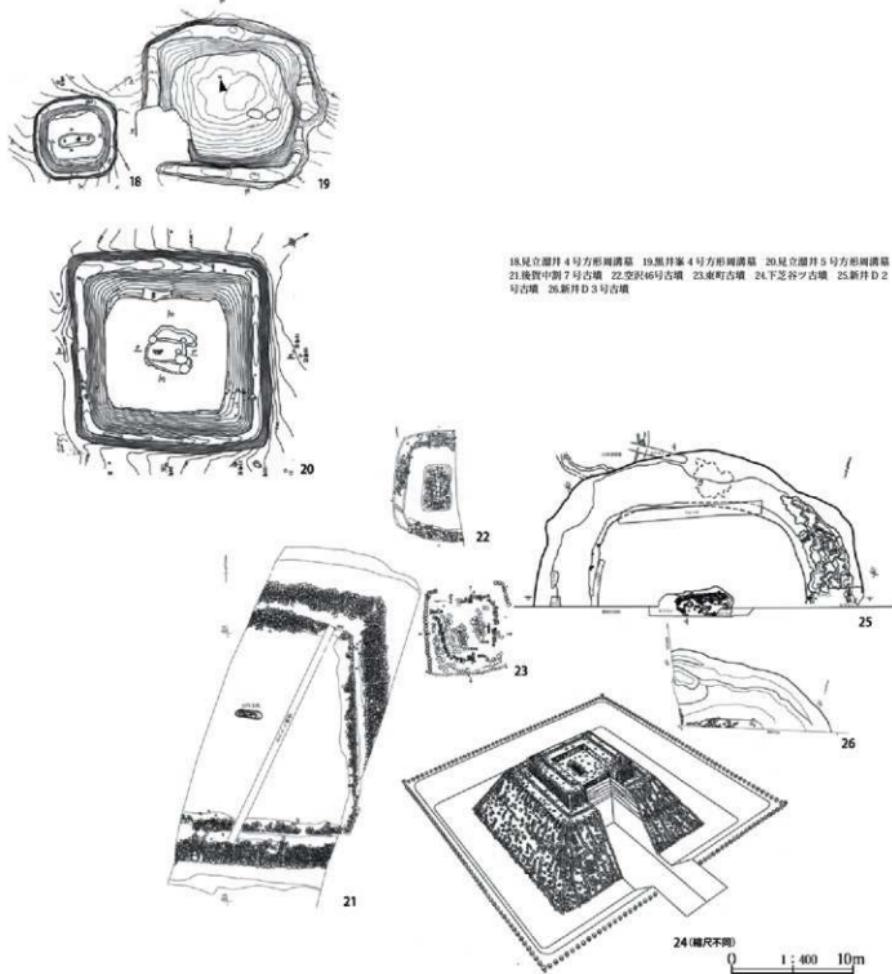


図4 吾妻川中・下流域他周溝墓・方墳編年図(2)

第7章 考察

表1 考察使用周溝墓・円墳・方墳一覧表

考察使用 周溝墓

No	No	遺跡名	遺構名	規模(m)		溝(cm)	主体部分	出土遺物	時期	文献
				長径	短径					
1 新井	1	D 1 号円形周溝墓		4.52	(3.40)	0+	15~42	2~8	土塁墓	弥生時代
	2	D 2 号円形周溝墓		6.15	(6.00)	0+	33~80	3~12	土塁墓	弥生時代
	3	D 1 号方形周溝墓		5.92	5.28	0+	57~144	12~47	第1土塁墓	古墳時代
	4	D 2 号方形周溝墓		5.10	4.75	0+	28~74	42	土塁墓	弥生時代
	5	D 4 号方形周溝墓		4.70	3.80	0.17~0.5	80~105	81~130	第2土塁墓	古墳時代
2	黒井塚	4 号方形周溝墓		9.60	9.40	0.70	210~300	80	東側・西側 内側・外側	古墳時代
3	1 空気窓2次	1号円形周溝墓		4.50		0+	30~40	20~30	礎床墓	弥生土器
	2	2号円形周溝墓		6.24		0+	60~70	30~40	礎床墓	鉢
1	A&B 1号円形周溝墓	13.80	13.20	0.24	100~240	30~50			古墳時代	
2	行幸山田	E 1 号方形周溝墓		7.50	7.00	0+	70~120	40~60		古墳時代
3	E 2 号方形周溝墓	6.40	6.00	0+	150~280	85~100	埴		古墳時代	
4	E 3 号方形周溝墓	5.60	5.00	0+	80~190	90~100	埴		古墳時代	
5	山中	1号方形周溝墓		9.00	(7.6.)	0.10	180~200	40~80	6层 木棺	弥生時代
1	4号方形周溝墓	5.79	5.52	0.33	92~128	28~52	土塁墓	小型甕	古墳時代	
6	2 見立塚Ⅱ	5号方形周溝墓		10.79	10.02	0.32	101~196	36~85	土塁墓 木杯・小型甕・印 鑿・浮	古墳時代
1	1号墓			11.05	10.24	0.50	120~240	24~90	1层 鋼鐵罐	
2								1层 磐床墓	ガラス玉	南・小型付石甕・ 高杯・圓
3	3号墓			4.08	3.92	0+	90	15	1层 鋼鐵	高杯
7	有馬Ⅱ	5号墓		6.080	6.00	0+	120	30	3层 磐床墓	南・甕・台付甕・ 鉢
4	6号墓			3.98	3.80	0+	110~115	25	2层 鋼鐵	ガラス玉・缸・ 高杯
5				(11.00)	(10.85)	0+	90~100	30	10层 磐床墓	南・甕・ガラス玉・ 管・骨・骨・高杯
6	7号墓					0+	68~110	23~27	2层 磐床墓	南・甕・石製鉢
7								3层 鋼鐵	ガラス玉	南付石・小型付 石甕・ガラス玉
8	金井下新田	3区1号周溝		7.60	6.70	0+	40~64	15~40	2层 磐床木棺墓	南・甕・高杯・ 防腐漆・管玉・ 土器
								4层 磐床	土器片・骨	弥生時代
								5层 磐床墓	石臼・石製品	弥生時代
								10号 不明		弥生時代

考察使用 古墳

No	No	遺跡名	遺構名	規模(m)		溝(cm)	主体部分	出土遺物	時期	文献
				長径	短径					
1 新井	1	D 1号墳(円)		15.68	5.92	0+	80~285	34~81		古墳時代
	2	D 2号墳(方)		17.36	8.96	0+	317~496	17~65	横穴式石室	ガラス玉
	3	D 3号墳(方)		9.92	4.40	0+	422~595	59~84	箱形墓	古墳時代
2	金井東裏	1号墳(円)		ø17.40		1.70	418~570	84	2基 石室主体部	大刀・鐵・刀子・ 匂玉・管玉・切子玉・ 剪葉鏡・匂玉・白玉・ 空玉
3	中ノ塚	中ノ塚(円)		ø9.06		1.20	115~150	56	輪軸鏡六式石室	刀・鐵・刀子・ 匂玉・管玉・切子玉・ 剪葉鏡・匂玉・白玉・ 空玉
4	行幸山田	A 1号墳(方)		25.56	20.80	2.80	75~85	110~140	木棺直葬	劍・鐵・鏡・刀 ガラス玉
5	後背中削	2区7号墳(方)		27.80		(3.5~4.0)	150~480	80	埴丘内土坑墓	石製模造刀子
6	東町	東町(方)		5.80	5.50	0.75		2基 石室船状石室	月牙・鏡	
7	空気	46号墳(方)		6.00		0+	100~130	25	壁穴式石室	匂玉・管玉・白玉・ ガラス玉
8	下芝谷	下芝谷(方)		ø12.80		4.20	600	200	壁穴式G構	飾鏡・古鏡・鏡板・ 小札

表1 参考文献

- 本報告書
 - 黒井遺跡I・1985
 - 空気窓第2次・調査ノ木道跡発掘調査報告・1980
 - 行幸山田遺跡・1987
 - 山中遺跡・1997
 - 見立塚Ⅱ遺跡・2005
 - 有馬塚跡II・1990
 - 金井下新田遺跡・「扶桑の方形周溝墓」・平野進・1996
 - 金井下新田遺跡・「古墳時代の方形周溝墓」・石川和也・2019
 - 中ノ塚周溝發掘調査報告書・1980
 - 後背中削跡(T007遺跡)・2021
 - 齋馬史・資料編3・原始古代3・1981
 - 空気窓第2次 T・U地盤探査調査報告書・1990
 - 日本考古学会会誌64年総合・研究代表要旨・1998
- 本文参考文献
- 小鳥進子「「齋馬島の方形周溝墓」」「荒城北原跡跡」「今井神社古墳群・荒城古跡跡跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 平野進・1998
群馬県における「古墳周溝墓の発掘」」「三重シンボルクム東日本の古墳墓」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 小鳥進子「荒城からみた古墳盗掘の研究」「古代」96号早稲田考古学会 梅泽重阳・1994
行幸山田遺跡」「行幸山田の周溝墓と前方後方形周溝墓」「鶴之台塚」92号・群馬史学
及川哲也・1995
櫻田義弘・1995
相京健史・1996
群馬県の方形周溝墓」「「荒城の方形周溝墓」」「古代」106号
相京健史・1996
群馬県の方形周溝墓」「「荒城の方形周溝墓」」「古代」151号
野村洋子・1996
石川和也・2019
深澤進・2016
「方形周溝墓と前方後方形周溝墓の關係性について」「奈良考古学」15号・群馬大学考古学
石島和夫2021「後背中削跡7号墳の意義」「後背中削跡(T007遺跡)」(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

新井遺跡 遺構計測表

縄文時代

竪穴建物

No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
C 6	柱穴数 有	60938~60943 周満有無 カマド・炉構造	-92695~-92700 N-62°-E カマド・炉位置 やや東	台 貯藏穴 なし	長辺(m) 4.46 時期 縄文時代早期 中葉	短辺(m) 3.98 最大壁高(cm) 22 面積 10.173+6 備考 参考	C3・C7号壁建C25号土坑重複	面	4	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
D 26	柱穴数 なし	60982~60987 周満有無 カマド・炉構造	-92518~-92524 N-44°-E カマド・炉位置 なし	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) (5.18) 時期 縄文時代早期	短辺(m) (3.70) 最大壁高(cm) — 面積 (18.132)26	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
C 16	柱穴数 有	60948~60953 周満有無 カマド・炉構造	-92984~-2690 N-51°-E カマド・炉位置 中央	円 貯藏穴 なし	長辺(m) 5.35 時期 縄文時代前期	短辺(m) 5.20 最大壁高(cm) 10 面積 13.23+16	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
C 19	柱穴数 有	60947~90054 周満有無 カマド・炉構造	-92683~-92691 N-43°-W カマド・炉位置 中央	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) 6.82 時期 縄文時代前期	短辺(m) 6.00 最大壁高(cm) 9 面積 8.631+19	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
D 32	柱穴数 なし	60950~60956 周満有無 カマド・炉構造	-92622~-92628 N-36°-W カマド・炉位置 中央	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) 5.90 時期 縄文時代前期	短辺(m) 4.09 最大壁高(cm) 23 面積 20.907+32	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
C 8	柱穴数 有	60954~60957 周満有無 カマド・炉構造	-92677~-92682 N-51°-W カマド・炉位置 中央	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) 5.08 時期 縄文時代前期	短辺(m) 4.67 最大壁高(cm) — 面積 13.59+8	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
D 33	柱穴数 なし	60963~60966 周満有無 カマド・炉構造	-92633~-92637 カマド・炉位置 中央	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) 3.75 時期 縄文時代前期	短辺(m) 2.38 最大壁高(cm) 27 面積 6.444+33	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
C 17	柱穴数 なし	60958~60960 周満有無 カマド・炉構造	-92659~-92663 N-83°-E カマド・炉位置 中央	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) 4.28 時期 縄文時代前期	短辺(m) 2.23+ 最大壁高(cm) 24 面積 6.881+17	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
C 14	柱穴数 なし	60956~60958 周満有無 カマド・炉構造	-92674~-92675 カマド・炉位置 中央	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) 1.57+ 時期 縄文時代前期	短辺(m) 1.55+ 最大壁高(cm) 10 面積 0.99+14	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
D 29	柱穴数 なし	60969~60972 周満有無 カマド・炉構造	-92599~-92602 N-70°-E カマド・炉位置 中央	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) 3.17 時期 縄文時代前期	短辺(m) 3.00 最大壁高(cm) 14 面積 6.647+29	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
D 30	柱穴数 なし	60955~60959 周満有無 カマド・炉構造	-92590~-92601 N-3°-E カマド・炉位置 中央	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) 5.20+ 時期 縄文時代前期	短辺(m) 4.48 最大壁高(cm) 35 面積 16.68+30	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
D 31	柱穴数 なし	60955~60960 周満有無 カマド・炉構造	-92596~-92602 N-2°-W カマド・炉位置 中央	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) 6.20 時期 縄文時代中期	短辺(m) 5.80+ 最大壁高(cm) 22 面積 6.216+31	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
C 13	柱穴数 なし	60956~60959 周満有無 カマド・炉構造	-92666~-92671 方か カマド・炉位置 中央	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) 5.05+ 時期 縄文時代前期	短辺(m) 4.94+ 最大壁高(cm) 30 面積 5.532+13	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
C 10	柱穴数 なし	60944~60945 周満有無 カマド・炉構造	-92652~-92657 方か カマド・炉位置 中央	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) 5.15 時期 縄文時代前期	短辺(m) 1.23+ 最大壁高(cm) 20 面積 2.487+10	備考 参考	面	面	面
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
C 15	柱穴数 なし	60951~60956 周満有無 カマド・炉構造	-92978~-92984 N-83°-E カマド・炉位置 中央	長方 貯藏穴 なし	長辺(m) 5.02 時期 縄文時代前期	短辺(m) 5.00 最大壁高(cm) 21 面積 15.741+15	備考 参考	面	面	面

遺構計測表

No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号	
C 9	C	60951～60956	-92664～-2698	N-15°～W	楕円	(5.40)	(3.40)	—	(17,922)	9	
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期	—	偏考	—	面	
	不明	なし	—	なし	—	—	—	—	—	—	
C 11	No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
	C	60948～60953	-92669～-92676	N-73°～W	楕錐	—	6.34	4.85	44	10,398 柄有11,814	11
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期	—	偏考	—	面	
C 18	No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
	C	60948～60956	-92665～-92671	N-12°～E	楕円	—	7.56	5.08	—	25,475	18
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期	—	偏考	—	面	
C 5	No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
	C	60943～60948	-92684～-92689	N-23°～W	台	—	4.43	4.23	39	14,508	5
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期	—	偏考	—	面	
D 27	No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
	D	60973～60978	-92514～-92524	N-51°～W	方か	—	(4.90)	(4.43)	—	(19,338)	27
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期	—	偏考	—	面	
C 7	No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
	C	60938～60945	-92603～-92698	N-25°～E	長方形	—	5.90	4.45	15	14,234	7
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期	—	偏考	—	面	
C 20	No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
	C	60944～60947	-92688～-92691	N-55°～W	楕丸長方	—	3.28	2.50	12	3,078	—
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期	—	偏考	—	面	
D 28	No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
	D	60977～60981	-92544～-92548	円	—	φ4.10	—	—	—	10,44	28
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期	—	偏考	—	面	
D 34	No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
	D	60987～60992	-92527～-92532	N-11°～W	楕丸方	—	(5.20)	(5.10)	—	(27,927)	34
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期	—	偏考	—	面	
C 19	No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
	C	60947～60949	Y=-92686～-92688	楕丸方形	—	3.85	3.5	32～42	9,324	N-2°～W	楢文時代
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期	—	偏考	—	面	

堅穴状遺構

遺構名	座標	平面形状	堅模(m)			長軸方位	時期	時期
			長軸	短軸	深さ			
D 2	X=60960～60964	Y=-92623～-92626	—	3.85	3.5	32～42	9,324	N-2°～W

土坑

遺構名	座標	平面形状	堅模(cm)			長軸方位	時期	重複関係
			長軸	短軸	深さ			
C 2	X=60947～60949	Y=-92686～-92688	楕丸方形	195	176	38	N-74°～E	楢文時代
C 5	X=60952～60953	Y=-92688～-92689	楕円形	108	98	29	N-19°～W	楢文時代
C 10	X=60949～60952	Y=-92679～-92682	楕丸長方形	235	192	54	N-69°～W	楢文時代
C 14	X=60953	Y=-92666～-92667	円形	82	80	66	N-0°	楢文時代
C 15	X=60946～60948	Y=-92671～-92673	楕丸長方形	287	163	47	N-70°～E	楢文時代
C 16	X=60947～60949	Y=-92671～-92674	不整形	245	200	46	N-52°～E	楢文時代
C 19	X=60942～60943	Y=-92692～-92693	円形	124	110	101	N-77°～E	楢文時代

遺構名	座標		平面形状	規模(cm)			長軸方位	時期	重複関係
				長軸	短軸	深さ			
C20	X=60942	• 60943	Y=-92692 • -92693	円形	134	127	92	N-0°	縄文時代
C21	X=60945	• 60946	Y=-92705 • -92706	円形	110	106	23	N-10° • E	縄文時代
C23	X=60942	• 60943	Y=-92693 • -92694	円形	148	143	27	N-0°	縄文時代
C25	X=60941	• 60942	Y=-92698 • -92699	円形	116	115	79	N-0°	縄文時代
C27	X=60937	• 60938	Y=-92696 • -92697	円形か	120	69*	100	—	縄文時代
C28	X=60948	• 60950	Y=-92703 • -92705	梢円形	128	106	65	N-44° • W	縄文時代
C29	X=60942	• 60943	Y=-92696 • -92697	円形	133	117	21	N-2° • W	縄文時代
C30	X=60947	• 60949	Y=-92643 • -92644	不整形	180	81*	13	—	縄文時代
C33	X=60952	• 60953	Y=-92646 • -92647	不整形	145	85	30	N-81° • E	縄文時代
C36	X=60947	~ 60948	Y=-92646 • -92647	円形	106	102	27	N-0°	縄文時代
C37	X=60947	Y=-92650 • -92651	不整形	100	60	26	N-75° • E	縄文時代	
C40	X=60944	• 60945	Y=-92659 • -92660	不整形	112	104	36	N-12° • E	縄文時代
C44	X=60946	• 60948	Y=-92662 • -92664	円形	217	208	38	N-33° • W	縄文時代
C45	X=60943	• 60944	Y=-92663 • -92664	不整形	104	95	17	N-35° • W	縄文時代
C46	X=60945	• 60946	Y=-92668 • -92669	円形	90	86	70	N-0°	縄文時代
C48	X=60944	• 60945	Y=-92671 • -92672	円形	85	79	60	N-42° • E	縄文時代
C49	X=60946	• 60947	Y=-92671 • -92672	不整形	103	95	60	N-66° • E	縄文時代
C51	X=60946	• 60947	Y=-92675	不整形	90	63	70	N-31° • W	縄文時代
C53	X=60952	• 60953	Y=-92655 • -92657	梢円形	195	125	10	N-40° • W	縄文時代
C55	X=60943	Y=-92663 • -92664	不整形	78*	33*	21	—	縄文時代	
C59	X=60956	• 60957	Y=-92657	不整形	92	69	26	N-0°	縄文時代
C60	X=60956	• 60957	Y=-92659 • -92660	不整形	150	133	61	N-0°	縄文時代
C61	X=60955	• 60956	Y=-92659 • -92660	不整形	117	91*	12	—	縄文時代
C62	X=60954	• 60955	Y=-92658 • -92660	円形	148	141	30	N-0°	縄文時代
C63	X=60954	• 60955	Y=-92660 • -92661	円形	131	126*	21	N-0°	縄文時代
C64	X=60956	• 60957	Y=-92658 • -92659	円形	ø 79	—	38	N-0°	縄文時代
C65	X=60960	• 60961	Y=-92657 • -92659	不整形	102*	101	14	—	縄文時代
C66	X=60952	Y=-92658 • -92659	梢円形	111	71	41	N-53° • E	縄文時代	
C67	X=60952	• 60953	Y=-92661 • -92662	不整形	117	94	20	N-82° • E	縄文時代
C68	X=60953	• 60954	Y=-92671	円形	100	92	46	N-10° • W	縄文時代
C69	X=60955	• 60956	Y=-92669 • -92670	円形	106	102	31	N-0°	縄文時代
C70	X=60952	• 60953	Y=-92667 • -92668	彌丸長方形	126	88	46	N-15° • E	縄文時代
C71	X=60955	• 60956	Y=-92671 • -92672	梢円形	125	97	51	N-12° • W	縄文時代
C72	X=60954	• 60955	Y=-92673 • -92674	円形	140	139	23	N-0°	縄文時代
C73	X=60952	• 60954	Y=-92677 • -92678	不整形	140	134	21	N-28° • E	縄文時代
C74	X=60950	• 60952	Y=-92678 • -92680	円形	195	182	65	N-70° • E	縄文時代
C75	X=60951	• 60952	Y=-92681 • -92682	梢円形	109	96	31	N-75° • W	縄文時代
C76	X=60953	• 60954	Y=-92983 • -92985	不整形	173	125	50	N-79° • W	縄文時代
C77	X=60950	• 60951	Y=-92688 • -92689	円形	104	100	40	N-0°	縄文時代
C78	X=60950	• 60951	Y=-92658 • -92659	不整形	136	114*	25	—	縄文時代
C80	X=60955	• 60956	Y=-92658 • -92659	不整形	84	53*	14	N-35° • W	縄文時代
C81	X=60956	• 60957	Y=-92658	不整形	70	55*	48	—	縄文時代
C84	X=60959	• 60960	Y=-92660 • -92661	不整形	93*	90	30	N-8° • W	縄文時代
C85	X=60953	• 60955	Y=-92665 • -92666	不整形	221	135	31	N-8° • E	縄文時代
C85	X=60952	• 60953	Y=-92665 • -92666	円形	78	75	31	N-0°	縄文時代
C86	X=60955	• 60956	Y=-92667 • -92668	円形	110	98	50	N-0°	縄文時代
C87	X=60956	• 60957	Y=-92676 • -92678	円形	193	190	50	N-0°	縄文時代
C88	X=60957	• 60958	Y=-92674 • -92675	円形か	117	69*	25	—	縄文時代
C89	X=60951	• 60952	Y=-92667 • -92668	円形	113	109	38	N-0°	縄文時代
C90	X=60954	• 60955	Y=-92667 • -92668	不整形	127	110	50	—	縄文時代
C91	X=60956	• 60957	Y=-92680 • -92681	円形	127	122	55	—	縄文時代
C92	X=60941	• 60942	Y=-92695 • -92696	円形	96	95	53	N-0°	縄文時代
C93	X=60952	• 60953	Y=-92688 • -92689	円形	89	86	44	N-0°	縄文時代
C96	X=60949	• 60950	Y=-92675	梢円形	90*	57	28	N-11° • E	縄文時代
C97	X=60952	• 60953	Y=-92674 • -92675	不整形	115	90	20	N-60° • E	縄文時代
C98	X=60950	Y=-92671 • -92672	彌丸長方形	100	86	47	N-18° • E	縄文時代	
C99	X=60950	Y=-92674	円形	56	55	37	N-0°	縄文時代	
C100	X=60955	• 60956	Y=-92661 • -92662	円形	84	81	17	N-0°	縄文時代
D114	X=60986	Y=-92496 • -92497	円形	ø 64	—	24	N-0°	縄文時代	
D115	X=60988	Y=-92598 • -92599	不整形	72	59	26	N-70° • E	縄文時代	
D117	X=60979	• 60982	Y=-92503 • -92505	不整形	279	245	86	N-27° • W	縄文時代
D119	X=60980	• 60982	Y=-92502 • -92575	彌丸長方形	292	148	73	N-69° • E	縄文時代
D120	X=60977	• 60978	Y=-92570 • -92571	彌丸長方形	113	85	83	N-90°	縄文時代
D122	X=60973	Y=-92580 • -92582	彌丸長方形	234	47	40	N-80° • E	縄文時代	
D124	X=60965	• 60967	Y=-92592 • -92594	彌丸長方形	254	92	17	N-48° • E	縄文時代
D125	X=60956	• 60957	Y=-92590 • -92591	梢円形	120	81	17	N-87° • W	縄文時代
D126	X=60967	• 60969	Y=-92593 • -92595	不整形	257	68	21	N-62° • E	縄文時代
D127	X=61001	• 61002	Y=-92537	円形	82	77	35	N-68° • W	縄文時代

遺構計測表

遺構名	座標		平面形状	断面(cm)			長軸方位	時期	重複関係
				長軸	短軸	深さ			
D129	X=60998	Y=-92526 - 92527	楕円形	90	68	43	N-65° - E	縄文時代	東堀接
D130	X=60995	Y=-92528 - 92529	楕円形	107	92	23	N-84° - W	縄文時代	
D131	X=60954 - 60955	Y=-92524 - 92525	円形	108	105	67	N-65° - W	縄文時代	
D133	X=60983 - 60984	Y=-92516 - 92517	円形	97	90	46	N-75° - W	縄文時代	
D134	X=60987 - 60988	Y=-92530 - 92531	不整形	75	73	9	N-81° - E	縄文時代	
D136	X=60986 - 60987	Y=-92531 - 92532	楕円形	74	60	67	N-60° - E	縄文時代	
D141	X=60974 - 60975	Y=-92536 - 92537	不整形	109	97	41	N-75° - E	縄文時代	
D146	X=60970	Y=-92531 - 92532	不整形	91	73	29	N-3° - W	縄文時代	
D147	X=60975 - 60976	Y=-92531 - 92532	円形	98	95	33	N-30° - W	縄文時代	
D148	X=60985 - 60986	Y=-92522 - 92523	円形	95	91	29	N-0°	縄文時代	D26号壁建
D149	X=60981 - 60983	Y=-92519 - 92521	不整形	202	172	26	N-53° - E	縄文時代	
D150	X=60970	Y=-92573 - 92574	円形	φ 50	—	10	N-0°	縄文時代	
D153	X=60968 - 60969	Y=-92536 - 92537	不整形	107	96	17	N-73° - E	縄文時代	
D157	X=60967 - 60968	Y=-92563 - 92564	楕円形	55	52	17	N-35° - E	縄文時代	
D160	X=60984	Y=-92535	楕円形	55	47	20	N-68° - W	縄文時代	
D162	X=60987 - 60988	Y=-92539 - 92560	不整形	128	112	36	N-10° - E	縄文時代	
D163	X=60986 - 60987	Y=-92561 - 92562	楕円形	123	107	36	N-25° - W	縄文時代	
D168	X=60980 - 60982	Y=-92533 - 92534	円形	149	145	40	N-29° - E	縄文時代	
D170	X=60974 - 60975	Y=-92555	楕円形	48	45	17	N-86° - W	縄文時代	
D171	X=60968	Y=-92563 - 92564	楕円形	63	42	16	N-25° - W	縄文時代	
D176	X=60975 - 60977	Y=-92565 - 92566	不整形	135	134	52	N-5° - W	縄文時代	D178・D179号土坑
D177	X=60977 - 60978	Y=-92565 - 92566	不整形	140	120	39	N-33° - E	縄文時代	D178・D179号土坑
D179	X=60976 - 60978	Y=-92565 - 92566	不明	186	94	29	N-43° - W	縄文時代	D176・D177・D178号土坑
D180	X=60975 - 60976	Y=-92572 + 92573	円形	118	97	50	N-30° - W	縄文時代	
D182	X=60968 - 60969	Y=-92567 - 92568	円形	97	95	34	N-77° - E	縄文時代	
D184	X=60965 - 60967	Y=-92570 - 92572	不整形	127	102	27	N-75° - E	縄文時代	
D185	X=60967 - 60968	Y=-92572 - 92573	不整形	95	87	15	N-60° - W	縄文時代	
D188	X=60975 - 60976	Y=-92574 - 92575	円形	137	115	65	N-55° - E	縄文時代	D212・D213号土坑D539号ピット
D195	X=60967 - 60968	Y=-92574 - 92575	不整形	112	97	20	N-58° - W	縄文時代	
D199	X=60967 - 60968	Y=-92581 - 92583	不整形	128	127	46	N-5° - W	縄文時代	D543号ピット
D204	X=60963	Y=-92568	楕円形	49	40	31	N-13° - W	縄文時代	
D207	X=60977 - 60978	Y=-92576	円形	φ 71	—	13	N-0°	縄文時代	
D208	X=60979 - 60980	Y=-92546 - 92547	不整形	107	56	13	N-63° - E	縄文時代	D28号壁建
D209	X=60974 - 60975	Y=-92529 - 92530	円形	127	123	27	N-64° - E	縄文時代	
D211	X=60967 - 60968	Y=-92552 - 92553	楕円形	90	74	20	N-65° - W	縄文時代	
D212	X=60975 - 60976	Y=-92573 - 92574	不整形	121+	113	43	N-88° - E	縄文時代	D188・D213号土坑
D213	X=60974 - 60975	Y=-92573 - 92575	不明	172+	91+	29	N-77° - W	縄文時代	D188・D212号土坑
D214	X=60972 - 60973	Y=-92526 - 92528	不明	195	73+	47	N-73° - E	縄文時代	南壁接
D215	X=60968 - 60969	Y=-92589 - 92590	円形	114	108	41	N-0°	縄文時代	D25号壁建
D216	X=60960 - 60961	Y=-92602 - 92603	不整形	93	84+	87	N-11° - W	縄文時代	
D218	X=60957 - 60958	Y=-92589 - 92590	円形	125	113	32	N-90°	縄文時代	
D225	X=60968 - 60969	Y=-92594 - 92595	不整形	96	52	17	N-51° - E	縄文時代	
D226	X=60971 - 60973	Y=-92591 - 92593	楕円長方形	187	114	27	N-52° - E	縄文時代	D227号土坑
D230	X=60969 - 60970	Y=-92602 - 92604	楕円形	170	138	47	N-86° - E	縄文時代	
D232	X=60970 - 60971	Y=-92605 - 92606	不整形	126	115	17	N-21° - W	縄文時代	
D234	X=60969 - 60970	Y=-92604 - 92605	楕円形	67	53	30	N-80° - E	縄文時代	
D237	X=60961 - 60964	Y=-92613 - 92615	楕円形	238	215	42	N-38° - E	縄文時代	
D238	X=60957 - 60958	Y=-92640 - 92642	円形	142	117	31	N-69° - E	縄文時代	
D239	X=60954 - 60955	Y=-92638 - 92639	楕円形	109	89	20	N-75° - E	縄文時代	
D240	X=60952 - 60953	Y=-92639 - 92640	円形	φ 105	—	31	N-0°	縄文時代	
D241	X=60955 - 60956	Y=-92630 - 92631	円形	φ 95	—	12	N-0°	縄文時代	
D242	X=60957 - 60958	Y=-92628 - 92629	円形	120	116	29	N-30° - E	縄文時代	
D243	X=60960 - 60961	Y=-92628 - 92629	円形	φ 102	—	13	N-0°	縄文時代	
D244	X=60958 - 60959	Y=-92627 - 92629	円形	130	122	31	N-61° - W	縄文時代	D284号土坑
D245	X=60956 - 60958	Y=-92627 - 92628	楕円形	120	105	32	N-10° - E	縄文時代	
D246	X=60951 - 60953	Y=-92620 - 92621	円形	130	118	28	N-33° - W	縄文時代	
D247	X=60953 - 60955	Y=-92621 - 92622	楕円形	170	120	21	N-7° - E	縄文時代	D608号ピット
D248	X=60953 - 60955	Y=-92619 - 92620	楕円形	144	135	19	N-0°	縄文時代	
D249	X=60952 - 60953	Y=-92618 - 92619	円形	123	116	47	N-39° - E	縄文時代	D280号土坑
D250	X=60952 - 60953	Y=-92614 - 92615	円形	56	55	12	N-0°	縄文時代	
D252	X=60954 - 60955	Y=-92612 - 92613	不整形	135	128	50	N-8° - W	縄文時代	
D253	X=60961	Y=-92614 - 92615	円形	100	97	11	N-0°	縄文時代	D254号土坑
D254	X=60961 - 60962	Y=-92613 - 92614	円形	φ 111	—	14	N-0°	縄文時代	D253号土坑
D255	X=60963 - 60964	Y=-92611 - 92612	円形	φ 98	—	12	N-0°	縄文時代	
D256	X=60963 - 60964	Y=-92609	円形	80	69	16	N-79° - E	縄文時代	
D257	X=60955 - 60956	Y=-92617	不明	86+	38+	44	—	縄文時代	D4号方四D275号土坑
D258	X=60957 - 60958	Y=-92611	楕円形	84	63	14	N-78° - E	縄文時代	
D259	X=60958 - 60959	Y=-92611 - 92612	楕円形	82	56	39	N-75° - W	縄文時代	

遺構計測表

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			長軸方位	時期	重複関係
			長軸	短軸	深さ			
D260	X=60961・60962	Y=-92612・-92613	円形	67	62	14	N-0°	縄文時代
D261	X=60965・60966	Y=-92625・-92626	楕円形	102	82	24	N-18°-W	縄文時代
D262	X=60964・60965	Y=-92628・-92630	不整形	113	108	38	N-72°-W	縄文時代
D264	X=60962・60963	Y=-92634・-92635	楕円形	91	68	24	N-50°-E	縄文時代
D265	X=60963・60964	Y=-92637・-92638	不整形	120	100	36	N-10°-E	縄文時代
D266	X=60962・60963	Y=-92636	楕円形	80	63	66	N-45°-E	縄文時代
D268	X=60965・60967	Y=-92617・-92618	円形	144	137	19	N-77°-E	縄文時代
D269	X=60963・60964	Y=-92633・-92634	楕円形	130	110	23	N-27°-W	縄文時代
D270	X=60959・60960	Y=-92619・-92620	楕円形	146	128	10	N-24°-E	縄文時代
D271	X=60961・60963	Y=-92620・-92622	楕円形	220	158	16	N-45°-E	縄文時代
D272	X=60966・60967	Y=-92615・-92616	円形	120	117	19	N-0°	縄文時代
D273	X=60965・60967	Y=-92614・-92616	不整形	148	124	18	N-67°-E	縄文時代
D274	X=60968・60969	Y=-92613・-92614	円形	φ	144	-	70 N-0°	縄文時代
D275	X=60955・60956	Y=-92617・-92618	不明	92+	95	14	N-80°-E	縄文時代
D276	X=60961・60962	Y=-92644・-92645	楕円形	160	114	39	N-83°-W	縄文時代
D277	X=60959・60960	Y=-92641・-92642	不整形	124	92	32	N-76°-W	縄文時代
D278	X=60961・60962	Y=-92641・-92642	彌丸長方形	128	84	37	N-56°-W	縄文時代
D279	X=60962・60963	Y=-92632・-92633	円形	150	145	51	N-0°	縄文時代
D280	X=60952	Y=-92618・-92619	不明	91	50+	20		縄文時代 D249号上坑
D281	X=60956・60957	Y=-92613・-92614	彌丸長方形	111	59	37	N-72°-W	縄文時代 D251号上坑
D282	X=60958	Y=-92643	円形	59	52	24	N-83°-W	縄文時代
D283	X=60957・60958	Y=-92636・-92637	円形	102	98	14	N-0°	縄文時代
D284	X=60968	Y=-92627・-92628	不明	82	56+	21	-	縄文時代 D244号上坑
D285	X=60955・60960	Y=-92644・-92645	不整形	150+	115	54	N-89°-E	縄文時代 西壁接
D286	X=60953	Y=-92628	不明	100	59+	16	-	縄文時代 D32号堅建

ピット

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			時期	重複関係
			長軸	短軸	深さ		
C329	X=60957	Y=-92653	楕円形	81	50	61	縄文時代
C331	X=60959・60951	Y=-92659	楕円形	47	37	42	縄文時代
C343	X=60950・60951	Y=-92666・-2667	円形	70	59	36	縄文時代
C344	X=60950・60951	Y=-92666・-2667	楕円形	50	42	37	縄文時代
C348	X=60937	Y=-92705	不整形	33	33	43	縄文時代
C359	X=60949	Y=-92670・-92671	不整形	49	44	28	縄文時代
C360	X=60946	Y=-92674	不整形	62	35	59	縄文時代
C363	X=60955	Y=-92669・-92670	円形	37	37	65	縄文時代
C366	X=60944	Y=-92693・-92694	楕円形	40	33	53	縄文時代
C367	X=60944	Y=-92693・-92694	不整形	41	30	34	縄文時代

焼土

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			時期	備考
			長軸	短軸	深さ		
C 2	X=60946	Y=-92672		62	47	6	古代
C 3	X=60954	Y=-92667		68	58	13	縄文時代

集石

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			時期	備考
			長軸	短軸	深さ		
C 2	X=60950	Y=-92659		120	72	24	縄文時代

列石

遺構名	座標	全長(m)	方向	石大(cm)	数	時期	備考
C 1	X=60949～60956	Y=-92647～-92651	8.34	N-27°-W	22-65	19	縄文時代

配石

遺構名	座標X	座標Y	石個数	時期	備考
D 1	60966	-92608・-92609	2	縄文時代	
D 2	60953	-92618	1	縄文時代	
D 3	60959	-92624・-92625	1	縄文時代	
D 4	60960・60961	-92697	1	縄文時代	
D 5	60956・60957	-92639・-92367	4	縄文時代	

塗樹木

遺構名	座標X	座標Y	方向	長(m)	幅(m)	深さ(cm)	時期	備考
D 1	60982～60984	-92533～-92535		2.36	1.93	59	縄文時代	

遺構計測表

弥生時代

堅穴建物

No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
D24	D	60955～60962	-92592～-92509	N-48°-W	隅丸長方	6.23	4.24	37	25,182	24
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期		偏考		面
	5	なし		中央	なし	弥生時代中期				1下
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
D25	D	60963～60971	-92583～-92591	N-47°-W	隅丸長方	6.90	5.26	54	30,879	25
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期		偏考		面
	5	なし		中央	なし	弥生時代中期				1下
No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
C4	C	60946～60950	-92670～-92673	N-22°-W	隅丸長方	3.38	2.15	34	5,616	4
	柱穴数	周溝有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期		偏考		面
	なし	なし	なし	—	なし	弥生後期				3

堅穴状遺構

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			長軸方位	時期	時期
			長軸	短軸	深さ			
D 1	X=60968～60971 Y=-92577～-92580		2.90	2.7	28～53	4,457	N-25°-W 弥生時代	弥生時代

土坑

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			長軸方位	時期	重複関係
			長軸	短軸	深さ			
C 4	X=60954～60956 Y=-92656～-92659	隅丸方形	221	200	33	N-64°-E	弥生時代	D78号ピット
C 17	X=60950～60953 Y=-92652～-92654	隅丸長方形	230	190	44	N-79°-W	弥生時代	

ピット

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			時期	重複関係
			長軸	短軸	深さ		
C 302	X=60952 Y=-92657	楕円形	29	24	24	弥生時代	

方形周溝墓

No	座標値	規模(m)			面積(m²)	周溝上幅(cm)	周溝下幅(cm)	周溝深さ(cm)	偏考
		南北	東西	東西					
D 2	X=60962～60969 Y=-92597～-92603	外周	5.68	6.20	30,184	28～74	9～34	42	
		内周	4.75	5.10	21,704				
		全長(cm)	東部幅(cm)	中央部(cm)	西部(cm)	面積(m²)			
		上場	190	134	150	163	2,680		
		床面	155	108	110	107	1,488		

円形周溝墓

No	座標値	規模(m)			面積(m²)	周溝上幅(cm)	周溝下幅(cm)	周溝深さ(cm)	偏考
		南北	東西	東西					
D 1	X=60,975～60980 Y=-92528～-92532	外周	5.00	(4.00)	16,016	15～42	4～27	2～8	
		内周	4.52	(3.40)	12,320				
		全長(cm)	東部幅(cm)	中央部(cm)	西部(cm)	面積(m²)			
		上場	205	178	193	195	3,632		
		床面	176	135	152	138	2,480		
No	座標値	規模(m)			面積(m²)	周溝上幅(cm)	周溝下幅(cm)	周溝深さ(cm)	偏考
D 2	X=60962～60969 Y=-92597～-92603	外周	(6.80)	7.12	(37,552)	33～60	10～33	3～12	
		内周	(6.00)	6.15	(29,184)				
		全長(cm)	東部幅(cm)	中央部(cm)	西部(cm)	面積(m²)			
		上場	207	138	144	140	2,728		

古墳時代

堅穴建物

No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
A 6	柱穴数 4	A=60969~60975	-92858~92863	N-75°-W	隅丸方	5.33	4.90	27	19,481	6
		周溝有無 有	なし	一	カマド・炉横造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期 古墳時代前期	面積 面	備考 3
B 1	柱穴数 4	B=60945~60952	-92691~92697	N-36°-W	方	5.22	5.15	52	20,957	1
		周溝有無 有	なし	北壁中央	カマド・炉横造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期 古墳時代中期	面積 面	備考 3

方形周溝墓

No	座標値	規模(m)		面積(m ²)	周溝上幅(cm)	周溝下幅(cm)	周溝深さ(cm)	備考
		南北	東西					
D 1	X=60974~60981	外周	7.36	7.68	47,584	57~144	11~54	12~47
	Y=-92556~92564	内周	5.28	5.92	28,448			
		全長(cm)	東部幅(cm)	中央部(cm)	西部(cm)	面積(m ²)		
		1号主体部	上場	350	92	(92)	73	2,848
		床面	318	75	(79)	54	2,144	
		2号主体部	全長(cm)	東部幅(cm)	中央部(cm)	西部(cm)	面積(m ²)	
D 4	X=60952~60962	外周	9.60+	13.60+	113,024+	160~210	13~39	61~120
	Y=-92603~92618	内周	7.60+	9.40+	66,603+			
		全長(cm)	東部幅(cm)	中央部(cm)	西部(cm)	面積(m ²)		
		第1主体部	上場	404	112	110	126	4,565
		床面	360	96	86	98	3,0243	
		第2主体部	上場	390	90	92	94	3,200
		床面	292	74	72	56	1,899	

古墳

No	座標値	規模(m)		面積(m ²)	周溝上幅(cm)	周溝下幅(cm)	周溝深さ(cm)	備考
		南北	東西					
D 2	X=60974~60984	外周	7.80+	19.40+	108,544+	60~285	30~117	34~81
	Y=-92500~92519	内周	5.92+	15.68+	68,608+			
		全長(cm)	東部幅(cm)	中央部(cm)	西部(cm)	面積(m ²)		
		主体部	上場	404	112	110	126	4,565
		床面	360	96	86	98	3,0243	
		上場	390	90	92	94	3,200	
D 3	座標値	周溝(m)	南北	東西	面積(m ²)	周溝上幅(cm)	周溝下幅(cm)	周溝深さ(cm)
	X=60947~60953	外周	6.32+	12.16+	55,872+	422~595	55~210	59~84
	Y=-92628~92642	内周	4.40+	9.92	11,392+			

古代

堅穴建物

No	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
A 2	柱穴数 4	A=60977~60981	-92871~92876	N-90°-E	隅丸方	4.33	4.12	26	13,874	2
		周溝有無 有	不明	カマド・炉横造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期 古代	備考 3		
A 3	柱穴数 なし	A=60969~60976	-92873~92879	S-70°-E	隅丸長方	5.45	4.40	50	19,481	3
		周溝有無 有	有	カマド・炉横造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期 古代	備考 3		
C 2	柱穴数 4	C=60942~60947	-92674~-2680	N-88°-E	隅丸長方	5.15	4.62	38	17,868	2
		周溝有無 有	石組竈	カマド・炉横造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期 古代	備考 3		
C 3	柱穴数 1	C=60937~60941	-92691~92696	N-71°-E	不明	4.05	3.40+	61	10,095+	3
		周溝有無 有	不明	東壁	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積

遺構計測表

番号	区	位置X	位置Y	主軸方位	形状	長辺(m)	短辺(m)	最大壁高(cm)	面積	建物番号
D23	D	60958~60959	-92579~ -92583	-	不明	4.27+	1.40+	59	2.817+	23
	柱穴数	周満有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期		備考		面
	一	有	-	-	-	古代	南壁接		1下	
A 5	M	60979~60974	-92862~ -92866	-	不明		3.68	3.65	12.861	5
	柱穴数	周満有無	カマド・炉構造	カマド・炉位置	貯藏穴	時期		備考		面
	-	手明	-	-	-	古代			3	

掘立柱建物

遺構名	座標	平面形状	規模(m)			桁行	重複関係	時期
			桁行	梁行	面積(m ²)			
A 1	X=60983~60986	Y = -92881~ -92884	2間	1間				A 2号掘立
A 2	X=60985~60988	Y = -92879~ -92883	2間	1間				A 1号掘立

土坑群

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			長軸方位	時期	重複関係
			長軸	短軸	深さ			
B1	X=60948~60952	Y = -92723~ -92728	560+	455	143	N-60°-E	古代	
B2	X=60951~60957	Y = -92711~ -92719	800+	600+	108	N-55°-E	古代	

土坑

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			長軸方位	時期	重複関係
			長軸	短軸	深さ			
A 4	X=60975~60976	Y = -92869~ -92870	円形	118	114	39	N-0°	古代
A 5	X=60977~60983	Y = -92868~ -92870	楕円長方形	640+	62	44	N-17°-W	古代
A 6	X=60987~60988	Y = -92890~ -92891	楕円形	104	78	25	N-21°-E	古代
A 7	X=60991~60992	Y = -92902~ -92903	円形	62	50	34	N-0°	古代
A 8	X=60995~60996	Y = -92905~ -92906	楕円形	106	78	34	N-6°-W	古代
A 9	X=60973~60975	Y = -92873~ -92874	楕円長方形	197	55	41	N-16°-W	古代
A 10	X=60972~60975	Y = -92875~ -92876	楕丸長方形	275	47	15	N-14°-W	古代
A 11	X=60971~60974	Y = -92878~ -92879	楕丸長方形	334	72	39	N-8°-W	古代
A 12	X=60983~60988	Y = -92881~ -92888	楕丸長方形	245	82	26	N-9°-E	古代
A 13	X=60982~60984	Y = -92882~ -92883	楕丸長方形	207	108	60	N-28°-W	古代
A 14	X=60985~60988	Y = -92881~ -92883	楕丸長方形	395	51	36	N-24°-W	古代
A 15	X=60981~60983	Y = -92878~ -92880	楕丸長方形	166	131	15	N-22°-E	古代
A 16	X=60972	Y = -92858	楕円形	55	49	28	N-44°-E	古代
							A 6号堅建	

ピット

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			時期	重複関係
			長軸	短軸	深さ		
A 4	X=60993	Y = -92892~ -92893	楕円形	42	32	23	古代
C207	X=60957~60957	Y = -92667~ -92668	円形	43	42	18	古代
C235	X=60951	Y = -92675	円形	41	41	20	古代
C236	X=60951	Y = -92676	円形	32	31	53	古代
C246	X=60953	Y = -92679	円形	40	34	32	古代
D408	X=60982	Y = -92491~ -92493	円形	32	30	32	古代
D409	X=60983	Y = -92493~ -92494	不整形	35	32	45	古代
D410	X=60985	Y = -92495~ -92496	円形	42	40	24	古代
D412	X=60986~60987	Y = -92501~ -92502	楕円形	35	27	17	古代
D414	X=60988~60989	Y = -92505	楕円形	42	37	33	古代
D416	X=60989	Y = -92506	不整形	30	27	38	古代
D417	X=60989~60990	Y = -92506~ -92507	不整形	37	35	18	古代
D418	X=60994	Y = -92511	楕丸形	30	30	35	古代
D424	X=60993~60994	Y = -92530~ -92531	円形	103	40	62	古代
D432	X=60994~62995	Y = -92528	不整形	22	20	21	古代
D434	X=60994~62995	Y = -92526~ -92527	不整形	72	63	47	古代
D436	X=60994	Y = -92526	円形	24	20	21	古代
D437	X=60997	Y = -92526~ -92527	楕円形	40	26	34	古代
D438	X=60993~60994	Y = -92525~ -92526	楕円形	43	29	28	古代
D440	X=60991	Y = -92521	不整形	38	26	53	古代
D442	X=60991	Y = -92519	楕丸形	20	17	30	古代
D443	X=60992	Y = -92519	楕丸長方形	25	18	23	古代
D444	X=60987	Y = -92513	不整形	27	26	35	古代
D447	X=60990~60991	Y = -92540	不整形	48	40	39	古代
D475	X=60992	Y = -92546~ -92547	不整形	42	33	20	古代

遺構名	座標		平面形状	規模(cm)			時期	重複関係
				長軸	短軸	深さ		
D476	X=60991・60992	Y=-92546・-92547	楕円形	56	34	52	古代	
D477	X=60983	Y=-92515	楕円形	30	26	37	古代	
D480	X=60986・60987	Y=-92541	楕円形	45	35	15	古代	
D490	X=60969	Y=-92543	楕円形	58	52	30	古代	
D491	X=60969	Y=-92544	楕円形	33	29	20	古代	
D492	X=60975・60976	Y=-92548	不整形	50	47	62	古代	
D494	X=60972	Y=-92551	円形	79	35	111	古代	
D495	X=60975・60976	Y=-92550・-92551	円形	42	40	39	古代	
D497	X=60986・60987	Y=-92522・-92523	楕円形	42	37	9	古代	
D498	X=60987	Y=-92522	円形	16	15	16	古代	
D503	X=60984	Y=-92518	楕円形	30	27	11	古代	
D504	X=60983・60984	Y=-92519	円形	38	32	9	古代	
D505	X=60983	Y=-92520	不整形	48	32	16	古代	D26号堅建 D149号土坑
D506	X=60982・60983	Y=-92520・-92521	不整形	68	55	20	古代	D26号堅建 D149号土坑
D507	X=60981	Y=-92521	楕円形	40	31	36	古代	D508号ビット
D508	X=60981	Y=-92521	楕円形	36	25	17	古代	D507号ビット
D509	X=60982	Y=-92522	不整形	28	20	40	古代	
D510	X=60982	Y=-92521・-92522	楕丸方形	31	30	6	古代	D26号堅建 D569号ビット
D511	X=60983・60984	Y=-92523	円形	25	23	6	古代	
D512	X=60984	Y=-92524	不整形	23	20	7	古代	
D513	X=60984	Y=-92522・-92523	楕丸方形	29	28	3	古代	
D514	X=60984・60985	Y=-92524	不整形	25	25	4	古代	
D515	X=60976	Y=-92518・-92519	楕丸方形	35	27	4	古代	
D516	X=60976・60977	Y=-92519・-92520	楕円形	38	35	10	古代	
D517	X=60977・60978	Y=-92520	楕円形	22	18	19	古代	
D518	X=60978	Y=-92522	楕円形	52	40	12	古代	
D519	X=60978・60979	Y=-92522	円形	35	28	10	古代	
D520	X=60980	Y=-9245	不整形	41	33	6	古代	D28号堅建
D521	X=60980	Y=-9245・-92546	不整形	37	30	10	古代	D28号堅建
D522	X=60980	Y=-92546	楕円形	40	25	4	古代	D28号堅建
D523	X=60980	Y=-92546	楕円形	40	30	6	古代	D28号堅建
D524	X=60980	Y=-92547	楕円形	25	22	12	古代	D28号堅建
D525	X=60980	Y=-92547	楕丸方形	32	28	17	古代	D28号堅建 D526号ビット
D526	X=60980	Y=-92547	楕丸方形	22	18+	7	古代	D28号堅建 D525号ビット
D527	X=60980・60981	Y=-92547・-92548	不整形	35	31	28	古代	D28号堅建
D528	X=60980	Y=-9247・-92548	楕円形	26	20	9	古代	D28号堅建
D529	X=60979・60980	Y=-92458	円形	45	30+	11	古代	D28号堅建 D530号ビット
D530	X=60979	Y=-9248	円形	42	38	26	古代	D28号堅建 D529号ビット
D531	X=60978	Y=-9247	楕円形	28	21	10	古代	D28号堅建
D532	X=60977	Y=-92546・-92547	楕円形	25	20	7	古代	D28号堅建
D533	X=60977・60978	Y=-92544・-92545	楕円形	30	30	88	古代	
D534	X=60980	Y=-92544・-92545	円形	22	21	13	古代	D28号堅建
D535	X=60978・60979	Y=-92546	円形	30	27	6	古代	D28号堅建
D536	X=60977・60978	Y=-92546	円形	19	18	9	古代	D28号堅建
D537	X=60994・62995	Y=-92548	不整形	59	53	18	古代	
D538	X=60994・62995	Y=-92458・-92549	不整形	60	48	19	古代	
D539	X=60976	Y=-92574・-92575	円形	53	38+	37	古代	D188号土坑
D540	X=60974	Y=-92575	円形	37	29	32	古代	
D541	X=60965	Y=-92570	不整形	37	31	23	古代	
D543	X=60968	Y=-92580	円形か	60+	20+	古代		D199号土坑
D545	X=60997	Y=-92536	楕丸方形	21	17	8	古代	
D547	X=60982・60983	Y=-92549	円形	51	47	24	古代	
D548	X=60980	Y=-92554	円形	18	16	32	古代	
D555	X=60976	Y=-92552	楕丸方形	15	13	7	古代	
D556	X=60976	Y=-92553・-92554	円形	24	20	22	古代	
D557	X=60977・60978	Y=-92557	楕円形	55	42	17	古代	
D558	X=60975・60976	Y=-92562	円形	54	36	53	古代	
D559	X=60979・60980	Y=-92572・-92573	円形	58	52	12	古代	
D560	X=60972	Y=-92550	円形	32	30	21	古代	
D561	X=60961・60962	Y=-92582	不整形	51	45	18	古代	
D562	X=60958	Y=-92581・-92584	不整形	51	50	16	古代	
D563	X=60961	Y=-92585	楕円形	38	26	18	古代	
D564	X=60958・60959	Y=-92585	円形	25	23	35	古代	
D565	X=60957・60958	Y=-92585	不整形	56	43	33	古代	
D568	X=60982・60983	Y=-92507	楕円形	40	20	22	古代	
D570	X=60978	Y=-92521	不整形	45	44	23	古代	
D571	X=60977・60978	Y=-92519・-92520	不整形	55	20	20	古代	
D572	X=60975	Y=-92523	楕円形	20	18	18	古代	D27号堅建

遺構計測表

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			時期	重複関係	
			長軸	短軸	深さ			
D573	X=60975	Y=-92522・-92523	不整形	53	43	49	古代	D28号堅建
D574	X=60975・60976	Y=-92522	楕円形	39	29	39	古代	D29号堅建
D575	X=60975・60976	Y=-92521	楕円形	29	25	35	古代	D30号堅建
D576	X=60975	Y=-92521	楕円形	25	20	31	古代	D31号堅建
D577	X=60975	Y=-92521	楕円形	24	17	13	古代	D32号堅建
D578	X=60975	Y=-92521・-92522	楕円形	25	20	44	古代	D33号堅建
D579	X=60975	Y=-92522	楕円形	25	20	39	古代	D34号堅建
D580	X=60975	Y=-92521	不明	24	13+	14	古代	D35号堅建
D581	X=60975	Y=-92521	不整形	33+	30	16	古代	D36号堅建
D582	X=60975	Y=-92521	楕円形	29	23	7	古代	D37号堅建
D583	X=60975	Y=-92520	不整形	28	25	3	古代	D38号堅建
D584	X=60974	Y=-92520	楕円形	25	20	8	古代	D39号堅建
D585	X=60974・60975	Y=-92590・-92591	不整形	49	44	8	古代	D 3号方形溝墓
D587	X=60969・60970	Y=-92595・-92596	不整形	65	51	29	古代	
D588	X=60969・60970	Y=-92591	楕円形	52	37	33	古代	
D589	X=60970・60971	Y=-92591・-92592	楕円形	56	44	28	古代	
D590	X=60971	Y=-92590・-92591	楕円形	75	58	6	古代	
D591	X=60970・60971	Y=-92590・-92591	楕円形	43	34	33	古代	
D592	X=60978	Y=-92585	不整形	45	40	20	古代	
D594	X=60978・60980	Y=-92587	円形	φ 45	—	22	古代	
D596	X=60956	Y=-92601・-92602	円形	40	38	34	古代	D31号堅建
D597	X=60963・60964	Y=-92604	円形	φ 25	—	20	古代	
D598	X=60964	Y=-92602	円形	23	20	17	古代	
D599	X=60964	Y=-92603	円形	22	21	18	古代	
D600	X=60973・60974	Y=-92600	不整形	26	23	17	古代	
D601	X=60959・60960	Y=-92598	楕円形	75+	44	38	古代	D 31号堅建
D603	X=60953	Y=-92637	楕円形	45	38	44	古代	
D604	X=60953	Y=-92636・-92637	円形	44	37	40	古代	
D605	X=60953	Y=-92642	円形	60	55	76	古代	
D606	X=60964	Y=-92626・-92627	円形	33	24	49	古代	
D607	X=60963・60964	Y=-92625	円形	30	23	35	古代	
D608	X=60954	Y=-92621・-92622	円形	34	29	10	古代	D247号土坑
D609	X=60963・60964	Y=-92617	円形	39	35	40	古代	
D610	X=60990	Y=-92454	不整形	32	25	15	古代	

溝

遺構名	座標	方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	時期	備考	
							長軸	短軸
A 1	X=60961・60988	Y=-92875～-92881	N-7°-W	27.12+	3.36	54	古代	
A 2	X=60961～60987	Y=-92876～-92881	N-10°-W → N-5°-E	26.88+	1.60	116	古代	
A 3	X=60982～60986	Y=-92877～-92879	N-35°-W → N-17°-E	3.45	0.40	11	古代	A15号土坑
C 2 *	X=60942・60963	Y=-92623～-92666	N-63°-E	32.58+	0.60	12	古代	C 2 • D32号溝同一
D 32								

焼土

遺構名	座標	方向	規模(cm)			時期	備考	
			長軸	短軸	深さ			
A 1	X=61013～61015	Y=-92953～-92955	212	183	15	古代		
A 2	X=61001	Y=-92900	69	31	12	古代		
A 3	X=60984・60985	Y=-92875～-92876	107	103	15	古代		
A 5	X=60984・60987	Y=-92879～-92883	315	315	16	古代		
A 7 a	X=6098460985	Y=-92884～-92886	112	54	7	古代		
A 7 b			53	55	10	古代		
A 8 a	X=60989	Y=-92884～-92885	30	15	4	古代		
A 8 b			13	8	16	古代		

集石

遺構名	座標	方向	規模(cm)			時期	備考	
			長軸	短軸	深さ			
D 3	X=60965	Y=-92577～-92578	172	120	—	古代		
D 4	X=60965～60967	Y=-92575～-92577	135	125	8	古代		

箱

遺構名	座標X	座標Y	方向	面積(m ²)	歟長(m)	歟幅(m)	歟深さ(cm)	歟条数	時期	備考	
										歟長	歟幅
A 11	60985・60997	-92980～-92904	N-13°-W	75.7+	—	—	—	—	古代	歟不明瞭	
A 9	60977・60981	-92866～-92868	N-20°-W	4.767+	2.40	0.23			44	古代	
A 10	60972・60974	-92866～-92869	N-80°-E	4,067+	2.40	0.42			44	古代	

中近世

上坑群

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			長軸方位	時期	重複関係
			長軸	短軸	深さ			
B 3	X=60938~60943	Y=-92714~92719		522	308+	-	N-50°-E	近世
B 4	X=60933~60939	Y=-92720~92724		595	345	114	N-27°-E	近世

土坑

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			長軸方位	時期	重複関係
			長軸	短軸	深さ			
A 1	X=60937~61002	Y=-92943~92947	不整形	512+	188	56	N-27°-E	中近世 調査区壁接 A 2 烟
A 3	X=60996~60997	Y=-92932~92935	不整形	290	153	28	N-74°-W	中近世
B 8	X=60943~60944	Y=-92772~92773	不整形	110	108	60	N-0°	中近世
B 9	X=60950~60951	Y=-92720~92722	不整形	192	150	86	N-53°-W	中近世
B 10	X=60941~60945	Y=-92716~92720	双円形	432	253	120	N-47°-E	中近世
B 11	X=60936	Y=-92731~92732	不明	75	47+	24	-	中近世
B 12	X=60934~60939	Y=-92730~92732	楕丸長方形	557	73	46	N-25°-E	中近世
B 13	X=60939~60941	Y=-92727~92729	円形	177	162	93	N-0°	中近世
B 14	X=60927~60930	Y=-92728~92734	楕丸長方形	654+	99	53	N-56°-W	中近世
B 15	X=60937~60939	Y=-92929~92930	不整形	200	77	43	N-25°-E	中近世
B 16	X=60933~60936	Y=-92727~92730	不整形	354	228	88	N-27°-E	中近世
B 17	X=60936~60937	Y=-92724~92725	不整形	129	98	43	N-26°-E	中近世
B 18	X=60939~60941	Y=-92723~92724	不整形	84	77	40	N-15°-E	中近世
B 19	X=60938~60939	Y=-92725~92726	楕円形	135	90	66	N-67°-E	中近世
B 20	X=60938~60939	Y=-92723	楕円形	95	68	42	N-24°-E	中近世 B 4号上坑接
C 1	X=60954~60955	Y=-92704~92706	不整形	214+	151+	45	-	中近世 北西端部壁接
D 165	X=60984	Y=-92566	円形	49	45	67	N-0°	中近世
A 2	X=61005~61011	Y=-92932~92933	不整形	540+	160+	52	N-0°	調査区壁接 天明泥流以降

柱穴列

遺構名	座標	方位	規模(cm)			時期	備考
			距離	径	深さ		
D 1	X=60984~60987	Y=-92515~92519	N-47°-W	400	18~35	9~30	中近世
D 2	X=60988~601000	Y=-92536~92540	N-51°-E	500	20~50	8~13	中近世
D 3	X=60990~60991	Y=-92533~92536	N-87°-E	315	24~27	10~24	中近世
D 4	X=60987~60988	Y=-92547~92551	N-75°-E	410	38~51	19~51	中近世
D 5	X=60976~60979	Y=-92551~92553	S-73°-E → S-8°-W	146+260	15~20	5~13	中近世

ピット

遺構名	座標	平面形状	規模(cm)			時期	重複関係
			長軸	短軸	深さ		
A 1	X=60983	Y=-92874~92875	円形	49	39	21	中近世
A 2	X=60981	Y=-92876	円形	50	43	16	中近世
A 3	X=60970	Y=-92892~92893	楕円形	47	35	19	中近世
A 5	X=60981~60982	Y=-9292881	楕円形	43	36	19	中近世
C 303	X=60941	Y=-92705	円形	20	20	11	中近世 C 1号満内
C 304	X=60951	Y=-92704	円形	14	14	5	中近世 C 1号満内
C 305	X=60952	Y=-92703	楕円形	25	16	5	中近世 C 1号満内
C 306	X=60954	Y=-92701	楕円形	12	8	10	中近世 C 1号満内

焼土

遺構名	座標	規模(cm)			時期	備考
		長軸	短軸	深さ		
C 1	X=60948~60949	Y=-92704	90	68	-	中・近世

溝

遺構名	座標	方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	時期	備考
			長	短			
C 1	X=60945~60955	Y=-92698~92707	N-41°-E	13.20+	0.60	61	中近世 北西端
C 3	X=60952~60956	Y=-92702~92706	N-46°-E	5.50+	0.90	25	中近世

細

遺構名	座標X	座標Y	方向	面積(m)	歴長(m)	歴幅(m)	深さ(cm)	歴条数	時期	備考
A 1	61003~61023	-92935~92965	N-50°-W	278.8+	5.50	0.38	6	49	中近世	
A 2	60999~61008	-92942~92952	N-58°-W	50.067+	3.60	0.40	6	15	中近世	
A 3	61004~61011	-92939~92945	N-47°-W	15.034					中近世	

遺構計測表

遺構名	座標X	座標Y	方向	面積(m ²)	歓長(m)	幅(m)	深さ(cm)	歓条数	時期	備考
A 4	61007~61018	-92934~-92945	N-45°-W	54.467+					中近世	
A 5	61009~61012	-92955~-92958	N-4°-W	4.784+	2.85	0.20	3	6+	中近世	
A 6	61009~61012	-92950~-92954	N-7°-W	9.064+	3.35	0.23	6	11+	中近世	
A 7	61001~61012	-92430~-92434	N-76°-E	14.434+	6.10	0.30		24+	中近世	
A 8	61054~61020	-92924~-92929	N-35°-W	14.7+	6.00	0.28	22	9+	中近世	

道

遺構名	座標	方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	時期	備考
A 1	X=61003~61009 Y=-92940~-92952	N-45°-W S-47°-W	16.18+	0.74		—	中・近世

石垣

遺構名	座標	全長(m)	長壁(m)	短壁(m)	深さ(cm)	時期	備考
A 1	X=61004~61013 Y=-92935~-92945	22	14.0	8.0		23~67	中近世

ヤックラ

遺構名	座標X	座標Y	方向	長(m)	幅(m)	深さ(cm)	時期	備考
A 1	61016~61020	-92951~-92959			9.52+	1.28+		中近世
A 2	61001~61007	-92933~-92940			6.00	4.10		中近世
A 3	60997~61000	-92929~-92932			2.40	2.10		中近世

複丘坑

座標	埋設			深さ(cm)	面積(m ²)	歓条数	時期	備考
		歓長(m)	歓幅(m)					
X=60999~61019	最大	11.90	1.50	42	15.634			
Y=-92916~-92933	最小	1.10	0.75	20	0.70	18+	中近世	

欠番 土坑

C区 3・6・9・11~13・18~22・24・26・31・32・34・35・38・39・41~43・47・50・52・54・56~58・79・94・95・101
 116・118・121・123・128・132・135・137~140・124~145・151・152・154~156・158・159・164・166・167・169・172~175・178・181・
 D区 183・186・187・189~194・196・197・200~203・205・206・210・217・220~224・227・229・231・233・235・236・251・263・267

変更 ピット

D446~D470よりD34号窓穴建物へ
 D500→1号柱穴列P 1・D501→1号柱穴列P 2・D502→1号柱穴列P 3・D445→1号柱穴列P 4~
 D546→2号柱穴列P 1・D428→2号柱穴列P 2・D547→2号柱穴列P 2~
 D473→3号柱穴列P 1・D472→3号柱穴列P 2・D473→3号柱穴列P 3~
 D475→4号柱穴列P 1・D478→4号柱穴列P 2・D481→4号柱穴列P 3~
 D548→5号柱穴列P 1・D550→5号柱穴列P 2・D551→5号柱穴列P 3・D552→5号柱穴列P 4・D553→5号柱穴列P 5・D554→5号
 柱穴列P 6~

欠番 ピット

C区 1~206・208~234・237~245・247~301・307~328・330・332~342・345~347・349~358・361・362・364・365
 D区 411・413・415・419~423・425~427・430・431・433・435・439・441・445・446・448~473・478・479・481~489・493・499~501・542・
 559・566・567・593・595・602

変更 方形周溝基→円形周溝基

D 3方形周溝基→D 2円形周溝基

D 3方形周溝基は欠番

縄文・弥生土器遺物観察表凡例

-縄文土器・弥生土器-

2名の担当者が観察したため、胎土などの属性、型式名、文様の表現などに差がある。A～C区出土の縄文・弥生土器の胎土や縄文原体は別表にある通りである。D区に関しては、以下に記載した。

胎土：土器の夾杂物を記した。混和材としての砂粒が2mm以上を粗砂粒、2mm以下は細砂粒とした。混和剤中の特徴的な鉱物粒として、石英、輝石を基準とした片岩、チャートなどが含まれた場合も明記した。また礫種も胎土の一つとして記している。

焼成：良好な例を標準とし、焼成温度が低く土器胎土が弱い順に、軟質（陶器）、やや軟質、良好と記した。

色調：土器の表面色調を優先し、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修）に準拠したが、色調名を優先し、マンセル値は併記していない。

計測値：土器は口径・高さ・底径を基準に現存した部位を計測した。1/2以下の復元値は()で記した。破片資料の現存値は記していない。

文様の特徴：器形、文様構成を主とした記載で、文様要素や原体、内部整形などを併記した。

備考：土器の時期の目安として、縄文時代六期区分と区分内の大分の段階必要に応じて型式名を記した。弥生土器も中期と後期の大区分を基本に中葉と後葉段階を記し、一部型式名を付した。

表1 縄文・弥生土器の胎土分類表

No.	類別	胎土	備考
1	A1	少量の灰白色片岩・珪質乳白色片岩・輝石の細砂と繊維を含むやや硬質な胎土。	主として繊維を含む有するグループ。
2	A2	少量の円錐度の進んだ灰白色片岩・珪質乳白色片岩・石英・輝石の粗・細砂と赤色片岩・粗砂と繊維を含むやや硬質な胎土。	
3	A3	少量の円錐度の進んだ灰白色片岩・輝石・珪質乳白色片岩の粗・細砂と繊維を含むやや硬質な胎土。	
4	A4	中量の円錐度の進んだ灰白色片岩の輝・細砂や少量の珪質乳白色片岩・輝石・石英の粗・細砂と繊維を含むやや硬質な胎土。	
5	A5	中量の円錐度の進んだ灰白色・珪質乳白色片岩の輝・細砂や中量の珪質乳白色片岩・輝石・石英の粗・細砂と繊維を含むやや硬質な胎土。	
6	A6	多く中量の円錐度の進んだチャート・赤色片岩の輝・粗砂や中量の珪質乳白色片岩・灰白色片岩の粗・細砂と繊維を含むやや硬質な胎土。	
7	A7	少少量の円錐度の進んだ灰白色・珪質乳白色片岩・輝石や少量の白磁。	粗砂・繊維を含むやや硬質な胎土。
8	A8	中量の円錐度の進んだ赤色片岩の輝・粗砂と珪質乳白色片岩や灰白色片岩の粗・細砂および繊維を含むやや硬質な胎土。	
9	A9	多量の円錐度の進んだ珪質乳白色片岩の輝・細砂と繊維を含むやや硬質な胎土。	
10	A10	多く中量の円錐度の進んだ粘土質片岩や珪質乳白色片岩の輝・粗砂と少量の灰白色片岩・粗砂及び繊維を含むやや硬質な胎土。	
11	A11	多量の円錐度の進んだ灰白色・石英・角閃石・雲母の粗・細砂と微量の繊維を含むやや硬質な胎土。	
12	A12	多量の円錐度の進んだ灰白色・赤色片岩・粗砂や中量の珪質灰白色片岩・輝石・石英の粗・細砂と繊維を含むやや硬質な胎土。	
13	A13	中量の円錐度の進んだ赤色片岩や珪質乳白色片岩の輝・粗砂と少量の灰白色片岩・粗砂および繊維を含むやや硬質な胎土。	
14	A14	多量の円錐度の進んだ珪質乳白色片岩や少量の石英・赤色片岩の粗・細砂と粗質の繊維を含むやや硬質な胎土。	
15	A15	少量の円錐度の進んだ珪質乳白色片岩・粗砂や灰白色片岩・粗砂と繊維を含むやや硬質な胎土。	
16	A16	中量の円錐度の進んだ灰白色片岩・少量の石英・珪質乳白色片岩・輝石の粗・細砂および繊維を含むやや硬質な胎土。	
17	A17	多量の円錐度の進んだ灰白色片岩の輝・粗砂や少量の珪質乳白色片岩・輝石の粗・細砂と繊維を含むやや硬質な胎土。	
18	B1	少量の長石・石英・角閃石・雲母の粗・細砂と微量の繊維を含むやや硬質な胎土。	
19	B2	多量の円錐度の進んだ長石・石英・角閃石の粗・細砂や少量の珪質灰白色片岩・輝石を含むやや硬質な胎土。	主として繊維を含む有するグループ。
20	C1	中量の円錐度の進んだ粘土質片岩や灰白色・黒色片岩の輝・粗砂と珪質乳白色片岩・粗砂・雲母繊維を含む角閃石を含む織紋な胎土。	主として粘土質片岩を含むし、繊維を含まないグループ。
21	C2	中量の円錐度の進んだ粘土質片岩・輝・粗砂や少量の灰白色・黒色片岩・珪質乳白色片岩の粗・細砂と含む織紋の角閃石。	主として粘土質片岩を含むし、繊維を含まないグループ。
22	C3	多量の円錐度の進んだ粘土質片岩・珪質灰白色片岩や灰白色片岩の輝・粗砂を含む織紋の角閃石。	
23	D1	少量の円錐度の進んだ灰白色片岩・珪質乳白色片岩・輝の細砂を含むやや硬質な胎土。	未として灰白色。
24	D2	少量の珪質乳白色片岩・輝・粗砂の円錐度の進んだ灰白色片岩の輝・粗砂を含む織紋な胎土。	珪質乳白色片岩や輝石を含むし、繊維を含まない。
25	D3	中量の円錐度の進んだ珪質乳白色片岩・輝・少量の灰白色片岩の粗・細砂を含む織紋な胎土。	
26	D4	少量の円錐度の進んだ灰白色片岩・珪質乳白色片岩の輝・粗砂・輝石の粗砂を含む織紋な胎土。	
27	D5	少量の円錐度の進んだチャート・輝・灰白色片岩・珪質乳白色片岩・輝の粗・細砂を含む織紋な胎土。	
28	D6	多量の円錐度の進んだ珪質乳白色片岩・灰白色片岩および無色片岩・輝の粗・細砂を含む織紋な胎土。	
29	D7	多量の輝石・中量の円錐度の進んだ灰白色片岩・珪質乳白色片岩や少量の灰白色片岩の粗・細砂を含む織紋な胎土。	
30	D8	多量の円錐度の進んだ灰白色片岩・輝石・中量の灰白色片岩の粗・細砂を含む織紋な胎土。	
31	D9	多量の円錐度の進んだ珪質乳白色片岩や灰白色・黑色片岩の輝・粗砂と少量の輝石・粗砂を含むやや硬質な胎土。	
32	E1	中量の円錐度の進んだ珪質乳白色片岩や灰白色片岩の粗・細砂と少量の輝・石英の粗・細砂を含む織紋な胎土。	主としてD類+石英を含む有するグループ。
33	E2	中量の石英や粗砂・繊維の円錐度の進んだ灰白色片岩・粗砂と含む織紋な胎土。	
34	E3	多量の円錐度の進んだ灰白色片岩・珪質乳白色片岩と少量の石英・輝石の粗・細砂を含むやや硬質な胎土。	
35	E4	多量の珪質乳白色片岩・輝石・石英と少量の灰白色片岩の粗・細砂を含む織紋な胎土。	
36	F1	少量の円錐度の進んだ灰白色片岩・珪質乳白色片岩・輝石・石英の粗・細砂と少量の灰白色片岩・粗砂を含むやや硬質な胎土。	主としてD類+赤色片岩を含む有するグループ。
37	F2	中量の円錐度の進んだ灰白色片岩・珪質乳白色片岩・赤色片岩・輝石・石英等の粗・細砂を含む織紋な胎土。	
38	F3	多量の円錐度の進んだ灰白色・赤色片岩・粗砂と中量の珪質灰白色片岩・輝石・石英の粗・細砂を含むやや硬質な胎土。	
39	G1	中量の珪質乳白色片岩・石英・輝石の粗・細砂や少量の灰白色・赤色片岩・粗砂を含む織紋な胎土。	主としてE類+赤色片岩を含む有するグループ。
40	H1	少量の円錐度の進んだ灰白色・黒灰色片岩・輝石の粗・細砂を含むやや硬質な胎土。	主としてE類+赤色片岩を含む有するグループ。
41	H2	多量の円錐度の進んだ灰白色・赤色・黒色片岩の輝・粗砂と少量の灰白色・石英・珪質乳白色片岩や輝石の粗・細砂を含む織紋な胎土。	主としてE類+赤色片岩を含む有するグループ。
42	I1	少量の灰白色片岩・輝石・石英・赤色片岩の粗・細砂を含む織紋な胎土。	主としてD類+赤色片岩を含む有するグループ。
43	I2	中量の円錐度の進んだ灰白色・赤色片岩の輝・粗砂や少量の灰白色・灰白色片岩・輝石・石英等の粗・細砂を含む織紋な胎土。	主としてD類+赤色片岩を含む有するグループ。
44	I3	多量の円錐度の進んだ灰白色・赤色・黑色片岩の輝・粗砂と少量の灰白色・石英・珪質乳白色片岩や輝石の粗・細砂を含むやや硬質な胎土。	主としてD類+赤色片岩を含む有するグループ。
45	K1	多量の円錐度の進んだ珪質乳白色・赤色・黒色片岩の輝・粗砂を含む織紋な胎土。	主としてD類の灰白色片岩が欠落するグループ。

ルーラー等を使用した寸幅表示による分類。

表2 縄文原体分類表

No.	原体名	繊維合繊り	粗砂合繊り
1	直筒合繊り	L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺	L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺
2	直筒合繊り	L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺	L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺
3	直筒合繊り (底多変)	L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺	L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺
4	直筒合繊り (底多変)	L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺	L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺ L ⁺ -R ⁺ -C ⁺

土師器・須恵器等観察表凡例

1 種類

文化庁文化財部記念物課監修2010年「発掘調査のてびき」に準じて土師器、須恵器、黒色上器、施釉陶器(奈良三彩、灰釉陶器、綠釉陶器)、上製品等に種別している。

なお、古墳時代に黒色処理を施された上器については、その成形形から土師器とした。

その後の奈良時代中期から出現する内面及び内外面を黒色処理された上器については、成形形から黒色上器として種別してある。

2 器種

文化庁文化財部記念物課監修2010年「発掘調査のてびき」に準じて杯、碗、高杯、盤、皿、鉢、壺、器台、壺・瓶(長颈壺、短颈壺、平瓶、横瓶、提瓶、罐)、甕、甕等の名称を使用している。なお、杯と碗の区分は、器高/口径比が大きいものを碗としているが、明確に数値化できていない。壺と甕との区分は、頸部/胴部最大径比によって区分しているが、例外として胴部最大径より頸部系径の大きい形態である広口壺と呼称しているものも存在する。

3 存在率

概ね全体の比率で「完形」、「3/4」、「1/2」等で表示している。なお、1/4以下については、「口縁部片」、「底部片」等の部位片で表示している。

4 計測値

計測部位は、以下のようによく省略している。

口：口径、底：底径、高：器高、台：高台径、擴：擴径、力：杯蓋等のカエリ径、頸：頸部径、胴：胴部最大径、孔：瓶・有孔甕などの底部に設けられた孔径等である。この他の略称についてはそれぞれ備考等に表示した。

なお、単位はcmである。

5 脱土

範中の表現にある細砂粒は、径2mm以下、粗砂粒は2～5mmのものを表す。5mm以上は、礫と表示した。

6 燃成

土師器は、比較的硬質に焼成されているものを「良好」、軟質や脆い状態のものを「軟質」、「不良」で表示してある。

須恵器は、「還元焰」、「酸化焰」で表示してある。

7 色調

林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色調監修「新版 標準上色調帖」に準拠している。

8 特徴

整形を中心に記載している。

9 備考

灰釉陶器は、埴投古窯跡群と東濃古窯跡群を区分し、可能な限り各窯式期を判断して記載している。

釉陶器は、東海産、畿内産、近江産を区分し、可能な限り年代または窯式期を判断して記載している。

10 掘藏縮尺

原則 1/3で掲載している。大きさによっては、1/1～1/4の縮尺で掲載しているものがある。その場合は、それぞれの遺物図に明示してある。

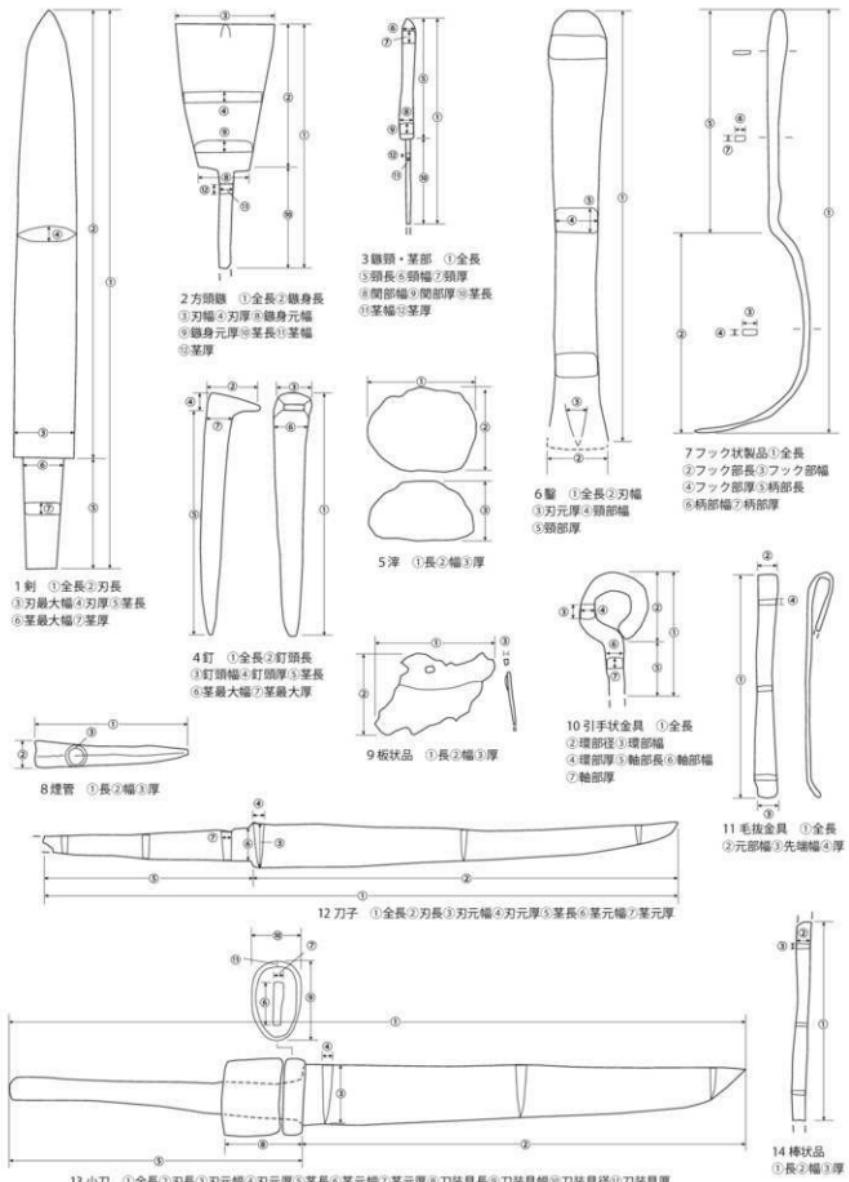


図1 鉄器計測部位位置図

遺物觀察表

縄文時代

C 6号堅穴建物

拂 図 PL_No	種 類 器 形	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第18回 PL_147	1 縄文土器 深鉢	フク上 胴部片		D 2	無文土器。内外面共に被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	早期中葉
第18回 PL_147	2 縄文土器 深鉢	フク上 胴部片		D 9	無文土器。外面丁寧な横幅磨き、内面横幅磨き。	早期中葉
第18回 PL_147	3 磨石器 磨石	フク上 完形	長 12.5 厚 6.5 幅 9.6 重 1106.9	粗粒輝石安山岩	円盤を利用する。表面裏面の中央付近に磨面が認められる。表面の中央や上方に敲打痕が認められる。	

C 26号堅穴建物

拂 図 PL_No	種 類 器 形	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第19回 PL_147	1 縄文土器 深鉢	炉内 口縁部片				早期後葉
第19回 PL_147	2 縄文土器 深鉢	炉内 口縁部片				早期後葉
第19回 PL_147	3 縄文土器 深鉢	炉内 体部片		粘土燒造・石英・白色粒/やや軟質/暗褐色	口縁部外反。口縁部に斜位刻みを施す。幅20mmほどの小口鉄工具による斜位条痕文が現る。体部は擦で加わる。内面も弱い横位条痕を見るが表面磨滅する。1~6は同一個体。	早期後葉
第19回 PL_147	4 縄文土器 深鉢	炉内 体部片				早期後葉
第19回 PL_147	5 縄文土器 深鉢	炉内 体部片				早期後葉
第19回 PL_147	6 縄文土器 深鉢	炉内 体部片				早期後葉
第19回 PL_147	7 刻片石器 打製石斧	フク上 1/4	長 (6.7) 厚 2.3 幅 5.9 重 111.7	黑色頁岩	両面加工により整形する。表面の中央付近に磨滅部分が認められ着柄痕の可能性がある。下部折断面からの加工痕が表面に認められ打製石斧からの転用を意図した可能性がある。	

C 16~C 19号堅穴建物

拂 図 PL_No	種 類 器 形	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第20回 PL_147	1 縄文土器 深鉢	底面 胴部片		A 4	LR・LIR文を横位・交叉に施して菱形モチーフを構成。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅲ式
第20回 PL_147	2 縄文土器 深鉢	フク上 胴部片		A 4	LR文を横位施す。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅲ式
第20回 PL_147	3 縄文土器 深鉢	フク上 胴部片		A 1	RLR文を横位施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面丁寧な横幅磨き。	関山Ⅲ式
第20回 PL_147	4 刻片石器 楔形石器	フク上 完形	長 3 厚 1 幅 1.7 重 4.8	黒曜石	上下端部付近に両面加壓による剥離痕が集中する。	
第20回 PL_147	5 磨石器 磨石	フク上 完形	長 12.6 厚 6.6 幅 8.1 重 997.9	粗粒輝石安山岩	円盤を利用する。表面の中央付近と裏面の左半分に磨面が認められる。	
第20回 PL_147	6 縄文土器 深鉢	フク上 胴部片		A 8	条直文を斜位に施す。内面被熱風化・剥離。	鶴ヶ島台式
第20回 PL_147	7 縄文土器 深鉢	フク上 胴部片		A 7	円筒形状具による擗け状文や刺突文を施す。内外面共に横位条痕文。	鶴ヶ島台式
第20回 PL_147	8 磨石器 磨石	フク上 2/3	長 (9.1) 厚 5.7 幅 7.1 重 583.0	粗粒輝石安山岩	円盤を利用する。表面・左側面、裏面に磨面が認められる。表面と側面の境界及び裏面と側面の境界には穂が形成される。	

D 32号堅穴建物

拂 図 PL_No	種 類 器 形	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第22回 PL_147	1 縄文土器 深鉢	床直 口縁部破片		織織織・石英・白色粒/良好/褐色	口縁部に浅い刻み、口縁部はLとRの織糸圧痕文による織手状況記が配され刺切文が施される。内面平滑な撫で調整。	前期初頭
第22回 PL_147	2 縄文土器 深鉢	床直 口縁部破片		織織織・石英少・白色粒/良好/にふい黃褐色	0段多条L RとR Lによる幅狭の横位羽状織文構成。内面平滑な撫で調整。	前期初頭
第22回 PL_147	3 縄文土器 深鉢	床直 口縁部破片		織織織・石英・薄石・白色粒/良好/にふい黃褐色	波状線。口縁部に円形刺突文を連続する。以下軸織をL Rとした糸糸付しの付加条織文(2種)が施される。内面は弱い波状に調整。	前期初頭
第22回 PL_147	4 縄文土器 深鉢	フク上 口縁部破片		粗織織・石英・白色粒/良好/にふい黃褐色	口縁部横位線に矢羽状の連続刺突文を加える。以下、應糸圧痕文と刺切文を施す。内面横位研磨。外表面磨滅。	前期初頭
第22回 PL_147	5 縄文土器 深鉢	フク上 口縁部破片		織織織・石英少・白色粒/良好/にふい樹褐色	織糸に棒状點付文を2付しR Lを施す。内面丁寧な研磨を加える。外表面磨滅。	前期初頭
第22回 PL_147	6 縄文土器 深鉢	フク上 口縁部破片		織織織・石英少・白色粒/良好/黒褐色	薄手の器厚を呈す。口縁部は幅狭の横位平行沈線で画し、同沈線で横位山形文が施される。体部はL RとR Lによる横位羽状織文構成。内面平滑な撫で調整。凹凸を見る。	前期初頭
第22回 PL_147	7 縄文土器 深鉢	床上 体部破片		織織織・石英少・白色粒/良好/黒褐色	0段多条L RとR Lの横位羽状織文構成。内面平滑な撫で調整。	前期初頭
第22回 PL_147	8 縄文土器 深鉢	フク上 体部破片		織織織・石英少・白色粒/良好/黒褐色	織糸とR Lによる矢羽状の織糸圧痕文と刺切文を施す。内面平滑な撫で調整。	前期初頭
第22回 PL_147	9 縄文土器 深鉢	フク上 体部破片		原体壁が短い0段多条L RとR Lの横位羽状織文構成。内面平滑な撫で調整。	前期初頭	

種 国 PL-No	種 類 器 形	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第22回 PL-147	10 瓔文土器 深鉢	床直 底部1/4残存		底 (6.7)	粗粒織・石英少 白色粒/良好/褐色	直立気味の部下平。底面は上げ底を呈す。体部は原体幅が狭いの段多条L RとR Lの横位羽状織構成。底面もR Lを施す。内面弱い撫で調整。被熱のため溶脂剥落。	前期前頭
第22回 PL-147	11 剥片石器 石礫	床直 ほぼ完形	長 2.7 幅 (1.3) 厚 0.4 重 0.8	チャート	細身・長身の円錐基盤構造。加工は丁寧で、全面に押圧・削離が複数。左辺側の返し部を欠損する。完成状態。		
第22回 PL-147	12 剥片石器 石礫	フク土 2/3	長 (1.5) 幅 (1.5) 厚 0.4 重 0.7	油軟岩	三角形状を呈する円錐基盤構造。器体先端は1/3程度を破損する。加工は丁寧。完成度で破損したのか。		
第22回 PL-147	13 剥片石器 スクリエ バー	フク土 ほぼ完形	長 3.7 幅 7.6 厚 1.2 重 23.7	黒色頁岩	極長長い棒状に用いる。刃面側を除く裏面裏面側に微細な加工を施す。器体端部の剥離は階段状となっており、使用の結果、刃部がダメージを受けている。		
第22回 PL-147	14 剥片石器 二次加工あ る剥片	床直 完全	長 11.5 幅 11.9 厚 3.3 重 423.3	粗粒輝石安山岩	幅広刃形を用いる。刃部側は左辺側に偏り、加工は粗い。加工意図は明らかでない。		
第22回 PL-148	15 磨石器 凹石	床直 ほぼ完形	長 10.5 幅 8.2 厚 4.9 重 553.7	粗粒輝石安山岩	背面面に漏斗状の線み2か所。アバタ状の集合打痕1ヶ所がある。裏面側は弱く摩耗する。裏面側の破損採集以前で、削理で別れたもの。		
第22回 PL-148	16 磨石器 磨石	床直 完全	長 9.7 幅 5.7 厚 3.5 重 324.1	粗粒輝石安山岩	裏面側は大きく摩耗面が広がる。このほか、アバタ状の打痕が複数確認できる。		
第22回 PL-148	17 磨石器 磨石	フク土 完全	長 8.9 幅 8.7 厚 4.2 重 470.9	粗粒輝石安山岩	裏面側とも摩耗するほか、中央付近にアバタ状の打痕が広がる。裏面側とも復元している。偏平錐素材。		
第22回 PL-148	18 磨石器 磨石	床直 完全	長 9.5 幅 6.1 厚 4.4 重 433.1	粗粒輝石安山岩	裏面側とも摩耗面が広がる。激しく使った跡でおり、多孔質石材の目が潰れるなどである。このほか裏面側には器中央からやや離れて集合打痕がある。		
第22回 PL-148	19 磨石器 磨石	床直 完全	長 12.3 幅 6.9 厚 3.9 重 499.8	粗粒輝石安山岩	磨耗表面は全面に及び、右辺側に著しく摩耗した平坦面がある。身上にも打痕と摩耗痕が広がり、圓形状を意識した使い方が窺われる。		
第22回 PL-148	20 磨石器 敲石	フク土 完全	長 7.6 幅 6.2 厚 6 重 355.9	粗粒輝石安山岩	裏面側とも摩耗する。石材は若干多孔質気味で、部間に比べてガラス質が残る。偏平幅円錐を用いる。上半部を大きく欠損する。		
第22回 PL-148	21 磨石器 敲石	フク土 1/2	長 (9.9) 幅 7.5 厚 3 重 314.6	粗粒輝石安山岩	裏面側とも摩耗面が広がる。裏面側には器中央に打痕がわずかに認められる。		

C 8号室穴建物

種 国 PL-No	種 類 器 形	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第23回 PL-148	1 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部片		A 5	口縁部に2本の横位細縦織を施し、半截竹管状具の連続刺突を施す。内外面共にやや被熱風化。	関山I式
第23回 PL-148	2 瓔文土器 深鉢	床直 脚部片		A 1	括れ縫に横位隙縫を複数施し、O段多条の横位RL織文やその間に円形刺突文施文。内外面共にやや被熱風化。	関山I式
第23回 PL-148	3 瓔文土器 深鉢	堅建束 脚部片		A 1	O段多条RL・LR織文を横位・互々に多段施文か。内外面共に被熱風化。	関山II式
第23回 PL-148	4 瓔文土器 深鉢	床直 口縁部片		A 1	波状口縁。半截竹管状具の連續爪彫文により菱形意匠を構成。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第23回 PL-148	5 瓔文土器 深鉢	床直 底部1/3	底 (6.0)	A 1	RL織文を横位施文。内外底面共に丁寧な磨き。	有尾式
第23回 PL-148	6 磨石器 磨石	周溝内 完全	長 12.4 幅 8.6 厚 5.3 重 840.8	粗粒輝石安山岩	ほぼ全面が磨面で構成される。表面の中央に打痕がわずかに認められる。	
第23回 PL-148	7 磨石器 石皿	堅建束 1/3	長 (24.3) 幅 (20.0) 厚 (8.5) 重 3906.6	粗粒輝石安山岩	側面は全体的に風化が進行しておらず打痕面あるいは被削面と考えられる。裏面側は風化が進行しており自然面と考えられる。亜円錐を利用して。表面は風化的形態であり全体的に滑らかである。暗褐色の物質が広範囲に付着する。	

D3号室穴建物

種 国 PL-No	種 類 器 形	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第24回 PL-148	1 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部破片		粗粒織・石英少 白色粒/良好/暗灰 黄色	口部の様相から片口か。口縁部直下にコンバス文、以下O段多条の横位L RとR Lによる羽状織構成。内面丁寧な研磨を加える。	前期前葉
第24回 PL-148	2 瓔文土器 深鉢	床直 片口部破片		粗粒織・石英少 白色粒/良好/褐灰色	片口部磨面か。緑辺に棒状工具による撫でが施される。内面平滑な撫で調整。	前期前葉
第24回 PL-148	3 瓔文土器 深鉢	床直 体部破片		粗粒織・石英少 白色粒/良好/褐灰色	直前段反燃りR R Lの横位施文。内面弱い研磨を施す。	前期前葉
第24回 PL-148	4 瓔文土器 深鉢	フク土 底部破片	底 (7.5)	粗粒織・石英少 白色粒/良好/黃灰 色	体部は直立気味に開口。底面は上げ底。O段多条のL R・R Lによる羽状織構成。内面撫で。	前期前葉
第24回 PL-148	5 瓔文土器 深鉢	フク土 底部破片		粗粒織・石英少 白色粒/良好/褐色	L RとR Lによる直前段合巻(直前合2L)。内面丁寧な研磨を加える。	前期前葉
第24回 PL-148	6 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部破片		粗粒織・輝石少 白色粒/良好/褐色	横位位置で底部を口縁部は弧状弦線を削す。地盤は横位L Rを施す。内面平滑な撫で調整。	前期中葉
第24回 PL-148	7 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部破片		粗粒織・石英少 白色粒/良好/褐色 黄色	波状部に刻みを付すV字状貼付文と円形刺突文を施す。燃糸じとRによる燃系痕文や割切文を施す。内面研磨を加える。	前期前葉
第24回 PL-148	8 瓔文土器 深鉢	フク土 体部破片		粗粒織・白色粒/ 良好/灰褐色	内面浅い菱形文を施す。	早期後葉
第24回 PL-148	9 瓔文土器 深鉢	フク土 体部破片		粗粒織・石英・輝 石/白色粒/良好/褐色	体部底曲部に横位細縫線を設け、円形刺突文を基点に結節文を施す。内面横位撫で調整。	早期後葉

遺物観察表

種 国 PL_No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第24回 PL_148	10 磁石器 磨石	フク上 完形	長幅 19.1 厚 12.2 重 2009	粗粒輝石安山岩	背面および右辺に摩耗痕があるほか、小口部分に敲打痕を伴う摩耗痕が広がる。確重量が2Kgを超える。主に地面に据え置き使用したものと見られる。	
第24回 PL_148	11 磁石器 磨石	床下 4/5	長 12.6 幅 (10.8) 重 4.6 849.3	粗粒輝石安山岩	表面裏面とも弱く摩耗する。左辺側の欠損は最終段階というより使用段階のそれであり、弱く摩耗している。	

C17号堅穴建物

種 国 PL_No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第25回 PL_149	1 磁文土器 深鉢	フク上 胴部片		A 2	L織文を横位・多段に施し。外面やや被熱風化、内面丁寧な横位磨き。	関山Ⅱ式
第25回 PL_149	2 磁文土器 深鉢	フク上 胴部片		A 2	0段多条RL・LR織文を交互に施して羽状のモチーフを構成。内面煤炭化物付着。	関山Ⅱ式
第25回 PL_149	3 磁文土器 深鉢	フク上 底部既存	底 9.5	A 2	上げ底状の底部。0段丸い組紐を横位・多段に施す。外面部被熱風化、内面煤炭化物付着。	関山Ⅱ式
第25回 PL_149	4 磁文土器 深鉢	フク上 胴部片		A10	円筒形骨状具の剥突文や押し引き状斑紋を施す。内面横位磨き。	鶴ヶ島台式
第25回 PL_149	5 磁文土器 深鉢	フク上 口縁部片		A 8	L口部および口縁部に略条件症斑文を横位に施す。内面被熱風化。	早期末葉
第25回 PL_149	6 磁文土器 深鉢	フク上 胴下半～底部 4/5	底 5.4	D 5	RL織文を横位・多段に施す。外面部下半部に被熱剥離・煤炭化物付着、内面やや粗い横位磨き。	諸磯 a式

C14号堅穴建物

種 国 PL_No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第26回 PL_149	1 磁文土器 深鉢	フク上 口縁部片		A 1	口縁部に半截竹管状具のコンバス文を施し、以下にRL織文を横位施す。	関山Ⅱ式
第26回 PL_149	2 磁文土器 深鉢	フク上 胴部片		直前合2R・2L A 1	2種類の直前段合燃り織文を横位・多段に交互施す。内外両面共に被熱風化。	関山Ⅱ式
第26回 PL_149	3 磁文土器 深鉢	フク上 胴部片		直前合2R・2L (0段多条) A 1	2種類の直前段合燃り織文を横位・交互に多段施して菱形モチーフを構成。推定6本櫛状具のコンバス文を施す。内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式
第26回 PL_149	4 磁文土器 深鉢	フク上 胴部片		A 1	RL織文を横位施す。外面部一部に煤炭化物付着。	関山Ⅱ式
第26回 PL_149	5 磁文土器 深鉢	フク上 胴部片		A 1	RL・LR織文を横位・交互に施して羽状の意匠を構成。	関山Ⅱ式
第26回 PL_149	6 刃片石器 石器	フク上 完形	長 1.7 幅 1.4 重 0.4 6.0	黒曜石	表面共に押刃剥離痕が認められ丁寧に加工整形する。	円基無茎鐵
第26回 PL_149	7 磁石器 磨石	フク上 完形	長 9.9 幅 9 重 5.5 658.4	粗粒輝石安山岩	円鑿を利用する。表面裏面の中央付近に磨面が認められる。側面部には敲打痕が散在する。	

D29号堅穴建物

種 国 PL_No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第27回 PL_149	1 磁文土器 深鉢	床直 口縁部破片		織織織・輝石少 白色粒/良好/褐色	小型深鉢。薄手の器厚を呈す。口縁部欠損。LRとRLにによる横位羽状織文構成。内面研磨。口縁部に補修孔を見る。	前期中葉
第27回 PL_149	2 磁文土器 深鉢	フク上 体部破片		織織織・石英少 白色粒/良好/ぶ い黄褐色	横位LRとRLによる羽状織文構成。やや乱雑な施文。内面弱い研磨を施す。	前期中葉
第27回 PL_149	3 磁文土器 深鉢	フク上 体部破片		織織織・石英少 白色粒/良好/良 好/白色粒/良好/	やや薄手の器厚を呈す。横位LRとRLによる羽状織文構成。内面研磨を調整。	前期中葉
第27回 PL_149	4 磁文土器 深鉢	フク上 体部破片		粗粒織・石英少 白色粒/良好/良 好/明黄色	0段多条LRとRLの羽状織文構成。原体沿部も見る。内面平行な撫で調整。	前期中葉
第27回 PL_149	5 磁石器 台石	床上 1/2	長 (22.1) 幅 (15.7) 重 4017.9	粗粒輝石安山岩	表面は平坦でありほぼ全面に滑らかな面が認められる。裏面全体は表面が剥落している。大形円鑿を利用していると考えられる。	

D30・D31号堅穴建物

種 国 PL_No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第28回 PL_149	1 磁文土器 深鉢	フク上 口縁部破片		織織織・石英少 白色粒/良好/灰褐色	波状織か。0段多条のLRとRLによる羽状織文構成。規則性が伴わぬ菱形文をなさない。内面撫で調整。	前期中葉
第28回 PL_149	2 磁文土器 深鉢	床直 口縁部破片		織織織・石英少 白色粒/良好/褐色	横位無節Lが複数。内面丁寧な研磨を加える。	前期中葉
第28回 PL_149	3 磁文土器 深鉢	フク上 口縁部破片		織織織・石英少 白色粒/良好/灰褐色	横位LRを施す。内面平滑な横位撫で調整。外表面磨滅。	前期中葉
第28回 PL_149	4 磁文土器 深鉢	フク上 体部破片		織織織・石英少 白色粒/良好/明黄色	0段多条のLRとRLによる羽状織文構成。規則性が伴わぬ菱形文をなさない。内面弱い研磨を施す。	前期中葉
第28回 PL_149	5 磁文土器 深鉢	フク上 体部破片		織織織・石英少 白色粒/良好/褐色	0段多条のLRとRLによる横位羽状織文構成。内面丁寧な研磨を加える。	前期中葉
第29回 PL_149	6 磁文土器 深鉢	フク上 体部破片		織織織・石英少 白色粒/良好/褐色	体部の中位。無節Lと結節部が施される。内面平滑な横位撫で調整。	前期中葉

種 国 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残 余 率	計測値	胎土・焼成・色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第2984 PL.149	7	縄文土器 深鉢	フク土 体部破片		粗織織・輝石少 白色粒/良好/明黄 褐色	2条の刃目を付す横位隆線間に強い横位刺突文を施す。以 下R.Lを施す。内面平滑な撫で調整。	前期中葉
第2985 PL.149	8	縄文土器 深鉢	フク土 体部破片		粗織織・白色粒/ 良好/明褐色	直前段合焼(直前合2 R)とL.Rによる横位羽状織文構成。 内面平滑な撫で調整。	前期中葉
第2986 PL.149	9	縄文土器 深鉢	フク土 体部下半破片		粗織織・石英少 白色粒/良好/褐色	無筋が横位施文される。内面撥位撫でにより平滑。	前期中葉
第2987 PL.149	10	縄文土器 深鉢	フク土 底部破片	底 (9.0)	粗織織・石英少 白色粒/良好/褐色	L上底を呈す。体部はR.L、底面はL.Rを施す。内面深い 撫で。	前期中葉
第2988 PL.149	11	縄文土器 深鉢	フク土 底部破片	底 (10.0)	粗織織・石英少 白色粒/良好/褐色	L上底を呈す。体部は無文で撫で、底面は研磨を加える。 内面深い撫で調整。	前期中葉
第2989 PL.150	12	縄文土器 深鉢	フク土 口縁部破片		粗織織・石英少 白色粒/良好/灰褐色	波状紋。やや厚手の器厚。連続爪形文と平行沈線による菱 形状意匠。内面弱い部位研磨を加える。	前期中葉
第2990 PL.150	13	縄文土器 深鉢	フク土 口縁部破片		粗織織・石英少 白色粒/良好/黒褐色	平緩か。連続爪形文による小型の菱形状意匠が配される。 内面深い研磨を加える。	前期中葉
第2991 PL.150	14	縄文土器 深鉢	フク土 口縁部破片		粗織織・石英少 白色粒/良好/暗赤 褐色	波状紋。やや薄手の器厚。連続爪形文による菱形状意匠が 波状面に配される。内面平滑な撫で調整。	前期中葉
第2992 PL.150	15	縄文土器 深鉢	フク土 体部上半破片		粗織織・石英少 輝石少/白色粒/良 好/暗褐色	頸部～体部に設けられる横位内皮平行沈線層。おそらく菱 形状意匠下端か。内面研磨を施す。	前期中葉
第2993 PL.150	16	縄文土器 深鉢	フク土 体部破片		粗織織・石英少 白色粒/良好/褐色	0段2条のL.RとR.Lによる羽状織文構成。菱形状意匠を 想起するか。内面平滑な撫で調整。	前期中葉
第2994 PL.150	17	縄文土器 深鉢	フク土 口縁部破片		粗織織・石英/白 色粒/良好/褐色	平緩。豊糸LとRを一直線とした側面圧痕が横位多段に配さ れ。斜位刺切文も施される。内面平滑な撫で調整。	前期初頭
第2995 PL.150	18	縄文土器 深鉢	床直 体部破片		粗織織・輝石少 白色粒/良好/褐色	横位降継に円形刺突文が沿う。縄文は横位L.R。内面は平 滑な撫で、外面部脣部。	前期初頭
第2996 PL.150	19	縄文土器 深鉢	フク土 口縁部破片		粗織織・石英少 白色粒/良好/黃褐色	0段多条のL.RとR.Lによる横位羽状織文構成。内面研磨 を施す。	前期前葉
第2997 PL.150	20	縄文土器 深鉢	フク土 体部破片		粗織織・石英/白 色粒/良好/明赤褐色	斜位内皮沈線層をやや亂雑に施す。地文は丸組紐。内面平 滑な撫で調整。	前期前葉
第2998 PL.150	21	縄文土器 深鉢	フク土 口縁部破片		粗織織・石英少 白色粒/良好/にぶ い黄褐色	波状縫迹頂部。3・4条単位の内皮平行沈線による施文。 菱形意匠や半円意匠が組み込まれる。地文に丸組紐が施さ れる。内面研磨を加える。	前期前葉
第2999 PL.150	22	縄文土器 深鉢	フク土 体部破片		粗織織・石英少 白色粒/良好/明黄 褐色	横位内皮平行沈線層以降斜位沈線層による小区画文。地文 は丸組紐。内面平滑な横位撫で調整。	前期前葉
第2999 PL.150	23	縄文土器 深鉢	フク土 体部破片		粗織織・白色粒/ 良好/明褐色	横位L.RとR.Lの羽状織文構成。内面は弱い撫で調整に止 まる。	前期後葉
第2999 PL.150	24	縄文土器 深鉢	フク土 体部破片		粗織織・白色粒/ 良好/明褐色	横位L.Rを施す。内面弱い撫で調整に止まる。	前期後葉
第2999 PL.150	25	縄文土器 深鉢	フク土 体部破片		粗織織・白色粒/ 良好/暗褐色	横位L.RとR.Lの羽状織文構成。内面は弱い撫で調整に止 まる。	前期後葉
第2999 PL.150	26	縄文土器 深鉢	フク土 口縁部破片		粗織織・石英少 白色粒/良好/暗褐色	口縁部に横位結節文。以下横位結節文を施す。極めて薄手 で質実な感が強く異系統土器と思われる。	前期中葉
第2999 PL.150	27	削片石器 石器	ほぼ完形	長 2.5 厚 0.3 幅 1.2 重 0.5	黑曜石	両面加工により整形する。	凹基有茎鐵
第2999 PL.150	28	磨石器 磨石	完形	長 6.9 厚 5.2 幅 327.5	粗粒輝石安山岩	表面のほぼ全面に磨面が認められる。円擦を利用している と考えられる。	
第2999 PL.150	29	磨石器 磨石	完形	長 13.5 厚 4.6 幅 8.4 重 725.4	粗粒輝石安山岩	表面のほぼ全面及び裏面の中央付近に磨面が認められる。 円擦を利用していると考えられる。	
C13号窓穴建物							
種 国 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残 余 率	計測値	胎土・焼成・色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第31回 PL.150	1	縄文土器 深鉢	フク土 口縁部		A 5	口縁部頂面下に刻み目を付加した垂下降帶を施し、半截竹 管状器具の並行沈線文で菱形意匠を構成。外面部に煤状炭 化物付着、内面や被熱風化。	有尾式
第31回 PL.150	2	縄文土器 深鉢	フク土 口縁部		A10	波状口縁。幅広の半截竹管状器具の並行沈線文により菱形意 匠を構成。内面横位磨き。	有尾式
第31回 PL.150	3	縄文土器 深鉢	フク土 脚部		A 5	半截竹管状器具の並行沈線文により菱形意匠を構成。内面丁 寧な横位磨き。	有尾式
第31回 PL.150	4	縄文土器 深鉢	フク土 口縁部		A 5	内削ぎ状口脚部外端に刻み目を施す。半截竹管状器具の連続 爪形文を複数施して菱形意匠を構成か。内面丁寧な横位 磨き。	有尾式
第31回 PL.150	5	縄文土器 深鉢	フク土 脚部		A 5	幅広半截竹管状器具の横位連続爪形文により菱形意匠を構成。 内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第31回 PL.150	6	縄文土器 深鉢	フク土 脚部		A10	幅広半截竹管状器具の横位連続爪形文により菱形意匠を構成。 内外面共にやや被熱風化。	有尾式

遺物觀察表

種類	出上位置	計測値	胎土・焼成・色調	成形・整形の特徴	備考	
No	器種	残存率	石材・素材等			
第31回 PL.150	7 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部片	A 6	0段多条RL・LR縞文を横位・交互に多段施文して羽状の意匠を構成。内外面共にやや被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	有尾式	
第31回 PL.150	8 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部片	A10	RL縞文を横位・多段に施文。内面横位磨き。	有尾式	
第31回 PL.150	9 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部片	A 5	L状文を横位・多段に施文。内面丁寧な横位磨き。	有尾式	
第31回 PL.150	10 瓔文土器 深鉢	フク土 脚部片	A 5	幅広竹管状具の連續爪彫文により菱形意匠を構成か。内外面共にやや被熱風化。	有尾式	
第31回 PL.150	11 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部片	A 5	LR・RL縞文を横位・交互に多段施文して羽状の意匠を構成。内外面共にやや被熱風化。	有尾式	
第31回 PL.150	12 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部片	E 2	半截竹管状具の並行捺痕文を複数施し、その間際に同工具の刻文を横位施文。内面丁寧な横位磨き。	田中下層式	
第31回 PL.150	13 瓔文土器 深鉢	フク土 脚部片	A 7	く字形に強く屈する器形。円形竹管状具の刻文を施す。内面やや被熱風化。	鶴ヶ島台式	
第31回 PL.150	14 瓔文土器 深鉢	フク土 脚部片	A 5	複数の横位刻み日除帶文やR・Lの側面押圧彫文や円形竹管削文を施す。内外面共にやや被熱風化。	二ツ木式	
第31回 PL.150	15 瓔文土器 深鉢	フク土 脚部片	A 5	原体長10mm前後の短い0段多条RL・LR縞文を横位・多段に交互に施文して羽状意匠を構成。内外面共にやや被熱風化。	二ツ木式	
第31回 PL.150	16 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部片	A 1	口部上面に鋸歯状の削み目を施す。以下に0段多条RLの隣接部を横位施文。円形貼付文を施す。	聞山I式	
第31回 PL.150	17 瓔文土器 深鉢	フク土 脚部片	A 7	斜削部に刻み目を持ち隣接2条を横位に施し、その間際に斜削部を円形状に施文。下位に0段多条RLの隣接付き縛文を横位に施す。		
第31回 PL.151	18 剥片石器 石鑿	フク土 ほぼ完形	長 幅 (2.1) 厚 重 0.3 0.9	黒曜石	表面裏面に押圧剝離痕が認められ丁寧に加工整形する。	凹基無茎鐵
第31回 PL.151	19 剥片石器 石匙	フク土 完形	長 幅 3.3 4.1	厚 重 0.8 7.3	褐色碧玉	表面裏面に素材剥片の剝離面を大きく残し、横長剥片を素材とする。つまり部分は両面加工であるが、内側及び下部末端剥片面加工が主体的である。
第31回 PL.151	20 剥片石器 石匙	フク土 完形	長 幅 7.4 2.6	厚 重 1.1 22.1	珪質頁岩	表面裏面に素材剥片の剝離面を大きく残す。長範囲剥片を素材とし、打面は單面削面である。左側辺の二次加工は両面加工であるが、右側辺は片面加工が主体的である。
第31回 PL.151	21 磨石器 磨石	フク土 完形	長 幅 13.1 7.9	厚 重 4.3 616.5	粗粒輝石安山岩	円錐面を利用する。表面裏面のほぼ全面に磨削痕が認められる。表面の中央付近に敲打痕がわずかに認められる。
第31回 PL.151	22 磨石器 磨石	フク土 完形	長 幅 14.9 9.1	厚 重 4.5 890.2	粗粒輝石安山岩	円錐面を利用する。表面裏面のほぼ全面に磨削痕が認められる。表面裏面と側面との境界はすこし棱を形成する。表面裏面の中央付近及び下端部には敲打痕が集中する。
第31回 PL.151	23 磨石器 石皿	フク土 ほぼ完形	長 幅 (25.8) (31.2)	厚 重 11 11600	粗粒輝石安山岩	表面裏面の中央付近に滑らかな部分が認められる。表面裏面は自然である。右側面には細かい凹凸で構成され敲打により整形されたと考えられる。その他の側面は削面面で構成される。

C10号堅穴建物

種類	出上位置	計測値	胎土・焼成・色調	成形・整形の特徴	備考	
No	器種	残存率	石材・素材等			
第32回 PL.151	1 瓔文土器 深鉢	フク土 脚部片	A 1	0段多条のLR縞文を横位施文。外側一部に煤状炭化物付着。	有尾式	
第32回 PL.151	2 瓔文土器 深鉢	フク土 脚部片	A 1	半截竹管状具の連續爪彫文を横位施文。内面横位磨き。	有尾式	
第32回 PL.151	3 剥片石器 石鑿	フク土 4/5	長 幅 (2.8) 1.5	厚 重 1.1 3.1	黒曜石	一部の自然面を残し角錐を利用。両面加工により尖頭部を作出する。先端部欠損。
第32回 PL.151	4 剥片石器 磨石片	フク土 完形	長 幅 17.2 4.2	厚 重 2.9 290.1	変玄武岩	先端刃部付近を中心丁寧に研磨整形される。先端刃部では刃端部に施される細かい擦痕が表裏面でわずかに認められ使われ痕の可能性がある。

C15号堅穴建物

種類	出上位置	計測値	胎土・焼成・色調	成形・整形の特徴	備考	
No	器種	残存率	石材・素材等			
第33回 PL.151	1 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部片	D 2	波紋口縁。半截竹管状具の横位連續爪彫文を複数施す。外側一部に煤状炭化物付着、内面丁寧な横位磨き。	諸職a式	
第33回 PL.151	2 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部片	G 1	波紋口縁。RL・LR縞文を横位・交互に施文して羽状の意匠を構成か。内面やや粗い横位磨き。	諸職a式	
第33回 PL.151	3 瓔文土器 深鉢	フク土 口縁部片	G 1	波紋口縁。RL・LR縞文を横位施文。内面裏面で構成される。	諸職a式	
第33回 PL.151	4 瓔文土器 深鉢	フク土 脚部片	C 1	RL縞文を横位・多段に施文。内面一部に被熱風化。	諸職a式	
第33回 PL.151	5 瓔文土器 深鉢	フク土 脚部片	A10	条直文を外面縦・斜位に、内面横位に施す。内外面共にやや被熱風化。	早期末葉	
第33回 PL.151	6 瓔文土器 深鉢	フク土 脚部片	A 2	半截竹管状具の横位連續爪彫文を複数施す。下位に0段多条RL・LR縞文を横位・交互に施文。内面横位磨き。	有尾式	
第33回 PL.151	7 磨石器 四石	フク土 完形	長 幅 9.9 7.5	厚 重 4.3 486.7	粗粒輝石安山岩	円錐面を利用する。表面の中央に2才所の凹みが認められる。下方の凹み底部には断面U字形の線条の擦痕が認められる。縦辺部には敲打痕が散在する。裏面のほぼ全面に磨面が認められる。
第33回 PL.151	8 磨石器 磨石	フク土 完形	長 幅 8.5 8.1	厚 重 4.4 426.1	粗粒輝石安山岩	円錐面を利用する。表面裏面の中央付近に磨面が認められる。

C 9号堅穴建物

種 因 PL.No	種 類 器 種	出土位置 深跡	出土位置 深跡	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第34回 PL.151	1 繩文土器 深跡	床直 胴部下半～底部 完全	底	7.2	F 3	微隆起帯の懸垂文を施し、LR縄文を縱位・充填的に施文。 内外面共にやや被熱風化・剥離。	加曾利E 4式
第34回 PL.151	2 繩文土器 深跡	床直 胴部中央1/3			D 8	LR縄文を縱位に全面施文。内外面共に被熱風化。	加曾利E 4式
第34回 PL.151	3 繩文土器 深跡	フク土 口縁部片			D 8	口縁部に横位の微隆起帯を施し、LR縄文を充填的に施文。 内面横位磨き。	加曾利E 4式
第34回 PL.151	4 磬石器 磨石	床下 完全	長 10.5 厚 3.6 幅 6.5 重 393.1		粗粒輝石安山岩	円鑿を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。	

C 11号堅穴建物

種 因 PL.No	種 類 器 種	出土位置 深跡	出土位置 深跡	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第37回 PL.151	1 繩文土器 深跡	床下 口縁部片			E 1	口縁波底部に横状の8字状波帶文を施し、LR縄文を充填施文。 口縁部に横位微隆起帯を残らせ、以下にLR縄文を縱位施文。 内外面共に煤状炭化物付着。	称名寺1式併行
第37回 PL.151	2 繩文土器 深跡	床下 口縁部片			D 8	波状頂部の中央突起内部に8字状の捻軸附文を施し、 口縁部に波状頂部に8字状の捻軸附文を施す。	称名寺1式
第37回 PL.151	3 繩文土器 深跡	床上 口縁部片			D 2	外側から内側の口縁波底部に8字状の捻軸附文を施す。 口縁部に横位微隆起帯を施す。	称名寺1式併行
第37回 PL.151	4 繩文土器 深跡	床直 口縁部片			D 8	口縁波底部にやや横位微隆起帯を施す。 LR縄文を充填的に施す。	称名寺1式併行
第37回 PL.151	5 繩文土器 深跡	床直 口縁部片			G 1	波状口縁。口縁部に断面輪郭状の横位降伏帶を施す以外は無文。 内面共に被熱風化。内面口縁部に煤状炭化物付着。	称名寺1式併行
第37回 PL.151	6 繩文土器 深跡	床直 口縁部片			E 1	2本の棒状微隆起帯間に尖頭状の棒工具で刺突文を2列施す。 内面横位磨き。	称名寺1式併行
第37回 PL.151	7 繩文土器 深跡	フク土 口縁部片			E 1	短く内側する口縁部に細い棒工具の刺突文を2列割らせる。 内面共にやや被熱風化。	称名寺1式併行
第37回 PL.151	8 繩文土器 深跡	フク土 口縁部片			B 1	外崩ぎ状の口縁下に無文部を置いてLR縄文を充填的に施文。	称名寺1式
第37回 PL.151	9 繩文土器 深跡	床直 胴部片			D 8	大形の楕状把手が破損・欠損。LR縄文を充填的に施文。 外側一部に煤状炭化物付着。	称名寺1式併行
第37回 PL.151	10 繩文土器 深跡	床直 胴部片			D 2	瘤状の突起や横位微隆起帯を施し、LR縄文を充填的に施文。 外側一部に煤状炭化物付着。	称名寺1式併行
第37回 PL.151	11 繩文土器 深跡	床直 口縁部片			D 8	沈線区画を施す。ややかいLR縄文を充填施文。内外面共に被熱風化。外側一部に煤状炭化物付着。	称名寺1式併行
第37回 PL.152	12 繩文土器 深跡	フク土 胴部片			E 1	J子型の沈線区画を施す。LR縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化。	称名寺1式
第37回 PL.152	13 繩文土器 深跡	床下 胴部片			D 8	S字型または8字状の沈線区画を施す。LR縄文を充填的に施文。 内外面共にやや被熱風化。	称名寺1式併行
第37回 PL.152	14 繩文土器 深跡	床直 胴部片			D 8	微隆起帯に沿って8字状の沈線区画文を施す。LR縄文を充填施文。外側一部に横状炭化物付着。	称名寺1式
第37回 PL.152	15 繩文土器 深跡	床直 胴部片			D 8	S字状の沈線区画文を施す。LR縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化。	称名寺1式
第38回 PL.152	16 繩文土器 ミニチュア 深跡	床直 口縁部1/6	口 (7.0)		E 1	口縁下に幅狭の無文部を置き、以下に異条のRL縄文を縱位に施す。内面粗い横位磨き。指添状压痕を残す。	称名寺1式併行
第38回 PL.152	17 繩文土器 深跡	床上 底部1/2	底 (6.0)		D 2	内外面共に丁寧な横位磨き。	称名寺1式併行
第38回 PL.152	18 繩文土器 深跡	床直 底部1/2	底 (12.6)		D 8	内外面共にやや被熱風化。外面に灰付着。	称名寺1式併行
第38回 PL.152	19 繩文土器 深跡	フク土 胴部片			D 8	LR縄文を縱位に施文し、幅広のS字型の沈線文を施す。先端部に横位磨き。	加曾利E 4式
第38回 PL.152	20 繩文土器 深跡	床直 胴部片			D 8	LR縄文を縱位施文し、沈線系文を施す。内面被熱風化・剥離。	加曾利E 4式
第38回 PL.152	21 剣片石器 石礫	フク土 完全	長 1.3 厚 0.3 幅 1.2 重 0.4		黒曜石	表裏面共に押圧剥離痕が認められ丁寧に加工整形する。	凹基無茎織
第38回 PL.152	22 剣片石器 石礫	フク土 石礫	長 (2.3) 厚 0.4 幅 (1.1) 重 0.5		チャート	表裏面共に押圧剥離痕が認められ丁寧に加工整形する。先端を尖錐状に作出加工する。先端部及び両端部先端欠損。	凹基無茎織
第38回 PL.152	23 剣片石器 石礫	床直 完全	長 (2.2) 厚 0.4 幅 (1.5) 重 1.2		珪質頁岩	表裏面共に押圧剥離痕が認められ丁寧に加工整形する。先端部及び両端部先端欠損。	凹基無茎織
第38回 PL.152	24 剑片石器 石匙	フク土 完全	長 4.6 厚 1.1 幅 6.5 重 15.1		珪質頁岩	表裏面に素材削片の剥離面を大きく残す。打痕は單斜面である。つまみ部は背面加工であるが、橢形部と推定される下部末端は片面加工が主体である。表面の左側辺上方に微細剥離痕が認められる。	
第38回 PL.152	25 磬石器 門石	床直 完全	長 11.5 厚 4.3 幅 9.6 重 705.8		粗粒輝石安山岩	円鑿を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表面の凹みは2カ所に分別することができる。裏面の凹みは1カ所である。	
第38回 PL.152	26 磬石器 磨石	床直 完全	長 10.8 厚 4 幅 6.4 重 409.1		粗粒輝石安山岩	円鑿を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表面の中間に敲打痕が認められる。	
第38回 PL.152	27 磬石器 多孔石	床直 完全	長 18.2 厚 8.8 幅 12.7 重 2482		粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩が利用する。表面のやや上方に漏斗状の孔が3カ所認められる。	
第38回 PL.152	28 磬石器 多孔石	フク土 2/3	長 21.2 厚 10.1 幅 15.6 重 3528.9		粗粒輝石安山岩	亜角礫を利用する。表面裏面に漏斗状の凹みが認められる。	

遺物観察表

種 国 PL., No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第38回 PL.152	29 石製品 石製品	床直 1/3	長 幅	(3.8) (1.0)	厚 重	(0.5) 2.2	葉ろう石	外面は丁寧に研磨整形されており光沢がある。孔の内部は中央やや上方に稜が形成されており、稜より下は横方向の擦痕が主である。稜より下は横方向と縱方向の擦痕が混在する。

C 18号堅穴建物

種 国 PL., No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第40回 PL.152	1 瓢文土器 深鉢	フク土 口縁部片				E 4	口縁波頂部に付された鶴嘴把手に連接して横位の微隆起帯を有す。面部はし縦文を点て・斜位に施す。外面保塗炭化物を付す。内面横位磨き。	称名寺1式併行
第40回 PL.152	2 瓢文土器 鉢	フク土 鉢部片				G 1	把手部が欠損するが、両耳的な無文土器。	称名寺1式併行
第40回 PL.152	3 瓢文土器 深鉢	フク土 鉢部片				E 4	縦・凹穫懸垂文を施し、LR縦文を充填的に擬位施す。外表面にやや被熱風化。	称名寺1式併行
第40回 PL.152	4 瓢文土器 深鉢	フク土 鉢部片				E 4	LR縦文を縦位施す。外表面共にやや被熱風化、内面一部に保塗炭化物を有す。	称名寺1式併行
第40回 PL.152	5 瓢文土器 瓢形土器	フク土 口縁部片				D 2	微隆起帯により文様構成。外表面共に赤色彫彩、丁寧な磨き。	称名寺1式併行
第40回 PL.152	6 瓢文土器 深鉢	フク土 口縁部片				A 3	波状口縁。半截竹管状模のコンバス文や並行沈線文・連續割れ文を施す。内面割れ文を施す。	開山1式
第40回 PL.152	7 磨石器 門石	フク土 完形	長 幅	12.5 7.6	厚 重	3.6 449.7	粗粒輝石安山岩	円錐を利用す。表裏面のほぼ全面に磨面が認められ、側面部分の境界には稜が形成される。表面の中央には深い漏斗状の凹みが3力所認められ、裏面の中央にも漏斗状の凹み2カ所認められる。
第40回 PL.152	8 磨石器 磨石	フク土 完形	長 幅	13.9 5.7	厚 重	3.6 481.3	粗粒輝石安山岩	円錐を利用す。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。右側面の一部にも磨面が認められる。表面の中央付近に敲打痕が認められる。
第40回 PL.152	9 磨石器 門石	フク土 完形	長 幅	13.6 9.9	厚 重	5.7 124.4	粗粒輝石安山岩	円錐を利用す。表面の中央に凹みが2カ所認められ、その上に敲打痕が残る。裏面の中央にも敲打痕が集中する。表面側面と右側面の中央付近に磨面が認められ、表裏面と右側面との境界は棱を形成する。
第40回 PL.152	10 磨石器 多孔石	フク土 完形	長 幅	24 26.7	厚 重	9.6 8000	粗粒輝石安山岩	扁平な円錐を利用す。と考えられる。表面に漏斗状の孔が多数認められる。孔の内面は細かい凹凸で構成されており比較的滑らかである。

C 5号堅穴建物

種 国 PL., No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第42回 PL.153	1 削片石器 石匙	フク土 完形	長 幅	7.6 4.2	厚 重	1.7 35.1	黒色頁岩	表面裏面に素材削片段階の剥離面を大きく残す。打面は單刷離面である。概観削片を素材とし、二次加工は片面加工を主体とする。
第42回 PL.153	2 石製品 石製品	P10型 4/5	長 幅	7 3.3	厚 重	0.9 36.6	安質蛇紋岩	全体的に丁寧に研磨整形されており光沢がある。表面裏面には細かい擦痕が多数認められる。
第42回 PL.153	3 削石器 石皿	床直 完形	長 幅	31.2 30.3	厚 重	11.2 15950	粗粒輝石安山岩	円錐を利用す。表面のほぼ全面と裏面の下部に滑らかな部分が認められる。表面の中央には帶状に炭化物がわずかに付着する。

D 27号堅穴建物

種 国 PL., No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第43回 PL.153	1 削片石器 石鍬	フク土 完形	長 幅	1.6 1.4	厚 重	0.5 0.6	黒色安山岩	両面加工により整形する。
第43回 PL.153	2 削片石器 門石	床直 完形	長 幅	10.6 8.4	厚 重	4.6 592.6	粗粒輝石安山岩	表面のほぼ中央に凹みが1箇所認められ周囲に目面が形成される。裏面のほぼ全面に磨面が認められる。亜円錐を利用していると考えられる。
第43回 PL.153	3 削石器 磨石	床直 完形	長 幅	11.3 9.9	厚 重	4.2 699.2	粗粒輝石安山岩	裏面裏面のほぼ全面に磨面が認められる。円錐を利用していると考えられる。
第43回 PL.153	4 削石器 磨石	床直 2/3	長 幅	(10.5) (8.0)	厚 重	(4.6) 599.7	ひん岩	表面のほぼ全面及び右側面の一部に磨面が認められる。裏面は全体的に表皮が剥落しており敲打による剥落の可能性がある。円錐を利用していると考えられる。

D 2号堅穴状遺構

種 国 PL., No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第48回 PL.153	1 削片石器 石鑿	フク土 ほぼ完形	長 幅	(1.5) (1.4)	厚 重	0.4 0.6	チャート	削離面の棱を器体中央に取り込み製作された小形の石鑿。削片の打面部を基部側に用い、粗く加工して形状を整える。円錐無茎鍬。
第48回 PL.153	2 削石器 敲石	フク土 完形	長 幅	6.7 6.3	厚 重	2.5 148.1	粗粒輝石安山岩	側面には周囲するように敲打痕を伴う剥離痕が巡る。背面側面には著しい摩耗跡。小形扁平鍬を用いる。

縄文時代土坑

種	國	類	器	出土位置	残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第718	1	縄文土器	D17号土坑 口縁部片				織錦陶・白色粒/ 良好/黒褐色	口縫部角頭状を呈し口縫部僅かに外反。浅い横位沈縫が数 条配される。口縫部のみ研磨。内面平滑な撫で調整。	早中期中葉	
第719	2	縄文土器	C19号土坑 口縁部片				A7	波状口縫。内削ぎ口縫部外端に削み目を施す。竹管状具 の摩状区画文内や外に押引状結節付被文と円形刻突文を 施す。外面横位条痕文・模状炭化物付着。内面被熱風化。	鶴ヶ島台式	
第718	3	礫石器	C19号土坑 完形	長 幅	12.2 8.8	厚 重	7.4 995.5	粗粒輝石安山岩	円錐を利用する。表面の中央付近に磨面が認められる。	
第718	4	縄文土器	C20号土坑 口縁部片				A 7	口縫部外端に削み目を施す。半截竹管状具の押引状結節次 継文を施す。内面共に横位条痕文、外面一部に模状 炭化物付着。	鶴ヶ島台式	
第718	5	縄文土器	C23号土坑 口縁部片				A 7	波状口縫。内削ぎ口縫部内・外端に削み目を施す。琵狀 貝の曲線文や模状区画文内に押引状結節沈縫文と円形刻突 文を施す。内面共に横位条痕文。	鶴ヶ島台式	
第718	6	縄文土器	D153号土坑 体部上～底部 1/3残存		底	5.6	粗織錦・石英・白 色粒/やや軟質/暗 褐色	底盤は平底。体部半分が僅かに内湾し上半は強く聞く。幅 25mm程の小口抜工具による斜位条痕文が覆う。内面も弱い 条痕文を見るが器底摩耗する。	早期後葉	
第718	7	縄文土器	D180号土坑 体部破片				織錦陶・石英多・ 白色粒/良好/にふ い/黄褐色	外面は斜位条痕後撫で調整。内面は横位・斜位条痕を施す。	早期後葉	
第718	8	縄文土器	D180号土坑 体部破片				織錦陶・片岩・雲 母末・白色粒/良 好/褐色	外面は横位・斜位条痕後撫で調整。内面は横位・斜位条痕を 施す。	早期後葉	
第718	9	縄文土器	D188号土坑 体部破片				粗織錦・石英大・ 片岩・白色粒/良 好/にふい/褐色	外面斜位条痕を施す。内面は弱い撫で調整に止まる。内外 面とも器底凹凸顯著。	早期後葉	
第718	10	縄文土器	C78号土坑 口縁部片				A 7	波状口縫。口縫部内・外端に削み目を施す。琵狀貝の摩 状区画文内や交点に押引状結節沈縫文と円形竹管文を施す。 内外共に横位条痕文、やや被熱風化・剥離。	鶴ヶ島台式	
第718	11	縄文土器	C78号土坑 制脚部片				A14	0段多条のRL縫文を横位施す。内面やや粗い横位磨き。	黒浜式	
第718	12	縄文土器	C5号土坑 口縁部片				I 2	無文土器。外面やや粗い撫で状の横位磨き、内面やや被熱 風化。	早期後葉	
第718	13	縄文土器	C5号土坑 制脚部片				A 5	RL縫文を横位施す。内面共にやや被熱風化。	有尾式	
第718	14	縄文土器	C25号土坑 制脚部片				K 1	内面共に横位条痕文、被熱風化。	早期末葉	
第718	15	縄文土器	C119号土坑 口縁部破片				粗織錦・石英・小 譚/良好/赤褐色	薄手の器壁を呈す。波状縫で口縫部に横位の削みを加える。 以下結節 RLを施す。内面粗い撫で調整	前初期初頭?	
第718	16	縄文土器	C249号土坑 口縁部破片				粗織錦・白色粒/ 良好/灰黃褐色	口縫部弧状小隣縫を貼付。口縫部に燃系LとRによる燃系 圧痕が沿い隣手筋位置へ変化する。小型円形刻突文が周 縁及び内縫に施される。内面研磨。	前初期初頭	
第718	17	縄文土器	C262号土坑 体部破片				粗織錦・石英大・ 白色粒/良好/明黃 褐色	0段多条のRL LとRによる横位多段羽状縫文構成。原体 幅は短い。	前初期葉	
第718	18	縄文土器	D269号土坑 体部破片				粗織錦・石英・褐 色粒・白色粒/良 好/明黃褐色	0段多条のRL LとRによる横位多段羽状縫文構成。原体 幅は短い。内面平滑な撫で調整。	前初期葉	
第728	19	縄文土器	B257号土坑 口縁部破片				織錦陶・石英少・ 白色粒/良好/黒褐 色	口縫部内湾。環付RL閉端部の横位多段施す。内面丁寧な 研磨を加える。	前前期葉	
第728	20	縄文土器	D09号土坑 口縁部片				A 7	波状口縫。口縫部に琵狀貝の鋸歯文や櫛状貝のコンバツ文 を施す。内面横位磨き。	鶴山Ⅱ式	
第728	21	縄文土器	D09号土坑 口縁部片				A 7	波状口縫に半截竹管文を施す。口縫部上面に竹管状具の 押引状結節沈縫文を施す。以下に0段多条の環付RL縫文 を横位・多段に施す。内面横位磨き。	鶴山Ⅱ式	
第728	22	縄文土器	D09号土坑 口縁部片				A 5	半截竹管状具の連続爪形文を複数条施して菱形意匠を構 成。外面一部に模状炭化物付着、内面丁寧な横位磨き。	有尾式	
第728	23	縄文土器	D243号土坑 口縁部破片				織錦陶・石英・ チヤート・白色粒/ 良好/明赤褐色	厚手の器壁を呈す。外反する口縫部。横位RL Lが覆う。内 面粗い研磨を加える。	前中期中葉	
第728	24	縄文土器	D243号土坑 口縁部破片				織錦陶・白色粒/ 良好/明黃褐色	肥厚口縫部に強い削み。口縫部二横位平行弦縫3条を設け る。内面丁寧な研磨を加える。	前前期葉	
第728	25	縄文土器	D66号土坑 制脚部片				A 4	半截竹管状具の平行弦縫文やコンバツ文を施す。内面横位 磨き。	黒浜式	
第728	26	縄文土器	D48号土坑 口縁部片				A 7	直状口縫に半截竹管状具の平行弦縫文を施す。口縫下に 横位に施す。外面被熱風化付着、内面横位磨き。	黒浜式	
第728	27	縄文土器	D48号土坑 制脚部片				A 7	半截竹管状具の平行弦縫文を横・縱位に施す。縫部に同具 の刻突文を施す。外面一部に模状炭化物付着、内面丁寧な 横位磨き。	黒浜式	
第728	28	礫石器	C48号土坑 完形	長 幅	10.5 8.3	厚 重	4.8 576.3	流紋岩	円錐を利用する。表裏面の中央付近に磨面が認められる。	

遺物觀察表

種 団 PL., No	種 器 類	出上位置 残存率	計測値	胎上/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第72回 PL.154	29 離石器 敲石	C48号土坑 完形	長幅 22.8 幅 6.1	厚 重 3.6 751.1	変玄武岩	全体的に研磨整形されており磨製石斧の転用品と考えられる。下部先端方向からの剥離面が数多く認められ、先端部にはつぶれが認められる。表面に長さ5mm、幅1mm程度の縦条の痕跡が集中する箇所が認められ敲打痕の可能性がある。
第72回 PL.154	30 鑄文土器 深鉢	C59号土坑 口縁～胴部1/3	口 (24.4)		A 7	波状口縁。口縁に半蔵竹管状具のやや逆曲したコシバズを多段に施す。胴部にはL.R・RL鑄文を横位・交互に多段施文として羽状の意匠を構成。内外面共に被熱風化、外表面炭化物付着。
第72回 PL.154	31 離石器 磨石	C59号土坑 完形	長幅 8.9 幅 7.3	厚 重 3.4 329	粗粒輝石安山岩	円礪を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。
第72回 PL.154	32 鑄文土器 深鉢	C77号土坑 口縁部分			A14	RL鑄文を横位施す。外表面炭化物付着、内面横位磨き。
第72回 PL.154	33 鑄文土器 深鉢	D25号土坑 体部破片				内皮平行沈線による横位沈線群と弧状意匠。内面弱い研磨を加える。
第72回 PL.154	34 鑄文土器 深鉢	D25号土坑 口縁～体部上半 破片				粗粒輝・石英・輝 石少・白色粒/良好 /明褐色
第72回 PL.154	35 鑄文土器 深鉢	D25号土坑 体部下半～底部 破片				粗粒輝・石英・輝 石少・白色粒/良好 /明褐色
第72回 PL.154	36 鑄文土器 深鉢	D25号土坑 口縁～体部上半 破片				波痕部。L.RとR.Lによる羽状沈線構成。内面横位研磨。36と同一個体。
第72回 PL.154	37 鑄文土器 深鉢	D25号土坑 体部下半～底部 1/3残存		底	(9.0)	内青味気間に開く体部下半。0段多条のL.Rと直前段合撫(直前合2R)による羽状沈線構成。内面底面研磨を加える。
第73回 PL.154	38 鑄文土器 深鉢	D182号土坑 体部破片				粗粒輝・石英・輝 石少・白色粒/良好 /褐色
第73回 PL.154	39 鑄文土器 深鉢	D271号土坑 口縁～体部下半 1/3残存	口 (32.0)			波痕僅かに上げ底で平滑な撫で。体部はL.RとR.Lによる羽状沈線構成。内面は平滑な撫で調整。煤付着。
第73回 PL.154	40 削石器 磨製石斧	D271号土坑 完形	長幅 25.2 幅 8	厚 重 5.2 1665.2	変玄武岩	口凹部側の研磨は丁寧で、ほとんど打痕が残らないほどであるが、両側面から頭部にかけては研磨は弱く敲打痕が良く残る。大型品で、形状は乳棒状を呈する。
第73回 PL.154	41 鑄文土器 深鉢	D232号土坑 体部破片				刃面部の研磨は丁寧で、ほとんど打痕が残らないほどであるが、両側面から頭部にかけては研磨は弱く敲打痕が良く残る。大型品で、形状は乳棒状を呈する。
第73回 PL.154	42 鑄文土器 深鉢	D248号土坑 体部破片				粗粒輝・石英少・ 白色粒/良好/褐色
第73回 PL.154	43 鑄文土器 深鉢	D283号土坑 体部破片				粗粒輝・石英少・ 白色粒/良好/褐色
第73回 PL.154	44 離石器 台石	D283号土坑 完形	長幅 18.6 幅 15.3	厚 重 5.9 2490.9	粗粒輝石安山岩	厚い板状地で、形状は略三角形を呈す。全面が被熱風化、剥離面も生じている。背面側中央付近に敲打痕が、裏面側平坦面には摩耗面が広がる。
第73回 PL.155	45 離石器 石皿	D283号土坑 ほぼ完形	長幅 (30.6) 幅 19.2	厚 重 6.4 3819	粗粒輝石安山岩	河床礫を長輪上三分、石面の素材としたもの。機能面には薄く済む。摩耗部は全周に広がっているが、特に中央より上半分が強く摩耗する。
第73回 PL.155	46 鑄文土器 深鉢	D199号土坑 体部破片				無節LとRの横位施文による羽状沈線構成。内面弱い撫で調整。
第73回 PL.155	47 鑄文土器 深鉢	D199号土坑 体部破片				無節LとRによる横位羽状沈線構成。内面平滑な撫で調整。
第73回 PL.155	48 鑄文土器 深鉢	D199号土坑 体部破片				粗粒輝少・石英・ 輝石・白色粒/良好 /明褐色
第74回 PL.155	49 鑄文土器 深鉢	D247号土坑 口縁部破片				粗粒輝・石英・ チャート・白色粒/ 良好/明褐色
第74回 PL.155	50 鑄文土器 深鉢	D247号土坑 口縁部破片				やや薄手の器底。R.LとRによる付加横位施文。内面丁寧な研磨を加える。
第74回 PL.155	51 鑄文土器 深鉢	D247号土坑 口縁部破片				粗粒輝・輝石少・ 白色粒/良好/褐色
第74回 PL.155	52 鑄文土器 深鉢	D247号土坑 体部破片				粗粒輝・石英少・ 輝石少・白色粒/良 好/灰褐色
第74回 PL.155	53 鑄文土器 深鉢	D247号土坑 体部破片				直前段合撫(直前合2Lと直前合2R)による横位羽状沈線構成。内面丁寧な研磨を加える。
第74回 PL.155	54 鑄文土器 深鉢	D247号土坑 体部破片				O段多条のL.R・R.Lによる羽状沈線による菱形意匠を配す。内面弱い研磨を施す。

種 国 PL.No	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎工/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	D247号土坑 体部破片		縦彫挫・石英少・ 白色粒/良好/褐灰色	横位 L R & R L による羽状彫文構成。内面丁寧な研磨を施す。	前期中葉	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	D247号土坑 体部上半破片		縦彫挫・石英少・ チャート・白色粒/ 良好/褐色	外反する体部上半。屈曲部に横位内皮平行沈線を設ける。 地文に横位 L R を施す。内面平滑な撫で調整。	前期中葉	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	D247号土坑 底部のみ残存	底 7.6	粗彫挫・石英・輝 石・白色粒/良好/ 明褐色	小型の深鉢か。内外面とも撫で調整。	前期中葉	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	D247号土坑 底部のみ残存	底 7.9	粗彫挫・石英少・ 白色粒/良好/にぶ い褐色	直立気味の体部下半。上げ底を呈す。体部は L R を施す。 内面弱い撫で調整。	前期中葉	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	D247号土坑 口縁部破片		縦彫挫・チャート・ 少・白色粒少/良好/ 明褐色	口回り内削割・幅広の内皮平行沈線を横位に施す。内面平 滑な研磨を加える。	前期中葉	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	D247号土坑 体部破片		粗彫石多・白色粒/ 良好/暗褐色	体部上半か、楕円の横位平行沈線群を設けて横位 L R を 施す。内面平滑な撫で調整。	前期後葉	
第74回 PL.155	削片石器 磨製石斧	D247号土坑 完形	長 幅 6.9	厚 重 4.4 1184.5	玄武岩	刀部側の研磨は丁寧だが、側縁から頭部の研磨は省力化し て雑である。器頭部を被削、刃部は被打けられ、潰れている。 頭部が被削したことで敲打具に転用したのかかもしれない。	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	C97号土坑 剥削部1/3		A 7	手削竹管状具の平行沈線文を横位・多段に施す。外表面熱 風化・削離、内面やや被熱風化・横位磨き。	黒浜式	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	C97号土坑 剥削部		A 7	粗彫文を横位施す。外表面熱風化・一部剥離、内面横位 磨き。	黒浜式	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	C97号土坑 剥削部		K 1	粗彫文を横位・多段に施す。内外面共にやや被熱風化・ 一部剥離。	諸磯 a式	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	C97号土坑 剥削部		C 3	粗彫文を横位・多段に施す。内外面共にやや被熱風化、 内面横位磨き。	諸磯 a式	
第74回 PL.155	鍛石器 磨石	C97号土坑 完形	長 幅 11.5	厚 重 6.2 871.2	粗粒輝石安山岩	円錐を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。 表裏面の中央付近に敲打痕が散在する。	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	C16号土坑 底部		A 1	手削竹管状具の平行沈線文を多段に全面施す。内外面共に やや被熱風化・外表面模状炭化物付着。	黒浜式	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	C16号土坑 剥削部		F 2	粗彫文を横位・多段に施す。外面一部に模状炭化物付着、 内面横位磨き。	諸磯 b式	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	C16号土坑 剥削部		D 3	圓端直筒自轉の粗彫文を横位施す。外面一部に模状炭化 物付着、内面横位磨き。	諸磯 b式	
第74回 PL.155	剖片石器 石器	C16号土坑 1/2	長 幅 (2.6) (1.9)	厚 重 (0.4) 1.5	黑色安山岩	表裏面共に押圧剥離痕が認められ丁寧に加工整形する。下 部剥欠。	
第74回 PL.155	縄文土器 深鉢	B255号土坑 体部破片		縦彫挫・石英・輝 石少・白色粒/良好/ 明褐色	薄手の器厚を呈し、やや異質感を受ける。横位 L R & R L による羽状彫文構成。内面横位撫で調整。	前期中葉	
第75回 PL.156	縄文土器 深鉢	D276号土坑 口縁部破片		縦彫挫・石英少・ 白色粒少/良好/に ぶい・黃褐色	やや厚手。小型の竹管による円形刺突文が施される。内面 研磨を加える。	前期中葉	
第75回 PL.156	縄文土器 深鉢	D276号土坑 体部破片		縦彫挫・石英少・ 白色粒/良好/灰黃 褐色	横位撫位 L & R L による羽状彫文構成。内面平滑な撫で調 整。	前期中葉	
第75回 PL.156	縄文土器 深鉢	D276号土坑 口縁部破片		縦彫石少・白色粒/ 良好/にぶい・黃褐 色	薄手の器厚を呈す。既先状突起下位か。横位浮線文2条を 体部間に施す。口部に横位浮線文による弧状意匠を施す。内面 弱い研磨・保付。	前期後葉	
第75回 PL.156	削片石器 石器	D276号土坑 4/5	長 幅 (2.9) (1.7)	厚 重 0.3 1.2	黑色頁岩	凹基無茎葉、返し手の両端を仄く、やや風化が進んでいる が、薄手で優品の部類に属す。完成度は高い。	
第75回 PL.156	縄文土器 深鉢	G60号土坑 1/2縁部		A 2	手削竹管状具の連続爪形文を施す。内外面共にやや被熱風 化。	有尾式	
第75回 PL.156	縄文土器 深鉢	G60号土坑 1/2縁部		A10	波状刃縁・手削竹管状具の連続爪形文により菱形意匠を構 成か。外面やや被熱風化・内面横位磨き。	有尾式	
第75回 PL.156	縄文土器 深鉢	G60号土坑 1/2縁部		A 7	R彫文を横位・多段に施す。外面模状炭化物付着、内面被 熱風化・削離。	有尾式	
第75回 PL.156	縄文土器 深鉢	G60号土坑 1/2縁部		A 7	浅状具の細沈線文で斜格子状の意匠を構成し、円形竹管文 を施す。外面やや被熱風化・内面横位磨き。	闇山Ⅱ式	
第75回 PL.156	削片石器 石器	G60号土坑 完形	長 幅 6.1	厚 重 1 19.5	珪質頁岩	表裏面に素材削り跡の剥離面を大きく残す。打面は自然 面であり縦刻片を素材とする。	
第75回 PL.156	縄文土器 深鉢	G237号土坑 体部破片		粗彫挫・石英少・ 輝石少・白色粒/良 好/にぶい・赤褐色	横位 L R を施す。外器面済。内面平滑な撫で。	前期中葉	
第75回 PL.156	縄文土器 深鉢	G237号土坑 体部破片		粗彫挫・石英・白 色粒/良好/灰黃 褐色	0段多条の L R & R L による縦位羽状彫文構成。あるいは 菱形意匠か。内面研磨。	前期中葉	
第75回 PL.156	縄文土器 深鉢	G237号土坑 剥削部		縦石英少・輝石少 /良好/にぶい・黃褐 色	2・3条単位の横位浮線文を多段に配す。横位 L R を加え る。内面平滑な研磨。	前期後葉	
第75回 PL.156	縄文土器 深鉢	G34号土坑 剥削部		A 7	R彫文を横位・多段に施す。外面やや被熱風化。内面縦位 磨き。	黒浜式	

遺物觀察表

種 国 PL.N.	種 類 種	出土位置 残存率	計測値	施工/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第758# PL.156	85 瓔文土器 深鉢	C84号土坑 削部片		A 2	0段多条のRL・LR彫文を横位し、半截竹管状具の平行沈 鏡文を施す。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第758# PL.156	86 瓔文土器 深鉢	C84号土坑 削部片		A11	外面部・内面部のやや粗雑で微弱な条痕文。内外面共に やや被熱風化。	鶴ヶ島台式
第758# PL.156	87 磨石器 磨石	C84号土坑 ほぼ完形	長 8.7 幅 8.4	厚 6 重 545.5	粗粒輝石安山岩 円錐を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。 表面裏面の中央付近に敲打痕が集中する。表面から左側面に かけてはやや黒変しており受熱の可能性がある。	
第758# PL.156	88 瓔文土器 深鉢	C91号土坑 削部片		A 7	0段多条のRL・LR彫文を横位・交互に施す。内外面共に 被熱風化。	有尾式
第758# PL.156	89 瓔文土器 深鉢	C91号土坑 削部片		A 7	RL・LR彫文を横位・交互に多段彫文して菱形意匠を構成か。 内外面共に被熱風化。一部削離。内面模状炭化物付着。	有尾式
第758# PL.156	90 瓔文土器 深鉢	C91号土坑 削部片		A15	0段多条のRL・LR彫文を横位・交互に施す。外面部被熱風化。 内面横・斜位磨き。	有尾式
第758# PL.156	91 瓔文土器 深鉢	C91号土坑 底部/2	底 10.0	A 7	やや上げ底度。内外面に被熱風化。	有尾式
第758# PL.156	92 瓔文土器 深鉢	C91号土坑 削部片		A 1	0段多条のRL・LR彫文を横位・交互に施す。底状具の コンパス文を施す。内面横位磨き。	圓山日式
第758# PL.156	93 瓔文土器 深鉢	C91号土坑 底部/3	底 (12)	D 8	内外面共に被熱風化。内面模状炭化物付着。	諸磲ア式
第758# PL.156	94 剣片石器 磨製石斧	C91号土坑 4/5	長 19.5 幅 (4.4)	厚 2.7 重 331.7	変玄武岩 全体的に研磨整形成される。先端部右側邊に細面が認めら れるが先端部付近に打点が観察され、使用時の衝撃剝離 の可能性がある。	
第768# PL.156	95 瓔文土器 深鉢	B230号土坑 口縁部破片		細繊維・石英少 白色粒/良好/黄褐色	小型の内皮平行沈線と連続爪形文が横位多段に配される。	前中期中葉
第768# PL.156	96 瓔文土器 深鉢	B230号土坑 口縁部破片		粗粒輝石・片岩・白 色粒/良好/灰黃褐色	口縫部外反する。横位LRが覆う。内面弱い研磨。	前期
第768# PL.156	97 瓔文土器 深鉢	B230号土坑 体部破片		粗繊維・石英少 輝石・白色粒/良好 /灰黃褐色	横位LRが覆う。内面研磨。被熱のため下半にはぶい黄 褐色を呈す。	前中期中葉
第768# PL.157	98 磨石器 磨石	B230号土坑 ほぼ完形	長 11.5 幅 7.8	厚 7 重 784.9	表面裏面の中央付近に磨面が認められる。円錐を利用して いると考えられる。	
第768# PL.157	99 磨石器 凹石	B230号土坑 底部	長 9.9 幅 7	厚 3.5 重 352.7	粗粒輝石安山岩 表面裏面の中央に凹みが認められる。表面裏面の凹みの周囲に は磨面が形成される。側面に敲打痕が散在する。円錐を利 用していると考えられる。	
第768# PL.157	100 瓔文土器 深鉢	C44号土坑 口縁部片		A 7	半截竹管状具の平行沈線文を複数条施す。内外面共に被熱 風化。一部削離。	有尾式
第768# PL.157	101 瓔文土器 深鉢	C44号土坑 口縁部片		A12	波状口縁・RL・LR彫文を横位・交互に施す。半截竹管 状具の平行沈線文により菱形意匠を構成か。内外面共にや や被熱風化。内面横位磨き。	有尾式
第768# PL.157	102 瓔文土器 深鉢	C44号土坑 削部片		A 7	RL・LR彫文を横位・交互に多段彫文して菱形意匠を構成か。 内外面共に被熱風化。一部削離。	有尾式
第768# PL.157	103 瓔文土器 深鉢	C44号土坑 口縁部片		A 7	半截竹管状具の連続爪形文により菱形意匠を構成。内外面 共に被熱風化。内面模状炭化物付着。内面一部削離。	有尾式
第768# PL.157	104 瓔文土器 深鉢	C44号土坑 口縁部片		A 7	小波状口縁下に鉛錠彫文を施す。半截竹管状具の平行沈 鏡文や波状文を施す。内面口縁部下に横継文。内外面共に やや被熱風化。外面部に煤状炭化物付着。内面一部削離。	黑浜式
第768# PL.157	105 瓔文土器 深鉢	C44号土坑 口縁部片		A 2	半截竹管状具の平行沈鏡文を複数条施す。内面やや被熱風 化。やや粗い擦除の磨き。	黑浜式
第768# PL.157	106 磨石器 石皿	C44号土坑 完形	長 30.9 幅 24.3	厚 10.2 重 11600	粗粒輝石安山岩 円錐を利用する。表面のほぼ全面に滑らかな部分が認め られる。表面の中央付近に薄い削離痕が集中し敲打による 痕跡と考えられる。	
第768# PL.157	107 瓔文土器 深鉢	B279号土坑 口縁部~体部上 半破片		細繊維・石英・片 岩・白色粒/良好/ ぶい赤褐色	波状縁・幅広の口縁部に太い平行沈線による大病の菱形 意匠を施す。頭部曲面部に横位平行沈線を設け以下。O 段多条のLRとRLによる横位羽状縦彫文構成による菱形文。 内面弱い擦除。口縫部内面研磨を加える。	前中期中葉
第768# PL.157	108 瓔文土器 深鉢	B279号土坑 体部上半破片		粗繊維・石英・白 色粒/やや軟質/明 黄褐色	口縫部内削離で孔を加える。口縫部及び体部上半に横位 連続爪形文を施す。口縫部にO段多条LRとRLによる崩 れた菱形意匠を配す。内面平滑な研磨。外面部被熱により 磨滅。	前中期中葉
第768# PL.157	109 瓔文土器 深鉢	B279号土坑 体部上半破片		粗繊維・石英少 輝石少・白色粒/良 好/ぶい黄褐色	横位連続爪形文2条を配し。O段多条LRとRLによる横 位羽状縦彫文構成。菱形意匠配す。内面弱い研磨を加える。	前中期中葉
第768# PL.157	110 瓔文土器 深鉢	B279号土坑 体部破片		細繊維・石英少 白色粒/良好/ぶい 黄褐色	横位O段多条LRとRLによる羽状縦彫文構成。内面平滑な 横位研磨を加える。	前中期中葉
第768# PL.157	111 瓔文土器 深鉢	B279号土坑 体部破片		細繊維・石英・白 色粒/良好/ぶい 黄褐色	O段多条LRとRLによる羽状縦彫文構成。顯著な菱形状では ない。内面平滑な研磨を加える。	前中期中葉
第778# PL.157	112 瓔文土器 深鉢	B279号土坑 口縁部破片		細繊維・白色粒/ 良好/ぶい黄褐色	波状縁か。幅広の内皮平行沈線が口縫部に沿う。地文は横 位LR。内面研磨を加える。	前中期中葉

種 国 PL-No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎・成形・色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
			幅	厚			
第778号 PL.157	113 縄文土器 深鉢	B279号土坑 口縁部破片			織維陶・白色粒 良好/に赤い黄褐色	薄手の器厚。角頭状の口部唇で波状線を呈す。口縁部に小型の連續爪形文を多段に配す。内面平滑な撫で調整。	前期中葉
第778号 PL.157	114 縄文土器 深鉢	B279号土坑 体部破片			織維陶・石英少 輝石少・白色粒/良 好/に赤い黄褐色	体部上半に幅広の内皮平行沈線を設け以下LRを施す。内面研磨を加える。	前期中葉
第778号 PL.157	115 縄文土器 深鉢	B279号土坑 口縁部破片			織維陶・石英少 輝石少・白色粒/良 好/に赤い黄褐色	連續爪形文による口頭部菱形文・三角形意匠を配す。内面横位研磨。	前期中葉
第778号 PL.157	116 縄文土器 深鉢	B279号土坑 体部上半破片			織維陶・石英少 白色粒/やや軟質/ に赤い黄褐色	横位無節Rが覆う。内面研磨を加えるも凹凸が顕著。	前期中葉
第778号 PL.157	117 縄文土器 深鉢	B279号土坑 口縁部破片			織維陶・白色粒/ やや軟質/に赤い 黄褐色	口縫部内削剂を呈す。以下横位無節しが覆う。原体端部の痕跡も見る。内面研磨を加えるも凹凸が顕著。	前期中葉
第778号 PL.157	118 縄文土器 深鉢	B279号土坑 口縁部破片			織維陶・石英少 白色粒/やや軟質/ に赤い黄褐色	口唇部僅かに残る角頭状をなす。以下横位LRとRLによる羽状構文構成。菱形意匠。内面弱い横位撫で。	前期中葉
第778号 PL.157	119 縄文土器 深鉢	B279号土坑 口縁部破片			粗織陶・片岩/白 色粒/海綿状骨針/ 良好/に赤い黄褐色	口縫部内削剂を呈す。横位LRとRLを施すが顕著な羽状ではない。内面平滑な撫で調整。	前脚中葉
第778号 PL.157	120 縄文土器 深鉢	B279号土坑 口縁部破片			粗織陶・片岩/白 色粒/海綿状骨針/ 良好/に赤い黄褐色	口縫部内削剂を呈す。横位LRとRLを施すが顕著な羽状ではない。内面平滑な撫で調整。	前脚中葉
第778号 PL.157	121 縄文土器 深鉢	B279号土坑 体部破片			粗織陶・石英・白 色粒/良好/に赤 い黄褐色	横位沈線2条以下に斜位弧状短沈線を施す。地文に横位LR。内面無調整に強く凹凸がある。	前脚中葉
第778号 PL.157	122 縄文土器 深鉢	B279号土坑 体部破片			織維陶・石英少 白色粒/良好/に赤 い黄褐色	幅広の平行沈線を口縫部に施す。地文に横位LRを施す。内面弱い横位撫で調整で口縫部に凸凹。	前脚中葉
第778号 PL.157	123 縄文土器 深鉢	B279号土坑 口縁部破片			織維陶・石英少 白色粒/良好/に赤 い黄褐色	横位隣線2条を口縫部に付し細かな連續爪形文を加える。以下2条の捺系压痕と矢羽状削切りを施す。内面研磨。	前脚前葉
第778号 PL.157	124 縄文土器 深鉢	B279号土坑 体部破片			織維陶・石英少 白色粒/やや軟質/ に赤い黄褐色	横位0段多条LRとRLによる幅狭の羽状織文構成。内面平滑な撫で調整。	前脚初頭
第778号 PL.157	125 縄文土器 深鉢	B279号土坑 底部破片			織維陶・石英少 白色粒/良好/に赤 い黄褐色	外反気味に聞く体部下半。底面は上げ直状で体部と共にLRを施す。内面撫で調整。	前脚初頭
第778号 PL.158	126 剥片石器 石匙	B279号土坑 完形	長 3 幅 3.6	厚 1 重 5.8	黑色安山岩	やや幅広の横型石匙。多孔質石材だが、見た目よりも剝離面の様はシャープに見える。刃部再生は明らかで、当初の形状は大きく変形してしまっている。	
第778号 PL.158	127 礫石器 磨石	B279号土坑 完形	長 5.8 幅 5.1	厚 3.9 重 163.3	粗粒輝石安山岩	表面とも摩耗する。輝面は煤けて赤化しており、一部ヒビ割れている。	
第778号 PL.158	128 礫石器 磨石	B279号土坑 完形	長 6.9 幅 5.8	厚 4.6 重 266.4	粗粒輝石安山岩	表面とも摩耗面が広がる。輝面にはならないが、やや中高で摩耗面は石材の目が潰れる程度に摩耗している。	
第778号 PL.158	129 礫石器 門臼	B279号土坑 完形	長 9.4 幅 8.1	厚 6.1 重 608.9	粗粒輝石安山岩	表面裏面の摩耗が激しい。輝の小口部分に敲打痕がある。	
第778号 PL.158	130 礫石器 四石	B279号土坑 完形	長 11.8 幅 9.5	厚 5.7 重 883.6	粗粒輝石安山岩	裏面とも摩耗するほか、背面側上面に闊斗状の痛み部がある。痛み部は摩耗せず新鮮であり、通常の摩耗した漏斗状の痛み部とは異なる。	
第778号 PL.158	131 礫石器 台石	B279号土坑 完形	長 37.2 幅 13.7	厚 8.8 重 6500	粗粒輝石安山岩	背面側に敲打痕と深い摩耗痕がある。裏面側には広い平坦面となっており、弱い摩耗痕が広がる。	
第778号 PL.158	132 礫石器 磨石	B279号土坑 完形	長 17.8 幅 16.4	厚 15.2 重 6300	粗粒輝石安山岩	裏面側に弱い摩耗痕がある。全面に打痕が広がるようにも見えるが、実態はわからない。大形の球形擦で、中期閃石などに伴う丸石を認める。	
第788号 PL.158	133 縄文土器 深鉢	C36号土坑 口縁部			I 2	半截竹管状具の連續爪形文を複数施す。外外面共にやや被熱風化。外側被熱化物付着。	有尾式
第788号 PL.158	134 縄文土器 深鉢	C36号土坑 側面部			A 7	粗面文を横位施し、芯原文を斜位に施す。外外面共に被熱風化。	有尾式
第788号 PL.158	135 縄文土器 深鉢	C36号土坑 底部1/2	底 (6.5)		A 7	0段多条のRL織文を横位施す。外外面共にやや被熱風化。	有尾式
第788号 PL.158	136 縄文土器 深鉢	C36号土坑 側面部			A 2	RL・LR織文を横位・交叉に多段施文して菱形意匠を構成。外外面共に被熱風化。内面一部に保状化物付着。	有尾式
第788号 PL.158	137 縄文土器 深鉢	C21号土坑 口縁部			A10	半截竹管状具の連續爪形文を横・斜位に施す。外外面一部に保状化物付着。内面横丁寧な位崩き。	有尾式
第788号 PL.158	138 礫石器 磨石	C21号土坑 完形	長 9.9 幅 8	厚 5 重 571.7	粗粒輝石安山岩	内面を利用す。表面の中央付近と裏面の一部に磨面が認められる。下側面を中心に敲打痕が認められる。	
第788号 PL.158	139 縄文土器 深鉢	C40号土坑 側面部			A 7	0段多条のLR織文を横位施す。外表面被熱風化・一部剝離、内面横丁寧な位崩き。	有尾式

遺物觀察表

種 団 PL, No	器 種	出上位置 残存率	計測値	胎上/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第7884 PL, 158	140 瓢文土器 深鉢	C40号土坑 削部片		A 1	手裁竹管状具の連続爪形文を施す。内外面共に被熱風化、一部剥離。	有尾式
第7885 PL, 158	141 瓢文土器 深鉢	C45号土坑 口縁～削部上位 1/4	口 (38)	A 7	O段多条のRL・LR縦文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。外面被熱風化・煤状炭化物付着、内面やや被熱風化・横位磨き。	有尾式
第7886 PL, 158	142 瓢文土器 深鉢	C63号土坑 削部片		A 7	RL縦文を横位施文。内外面共に被熱風化、一部剥離。	有尾式
第7887 PL, 158	143 瓢文土器 深鉢	C63号土坑 口縁～削部1/4	口 (35)	A 6	波状口縁、半截竹管状具の平行沈線文で菱形意匠を構成。削部にLR縦文を横位施文。内外面共に被熱風化、一部剥離。	有尾式
第7888 PL, 158	144 瓢文土器 深鉢	C63号土坑 削部1/3		A13	RL縦文を横位施文し、半截竹管状具の平行沈線文で菱形意匠を構成。外面被熱風化、一部煤状炭化物付着。	有尾式
第7889 PL, 158	145 瓢文土器 深鉢	C63号土坑 口縁～削部1/4		A 4	波状口縁、半截竹管状具の平行沈線文で菱形意匠を構成。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第7890 PL, 158	146 瓢文土器 深鉢	C63号土坑 削部片		A 6	RL・LR縦文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内外面共に被熱風化、一部剥離。	有尾式
第7891 PL, 158	147 磨石器 砾石	C63号土坑 完形	長 幅 11.8 7.6	厚 重 4.3 492.2	円錐を利用する。表面のほぼ全面及び裏面の一部に磨面が認められる。右側面のほぼ全面にも磨面が認められる。表面の中央にわずかに研打痕がある。	
第7906 PL, 159	148 瓢文土器 深鉢	G69号土坑 口縁部片		A12	RL・LR縦文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内外面共に被熱風化。	有尾式
第7907 PL, 159	149 瓢文土器 深鉢	G69号土坑 削部片		A 7	R・L縦文を横位・交互に施文。内外面共にやや被熱風化、外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第7908 PL, 159	150 刷片石器 石墨	G69号土坑 完形	長 幅 (1.4) (1.2)	厚 重 0.4 0.4	表面全面に押圧剥離痕が認められ丁寧に加工整形する。右側面先端欠損。	凹基無茎造
第7909 PL, 159	151 瓢文土器 深鉢	G73号土坑 口縁部片		A 1	波状口縁。RL縦文を横位施文。内外面共にやや被熱風化、一部剥離。	有尾式
第7910 PL, 159	152 瓢文土器 深鉢	G93号土坑 削部片		A 1	O段多条のLR縦文を横位施文。内外面共に被熱風化。	有尾式
第7911 PL, 159	153 瓢文土器 深鉢	G87号土坑 口縁部片		A 2	波状口縁。半截竹管状具の平行沈線文を複数案施す。内外面共に被熱風化、一部剥離。	有尾式
第7912 PL, 159	154 瓢文土器 深鉢	G87号土坑 口縁部片		A 7	R・L縦文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内外面共に被熱風化、外面煤状炭化物付着。	有尾式
第7913 PL, 159	155 瓢文土器 深鉢	G87号土坑 削部片		A 7	半截竹管状具の連続爪形文により菱形意匠を構成か。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第7914 PL, 159	156 瓢文土器 深鉢	G87号土坑 底1/5	底 (9)	A 7	O段多条のRL・LR縦文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。やや上げ底状。内外面共に被熱風化。	有尾式
第7915 PL, 159	157 瓢文土器 深鉢	G87号土坑 底部2/3	底 10.8	A 8	O段多条のRL・LR縦文を横位施文。やや上げ底状。内外面共にやや被熱風化、内面一部に煤状炭化物付着。	有尾式
第7916 PL, 159	158 瓢文土器 深鉢	G88号土坑 口縁～削部1/5	口 (15.5)	A 7	O段多条のRL・LR縦文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内外面共に被熱風化、外面口縁部に煤状炭化物付着。	有尾式
第7917 PL, 159	159 瓢文土器 深鉢	G88号土坑 削部片		A 1	R・L縦文を横位・交互に施文。内外面共にやや被熱風化、外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第7918 PL, 159	160 瓢文土器 深鉢	G88号土坑 削部片		A 7	O段多条のRL・LR縦文を横位・交互に多段施文。内外面共に被熱風化、内面煤状炭化物付着。	有尾式
第7919 PL, 159	161 磨石器 砾石	G88号土坑 完形	長 幅 11.5 6.4	厚 重 4 471.3	円錐を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。表面の中央付近に研打痕が集中する。	
第7920 PL, 159	162 瓢文土器 深鉢	G87号土坑 口縁部片			頭部に横位平行沈線筋を設け、口頭部には平行沈線による小型の菱形意匠が横位に連接する。内面平滑な横位ヘラ擦れ。	前期中葉
第7921 PL, 159	163 刷片石器 石墨	G270号土坑 ほぼ完形	長 幅 (2.5) (1.5)	厚 重 0.5 1.3	基盤が弱く深く円基無茎造。加工は丁寧で、完成状態にある。石墨先端部はスケット状に尖る。右辺側の返し部を欠損する。	
第7922 PL, 159	164 磨石器 砾石	G270号土坑 ほぼ完形	長 幅 9.4 7.7	厚 重 (4.7) 385	背面側中央付近から左辺に摩耗痕が広がる。表面裏面とも被熱して摩耗する。裏面側も摩耗したものと思われるが、薄く削せば摩耗の有無は不明。	
第7923 PL, 159	165 磨石器 石墨	G270号土坑 2/3	長 幅 38.8 (26.4)	厚 重 13.3 18800	背面側に広い摩耗面が広がる。被熱して1/3ほどを欠く。裏面側縁辺のみが研けており、置いた状態で被熱したものと見られる。	
第8004 PL, 159	166 瓢文土器 深鉢	G252号土坑 体部破片			細織繩・石英少・白色粒/良好/褐色	内皮工具による横位連続爪形文が2条配される。内面研磨。前期中葉
第8005 PL, 159	167 刷片石器 打製石斧	B252号土坑 4/5	長 幅 (10.3) 6.1	厚 重 3.4 250.5	裏面側に大きく磨耗を残す。刃部および左側縁の加工は粗く、完成状態には違い。また、右辺には磨面が取り切れず、上半部を欠いた段階で製作を放棄したものと思われる。	
第8006 PL, 159	168 磨石器 石墨	B252号土坑 完形	長 幅 24.4 21.2	厚 重 6.8 4590	背面側平坦面が摩耗するほか、中央付近に研打痕が集中する。稼働範囲は狭く、製粉具には適していない。無縫の石皿。	
第8007 PL, 159	169 瓢文土器 深鉢	C15号土坑 口縁部片		A 7	波状口縁。LRの異条縦文を横位施文。内面躍位磨き。	有尾式
第8008 PL, 159	170 瓢文土器 深鉢	C15号土坑 削部片			RL縦文を横位施文。内面躍位磨き。	諸機ア式
第8009 PL, 159	171 磨石器 磨石	G15号土坑 完形	長 幅 12.2 9	厚 重 3.9 708.5	円錐を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。	
第8010 PL, 159	172 磨石器 石墨	C15号土坑 完形	長 幅 21.2 16.4	厚 重 8.5 4668.5	円錐を利用する。表面のほぼ全面及び裏面の中央付近に滑らかな部分が認められる。	

種 団 PL. N.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値	胎上/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第8084 PL.160	173	礎文土器 深鉢	C10号土坑 口縁部片		A 1	RL織文を横位施文。内面横位磨き。	有尾式	
第8084 PL.160	174	礎文土器 深鉢	C10号土坑 口縁部片		A 3	0段多条のRL織文を横位施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	有尾式	
第8084 PL.160	175	礎文土器 深鉢	C10号土坑 口縁部片		A 3	0段多条のRL・LR織文を横位・交互に多段施文して羽状の意匠を構成。外面共にやや被熱風化。	有尾式	
第8084 PL.160	176	礎文土器 深鉢	C10号土坑 底部1/5	底 (13.5)	A 2	何枚第1種RL+L織文を横位施文。外面共にやや被熱風化。	有尾式	
第8084 PL.160	177	礎文土器 深鉢	C10号土坑 口縁部片		F 1	LR織文を横位施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	諸機 a 式	
第8084 PL.160	178	礎文土器 深鉢	C10号土坑 脚部片		F 2	RL織文を横位・多段に施文。内面縦位磨き。	諸機 a 式	
第8084 PL.160	179	礎文土器 深鉢	C10号土坑 脚部片		F 2	RL織文を横位施文。外面縦状炭化物付着。内面縦位磨き。	諸機 a 式	
第8084 PL.160	180	礎文土器 深鉢	C10号土坑 脚部片		F 1	RL織文を横位施文。外面共にやや被熱風化。	諸機 a 式	
第8084 PL.160	181	剥片石器 石礫	C10号土坑 ほぼ完形	長 1.2 幅 1.2 厚 0.2 重 0.1	流紋岩	表裏面共に押圧剝離が認められ丁寧に加工整形する。先端無欠損	凹型無茎頭	
第8084 PL.160	182	礎石器 磨石	C10号土坑 完形	長 9.1 幅 6.2 厚 4.9 重 372.7	粗粒輝石安山岩	円錐を利用する。表裏面の中央付近に磨面が認められる。		
第8084 PL.160	183	礎文土器 深鉢	C10号土坑 脚部片		A 1	0段多条のLR織文を横位施文し、手裁竹管状具の平行沈線を施す。内外面共にやや被熱風化。	有尾式	
第8084 PL.160	184	礎文土器 深鉢	C7号土坑 脚部片		A 7	0段多条のLR・RL織文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内面横位磨き。	有尾式	
第8084 PL.160	185	礎文土器 深鉢	C7号土坑 脚部片		D 3	LR・RL織文を横位・交互に多段施文して羽状の意匠を構成。内外面共にやや被熱風化。内面一部剥離。	諸機 a 式	
第8084 PL.160	186	礎石器 四凹	C7号土坑 完形	長 11.5 幅 8.1 厚 4.3 重 640.6	粗粒輝石安山岩	円錐を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表面の中央に浅い削斗状の凹みが2ヶ所認められる。裏面の中央には敲打痕が集中する。		
第8084 PL.160	187	礎石器 磨石	C7号土坑 完形	長 12. 幅 8.3 厚 4.7 重 684.3	粗粒輝石安山岩	円錐を利用する。表面の中央付近と裏面のほぼ全面に磨面が認められる。		
第8084 PL.160	188	礎文土器 深鉢	C7号土坑 完形	口 13.6 底 5.5	D 3	開窓自彌自縛のRL織文を横位・多段に施す。外面に縦状炭化物付着、内面や軽い横位磨き。	諸機 a 式	
第8084 PL.160	189	礎文土器 深鉢	G68号土坑 脚部片		E 1	RL織文を横位・多段に施す。外面縦状炭化物付着、内面横位磨き。	諸機 b 式	
第8084 PL.160	190	礎文土器 深鉢	G72号土坑 口縁部片		C 3	RL織文を横位・多段に施す。外面縦状炭化物付着、内面横位磨き。	諸機 b 式	
第8084 PL.160	191	礎文土器 深鉢	C273号土坑 体部破片			粗編織・石英・チャート・白色粒/良好/褐色	横位無節しが施される。内面平滑な撫で調整、撫付着。前期中葉	
第8084 PL.160	192	礎文土器 深鉢	C273号土坑 体部破片			粗石英・輝石・白色粒・角安/良好/黒褐色	横位隕降線による斜削線が派生する。縦位無節しが充填施される。内面撫で調整。	中期末葉
第8084 PL.160	193	礎文土器 深鉢	D150号土坑 口縁・体部上半 1/4残存	口 35.6	粗石英少・輝石・白色粒/良好/不 規則	沈線で画された施文部と磨削部。施文部逆U字状意匠と構成部に画す。磨削部に麻状模様文を配す。施文部織文は縦位R L充填施す。内面は平滑な撫で調整。	中期後葉	
第8084 PL.160	194	礎文土器 深鉢	R272号土坑 口縁部破片		粗石英多・輝石・白色粒/良好/褐色	無文。口縁部四凹あり。外面弱い研磨、内面深い撫で調整。	後期初頭~前葉	
第8084 PL.160	195	礎文土器 深鉢	C70号土坑 体部破片		粗石英・輝石少・白色粒/良好/褐色	外縦位R L。内面墨系Rによる捺糸痕文。	早期後葉か?	
第8084 PL.160	196	礎文土器 深鉢	C70号土坑 口縁部1/5	口 (23.5)	D 9	無文土器。外面被熱風化。内面横位磨き。	称名寺1式併行	
第8084 PL.160	197	礎文土器 深鉢	C70号土坑 口縁部1/5	口 (31)	F 3	逆U字状の沈線区画文を施す。外縁部にRL織文を充填施す。内面共に被熱風化。	称名寺1式併行	
第8084 PL.160	198	礎文土器 瓢形土器	G70号土坑 脚部1/3		E 3	縦縞記文により溝文や横位の縦状把手を施す。外面上半部・内全面に赤色塗彩。	称名寺1式併行	
第8084 PL.160	199	礎文土器 深鉢	G70号土坑 口縁部1/3	口 (37.5)	F 3	口縁部に横位の機械起削を施し、下位にLR織文を縦位施す。外面に保炭灰化物付着、内面やや被熱風化・縦状炭化物付着。	称名寺1式併行	
第8084 PL.160	200	礎石器 磨石	C14号土坑 完形	長 9.5 幅 7.4 厚 5.6 重 575.1	粗粒輝石安山岩	円錐を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。左右山側面及び下側面にも磨面が認められる。		
第8084 PL.161	201	礎文土器 深鉢	C86・90号土坑 脚部片		G 1	粗縞記文の区画文を施す。LR織文を充填施す。内外面共に被熱風化。	称名寺1式併行	
第8084 PL.161	202	礎文土器 深鉢	C86・90号土坑 脚部片		D 3	RL織文を斜位に施す。	諸機 a 式	
第8084 PL.161	203	礎文土器 深鉢	C285号土坑 口縁部~脚部上位 1/3	口 (35.5)	F 3	口縁部に横位織文を施す。RL織文を1段横位。以下に縦位施す。内面共に被熱風化、外縁部に保炭灰化物付着。	加曾利E 4式	
第8084 PL.161	204	礎文土器 深鉢	C285号土坑 体部下半~底部 残存	底 7.6	粗石英・輝石・角安/白色粒/良好/褐色	強く聞く体部下半。縦位L Rが復う。下端及び底面は研磨。内面は平滑な撫で調整。	中期末葉	
第8084 PL.161	205	礎石器 磨石	C2号土坑 完形	長 14. 幅 11.1 厚 7.4 重 1836.6	粗粒輝石安山岩	球形状を呈す背面と腹面に摩耗痕が広がる。頭部は荒れて見える。ここが使用部となることを考えておきたいが、判断とせず詳細は不明。		

遺物觀察表

種 因 PL_No	No	種 類 器 器	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第82回 PL.161	206	縄文土器 深鉢	C2号土坑 剥離部		A 5	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。内外面共に被熱風化、外面部に有尾式焼成固化物付着。		
第82回 PL.161	207	縄文土器 深鉢	C2号土坑 剥離部		D 6	横離縦線文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E 4式	
第82回 PL.161	208	縄文土器 深鉢	C2号土坑 剥離部		F 2	沈刷区画文を施し、RL縄文を充填施文。外面部焼成物付着、内面やや被熱風化。	称名寺T式併行	
第82回 PL.161	209	片削石器 石器	C2号土坑 4/5	長 2.6 幅 1.6	厚 0.4 重 1.2	珪質岩質	表面共に押圧摩耗痕が認められ丁寧に加工整形する。内側には斷面状を呈する。基部欠損。	
第82回 PL.161	210	縄文土器 深鉢	B216号土坑 剥離部破片			細縦彫・石英少、 白色粒/良好/暗褐色	幅広の底面沈線2条を配し地文にL Rを施す。内面弱い撫で、器面凹凸顕著。	前期中葉
第82回 PL.161	211	縄文土器 深鉢	B216号土坑 剥離部下半～底部 残存		底 8.0	粗石英・チャート ・白石粉/良好/青 い黄褐色	底部下半は強く書き、無文。削り調子後撫でを加える。被熱風化跡著しく、内外面とも器面磨滅する。内面保付着。	中期末葉～後期初頭
第82回 PL.161	212	削片石器 磨製石斧	B239号土坑 ほぼ完形	長 17.8 幅 5.6	厚 3.6 重 560.7	玄武岩	使用時に破損したことと、裏面側に大きな剥離面が残る。通常側に剥離痕が残っているが、残る部分は丁寧に全面研磨されている。乳房状を呈す。	
第82回 PL.161	213	鍬石器 門石	B141号土坑 完形	長 9.5 幅 8.6	厚 7.5 重 887.9	粗粒輝石安山岩	表面にそれぞれが1箇所認められる。表面のほぼ全面及び側面から剥離面全体に磨面が認められる。円錐を利用していると考えられる。	
第83回 PL.161	214	鍬石器 石皿	B244号土坑 完形	長 24.8 幅 27.2	厚 12.8 重 12000	粗粒輝石安山岩	厚い「板状跡」を用いる。背面側平坦面に広く摩耗痕が広がる。粗粒範囲には同時にアバタ状の打痕も広がり、石皿の機能を果たしたものと見られる。	
第83回 PL.161	215	鍬石器 石皿	B245号土坑 完形	長 36.2 幅 26.4	厚 9.5 重 13300	粗粒輝石安山岩	厚い「板状跡」を用いる。背面側平坦面に広く摩耗痕が広がる。裏面側面には凹のogniがあり安定していないが、地面に据え置かれたのであらかじめ種部が擦れ。	
第83回 PL.162	216	鍬石器 磨石	B246号土坑 完形	長 6.5 幅 5.8	厚 4.9 重 233.7	粗粒輝石安山岩	裏面ともよく磨耗するほか、僅の小口部分や側縁に敲打痕がある。被熱してヒビ割れる。	
第83回 PL.162	217	鍬石器 磨石	B246号土坑 4/5	長 8.9 幅 7	厚 4.9 (4.5) 重 350.8	粗粒輝石安山岩	裏面とも著しい摩耗面が広がる。背面側右辺には擦が付着、裏面と同様に擦痕が残して割れている。	
第83回 PL.162	218	削片石器 磨製石斧	B246号土坑 完形	長 8.6 幅 7.2	厚 5.6 重 439.2	粗粒輝石安山岩	裏面とも弱く摩耗する。側縁に敲打痕があるほか、上端側にベンガラ状の着色物がある。	
第83回 PL.162	219	鍬石器 戴石	B246号土坑 完形	長 13.8 幅 6.7	厚 5.2 重 766.7	粗粒輝石安山岩	小口部上端に敲打痕があるほか、小口部下端に敲打痕、摩耗痕が複合する。確認形状は角柱状を呈する。	
第83回 PL.162	220	鍬石器 石皿	B281号土坑 ほぼ完形	長 (31.6) 幅 27.1	厚 10.8 重 13600	粗粒輝石安山岩	背面側面が弱く窪んでおり、この部分に摩耗痕が広がる。裏の側面は被熱して剥落している。	

縄文時代ピット

種 因 PL_No	No	種 類 器 器	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第84回 PL.162	1	縄文土器 深鉢	C329号ピット 剥離部		A16	鋸状具の細沈線文と円形竹管文を施す。内外面共に微弱な横条直痕。外面部焼成物付着、内面被熱風化。	鶴ヶ島台式

縄文時代焼土

種 因 PL_No	No	種 類 器 器	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第85回 PL.162	1	縄文土器 深鉢	C2号燒土 剥離部		D 3	R L縄文を横位施す。内外面共にやや被熱風化。	諸磯a式
第85回 PL.162	2	縄文土器 深鉢	C3号燒土 剥離部		E 3	沈刷懸垂を施し、R L縄文を充填的に縦位施文。内面被熱風化・削離。	加曾利E 4式

縄文時代集石

種 因 PL_No	No	種 類 器 器	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第86回 PL.162	1	縄文土器 深鉢	C2号集石 剥離部		A 1	LR縄文を横位施す。外面被熱風化、内面横位磨き。	有尾式	
第83回 PL.162	2	縄文土器 深鉢	C2号集石 剥離部		A 1	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に施文して菱形意匠を構成か。外面被熱風化、内面横位磨き。	有尾式	
第83回 PL.162	3	鍬石器 磨石	C2号集石 完形	長 11.7 幅 8.2	厚 4.6 重 666.9	粗粒輝石安山岩	円錐を利用する。表面の下方右側に磨面が認められる。	
第83回 PL.162	4	鍬石器 磨石	C2号集石 完形	長 9.8 幅 8	厚 5.4 重 649.6	粗粒輝石安山岩	円錐を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。側面部に敲打痕が散在する。表面の右側から裏面全体にかけて黒変しており受熱の可能性がある。	

縄文時代配石

種 因 PL_No	No	種 類 器 器	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第88回 PL.162	1	鍬石器 石皿	B1号集石 完形	長 41.6 幅 26	厚 9.2 重 16750	粗粒輝石安山岩	背面側平坦面が広く摩耗するほか、部分的に敲打痕がある。これにもして裏面側左辺が摩耗しており、両面とも右皿としての機能を失ったものと思われる。	
第88回 PL.163	2	鍬石器 石皿	B4号配石 2/3	長 (31.4) 幅 30.2	厚 11.9 重 16700	粗粒輝石安山岩	背面側面は弱く僅み、摩耗痕が広がる。大形の横円錐で下部を大きく欠損する。欠損面の稜は風化気味で、破損後も使われ続けたものと思われる。	
第88回 PL.163	3	鍬石器 石皿	B5号配石 完形	長 28.2 幅 23.2	厚 7.3 重 6475	粗粒輝石安山岩	背面側平坦面が弱く僅みで摩耗痕が広がる。このほか、裏面側部が擦れ、据え置かれたことが分かる。背面側は赤化して大きく剥落、背側面が強く被熱する。	

D区風倒木

種 因 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第9094 PL.162	1 剥片石器 スクリーパー	フク上 ほぼ完形	長 6 幅 3.1 厚 1.5 重 24.3	黒色頁岩	幅広斜面を用いる。上端の打面側も加工されているが、凹 刃状に加工した下端側が刃部になる。	

縄文時代遺構外出土遺物

種 因 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第9094 PL.163	1 縄文土器 深鉢	A区 胴部片		D 3	RL縄文を横位施す。内面横位磨き。内外面共にやや被熱 風化。	有尾式
第9094 PL.163	2 縄文土器 深鉢	A区 口縁部片		C 3	波状口縁。RL縄文を横位・多段に施す。内面やや被熱風化。諸磯 a 式	
第9094 PL.163	3 縄文土器 深鉢	A区 胴部片		F 1	RL縄文を横位施し、半截竹管状具の集合平行沈線文を 密集させて横位施す。外面一部に環状炭化物付着、内面 横位磨き。	諸磯 b 式
第9094 PL.163	4 縄文土器 深鉢	A区 胴部片		F1	RL縄文を横位施し、半截竹管状具の集合平行沈線文を 横位に施す。内面やや横位磨き。	諸磯 b 式
第9094 PL.163	5 縄文土器 深鉢	A区 口縁部片		D 7	波状口縁。半截竹管状具の集合平行沈線文を施し、波頂 部下に耳状貼付文を施す。内外面共にやや被熱風化。	諸磯 c 式
第9094 PL.163	6 縄文土器 深鉢	A区 胴部片		C 3	半截竹管状具の横位集合平行沈線文や横位刻文を施す。 内面横位磨き。	諸磯 c 式
第9094 PL.163	7 縄文土器 深鉢	A区 胴部片		D 1	半截竹管状具の集合平行沈線文を横位施す。内面保状炭化 物付着。	諸磯 c 式
第9094 PL.163	8 縄文土器 深鉢	A区 胴部片		D 9	RL縄文を縱位施し、隣線の横線文や蛇行横垂文を施す。 内外面共にやや被熱風化。	加曾利 E 1 式
第9094 PL.163	9 縄文土器 深鉢	A区 胴部片		D 2	RL縄文を縱位施し、沈線垂文や曲線文を施す。内面 一部に環状炭化物付着。	加曾利 E 2 式
第9094 PL.163	10 縄文土器 深鉢	A区 胴部片		I 2	やや深い單沈線文を施す。内面横位磨き。	称名寺 II 式
第9094 PL.163	11 縄文土器 深鉢	A区 口縁部1/4	口 (6.0)	E 1	波状口縁。く字状に強く内折する口縁に単沈線文を施す。 脛之内 1 式	
第9094 PL.163	12 縄文土器 深鉢	A区 口縁部片		D 5	口縁内面に横位沈線文を施す。内外面共に丁寧な横位磨き。 脣之内 2 式	
第9094 PL.163	13 剥片石器 磨製石斧	A区 1/3	長 (6.4) 幅 (4.0)	厚 (2.3) 重 84.8	変質蛇紋岩 全体的に丁寧な研磨整形されておりわずかに光沢がある。	
第9094 PL.163	14 縄文土器 深鉢	B区 胴部片		A 9	粗大な楕円型横位を横位施す。内面に凹窓状の幅広沈線文 を斜位に施す。内外面共にやや被熱風化。	押型文
第9094 PL.163	15 縄文土器 深鉢	B区 胴部片		E 3	RL縄文を横位施し、上位に半截竹管状具の横位連続爪 形文を施す。	諸磯 a 式
第9094 PL.163	16 縄文土器 深鉢	B区 胴部片		D 1	RL縄文を横位施す。内外面共に被熱風化。	諸磯 a 式
第9094 PL.163	17 縄文土器 深鉢	B区 胴部片		E 4	RL縄文を横位・多段に施す。内外面共にやや被熱風化。	諸磯 b 式
第9094 PL.163	18 縄文土器 深鉢	B区 胴部片		D 8	やや深い單沈線文を施す。内外面共に被熱風化。	称名寺 II 式
第9094 PL.163	19 縄文土器 深鉢	B区 口縁部片		H 1	R 線条体を斜位に施す。内外面共にやや被熱風化。	夏島式?
第9094 PL.163	20 縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 2	口縁部の内外面に矧み目。格子状結節沈線文を縦 位に施す。内面横位に円形竹管文や押引状結節沈線文を施す。 内外面共に横位磨き。	鶴ヶ島台式
第9094 PL.163	21 縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 5	く字状に強く屈折する。竹管状具の押引状結節沈線文を縦 位に施す。	鶴ヶ島台式
第9094 PL.163	22 縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A14	口縫部外端に矧み目を施す。口縫部に角棒状具の押引状 結節沈線文や竹管状具の沈線文を施す。内外面共に微弱な条 痕文、内面やや被熱風化。	鶴ヶ島台式
第9094 PL.163	23 縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A10	口縫部上面に矧み目を施す。内面横位に横位条痕文。	鶴ヶ島台式
第9094 PL.163	24 縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 7	小凹状口縫。隣線の渦巻き画の交点・区画内に円形竹管文 や押引状結節沈線文を施す。内外面共に微弱な横位条痕文、 外面一部に環状炭化物付着。	鶴ヶ島台式
第9094 PL.163	25 縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 4	波状口縫。口縫部内・外端に矧み目を施す。口縫部に横 位状具の沈線文を施し、その区画内や交点に竹管状具の押引 状結節沈線文や押引状突文を施す。内外面共に微弱な横位 条痕文。	鶴ヶ島台式
第9094 PL.163	26 縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 4	長状具の渦巻き画の交点・区画内に円形竹管文を施す。 内面横位に横位条痕文、やや被熱風化。	鶴ヶ島台式
第9094 PL.163	27 縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 5	口縫部外端に矧み目を施す。口縫部に竹管状具の押引状 結節沈線文を施す。内面横位条痕文、やや被熱風化。	鶴ヶ島台式
第9094 PL.163	28 縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 2	口縫部の内・外端に矧み目を施す。口縫部に内円形竹管状具 の押突文と縦位沈線文。内外面共に条痕文は微弱で、や や被熱風化。	鶴ヶ島台式
第9094 PL.163	29 縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 4	胴部上位にく字状に強く屈折。幅広円形沈線文の側面に沿って 竹管状具の押引状結節沈線文を施す。内外面共に横位の条 痕文。外面一部に環状炭化物付着、内面やや被熱風化。	鶴ヶ島台式
第9094 PL.164	30 縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A16	く字状に強く屈折。圓錐具の細沈線文や円形竹管文・刺突 文を施す。外面一部に環状炭化物付着、内面被熱風化。	鶴ヶ島台式

遺物觀察表

種 国 PL_No	№	類 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎上/成形/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第91回 PL_164	31	縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 4	外削ぎ状の口唇外縁に斜め目を施す。口縁部から括れ部にかけて縦状具の縦縞文で格子状意匠を構成。内外面共に横位の条痕文。内面被熱風化。32と同一個体。	鶴ヶ島台式
第91回 PL_164	32	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 4	胴部上位がく字形に強く崩折。口縁部から括れ部にかけて縦状具の細辺縞文で格子状意匠を構成。内外面共に横位の条痕文、内面被熱風化。31と同一個体。	鶴ヶ島台式
第91回 PL_164	33	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A10	幅広平戻竹管状具の連続爪形文で菱形意匠を構成か。内面横位磨き。	有尾式
第91回 PL_164	34	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 5	凹彫文を横位・多段に施文。内面横位条痕文。内外面共にやや被熱風化。	早期末葉
第91回 PL_164	35	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A16	竹管状具の爪形状剥突文や円形竹管文を施す。外面爆状化物付着、内面被熱風化。	鶴ヶ島台式
第91回 PL_164	36	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 1	円形竹管文や沈線文を施す。内面横位条痕文。内外面共にやや被熱風化。	鶴ヶ島台式
第91回 PL_164	37	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A14	縱位の微隆起線文を重ねて円形竹管文を施す。内面横位条痕文、やや被熱風化。	鶴ヶ島台式
第91回 PL_164	38	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 7	内外面共に微弱な条痕文を横位施文。内面被熱風化。	鶴ヶ島台式
第91回 PL_164	39	縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 2	内外面に条痕文を横位施文。内外面共にやや被熱風化。	早期後半
第91回 PL_164	40	縄文土器 深鉢	C区 底部片		A 7	外面横・斜位の条痕文、内面被熱風化。	早期後半
第91回 PL_164	41	縄文土器 深鉢	C区 底部/3 底 (9.0)		A 4	外面横・斜位の条痕文、煤状斑化物付着。内面被熱風化、爆状化物付着。	早期後半
第91回 PL_164	42	縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		D 1	無文土器。内外面共に横位磨き。	早期後半
第91回 PL_164	43	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 7	条痕文を縱位施文。内面被熱風化。	早期後半
第92回 PL_164	44	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 6	内外面共に粗雑な条痕文を縱位施文。	早期後半
第92回 PL_164	45	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A10	内外面共に横位の条痕文を施し、被熱風化・一部剥離。	早期末葉
第92回 PL_164	46	縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 7	口縁部に横位の隆起を付し、口唇部上面やその下位に略柔体质圧痕文を施す。内外面共に被熱風化。	早期末葉
第92回 PL_164	47	縄文土器 深鉢	C区 底部片		A 1	R・L原体の側面圧痕を施す。外面共にやや被熱風化。二ツ木式	
第92回 PL_164	48	縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A15	手戻竹管状具の連続爪形文を施す縦擦痕や円形竹管文。3～4本單位の短辺縞文、R・L原体の側面圧痕文等を施文。内面横位磨き。	二ツ木式
第92回 PL_164	49	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A15	原体長の約1/2段多条RL・LR縞文を横位・交互に多段施文。外面部に煤状斑化物付着、内面横位磨き。	二ツ木式
第92回 PL_164	50	縄文土器 深鉢	C区 胴部上位1/3		A 5	0段多条のRL・LR縞文を横位・交互に多段施文して、部分的に菱形意匠を構成。内外面共にやや被熱風化、内面煤状斑化物付着。	関山I式
第92回 PL_164	51	縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 7	双頭状の波状口縁。梆子状沈線文により菱形状の意匠を構成し、円形貼付文を施す。外面一部に煤状斑化物付着、内面横位磨き。	関山I式
第92回 PL_164	52	縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 1	0段多条の環付きRL・LR縞文を横位・多段に施文。外面一部に煤状斑化物付着、内面横位磨き。	関山I式
第92回 PL_164	53	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 7	R・L原体の側面圧痕または略柔体质回転文を横位に施す。内外面共にやや被熱風化。	関山I式
第92回 PL_164	54	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A10	r縞の網状格子文を横位施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	関山I式
第92回 PL_164	55	縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 7	手戻竹管状具の重ね引き並行沈線文で巻闌状の意匠を構成。内外面共にやや被熱風化。	関山II式
第92回 PL_164	56	縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 1	手戻竹管状具により菱形状の單辺縞文や連続爪形文を施す。外面煤状斑化物付着、内面丁寧な横位磨き。	関山II式
第92回 PL_164	57	縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 1	環付きRL・LR縞文を横位・多段に施文。内面横位磨き。	関山II式
第92回 PL_164	58	縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 7	1段櫛丸組紐を横位施文。内外面共にやや被熱風化。	関山II式
第92回 PL_164	59	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 1	菱状具のやや粗大なコバヌ文を横位施文。内外面共にやや被熱風化。	関山II式
第92回 PL_164	60	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 2	原体長のやや短い1段多条RL・LR縞横位・交互に多段施文として菱形意匠を構成。内外面共に被熱風化。	関山II式
第92回 PL_164	61	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 1	0段多条の環付きRL・LR縞文を横位・多段に施文。内面横位磨き。	関山II式
第92回 PL_164	62	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 3	0段多条の環付きRL・LR縞文を横位・多段に施文。手戻竹管状具の沈線三角文を施す。内外面共に被熱風化。	関山II式
第92回 PL_164	63	縄文土器 深鉢	C区 胴部片		A 7	1段櫛丸組紐を横位施文し、手戻竹管状具の巻闌文や並行沈線文を施す。内外面共に被熱風化・煤状斑化物付着。	関山II式
第92回 PL_165	64	縄文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 8	LR縞文を横位施文し、手戻竹管状具の連続爪形文や巻闌文を施す。外面やや被熱風化、内面丁寧な横位磨き。	黒沢式

種 国 PL. No	種 類 器 種	出上位数 残存率	計測値	施上/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第92回 PL.165	65 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 7	半截竹管状具のコイン文を2段に施す。LR繩文を横位施文。外面保状化物付着、内面横位磨き。	黒浜式
第92回 PL.165	66 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 1	半截竹管状具の横位コイン文を複数条施す。内面横位磨き。	黒浜式
第92回 PL.165	67 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 7	L繩文を横位・多段に施文。内外面共に被熱風化、外面焼成化物付着。	黒浜式
第92回 PL.165	68 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 1	継やかな波頭部に小突起を付す。RL・LR繩文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成か。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	黒浜式
第92回 PL.165	69 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 1	RL・LR繩文を横位・交互に多段施文して羽状意匠を構成。外面一部に焼成化物付着、内面やや被熱風化・一部剥離。	黒浜式
第92回 PL.165	70 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A 6	半截竹管状具の横帶文を施す。内外面共に被熱風化。	黒浜式
第92回 PL.165	71 瓔文土器 深鉢	C区 口縁～胸部1/3	口 (20.0)	A 2	4単位の波底口縁か。冠繩文を横位・多段に施文。外面胸部に半截保状化物付着、内面やや被熱風化・一部剥離。	黒浜式
第93回 PL.165	72 瓔文土器 深鉢	C区 頭部		A10	幅広・半截竹管状具の連續爪形文で菱形意匠を構成か。内面横位磨き。73と同一側。	有尾式
第93回 PL.165	73 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A10	幅広・半截竹管状具の連續爪形文で菱形意匠を構成か。内面横位磨き。72と同一側。	有尾式
第93回 PL.165	74 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 1	半截竹管状具の連續爪形文により菱形意匠を構成か。外面被熱風化・内面横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	75 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 6	波底口縁。半截竹管状具の連續爪形文を複数条施す。内面7字な横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	76 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A 2	幅広の半截竹管状具の連續爪形文を横位に施す。内面横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	77 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 1	波底口縁。半截竹管状具の連續爪形文を複数条施す。外面やや被熱風化・内面やや粗い横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	78 瓔文土器 深鉢	C区 頭部		F 1	半截竹管状具の連續爪形文を横位施文。内外面共にやや被熱風化・内面一部被熱剥離。	有尾式
第93回 PL.165	79 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A 1	半截竹管状具の連續爪形文により菱形意匠を構成か。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第93回 PL.165	80 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 1	半截竹管状具の平行沈線文を複数条施す。内外面共に被熱風化。	有尾式
第93回 PL.165	81 瓔文土器 深鉢	C区 頭部		A 2	RL繩文を横位施し、幅広・円錐状の並行沈線文で菱形意匠を構成か。内面や粗い横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	82 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 1	L・R繩文を横位・交互に施文して菱形意匠を構成か。外から内面への径5mmの補修孔。内面横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	83 瓔文土器 深鉢	C区 胸部/4		A 2	括弧部に半截竹管状具の平行沈線文を横位に施文。脚部はO段多条のRL・LR繩文を横位・交互に多段施して菱形意匠を構成。内外面共に被熱風化・一部剥離。外面胸部上位に焼成化物付着。	有尾式
第93回 PL.165	84 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 1	半截竹管状具の平行沈線文で菱形意匠を構成か。外面一部に焼成化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	85 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 2	波底口縁。R・L繩文を横位・交互に施文し、半截竹管状具の並行沈線文を横位に施す。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第93回 PL.165	86 瓔文土器 深鉢	C区 胸部/4	底 (9.0)	A 3	RL繩文を横位・多段に施文。内外面共に焼成化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	87 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A 5	LR繩文を横位施文。外面一部に焼成化物付着。内面横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	88 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A 4	L繩文を横位施文。内面横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	89 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A 5	O段多条のRL・LR繩文を横位・交互に施文。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第93回 PL.165	90 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A 1	O段多条のRL・LR繩文を横位施文。外面被熱風化・一部剥離、内面横位保状化物付着。	有尾式
第93回 PL.165	91 瓔文土器 深鉢	C区 底部1/3	底 (9.8)	A15	O段多条のRL・LR繩文を横位・交互に多段施して菱形意匠を構成。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第93回 PL.165	92 瓔文土器 深鉢	C区 口縁部片		A 1	RL・LR繩文を横位・交互に多段施して羽状意匠を構成。外面被熱風化・内面や粗い横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	93 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A 2	RL繩文を横位施文。内面横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	94 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A16	O段多条RL繩文を横位施文。内外面共に被熱風化。	有尾式
第93回 PL.165	95 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A 1	RL繩文を横位施文。内面横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	96 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A 7	LR繩文を横位施文。内面横位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	97 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A 2	RL繩文を横位施文。内外面共にやや被熱風化・内面縱位磨き。	有尾式
第93回 PL.165	98 瓔文土器 深鉢	C区 胸部		A14	異なるO段RL繩文を横位施文。内外面共にやや被熱風化。外側焼成化物付着。	有尾式
第93回 PL.166	99 瓔文土器 深鉢	C区 頭部～胸部1/4		A 2	O段多条のRL・LR繩文を横位・交互に多段施して菱形意匠を構成し、半截竹管状具の平行沈線文を施す。内面横位磨き。	有尾式

遺物觀察表

種別	PL	No.	種類	器種	出土位置 残存率	計測値	施工/候成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第9384	PL_166	100	圓文土器	深鉢	C区 口縁部片		A 2	RJ・LR繩文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内外面共に被熱風化。	有尾式
第9385	PL_166	101	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		A 7	RJ・LR繩文を横位施文。外面共に被熱風化。外面一部剥離、内面一部に煤状炭化物付着。	有尾式
第9386	PL_166	102	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		A10	0段多条のRJ・LR繩文を横位・交互に施文。外面やや被熱風化。内面横位磨き。	有尾式
第9387	PL_166	103	圓文土器	深鉢	C区 脚部片	(口)(47)	A 1	0段多条RJ・LR繩文を横位施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第9484	PL_166	104	圓文土器	深鉢	C区 口縁部片		A 6	RJ・LR繩文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。外面口縁部に煤状炭化物付着。	有尾式
第9485	PL_166	105	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		A 6	RJ・LR繩文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。外面口縁部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第9486	PL_166	106	圓文土器	深鉢	C区 口縁部片		F 2	波狀口縁。RJ繩文を横位施文し、半截竹管状具の連続爪形文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	諸機a式
第9487	PL_166	107	圓文土器	深鉢	C区 口縁部片		F 2	波狀口縁。RJ繩文を横位施文し、半截竹管状具の連続爪形文を施す。外面共にやや被熱風化。	諸機a式
第9488	PL_166	108	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		F 2	半截竹管状具の横位骨文と同員の先端部回転による輻位刺突を施す。外面共にやや被熱風化。	諸機a式
第9489	PL_166	109	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		A 8	半截竹管状具の横位平行線文を複数本施し、下位にLR繩文を横位施文。内面横位磨き。	諸機a式
第9490	PL_166	110	圓文土器	深鉢	C区 口縁部1/4	(口)(8.0)	F 2	ミニチュアの深鉢。LR繩文を横位・多段に施文。内外面共にやや風化・剥離。	諸機a式
第9491	PL_166	111	圓文土器	深鉢	C区 口縁部片		F 2	RJ・LR繩文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化。一部に煤状炭化物付着。	諸機a式
第9492	PL_166	112	圓文土器	深鉢	C区 口縁部片		D 4	RJ・LR繩文を横位・多段に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	諸機a式
第9493	PL_166	113	圓文土器	深鉢	C区 口縁部片		E 3	RJ・LR繩文を横位・多段に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	諸機a式
第9494	PL_166	114	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		D 2	RJ・LR繩文を横位施文。内面横位磨き。	諸機a式
第9495	PL_166	115	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		D 8	RJ・LR繩文を横位・多段に施文。内面被熱風化。	諸機a式
第9496	PL_166	116	圓文土器	深鉢	C区 口縁部片		C 2	RJ・LR繩文を横位・多段に施文。内面丁寧な横位磨き。	諸機a式
第9497	PL_166	117	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		I 2	RJ・LR繩文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化・一部剥離、内面煤状炭化物付着。	諸機a式
第9498	PL_166	118	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		D 3	RJ・LR繩文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化。一部に煤状炭化物付着。	諸機a式
第9499	PL_166	119	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		D 6	RJ・LR繩文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化・内面被熱剥離。	諸機a式
第9500	PL_166	120	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		F 2	LR繩文を横位施文。内外面共に被熱風化。	諸機a式
第9501	PL_166	121	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		D 3	RJ・LR繩文を横位施文。内面横位磨き。	諸機a式
第9502	PL_166	122	圓文土器	深鉢	C区 口縁部片		D 6	波狀口縁。RJ・LR繩文を横位・多段に施文。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	諸機b式
第9503	PL_166	123	圓文土器	深鉢	C区 口縁部片		F 3	口唇部～口縁部に浮縫文を施す。内面被熱風化・剥離。	諸機b式
第9504	PL_166	124	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		F 2	RJ・LR繩文を横位施文し、横位浮縫文を施す。内面やや被熱風化・一部剥離。	諸機b式
第9505	PL_166	125	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		E 3	低平な浮縫文を横・斜位に施す。内外面共にやや被熱風化。	諸機b式
第9506	PL_166	126	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		F 3	RJ・LR繩文を横位・多段に施文し、やや低平な浮縫文を施す。	諸機b式
第9507	PL_166	127	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		C 3	RJ・LR繩文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化。	諸機b式
第9508	PL_166	128	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		D 6	RJ・LR繩文を横位施文。内外面共にやや被熱風化・外面一部に煤状炭化物付着。	諸機b式
第9509	PL_166	129	圓文土器	深鉢	C区 底部1/4	(底)(8.6)	C 3	RJ・LR繩文を横位施文。内面横位磨き。	諸機a式
第9510	PL_166	130	圓文土器	深鉢	C区 脚部下位～底部1/3	底 7.0	F 3	RJ・LR繩文を横位・多段に施文。内外面共に被熱風化・一部剥離。	諸機a式
第9511	PL_166	131	圓文土器	深鉢	C区 口縁部片		H 2	口縁部に横位の微隆起帯を施し、下位にLR・RR繩文を充填的に施文。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E 4式
第9512	PL_166	132	圓文土器	深鉢	C区 口縁部片		D 3	波狀口縁。微隆起帯により横S字形を施し、外縁にLR・RR繩文を充填的に施文。内面煤状炭化物付着。	加曾利E 4式
第9513	PL_166	133	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		I 2	逆U字形の懸垂文を施し、L・R繩文を充填施文。内面やや被熱風化・一部剥離。	加曾利E 4式
第9514	PL_166	134	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		I 2	微隆起懸垂文を施し、LR・RR繩文を充填的に縦位施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利E 4式
第9515	PL_166	135	圓文土器	深鉢	C区 脚部片		D 8	LR・RR繩文を斜位施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面被熱風化。	中期後半

種 国 PL. No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第9584 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 口縁部片		I 2	口縁波頭部の外側から内面にかけて捻じた8字状貼付文を施し、LR繩文を充填施文。内面横位磨き。	称名寺1式併行
第9585 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 口縁部片		F 3	口縁波頭部下にS字状波頭文を施し、L繩文を充填施文。口縁部の横位縫線文に沿って円形竹管文を施す。内面横位磨き。	称名寺1式併行
第9586 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 口縁部片		E 3	胸部に逆U字状の隠れ起縫文を施し、LR繩文を充填的に施す。内外面共にやや被熱風化。	称名寺1式併行
第9587 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 胸部片		D 9	逆U字状の沈継区画文を施し、LR繩文を充填施文。内外面共にやや被熱風化。	称名寺1式併行
第9588 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 胸部片		F 1	やや深い溝巻状沈継区画文を施し、LR繩文を充填施文。内面横位磨き。	称名寺1式併行
第9589 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 胸部片		F 3	やや深いS字は8字状沈継区画文を施し、LR繩文を充填施文。内面横位磨き、一部被熱風化。	称名寺1式併行
第9590 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 胸部片		D 7	横位沈継文を施し、RL繩文を充填施文。内面縦位磨き。	称名寺1式併行
第9591 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 胸部片		E 3	沈継区画文内にL繩文を充填施文。内外面共にやや被熱風化。	称名寺1式併行
第9592 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 胸部片		D 6	沈継区画文外縁にRL繩文を充填的に施す。内外面共にやや被熱風化。	称名寺1式併行
第9593 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 胸部片		I 3	沈継区画文を施し、LR繩文を充填施文。内面丁寧な縦位磨き。	称名寺1式併行
第9594 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 胸部片		D 3	沈継区画文内にLR繩文を充填施文。内面一部に煤状炭化物付着。	称名寺1式併行
第9595 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 胸部片		F 2	蛇行横垂文を施し、LR繩文を充填的に横位施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	腹之内1式
第9596 PL. 167	礪文土器 深鉢	G区 口縁部片		D 1	口縁部の上面に刻目と正面直下に横縫線文を施す。口縁には複数本の棒状貝又は横帶文を施し、やや細密なLR繩文を充填的に施す。内外面共に丁寧な横位磨き。	腹之内2式
第9597 PL. 167	礪文土器 上唇片加 円盤	G区 完形	長 3.5 厚 0.85	重 13.0	D 1 深鉢の胸部破片を円形状に打削整形し、全周に摩耗痕を持つ。	後期前半
第9598 PL. 167	剖片石器 石鑿	G区 ほぼ完形	長 (1.1) 幅 1.2	厚 0.2 重 0.1	表裏面共に押圧剥離痕が認められ丁寧に加工整形する。先端部欠損。	凹基無茎鑿
第9599 PL. 167	剖片石器 石鑿	G区 4/5	長 1.5 (1.3)	幅 0.3 重 0.3	表裏面共に押圧剥離痕が認められ丁寧に加工整形する。長脚である。左脚部に欠損部。	凹基無茎鑿
第9600 PL. 167	剖片石器 石鑿	G区 完形	長 1.8 幅 1.2	幅 0.3 重 0.6	玉輪	表裏面共に押圧剥離痕が認められ丁寧に加工整形する。凹基無茎鑿
第9601 PL. 167	剖片石器 石鑿(ドリル)	G区 4/5	長 (3.0) 幅 1.7	厚 0.6 重 2.2	赤碧玉	背面加工によって尖頭部を作出する。先端欠損。
第9602 PL. 167	剖片石器 石匙	G区 完形	長 2.7 幅 4.3	厚 0.9 重 7.8	黒色頁岩	表裏面に素材剖片の剥離面を大きく残し、横長剖片を素材とする。つまり部分は背面加工であるが、機能部と推定される下端未端は片面加工が主体的である。
第9603 PL. 167	剖片石器 楔形石器	G区 完形	長 4.3 幅 2.2	厚 1.9 重 16.8	黒色頁岩	上下端部に橢円加厚による剥離痕があり、側面部には橢円加厚により生じた凹斬面が認められる。
第9604 PL. 167	剖片石器 スクレイパー	G区 ほぼ完形	長 3.6 (9.4)	厚 1.5 重 45.5	黒色頁岩	表面の中央に素材剖片的主要剥離面を残す。横長剖片を素材とする。刃部と想定される下方未端部の二次加工は片面加工である。
第9605 PL. 167	石製品 石製品	G区 完形	長 2.7 幅 1.5	厚 0.5 重 3.8	変質蛇紋岩	全体的に丁寧に研磨整形されており光沢がある。
第9606 PL. 167	剖片石器 戴石	G区 完形	長 15.3 幅 4.7	厚 2.6 重 306.4	変玄武岩	全体的に研磨整形されており磨削石斧の転用品と考えられる。下部先端方向からの剥離面が数多く認められ、先端部にはつぶれが認められる。
第9607 PL. 167	礪石器 完全	G区 完全	長 9.8 幅 8.3	厚 4.6 重 546.7	粗粒輝石安山岩	内部を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表裏面の中央付近に敲打痕が集中する。
第9608 PL. 167	礪石器 磨石	G区 完全	長 10.5 幅 9.7	厚 5.1 重 857.2	粗粒輝石安山岩	内部を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表裏面の中央付近に敲打痕が認められる。
第9609 PL. 167	礪石器 石皿	G区 4/5	長 20.5 幅 19.4	厚 6.8 重 8300	粗粒輝石安山岩	垂直面を利用する。表面の中央付近に滑らかな部分が認められる。非常に滑らかな部分は中央部がわずかに隆起した形態である。
第9610 PL. 167	礪石器 石皿	G区 完形	長 22.4 幅 17.5	厚 5.3 重 3082.5	粗粒輝石安山岩	裏面と側面は自然面であり扁平な円錐を利用。裏面の中央から下方向にかけて著しく滑らかな部分が認められる。
第9611 PL. 167	礪石器 石皿	G区 1/2	長 (22.0) (16.6)	厚 6.5 重 2869.4	粗粒輝石安山岩	裏面と側面は自然面であり扁平な円錐を利用。裏面の中央には薄い剥離痕が累積し敲打の跡跡と考えられる。表面の下方には滑らかな部分が認められるが敲打痕の方が新しい。
第9612 PL. 168	礪石器 石皿	G区 完形	長 30.3 幅 22.5	厚 8.5 重 3978.2	粗粒輝石安山岩	垂直面を利用する。表面のほぼ全面及び右側面の中央付近に滑らかな部分が認められる。
第9613 PL. 168	礪石器 多孔石	G区 不明	長 13.7 幅 9.1	厚 3.9 重 420.3	粗粒輝石安山岩	表面、左側面、上面には自然面が多く残り角礫を利用。表面の中央に漏斗状の孔が4カ所認められる。裏面は剥離面である。孔が表面の中央に集中することから、この形態で完形の可能性がある。

遺物觀察表

種 国 PL.No	器 物 種	出上位置 残 存 率	計測値	施上/候成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第96回 PL.168	166 離石器 石皿	C区 完形	長 幅 53.6 46.4	厚 重 18.4 52340	粗粒輝石安山岩	右側面から上側面にかけては風化度合いが高く削面と考えられる。裏面全体は風化が進行しており自然面と考えられる。亜角礫を利用する。表面は柱状の形態であり全体的に滑らかである。部分的に非常に滑らかな箇所が認められる。	
第96回 PL.168	167 削片石器 块状耳飾	C区 1/2	長 幅 (2.7) (1.3)	厚 重 0.7 3.5	萬ろう石	全般的に丁寧に研磨整形されておりわずかに光沢がある。	
第97回 PL.168	168 縄文土器 深鉢	D2型 口縁部破片			粗:織維・白色粒/ 良好/にふい黃褐色	横位条痕を地文に、縦条体圧痕を加える。器面凹凸顯著。早期後葉	
第97回 PL.168	169 縄文土器 深鉢	D区 体部破片			粗:織維・石英・白 色粒/良好/褐色	内外とも斜位条痕を施す。	早期後葉
第97回 PL.168	170 縄文土器 深鉢	D区 体部破片			粗:織維・石英・片 岩・白色粒/良好/ にふい褐色	内外とも斜位条痕を施す	早期後葉
第97回 PL.168	171 縄文土器 深鉢	D区 口縁部破片			粗:織維・輝石・白 色粒/良好/明赤褐色	口縁部肥厚し縦状体圧痕を擬位に施す。内面横位条痕。	早期後葉
第97回 PL.168	172 縄文土器 深鉢	D区P-II-17V 体部破片			粗:織維・石英・白 色粒/良好/にふい 褐色	内外とも横位条痕を施す。	早期後葉
第97回 PL.168	173 縄文土器 深鉢	D区 体部破片			粗:織維・石英・片 岩・白色粒/良好/ にふい褐色	外側斜位条痕施術後撫でを加える。内面斜位条痕を施す。	早期後葉
第97回 PL.168	174 縄文土器 深鉢	D区L8 口縁部破片			粗:織維・石英・少 白・白色粒/良好/暗 褐色	標系LとRによる矢羽状の標系圧痕を横位に配し、刺切 紋も横位矢羽状に連続する。下位は幅狭のLとRとR Lによ る横位羽状縞文構成。内面研磨を施す。	前期初頭
第97回 PL.168	175 縄文土器 深鉢	D1方窓 口縁部破片			粗:織維・石英・輝 石・白色粒/良好/ にふい黃褐色	波状波浪底部がV字状突起 刺みを付す陰線が口縁部及び 波頂部に付され小窓形を配す。燃系LとRによる側面圧 痕と刺切文が施される。内面平滑な撫で調整。	前期初頭
第97回 PL.168	176 縄文土器 深鉢	D区L4 口縁部破片			粗:織維・白色粒/ 良好/にふい褐色	L1凹部に突起を付す。燃系LとRによる矢羽状の標系圧痕 文と刺切文を施す。内面平滑な撫で調整。	前期初頭
第97回 PL.168	177 縄文土器 深鉢	D区L2 3面 体部破片			粗:織維・石英・白 色粒/良好/にふい 褐色	標系LとRによる矢羽状の標系圧痕と刺切文を施す。内 面平滑な撫で調整。	前期初頭
第97回 PL.168	178 縄文土器 深鉢	D区K6 3面 体部破片			粗:織維・石英・白 色粒/良好/明赤褐 色	燃系LとRによる矢羽状の標系圧痕文による燃手状意匠と 刺切文を施す。内面平滑な撫で調整。	前期初頭
第97回 PL.168	179 縄文土器 深鉢	D区M-5 3面 体部上半破片			粗:織維・白色粒/ 良好/にふい黃褐色	刺みを付す横位隆起3条を設け。燃縫間に燃系LとRの側 面圧痕を施す。体部は原体部の短いL Rを横位施文する。 内面平滑な撫で調整。	前期初頭
第97回 PL.168	180 縄文土器 深鉢	D区L8 2面 体部破片			粗:織維・石英・片 岩・白色粒/良好/ にふい褐色	燃系LとRによる矢羽状の標系圧痕を横位に配し、以下 は幅狭L RとRによる横位羽状縞文構成。内面研磨を施す	前期初頭
第97回 PL.168	181 縄文土器 深鉢	D1方窓 体部破片			粗:織維・白色粒/ 良好/にふい褐色	幅狭のO段多条L RとR Lによる横位羽状圧痕文構成。内 面は平滑な撫で調整。	前期初頭
第97回 PL.168	182 縄文土器 深鉢	D区 体部破片			粗:織維・輝石少 白・白色粒/良好/に ふい褐色	横位結縞文L Rを施す。内面横位ハラ撫で。	前期初頭?
第98回 PL.168	183 縄文土器 深鉢	D区K-8 3面 体部破片			粗:織維・石英・白 色粒/良好/明赤褐 色	体部下半か。原体部の短いO段多条L RとR Lによる横位 羽状縞文構成。内面斜位ハラ撫で調整。	前期初頭
第98回 PL.168	184 縄文土器 深鉢	D区K5 3面 体部破片			粗:織維・白色粒/ 良好/にふい褐色	幅狭のO段多条L RとR Lによる横位羽状縞文構成。内 面研磨を加える。	前期初頭
第98回 PL.168	185 縄文土器 深鉢	D区K-5 3面 体部破片			粗:織維・輝石・白 色粒/良好/明赤褐 色	原体部の短いO段多条L RとR Lによる横位羽状縞文構 成。内面平滑な撫で調整。	前期初頭
第98回 PL.168	186 縄文土器 深鉢	D区M4 体部破片			粗:織維・石英・少 白・白色粒/良好/に ふい褐色	燃系L 2条による側面圧痕文を多段に配す。内面研磨。	前期初頭
第98回 PL.168	187 縄文土器 深鉢	D区 体部破片			粗:織維・石英・白 色粒/良好/にふい 黃褐色	円形貼付文が付され、刺みを加えた平行旋線文による山形 文が配される。内面丁寧な研磨を施す。	前期前葉 圓山式
第98回 PL.168	188 縄文土器 深鉢	D区 体部破片			粗:織維・石英・少 白・白色粒/良好/に ふい褐色	横位低隣線以下横位R L・L Rによる縱位羽状縞文構成。 内面平滑な撫で調整。	前期前葉
第98回 PL.168	189 縄文土器 深鉢	D区L5 3面 口縁部破片			粗:織維・石英少 白・白色粒/良好/に ふい赤褐色	双波状口縁。口脣部に刺み。以下環付R L閉端部の横位多 段施文。内面丁寧な研磨を加える。	前期前葉
第98回 PL.168	190 縄文土器 深鉢	D区L5 3面 口縁部破片			粗:織維・石英少 白・白色粒/良好/に ふい赤褐色	双波状口縁。口脣部に刺み。以下環付R L閉端部の横位多 段施文。内面丁寧な研磨を加える。	前期前葉
第98回 PL.168	191 縄文土器 深鉢	D区K-8 3面 体部破片			粗:織維・白色粒/ 良好/灰黃褐色	環付閉端部を横位・斜位多段に施文する。山形あるいは菱 形形状近似。以下はR Lを施す。内面丁寧な研磨を加える。	前期前葉
第98回 PL.168	192 縄文土器 深鉢	D区 3面 体部破片			粗:織維・石英・白 色粒/良好/赤褐色	環付R L閉端部の横位多段施文。内面平滑な撫で調整。	前期前葉

種 団 PL.No	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上 ¹ 候成・色調 石材・素材等	成形・整形 の 特徴	備 考
第9884 PL.168	193	縄文土器 深鉢	DKL4 体部中位破片		粗:織維・石英少・ 白色粒・良好/に赤い褐色	外反部に縦位内皮沈線を配し、上位に直前段合燃(直前合2L)、下位にR.Lを施す。内面丁寧な横位研磨を加える。	前期前葉
第9884 PL.168	194	縄文土器 深鉢	DKK6 3面 体部破片		織:織維・輝石少・ 白色粒・好み/相軸質・相 色	4条一組の沈線によるコンバス文を部位に配し、下位は直前段合燃(直前合2R)を施す。内面は研磨を加える。	前期前葉
第9884 PL.169	195	縄文土器 深鉢	DKL-II-16 黒 体部破片		粗:織維・石英大/ 良好/に赤い褐色	薄手の器厚。原体端面部の側突状施文か。内面強い横位燃 で調整。	前期前葉
第9884 PL.169	196	縄文土器 深鉢	D2内底周 体部破片		織:織維・輝石少・ 白色粒少/良好/暗 褐色	無文ながら、斜格子状に低位隕線が認められる。あるいは 織維束を胎上中に意図的に配したか。内面横位研磨。	前期中葉
第9884 PL.169	197	縄文土器 深鉢	DKL-II-18 口縁部破片		織:織維・石英少・ 白色粒/良好/黒褐色	口縁部外反し体部を立てる。口縁部へ頭部に横位燃系L、 体部は横位燃系Rを施す。内面丁寧な横位研磨。	前期中葉
第9884 PL.169	198	縄文土器 深鉢	DK-II 口縁へ体部上半 破片		織:織維・石英少・ 白色粒少/良好/黒褐 褐色	薄手の器厚で口縁部角頭状を呈す。O段多条L.RとR.Lに よる羽状構文構成が並巻形状況は意図されていない。内 面平滑な撫で調整。	前期中葉
第9884 PL.169	199	縄文土器 深鉢	DKK-5 3面 口縁部破片		織:織維・輝石少・ 白色粒/良好/黒褐 褐色	口縁部外反。L.RとR.Lによる羽状構文構成。あるいは並 形状況ほか、内面弱い撫で調整。凹凸削者。	前期中葉
第9884 PL.169	200	縄文土器 深鉢	DK-II 2面 口縁部破片		織:織維・白色粒/ 良好/明褐色	やや薄手の器厚を呈す。口唇部直下より横位コンバス文が 多段に配される。内面丁寧な横位研磨を加える。	前期中葉
第9884 PL.169	201	縄文土器 深鉢	DKL-II-18 体部破片		織:織維・石英少・ 輝石少・チャート少/ 白色粒/良好/黄褐色	やや薄手の器厚を呈す。外反気味の体部中央か。幅狭の平 行弦線による横位燃状況文が多段に配される。やや乱雑 な施文。内面丁寧な研磨を加える。	前期中葉
第9884 PL.169	202	縄文土器 深鉢	DKX19 体部破片		織:織維・石英少・ 輝石・白色粒/良好/ 褐色	無節LとRによる横位羽状構文構成。内面弱い研磨、少量 の煤付着。	前期中葉
第9884 PL.169	203	縄文土器 深鉢	DKL3 3面 体部破片		織:織維・石英・片 岩・白色粒/良好/ 明褐色	外反する体部中位。O段多条のL.RとR.Lによる横位羽状 構文構成。透窓箇所で追加整形施文の痕跡が看取される。 内面研磨、煤付着。	前期中葉
第9884 PL.169	204	縄文土器 深鉢	DKK5 3面 体部破片		粗:織維・輝石・白 色粒/良好/黄褐色	縦位・横位平行沈線部を地文とし、内皮平行沈線による強 度状況が重なる。内面丁寧な研磨。205と同一個体。	前期中葉
第9884 PL.169	205	縄文土器 深鉢	DKK5 3面 体部破片		粗:織維・輝石・白 色粒/良好/灰黄褐色	縦位・横位平行沈線部を地文とし、内皮平行沈線による弱 度状況が重なる。内面丁寧な研磨。	前期中葉
第9884 PL.169	206	縄文土器 深鉢	DK-II 体部破片		織:織維・石英少・ 輝石少・白色粒/良 好/に赤い黄褐色	L.RとR.Lによる横位施文による羽状構文構成。内面平滑な撫 で調整。	前期中葉
第9884 PL.169	207	縄文土器 深鉢	D4方周 体部破片		織:織維・白色粒/ 良好/明褐色	無節LとRによる横位施文による羽状構文構成。内面横位研磨 を加える。	前期中葉
第9884 PL.169	208	縄文土器 深鉢	DK-II 10トレ 体部破片		織:織維・白色粒/ 良好/灰黄褐色	外反する体部上半か。横位平行沈線を設け以下、無節Lを 横位に施す。内面平滑な撫で調整。	前期中葉
第9884 PL.169	209	縄文土器 深鉢	DK4方周 体部破片		織:織維・輝石・白 色粒/良好/に赤い 黄褐色	やや厚手の器厚を呈す。横位L.Rと縦位L.Rによる羽状構 文構成。内面研磨を施す。	前期中葉
第9884 PL.169	210	縄文土器 深鉢	DKP-II-15M 頭部破片		織:織維・白色粒/ 良好/に赤い黄褐色	外反する頭部に横位隕線を設ける。隕線貼付後に横位L.R を施す。内面平滑な撫で調整。	前期中葉
第9884 PL.169	211	縄文土器 深鉢	DKL2 3面 体部破片		織:織維・輝石少・ 白色粒/良好/明褐色	R.Lか? 原体不明。内面平滑な横位燃で調整。	前期中葉
第9884 PL.169	212	縄文土器 深鉢	DK-II 体部破片		織:織維・褐色・ 白色粒/良好/に赤い 黄褐色	体部上半か。幅狭の横位平行沈線以下L.RとR.Lによる羽 状構文構成。内面弱い撫で調整。	前期中葉
第9884 PL.169	213	縄文土器 深鉢	DK-II 体部破片		粗:織維・石英・ チャート/白色粒/ 良好/褐色	沈線による小波状文。直前段合燃(直前合2R)を施す。内 面丁寧な研磨を加える。	前期中葉
第9884 PL.169	214	縄文土器 深鉢	DKX-6-L-2 底部L/2残存	底 7.8	織:織維・白色粒/ 良好/赤褐色	強く聞く体部下平。上げ底を呈す。体部は織維文R.Lを継 続する施文。底面にも及び。内面は平滑な撫で調整。	前期中葉
第9884 PL.169	215	縄文土器 深鉢	DKM6 2面 体部破片		織:織維・輝石・白 色粒/良好/明褐色	無節LとRによる横位羽状構文構成。内面撫で調整。内外 とも器面磨減する。	前期中葉
第9884 PL.169	216	縄文土器 深鉢	DK-II 体部破片		織:織維・石英少・ 褐色・白色粒/良 好/に赤い褐色	無節Lを施す。内面へら状工具による撫で調整。	前期中葉
第9884 PL.169	217	縄文土器 深鉢	DK-II 底部破片		粗:織維・白色粒・ 小縫/良好/に赤い 黄褐色	上げ底を呈す。底面は撫でを加える。体部文様は器面磨滅 し判然としない。LR施文か。内面は横位燃で調整。	前期中葉
第9884 PL.169	218	縄文土器 深鉢	DK-II 2面 口縁部破片		織:石英少・白色粒/ 良好/褐色	無織維か。薄手の器厚で角頭状の口脣部を呈す。幅狭の平 行弦線によるコンバス文が横位多段に施される。内面平滑	前期中葉
第9884 PL.169	219	縄文土器 深鉢	DK-II型 口縁部破片		織:織維・石英少・ 白色粒/良好/に赤 い黄褐色	波頂部。刻みを加えた降線を付し、円形貼付文を加える。 内面平滑な撫で調整。	前期中葉

遺物觀察表

種 国 PL_No	種 類 器	出土位置 残 存 率	計測値	胎工・焼成・色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第9998 PL_169	縄文土器 深鉢	D区M5 2面 体部破片		細:石英少・白色粒 /良好・灰黃褐色	外反する体部。横に幾條を地文に、幅狭の平行沈線によるコンバス文が横位多段に配し、連続爪型文も加える。内面横位撫で調整。	前期中葉
第9998 PL_169	縄文土器 深鉢	D区2内墓 体部破片		細:礫維少・石英少 ・白色粒・良好・灰 黃褐色	薄手の器厚を呈す。外反する頭部か、幅狭の平行沈線によるコンバス文が横位多段に施される。内面平滑な撫で調整。	前期中葉
第9998 PL_169	縄文土器 深鉢	D区M4 2面 体部破片		細:礫維少・石英少 ・白色粒・良好・灰 黃褐色	体部上半か、薄手の器厚を呈す。幅狭の平行沈線によるコンバス文が横位多段に施される。補修孔を見る。	前期中葉
第9998 PL_169	縄文土器 深鉢	D区L3 3面 体部破片		細:輝石・白色粒 /良好・/赤い褐色	横位L Rが施される。内面は弱い撫で調整に止まり、凹凸が著しく、異質な感があり異系統上器の可能性もある。	前期後葉
第9998 PL_169	縄文土器 深鉢	D区4トレ 1面 体部破片		細:礫維・輝石・白 色粒/良好・灰褐色	外反する口縁部。小型の連続爪型文による小型の菱形状意匠を配す。	前期中葉
第9998 PL_169	縄文土器 深鉢	D区M5 3面 1面 体部破片		細:礫維・輝石少 ・白色粒/良好・褐色	内側口縁部。輝石の平行沈線部を口縁部配す。斜位沈線も見られあるいは菱形状意匠か。内面弱い研磨を施す。	前期中葉
第9998 PL_169	縄文土器 深鉢	D区4方1上 1面 体部破片		細:輝石少 ・白色粒/良好・黑褐 色	波状線。波頂部に小型の連続爪型文による大型菱形状意匠が配される。内面弱い撫で調整。	前期中葉
第9998 PL_169	縄文土器 深鉢	D区L2 3面 口縁部破片		細:石英・輝石・白 色粒/良好・淡黄色	無撫擦。横位沈線部口縁部を丸く弱位短沈線を充填す。 下位に横位小波状線と連続斜突文が沿い、連続斜突文に平行な撫で調整。薄手で異系統上器であろう。	前期中葉
第9998 PL_169	縄文土器 深鉢	D区 2面 体部破片		細:礫維・石英少 ・白色粒/良好・黑褐色	撫糸L 2条による網目状燃系文。内面は丁寧な研磨。	前期中葉
第9998 PL_169	縄文土器 深鉢	D区10トレ 1面 体部上半破片		細:輝石・白色粒 /良好・明黃褐色	地文に横位L Rを施し、円形刺突文を斜位に配す。内面丁寧な横位研磨を加える。	前期後葉
第9998 PL_170	縄文土器 深鉢	D区K6 3面 口縁一部体上半 1/3残存		細:石英少・白色粒 /良好・褐色	口縁部外反。横位L Rが覆う。内面丁寧な研磨を加える。	前期後葉
第9998 PL_170	縄文土器 深鉢	D区L8 3面 体部破片		細:石英・白色粒 /良好・灰褐色	横位L Rが施される。内面横位削り調整後弱い研磨。	前期後葉
第9998 PL_170	縄文土器 深鉢	D区K9 3面 体部破片		細:石英・輝石・白 色粒/良好/にぶい 褐色	横位・斜位L Rが施される。内面丁寧な研磨を施す。	前期後葉
第9998 PL_170	縄文土器 深鉢	D区K5 3面 体部破片		細:石英・片岩粒 ・白色粒/良好/に 赤い褐色	横位L Rが施される。内面平滑な撫で調整。	前期後葉
第9998 PL_170	縄文土器 深鉢	D区K2堅 体部破片		細:輝石少・白色粒 /良好/浅黄色	斜位L Rを施す。内面丁寧な研磨を加える。	前期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区K15 3面 体部上半破片		細:石英・輝石多 ・白色粒/良好・灰 褐色	小型の横位連続爪型文を1条配し、以下縱位L Rを施す。 内面研磨。	前期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区3方堅 体部破片		粗:白色粒/良好 /に赤い褐色	弱め付す横位浮線文3条を多段に配す。浮線文間に円形刺突文を施す。内面弱い研磨を加える。	前期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区K4 体部破片		細:石英・白色粒 /良好/灰褐色	尖状突起付を弱め付す浮線文を多段に配す。地文は見られ ない。内面撫で調整。	前期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区K15 3面 体部上半破片		細:石英・輝石多 ・白色粒/良好・灰 褐色	小型の横位連続爪型文を1条配し、以下縱位L Rを施す。 内面研磨。	前期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区2面 体部破片		細:石英・輝石・白 色粒/良好/褐色	結節彫文R Lが横位に施される。内面弱い撫で調整。	前期末葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区2面 体部破片		粗:輝石・白色粒 /良好/赤褐色	結節彫文R Lが横位に施される。内面弱い研磨を加える。	前期末葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区3 レ 口縁部破片		細:石英・輝石・白 色粒/良好/灰褐色	口縁部で画された施文部と磨消部による堅垂文構成か。施文部は縱位R L充填施文。磨消部は疊状堅垂文が配される。 内面弱い撫で調整。241と同一個体か。	中期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区1D固 1面 口縁部破片		粗:輝石・褐色 ・白色粒/良好/灰 褐色	口縁部横位隆線に小突起を設け下端より弧状隆線が派生す る。溝状状意匠か。施文部はR L充填施文。内面平滑な撫で。	中期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区3トレ 体部破片		粗:輝石・白 色粒/良好/灰 褐色	口縁部で画された施文部と磨消部による堅垂文構成か。施文部は縦位R L充填施文。内面弱い撫で調整。241と同一個体か。	中期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区2面 体部破片		粗:輝石・白色粒 /良好/褐色	施文部で画された施文部と磨消部による堅垂文構成か。施文部は縦位R L充填施文。内面弱い撫で調整。	中期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区2面 口縁部破片		粗:輝石・白色粒 /良好/灰褐色	横位L Rを充填する。内面弱い撫で。241と同一個体か。	中期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区3 レ 口縁部破片		粗:輝石・白 色粒/良好/灰 褐色	横位L Rを充填する。内面平滑な撫で。	中期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区1面 体部破片		粗:輝石・白色粒 /良好/灰褐色	施文部で画された施文部と磨消部による堅垂文構成か。施文部は縦位R L充填施文。内面弱い撫で。	中期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区2面 口縁部破片		粗:輝石・白色粒 /良好/灰褐色	横位L Rを充填する。内面弱い撫で。	中期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区3面 口縁部破片		粗:輝石・白 色粒/良好/褐色	横位L Rを充填する。内面平滑な撫で。	中期後葉
第10006 PL_170	縄文土器 深鉢	D区M19 1面 口縁部破片		粗:輝石・褐色 ・白色粒/良好/淡 褐色	口縁部肥厚。施文部で画された施文部と磨消部による堅垂文構成か。施文部はR L充填施文。内面平滑な撫で。	後期初頭

種 因 PL.No	種 類 器	出上位置 残存率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第100回 PL.170	249 瓔文土器 深鉢	DK0-IV-1 VII 体部破片		細:碎石多・白色粒/ 良好/にふい・黄褐色	細な複数で画された施部と磨消部の弧状意匠。施部は無 跡し充填施文。内面平滑な撫で調整。	後期前葉	
第100回 PL.170	250 瓔文土器 深鉢	DK0-III-17-VII 口縁部破片		粗:石英少・碎石 少:白色粒/良好/ 相色	大型深鉢で頭部で緩やかに屈曲する。口縁部は無文で屈曲 部に横位沈線3条を設ける。内面は横位研磨を加える。	後期後葉	
第100回 PL.170	251 瓔文土器 深鉢	DK0-III-16-2 体部破片		粗:石英少・碎石 少:白色粒/良好/ 相色	厚手の圓厚。体部下半か。幅狭の平行沈線による棱位波状 文や斜位沈線文が施される。瓦雜な施文。内面研磨。	後期前葉	
第100回 PL.170	252 瓔文土器 深鉢	DK 体部破片		粗:石英少・碎石 少:白色粒/良好/ 相色	厚手の圓厚。体部下半か。幅狭の平行沈線による棱位波状 文や斜位沈線文が施される。瓦雜な施文。内面研磨。	後期前葉	
第100回 PL.170	253 瓔文土器 深鉢	DK0-III-16-1 体部破片		粗:石英少・碎石少 ・白色粒/良好/相色	稜位波状沈線や斜位沈線が配される懸垂重構成と思われ る。内面は横位研磨を加える。250・251と同一個体か。	後期前葉	
第100回 PL.170	254 瓔文土器 深鉢	DK9トレス 体部破片		粗:石英少・碎石少 ・白色粒/良好/相色	稜位波状沈線や斜位沈線が配される懸垂重構成と思われ る。内面は横位研磨を加える。250・251と同一個体か。	後期前葉	
第100回 PL.170	255 瓔文土器 深鉢	DK12トレス 体部破片		粗:石英少・碎石少 ・白色粒/良好/相色	稜位波状沈線や斜位沈線が配される懸垂重構成と思われ る。内面は横位研磨を加える。250・251と同一個体か。	後期前葉	
第100回 PL.170	256 瓔文土器 深鉢	DK0-III-16-VII 体部破片		粗:石英少・碎石少 ・白色粒/良好/相色	稜位波状沈線や斜位沈線が配される懸垂重構成と思われ る。内面は横位研磨を加える。250・251と同一個体か。	後期前葉	
第100回 PL.170	257 瓔文土器 上製円盤	DK2円盤 完形	径 2.4 幅 2.5	厚 0.6 重 6.2	細:白色粒/良好/ 赤褐色	体部破片を利用する。小型で周縁を丁寧に磨る。文様はR Lを施す。	前期後葉
第100回 PL.171	258 刷片石器 打製石斧	DK 1/2	長 幅 4.3 4.4	厚 1.8 重 76.3	粗粒輝石安山岩	熱被剥離して上端部を欠く。表面裏とも刃部は著しく摩耗、 よく使い込まれている。右辺側刃部は内生され大きく変形 している。	
第100回 PL.171	259 刷片石器 スクレイバー	DK 完形	長 幅 7.8 7.3	厚 1.9 重 49.3	黒色頁岩	刃頭および左側刃の加工は丁寧だが、右辺側は粗く、側縁 は鋼直状を呈する。裏面右辺側削離が大きく内側に入り込 んでしまっている。削離面の棱はシャープで、完成状態には ないよう思う。	
第101回 PL.171	260 磨石器 四面	DK 完形	長 幅 8.2 7.6	厚 3.8 重 309.5	粗粒輝石安山岩	背面中央に偏平状の溝部Ⅰがあるほか、裏面側にアバ タ状の集合打痕、側縁に打痕がある。裏面裏とも摩耗痕に 覆われる。	
第101回 PL.171	261 磨石器 四面	DK 完形	長 幅 9.5 6.9	厚 4.9 重 389.2	粗粒輝石安山岩	裏面の中央に凹みがⅡ面所認められる。裏裏面のほぼ中央 及び下端部に敲打痕が集中する。円錐を利用していると考 えられる。	
第101回 PL.171	262 磨石器 四面	DK 完形	長 幅 13 10	厚 3.4 重 669.9	粗粒輝石安山岩	裏面の中央付近に小さな凹みが多数認められ周辺に齊面 が形成される。鍼辺部には側面方向からの剥離痕が多く認 められ敲打により生じたと考えられる。円錐を利用してい ることを考えられる。	
第101回 PL.171	263 磨石器 四面	DK 完形	長 幅 11.4 8.2	厚 4.4 重 620.4	粗粒輝石安山岩	裏面裏ともアバタ状の集合打痕Ⅱ面所があるほか、激しく 使い込んだ摩耗面が広がる。裏面側は被熱して赤化、ヒビ 割れがある。	
第101回 PL.171	264 磨石器 四面	DK 完形	長 幅 9.2 8	厚 6 重 500.6	粗粒輝石安山岩	裏面裏ともと漏斗状の窪みⅢがあるほか、弱い摩耗面も広 がっているが、小口部や側縁の打痕が優勢。被熱したのか 磚面がヒビ割れる。	
第101回 PL.171	265 磨石器 四面	DK 完形	長 幅 11.1 9	厚 5.3 重 735.1	粗粒輝石安山岩	裏面裏とも集合打痕と摩耗痕が広がる。摩耗は著しく裏面 の口が潰れるほどである。粗粒石材であるため分かりにく いが側面も摩耗しているように見える。	
第101回 PL.171	266 磨石器 四面	DK 完形	長 幅 10.3 10.2	厚 5.3 重 748.9	粗粒輝石安山岩	裏面裏とも摩耗痕が広がるほか、鍼の中央付近にアバタ状 の集合打痕がある。被熱して裏面が變色、下端側はヒビ割 れでいる。	
第101回 PL.171	267 磨石器 四面	DK 完形	長 幅 11.7 10.6	厚 4.9 重 839.8	粗粒輝石安山岩	裏面裏ともと漏斗状の窪みⅢがあるほか、摩耗痕が広が る。摩耗痕は石材の口が潰れるほどで、よく使い込まれてい ることが分かる。	
第101回 PL.171	268 磨石器 磨石?	DK 完形	長 幅 38.2 11.8	厚 10.6 重 8500	粗粒輝石安山岩	裏面裏とも集合打痕と摩耗痕が広がる。鍼形状は略台 形状を呈する。第101回271に近接して出土、セットとして 扱えるべきものかもしれない。	
第101回 PL.171	269 磨石器 磨石	DK 完形	長 幅 7.2 6.2	厚 5.6 重 321.6	粗粒輝石安山岩	裏面裏とも窪中央付近に打痕がある。小口部分に敲打痕 が球形状に近い。	
第101回 PL.171	270 磨石器 磨石	DK 完形	長 幅 6.1 5.3	厚 3.6 重 158.9	粗粒輝石安山岩	裏面裏とも摩耗痕が広がる。摩耗痕は鍼形状に即してお り、背面側では中央より右の摩耗が著しい。指先で握れる程度 の岩床運を用いる。	
第101回 PL.171	271 磨石器 石皿	DK ほぼ完形	長 幅 35.2 33.6	厚 12.3 重 22600	粗粒輝石安山岩	背面側に弱い摩耗面、裏面裏上半部に著しく摩耗した光沢 面が広がる。当初、殻穴遺物の出土遺物とされていたが、 最終的には弥生初期建物が埋没した後に据え置かれたものと された。器種名の検討を要す。	

弥生時代

D24号堅穴建物

種 因 PL.No	種 類 器	出上位置 残存率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第106回 PL.172	I 弥生土器 壺	床直 完形	口 高 8.0 15.4	底 5.6	細石英・白色粒/ 良好/暗赤褐色	体部最大径を下方に設けた均整の取れた安定した器形。口 縁へ体部上半は稜位研磨。下半は横位研磨、底部はへら削 りを施す。内面口縁部は横位研磨、体部は横位撫でか。	中期後葉

遺物觀察表

種 国 PL.No	種 類 器 種	出上位置 残 有 事	計測値			胎/成形/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
			口 高	底	6.7				
第10684 PL.172	2	弥生土器 壺	床直 ほぼ完形	口 9.7 17.6	底	6.7	織白色粒/良好/ にぶい赤褐色	口縁部は長く外反。頭部屈曲部に横位沈線1条を設け、体部中位に瘤状突起を5単位付す。口縁~体部中位横位研磨、下半部は横位研磨。内面口縁部は横位研磨。体部は横位へラ撫で。外面に被熱時に発着。器面も剥落する。	中期後葉
第10684 PL.172	3	弥生土器 壺	床直 口縁部2/3~体部上半1/3残存	口 12.4			織輝石/白色粒/ 良好/褐色	頭部は横位沈線2条を設ける。口縁部は横位L R、口縁部は横位研磨で削除。体部上半及 び下半部は瓶位。体部中位は横位研磨をす。内面口縁部は横位へラ撫で。外面に弱い研磨。体部は強いてラ撫で。外面にカゴ目を見る。	中期後葉
第10684 PL.172	4	弥生土器 壺	床直 ほぼ完形	口 13.4 25.5	底	8.4	織石英/白色粒/ 良好/褐色	均整取れた器形。口縁部に無節R 橫位施。頭部に横位沈線2条と波状沈線を配す。口縁部は横位撫で。体部上半及 び下半部は瓶位。体部中位は横位研磨をす。内面口縁部は横位研磨。体部は横位へラ撫で。外面にカゴ目を見る。	中期後葉
第10684 PL.172	5	弥生土器 壺	床直 頭部及び体部の一部欠損	口 16.5 28.0	底	6.6	織石英/白色粒/ 良好/明赤褐色	頭部に横位沈線2条を設ける。口縁部横位撫で後後位・横位 ハケ撫で。体部は横位研磨。中位屈曲部は横位研磨。内面口縁部は横位研磨。体部は横位・斜位へラ撫で。体部にカゴ目を見る。	中期後葉
第10684 PL.172	6	弥生土器 壺	床直 頭部~体部残存		底	6.3	織石英少・白色粒/ 良好/にぶい黄褐色	小型器。体部上半は斜位ハケ撫で後後位研磨。中位は横位 研磨。下半は斜位へラ撫で後弱い研磨。内面横位・斜位へ ラ撫で。	中期後葉
第10684 PL.172	7	弥生土器 壺	床直 口縁部及び体部の一部欠損		底	8.5	織石英/白色粒/ 良好/明黄褐色/黑 色	大型ながら器厚薄手で軽量。頭部に3条の横位沈線を2段 設け小字附加文を付す。5単位か。体部中位を横位沈線1条と し上半に沈線による大柄の渦巻文を5単位配す。体部下 半は輪軸状の付加条文を横位・斜位に施す。内面彫、透 視感落著し。内面に衆多入る。	中期後葉 墓場式か
第10684 PL.173	8	弥生土器 壺	床下 口縁~体部1/3、 底部残存	口 11.3 15.5	底	7.0	織石英少・白色粒/ 良好/明丽色/黑 褐色	口縁部短く外反。口部下半は斜位へラ撫で後後位研磨。内面口縁部は横 位研磨。体部は斜位ハケ撫で後後位研磨。	中期後葉
第10684 PL.173	9	弥生土器 壺	床直 頭部及び体部の一部欠損	口 16.4 16.8	底 0	6.0 0	織輝石/白色粒/ 良好/褐色	口縁部短く外反。口部下半は横位L R、頭部屈曲部に8本單 位の張致文。体部上半は強いてカゴ目による横位山形意匠が 達成する。体部下半は横位研磨を施す。内面口縁~体部上 半は横位、下半は弱い研磨を加える。外壁保付。	中期後葉
第10684 PL.173	10	弥生土器 壺	床直 口縁~体部一部 欠損	口 17.6 20.5	底	8.7	粗石英/白色粒/ 良好/明黄褐色	口縁部短く外反。口部下半は横位L R、頭部に6本單位の 張致文。体部上半は斜位へラ撫で後後位状文を重ね。体部 下半は弱い研磨を加える。内面横位研磨。外壁保付。	中期後葉
第10684 PL.173	11	弥生土器 壺	床直 口縁~体部1/2 欠損	口 19.7 23.3	底	7.8	織石英/白色粒/ 良好/褐灰色	口縁部短く外反。口部下半に刻み、頭部屈曲部に4本單位の 張致文。体部上半は波状文を施す。下半はへラ撫で調整後 横位研磨。内面は横位・斜位研磨を施す。	中期後葉
第10684 PL.173	12	弥生土器 壺	床直 口縁部~体部上 半1/4、体部下 半~底部残存	口 (24.2) 37.0	底	10.4	織石英少・白色粒/ 良好/にぶい黄 褐色	大型型。口縁部はよく外反する。口部下半に横位L R、頭部 屈曲部に5~6本單位の張致文。体部上半に強いてカゴ目 による横位山形意匠が意図される。地文は斜位ハケ目。 下半は弱い研磨を施す。内面口縁~体部上半は横位研磨。 体部中位は横位ハケ目、下半は横位研磨を加える。	中期後葉
第10684 PL.173	13	弥生土器 壺	フタ上 体部のみ1/2残 存				織輝石/白色粒/ 良好/灰黄色	球形状の器形。振動の大さい波状文+小さい波状文が横位 に配される。外端部削減。内面器壁剥落。	中期後葉
第10684 PL.173	14	弥生土器 壺	床下 底部1/2残存		底	9.6	粗石英少・織輝 石/白色粒/良 好/黒褐色	大型型か。外反気象に聞く体部下半。外壁は横位撫で後弱 い研磨。研磨は底面にも及ぶ。内面透壁剥落。	中期後葉
第10704 PL.174	15	弥生土器 台付甕	床直 完形	口 6.2 9.2	底	4.8	織石英少・白色粒/ 良好/黑色/明赤 褐色	口縁部上半位の横位波状文。体部は沈線による重コ字状 透壁意匠を4単位配し、頭部屈曲部と体部中位に円形貼付文を4 単位付す。体部下半及び内面は撫で調整。	中期後葉
第10704 PL.174	16	弥生土器 台付甕	床直 ほぼ完全(口縁 部と脚部一部欠 損)	口 12.8 14.5	底	8.7	織石英/白色粒/ 良好/黑色/明赤 褐色	口縁部横位L R、口縁部は斜位ハケ撫で後横位撫で。体部は沈線による横位波状文。 頭部屈曲部と体部中位に円形貼付文を5単位付す。体部下半 は横位研磨。脚部は横位研磨を施す。内面口縁~体部は横 位・斜位研磨を施し、脚部は横位撫で調整。口縁部には保 が付着する。	中期後葉
第10704 PL.174	17	弥生土器 台付甕	床直 脚部欠損	口 15.6			織石英/白色粒/ 良好/にぶい褐色 黒色	口縁部に横位L R、口縁部は平行沈線による横位波状文。 頭部は4.5~6本の瘤状が並ぶ。体部は強いてカゴ目による の重ね文が配される。頭部と体部中位に円形貼付文を付 す。6単位を数える。内面へラ撫で後横位研磨を重ねる。 外面に被熱による優位付着する。	中期後葉
第10704 PL.174	18	弥生土器 台付甕	フタ上 体部破片				織輝石/白色粒/ 良好/明赤褐色	内側する体部に沈線によるコの字重ね文を施す。地文にL Rか。内面横位研磨。	中期後葉
第10704 PL.174	19	弥生土器 台付甕	フタ上 脚部破片2点		底	(8.0)	織石英少・白色粒/ 良好/黑褐色	外側横位撫で後弱い研磨。内面横位へラ撫で。	中期後葉
第10704 PL.174	20	弥生土器 高杯	床直 ほぼ完形(脚部 一部欠損)	口 7.1 11.6	底	8.6	織石英少・白色粒/ 良好/黑色/明赤 褐色	均整の取れた安定感ある器形。外面口縁~体部・脚部とも横 位研磨を施す。内面口縁~体部・脚部とも横位研磨を施す。 脚部内面は横位撫で調整ご弱い研磨を加える。	中期後葉
第10704 PL.174	21	弥生土器 高杯	床直 口縁部の一部と 脚部欠損	口 18.2			織白色粒/良好/ 明赤褐色	口縁部山形突起が水平に突出する。おそらく5単位か。外 面口縁~体部は横位研磨。脚部は瓶位。瓶部は斜位研磨を 施す。内面口縁~体部上半は横位研磨、下半は斜位研磨。 脚部内面は横位撫で調整ご弱い研磨を加える。	中期後葉

拂 因 PL.No	No	種 類 器 種	出上位置 残 余 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第108回 PL.174	22	弥生土器 蓋	床直 完形	口 10.2 高 2.5	織:石英・輝石・ 白色粒/良好/灰黃褐色	小型で圓状の蓋。頭部に彫みを付さない。2個1対の小孔を 2單位設ける。外面丁寧な研磨を施し赤色を加える。内面 は斜位/ハケ撫で後弱い研磨。口縁端部は削り調整後研磨す る。	中期後葉	
第108回 PL.174	23	弥生土器 蓋	床上 1/3残存	口 (11.4) 高 1.9	織:石英・輝石・白 色粒/良好/灰黃褐色	小型で圓状の蓋。頭部に彫みを付さない。2個1対の小孔を 2單位設ける。外面丁寧な研磨を施し赤色を加える。内面 は斜位/ハケ撫で後弱い研磨。口縁端部は削り調整後研磨す る。地文にLR。内面研磨を加え。	中期後葉	
第108回 PL.174	24	磨製石礫	床上 ほぼ完形	長 幅 4.5 1.6	厚 0.3 重 1.7	珪質片岩	全体的に丁寧に研磨整形されており多方向の細かい擦痕が 認められる。全体的にむわむわに光沢がある。孔は中央が抜 くなっているより両面穿孔の可能性がある。孔径約3mm。	中期後葉
第108回 PL.174	25	磨製石礫	床直 完形	長 幅 4.8 2.2	厚 0.2 重 2.2	珪質片岩	全体的に丁寧に研磨整形されており多方向の細かい擦痕が 認められる。全体的にむわむわに光沢がある。孔は中央が抜 くなっているより両面穿孔の可能性がある。表面の孔に穿孔途 中のものが付随する。孔径約2mm。	中期後葉
第108回 PL.174	26	大型蛤貝 磨製石斧	床下 ほぼ完形	長 17 幅 6.6	厚 3.6 重 694.9	変輝綠岩	全体的に丁寧に研磨整形されている。刃部の反対側の基部 側に色調が異なる部分が帯状に認めらる者柄痕と考えられ る。表面では帶状部分は淡色であり基部は濃色であること から本器は着柄部ではなく外部に露出していたものと考えら れる。	中期後葉
第108回 PL.174	27	裸石器 磨石	床直 完形	長 幅 10. 9.3	厚 8.2 重 1079.6	粗粒輝石安山岩	全面が滑らかである面の可能性がある。表面から上面及 び右側面にかけて左側面の中央付近に非常に滑らかな部 分が認められる。円鑿を利用していると考えられる。	中期後葉
第108回 PL.174	28	裸石器 磨石	床直 完形	長 幅 12.1 8.3	厚 4.8 重 729.1	粗粒輝石安山岩	表面のほぼ全面に磨面が認められる。円鑿を利用してい ると考えられる。	中期後葉
第108回 PL.174	29	裸石器 台石	床直 4/5	長 (33.3) 幅 (26.7)	厚 (10.2) 重 14400	粗粒輝石安山岩	表面の中央部平用でやや滑らかな部分が認められる。大形 円鑿を利用していると考えられる。	中期後葉
第108回 PL.174	30	木器 道具	床直	長 (9.0) 幅 (3.15)	厚 1.2		木製の職具。鋸刃状の穂片。	中期後葉
D25号穴空建物								
拂 因 PL.No	No	種 類 器 種	出上位置 残 余 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第114回 PL.174	1	弥生土器 壺	床直 口縁部1/3-底部 残存	口 (12.0) 高 25.0	底 7.4	織:石英・輝石・ 白色粒/良好/に ふい褐色/黒褐色	口縁部は短く外反。口部に横位LR、頭部に横位沈線1 条を設けた下位は斜位LRを施す。体部は縦位/ハケ撫で、横 位/ハケ撫で後下位に縱位研磨を加える。内面は口縁部は横 位研磨。体部は撫で調整、内面体部は横位研磨。	中期後葉
第114回 PL.174	2	弥生土器 壺	床直 完形	口 9.8 高 25.2	底 6.0	織:石英・白色粒 /良好/黒褐色	縦位の取れた器形が呈す。口縁部に横位LR。頭部に横位 沈線2条を設けた後に横位研磨を施す。口縁へ体部上半部位研 磨。下半は斜位/ハケ撫で後縦位研磨を加える。内面口縁部 は横位/ハケ撫で後弱い研磨、体部はハラ撫で。	中期後葉
第114回 PL.175	3	弥生土器 壺	床直 口縁部1/3-体部 上半1/2-底部残 存	口 (12.0) 高 21.2	底 6.0	織:石英・白色粒 /良好/にふい 褐色	口縁部に横位LR、頭部は横位沈線2条を設けた所の間に山 形文を施す。地文には横位LR。体部は斜位/ハケ撫で後縦位 研磨を加える。内面は口縁部横位研磨で、体部は斜位/ハラ 撫で、ハケ撫でを施す。	中期後葉
第114回 PL.175	4	弥生土器 壺	床上 床部・体部1/2 残存	口 12.6		織:石英・輝石・ 褐色粒・白色粒/ 良好/褐色	広口で頭部扁曲面に横位沈線1条を設け、体部上半に横位 LRを施す。以下斜位/ハケ撫で後弱い縦位研磨を加える。口縁 部内面横位撫で、体部は器型剥落。	中期後葉
第115回 PL.175	5	弥生土器 壺	床直 口縁部3/4のみ 残存	口 10.8		織:石英・輝石・ 白色粒/良好/黒 褐色	小口径で口部にLR、頭部に横位沈線を設ける。外反する 頭部は横位撫で後弱い縦位研磨。内面は強い横位軸調整。	中期後葉
第115回 PL.175	6	弥生土器 壺	床上 口縁部のみ残存	口 14.2		織: 輝石・白色粒 /良好/やや軟質に ふい褐色	口縁部に横位LR。外反する頭部は縦位・斜位/ハケ撫でを 施す。内面横位軸で、頭部は斜位/ハケ撫でを施す。	中期後葉
第115回 PL.175	7	弥生土器 壺	床直 口縁部一部-頭 部残存	口 (14.0)		織: 輝石・白色粒 /良好/褐色	頭部僅かに内窪。頭部は斜位/ハケ撫でを施す。内面は横位 研磨。外側とも凹溝剥落。	中期後葉
第115回 PL.175	8	弥生土器 壺	床直 口縁部欠損-頭 部1/3-底部残存	底 7.5		織: 輝石・白色粒 /良好/黒褐色	頭部に横位沈線を設けるLRを施す。体部は斜位/斜位/ハ ケ撫で後縦位研磨を加える。内面は横位/ハラ撫でとハケ撫 でを施す。	中期後葉
第115回 PL.175	9	弥生土器 壺	床直 頭部1/6-体部 1/2残存	底 6.3		織: 石英・輝石・ 白色粒/良好/灰 褐色/黒褐色	頭部に横位沈線2条を設ける。以下体部は斜位/ハケ撫で後 縦位研磨を加える。内面頭部は横位研磨、体部は器型剥落。	中期後葉
第115回 PL.175	10	弥生土器 壺	口縁部-体部上 半2/3残存・ 底部破片	底 5.8		織: 石英・白色粒 /良好/にふい 褐色/黒褐色	頭部外反し4本単位の横位波状文と縦状文が記される。 体部上半は斜位/ハケ撫で、下半は斜位/ハケ撫で。内面は横位 削り調整を施し口縁部に弱い研磨を加える。	中期後葉
第115回 PL.175	11	弥生土器 壺	床直 口縁部欠損-頭 部1/2残存	底 6.0		織: 石英・白色粒 /良好/灰褐色/黑 褐色	頭部-体部はハラ撫で後縦位研磨を加える。内面は頭部上 半は斜位/ハラ撫で、下半はハケ撫でを施す。外外面体部下半 部研磨。	中期後葉
第115回 PL.175	12	弥生土器 壺	フタ上 体部上半-底部 2/3残存	底 6.5		織: 石英少・輝石 ・白色粒/良好/ にふい褐色/黑 褐色	体部上半-中位斜位-横位/ハケ撫で後弱い研磨、下半は丁 寧な研磨を施す。内面体部上半はハラ撫で、下半は横位/ハ ケ撫で。	中期後葉
第116回 PL.176	13	弥生土器 壺	フタ上 体部破片2点				外外面は横位撫で調整後縦位研磨。内面は横位/ハラ撫で後弱 い研磨。器型剥落。	中期後葉

遺物觀察表

種 因 PL.No	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第1168# PL.176	14 弁生土器 壺	床直 頭部のみ残存		緑:石英・輝石・ 白色粒・良好/に ぶい黄褐色	口縁部は横位撫で、頭部は斜位・傾位ハケ撫で後横位L R を重ねる。内面横位撫で調整。	中期後葉	
第1168# PL.176	15 弁生土器 壺	床直 口縁部・体部上半 一部欠損	口 高 12.8 11.8	底 6.6	粗:石英・輝石・ 白色粒・良好/に ぶい黄褐色	小型壺。上半の器形に添み。外面部横位撫で調整後斜位ハケ 撫で。内面は口縁部・体部上半ハケ撫で下半は横位研磨が加 わる。	中期後葉
第1168# PL.176	16 弁生土器 壺	床直 口縁部・体部上 半/2欠損		底 6.4	粗:輝石・白色粒 /やや軟質・灰黃 褐色	体部上半外反、2条の縦線平行沈線による懸垂。下端に 円形貼付文を付す。体部上半には丸頭な横位波状文が施さ れる。地紋は横位L R。内面横位撫で。外器面磨滅。	中期後葉
第1168# PL.176	17 弁生土器 壺	床直 口縁の一部と底 部欠損	口 16.9	粗:石英・白色粒 /やや軟質・黄褐 色/黒色	口縁部は横位L R、口縁部は本単位の横位波状文と 地紋L R、頭部は縦状文を設ける体部同工具による頭部 ハケ目3条を設けるが反対面には施していない。空白部 は横位波状文を多段に施す。内面は横位L R。内外面に燐片付	中期後葉	
第1168# PL.176	18 弁生土器 鉢	床直 口縁部1/4欠損	口 22.2 9.4	底 8.1	緑:石英・輝石・ チャート・白色粉 /良好/赤色	大型の鉢。口縁部一体化し内蔵。安定感ある器形。内 外面部横位研磨を入念に施し、赤彩を加える。	中期後葉
第1168# PL.176	19 弁生土器 台付鉢	床直 完形	口 10.0 13.3	底 8.2	粗:石英・輝石・ 白色粒・良好/に ぶい黄褐色・赤色	口縁部に小孔を2ヶ1対穿す。焼成前穿孔。口縁部と体部 下半に3条の沈線による横位山形文を配す。体部上半と 体部下半・脚部は丁寧な研磨後に赤彩を施す。赤彩は内面 にも及ぶ。出土上盤中微出した存在である。	中期後葉
第1168# PL.176	20 弁生土器 台付壺	床直 口縁部2/3欠損	口 9.0 10.6	底 5.2	緑:石英少・白色 /良好・赤色	口縁部に横位沈線2条による横位波状沈線を設け、体部に 逆S字による重コ字状位置を6単位配す。脚部に頭位ハケ撫 で、横位撫で。内面平滑な撫で調整。上手器削刮。	梨林式
第1168# PL.176	21 弁生土器 高杯	床上 体部下半・脚部 残存		底 7.9	緑:石英・白色粉 /良好/橙色/赤 色	体部下半は廣く圓く、斜位・縦位ハケ撫で後弱い研磨。 脚部は横位撫で。内面も研磨を施す。体部内外面赤彩を施す。	中期後葉
第1168# PL.176	22 大型蛤貝 磨製石斧	床直 完形	長 幅 16.8 7.2	厚 重 4.5 940.3	変輝隕岩	全体的に丁寧に研磨整形されている。刃部の反対側の基部 側に淡色部分が帶域に認められ着柄部と考えられる。基部 は過色であり着柄部でなく外部に露出していたものと考え られる。	
第1174# PL.176	23 大型蛤貝 磨製石鍬	床直 完形	長 幅 3.9 1.8	厚 重 0.3 1.9	珪質準片岩	全体的に丁寧に研磨整形されている。刃部は横方向の擦痕 が主目的であり、基部は縱方向の擦痕が主目的である。一 つ一つの擦痕は幅広く全体的に粗い。	
第1174# PL.176	24 大型蛤貝 磨製石鍬	床直 ほぼ完形	長 幅 4.4 2	厚 重 0.3 2.6	黒色準片岩	全体的に丁寧に研磨整形されている。刃部は横方向の擦痕 が主目的であり、基部は縱方向の擦痕が主目的である。一 つ一つの擦痕は幅広く全体的に粗い。	
第1174# PL.176	25 大型蛤貝 磨製石鍬	床直 完形	長 幅 4.9 2.1	厚 重 0.3 3.6	黒色準片岩	全体的に丁寧に研磨整形されている。刃部は横方向の擦痕 が主目的であり、基部は縱方向の擦痕が主目的である。	
第1174# PL.176	26 大型蛤貝 磨製石鍬	床直 2/3	長 幅 (4.7) 2.7	厚 重 0.3 4.9	綠色片岩	全体的に丁寧に研磨整形されている。刃部は横方向の擦痕 が主目的であり、基部は縱方向の擦痕が主目的である。一 つ一つの擦痕は幅広く全体的に粗い。	
第1174# PL.176	27 偏平片刃 磨製石斧	床上 完形	長 幅 4 3.8	厚 重 0.8 242	変質蛇紋岩	全体的に丁寧に研磨整形されており光沢がある。	
第1174# PL.176	28 離石器 石皿	床直 完形	長 幅 33 13	厚 重 2.7 1393.0	凝灰質砂岩	表面裏のほぼ全面に滑らかな部分が認められる。表面は中 央付近がやや凸たる形態であり全体的に赤褐色物質が付着 する。裏面はほぼ平坦であるが中央付近が特に滑らかである。	M—Ⅲ—18G と接合
第1174# PL.176	29 離石器 台石	床直 完形	長 幅 13.7 14.6	厚 重 5.6 1665.9	粗粒輝石安山岩	表面のほぼ全面に変色変化が認められる。表面に断面U字 形の比較的の深い横条痕が多数認められる。円錐を利用して していると考えられる。	
第1174# PL.177	30 砥石	床直 1/3	長 幅 (32.0) (15.4)	厚 重 (4.4) 3338.7	粗粒輝石安山岩	表面裏に平坦で滑らかな部分が認められる。表面は中 央付近がやや凸たる形態であり全体的に赤褐色物質が付着 する。部分的に非常に滑らかな箇所が認められる。表面裏及び右 側面は鏡面感と判断され板状節理の跡跡から石材採取して いると考えられる。	
第1174# PL.177	31 環狀石斧	床直 ほぼ完形	直 径 9	厚 重 3.3 277.7	変はんれい岩	全体的に丁寧な研磨整形が認められ実沢がある。中央の孔 の内面には横方向の細かい線条痕が多数認められる。	
第1186# PL.177	32 硅化木	床直				硅化木塊。無邊にヘギ材付着。	

C 4号堅穴狀遺構

種 因 PL.No	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第1198# PL.178	1 弁生土器 壺	床直 口縁部完存・脚 部1/4	18.5	I 1	複合口縁から脚部上位にかけて櫛描波状文を7帯施す。施 文具7箇12mm。外面部口縁部～脚部上位焼成化物付着。脚 部縦位磨き。内面部口縁部～脚部横位磨き。脚部縦位磨 き。	縛式
第1198# PL.178	2 弁生土器 壺	フク土 口縁部～脚部 3/4	17.0	D 6	括れ部から脚部にかけて櫛描T字文を施す。施文具7箇11 mm。外面部・内面部横位の焼磨き。	縛式
第1198# PL.178	3 弁生土器 小型壺	床直 完形	10.2 4.5	12.0 D 2	口縁部から括れ部にかけてやや粗雑な櫛描波状文を3～4 帯施す。施文具6箇11mm。外面部・脚位磨き。脚部下半 に焼成化物付着。内面やや粗い横・斜位磨き。幅10mm 前後の輪積み痕跡。	縛式
第1198# PL.178	4 弁生土器 高杯	床上 脚部完存	14.9	D 7	外面部縦・内面部横位の磨き。	縛式

種 国 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第119回 PL.178	5	剥片石器 石礫	フク土 完形	長 3.1 幅 1.9 厚 2.8	孔 0.5 重 0.07	細粒輝石安山岩	裏面に素材剥片の主要剥離面を大きく残す。表面は全面に 押圧剥離痕が認められる。	凹凸無基盤
第119回 PL.178	6	ガラス玉	フク土	長 0.35 幅 0.44	孔 0.2 重 0.07		鋼着色のカリガラス(Group II)。	
第119回 PL.178	7	ガラス玉	フク土	長 3.1 幅 1.9	孔 3.1 重 1.9		鋼着色のカリガラス(Group II)。	
第119回 PL.178	8	ガラス玉	フク土	長 3.1 幅 1.9	孔 3.1 重 1.9		鋼着色のカリガラス(Group II)。	

D 1号型6状遺構

種 国 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考			
第120回 PL.178	1	弥生土器 蓋	フク土 体部下半～底部 残存	底	9.0	細石英・輝石・白 色粒/良好/褐色	体部中位で内凹する。中位は横位研磨、下位は縦位研磨、 底面は斜位研磨を施す。内面は横位研磨。	縦式		
第120回 PL.178	2	弥生土器 蓋	フク土 体部下半～底部 1/3残存	底	(8.0)	細・輝石・白色粒/ 良好/灰黃褐色	体部中位強く張る。上半と下半は縦位研磨。中位のみ横位 研磨を施す。内面縦位研磨。被熱の外層顔面色に変色。	縦式		
第120回 PL.178	3	弥生土器 蓋	フク土 底部1/2残存	底	6.6	細・白色粒/良好/ 褐色	外反気味に聞く体部下半。丁寧な横位研磨を施し底面にま で及ぶ。内面も丁寧な横位・斜位研磨。	縦式		
第120回 PL.178	4	弥生土器 蓋	フク土 頭部1/2 残存	口	18.5	細石英少・白色粒/ 良好/明黄褐色	外反する頭部。6・7本単位の櫛状波状文が多段に施され る。内面丁寧な横位研磨。	縦式		
第120回 PL.178	5	弥生土器 高杯	床上 完形	口 高	16.7 12.6	底 8.0	細・輝石・白色粒/ 良好/褐色	体部及び脚部とも多く聞く均整取れた器形。口縁部～体部 は丁寧な横位研磨。脚部は縦位研磨。内面は横位で調整後丁寧な横位研磨を加える。内 外面とも赤色。	縦式	
第120回 PL.178	6	弥生土器 高杯	フク土 口縁部1/2、脚 部一部欠損	口 高	12.6 10.3	底 8.0	細・白色粒/良好/ 明褐色	口縁部横位撫で、体部～脚部縦位研磨。脚部は横位削り調 整。内高は横位研磨を施す。	縦式	
第120回 PL.178	7	弥生土器 蓋	フク土 完形	擴 高	5.8 7.3	底 12.4	細・石英少・白色粒/ 良好/にふく・黃褐 色	端部の肩減から蓋と判断した。縦部は横位研磨、接合部 は墨垂剥落。体部は縦位研磨。縫合部は縦位研磨。内面部 は横位研磨を施す。擴部内面は撫で、端部は磨滅する。	縦式	
第120回 PL.178	8	礫石器 磨石	フク土 完形	長 幅	14 8.3	厚 重	3.6 155.6	粗粒輝石安山岩	裏面の中央付近に磨面が認められる。円錐を利用していく と考えられる。	

弥生時代土坑

種 国 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考											
第121回 PL.179	1	弥生土器 蓋	C4号土坑 体部1/2				複体部破片、外面上赤色塗彩、磨き。内面ナデ。											
第121回 PL.179	2	弥生土器 蓋	C4号土坑 体部1/2				複体部破片、内外面ナデ。											
種 国 PL.No	No	縦別器種	出土位置	法量	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	観察内容	
第121回 PL.179	3	劍	C4号土坑	28.3	24.6	3.1	0.5	3.7+	(1.9)	(0.4)								刃長が復元を含めれば30 cm近くなる長剣。鍔は認 められず、両丸造である。 木柄の痕跡が数箇所に遺 存する。茎にも有機質狀 のものが残るが、明瞭な 木質・木目などは不明。 刃間は直線状を呈してい る。

弥生時代ビット

種 国 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第122回 PL.178	1	弥生土器 高杯	C17号土坑 杯部1/3欠損	台 径	10.0 8.1	10.0 D 7	内外面共に赤色塗彩。内面杯底部剥離。	縦式
第122回 PL.178	2	弥生土器 蓋	C17号土坑 口縁～底部3/4	台 径	11.0 4.8	(12.5) D 2	括れ部に櫛状横線文を、口縁部および脚部上位に同波状文 を各2帯施す。施文具7箇14mm。外面部下位縦位磨きを、 内面横位磨き。	縦式
第122回 PL.178	3	弥生土器 蓋	C17号土坑 脚部～脚部上位 1/3	台 径		D 7	括れ部に櫛状横線文を2帯施す。施文具10箇15mm。外面部 縦位磨き、内面剥離。	縦式

弥生時代ビット

種 国 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第123回 PL.179	1	弥生土器 蓋	C302号ビット 一部欠損	14.0 6.4	23.5 D 6		括れ部に2連止櫛状横線文を、口縁部および脚部上位に同 波状文を各2帯施す。施文具9箇17mm。外面部縦位磨きを、 内面横位磨き・口縁部煤状炭化物付着。	縦式

D 2号方形周溝墓

種 国 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第125回 PL.179	1	ガラス玉	フク土	長 0.32 幅 0.37	孔 0.16 重 0.06		鋼着色のカリガラス(Group II)。	

遺物觀察表

D 2 号円形周溝墓

種 国 PL. No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第12686 PL.179	1 石製品 呑玉	フク土	長 1.49 最 0.36	孔 0.08 重 0.26	珪質頁岩製。2片に割れている。	
第12686 PL.179	2 ガラス玉	フク土	長 0.29 最 0.24	孔 0.17 重 0.05	鋼着色のカリガラス(Group II)。	
第12686 PL.179	3 ガラス玉	フク土	長 0.30 最 0.37	孔 0.15 重 0.05	鋼着色のカリガラス(Group II)。	
第12686 PL.179	4 ガラス玉	フク土	長 0.30 最 0.36	孔 0.14 重 0.05	鋼着色のカリガラス(Group II)。	
第12686 PL.179	5 ガラス玉	フク土	長 0.27 最 0.41	孔 0.15 重 0.05	鋼着色のカリガラス(Group II)。	
第12686 PL.179	6 ガラス玉	フク土	長 0.28 最 0.34	孔 0.10 重 0.04	鋼着色のカリガラス(Group II)。	
第12686 PL.179	7 ガラス玉	フク土	長 0.37 最 0.33	孔 0.12 重 0.06	鋼着色のカリガラス(Group II)。	

D 1 円形周溝墓

種 国 PL. No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第12786 PL.179	1 幼生土器 高杯	床上 完形	口 12.2 高 8.7	底 6.3	繩彌石・白色粒/ 良好/褐色	均整の取れた小型の高杯。体部は強く開き、脚部は小径。 口縁～体部横位、体部下半斜位。接合部横位、脚部縫位。 縫隙部横位研磨を施す。内面は丁寧な横位研磨。	後期
第12786 PL.179	2 幼生土器 盞	床上 体部中位～底部 残存		底 4.8	粗石英・白色粒/ 良好/赤褐色	外表面とも丁寧な斜位研磨を施し赤彩を加えるも、器面剥落著しい。	後期

弥生時代遺構外出土物

種 国 PL. No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第12886 PL.179	1 弥生土器 筒形土器	A区 底部完全		7.1	I 2	底外面に織布痕。内外面共に縦位乾磨き。外面煤状炭化物付着、内面一部に炭状炭化物付着、やや被熱風化。	弥生中期
第12886 PL.179	2 弥生土器 甕	A区 口縁～脚部1/3		(12.5)	I 3	全面にLR織文を複数枚。多段に施し、括れ部に3条の横縫文を施す。内外面共にやや被熱風化。	弥生中期
第12886 PL.179	3 弥生土器 鉢	A区 底部4/5		8.1	C 3	丸底状の底部。外縁横・縫位乾磨き。一部に煤状炭化物付着。内面横位研磨。	弥生中期
第12886 PL.179	4 弥生土器 浅鉢	A区 口縁部分		D 5		口縁部上面にLR織文や棒状具の押印を施す。口縁部に方形形状の入組文を施し、LR織文を充填施文。外縁一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第12886 PL.179	5 弥生土器 甕	A区 口縁部分		D 2		口縁部に横縫文や縫位乾磨を施し、LR織文を充填施文。外縁一部に煤状炭化物付着。内面丁寧な横位乾磨。	弥生中期
第12886 PL.179	6 弥生土器 甕	A区 脚部		D 2		单枕脚の横縫文や縫位乾磨を施し、LR織文を充填施文。外縁一部に煤状炭化物付着。内面横位乾磨。	弥生中期
第12886 PL.179	7 弥生土器 筒形土器	A区 口縁～脚部片		D 2		方形状の入組文を施し、LR織文を充填施文。内外面共にやや被熱風化。煤状炭化物付着。	弥生中期
第12886 PL.179	8 弥生土器 甕	A区 脚部片		D 2		柄円文や曲線状入組文を施し、LR織文を充填施文。内面横位乾磨。	弥生中期
第12886 PL.179	9 弥生土器 甕	A区 脚部片		B 2		脚部に幅広沈底紋の重山形文を施し、LR織文を充填施文。内面被熱風化。	弥生中期
第12886 PL.179	10 弥生土器 蓋	A区 天井部完全	天 径 5.6	B 2		長さ18mmの縦位抜薪帶を側面3箇所に付し、中心部に径2mmの聚鉢孔(焼成前穿孔)を施すが、2箇所は削落。方形状の入組文を施し、LR織文を充填施文。	弥生中期
第12886 PL.179	11 弥生土器 台付鉢	A区 台部1/4		C 1		3箇所に径8mmの透かし孔。	弥生中期
第12886 PL.179	12 弥生土器 鉢	A区 脚部片		D 2		方形状の入組文を施し、LR織文を充填施文。外縁煤状炭化物付着。内面横位で状のやや長い横位乾磨。	弥生中期
第12886 PL.179	13 弥生土器 甕	A区 口縁部分		H 1		口縁部上面に刻み目。口縁部以下に横位の条文を施す。内外面共にやや被熱風化。	弥生中期
第12886 PL.179	14 弥生土器 甕	A区 脚部片		H 1		方形状の沈底文を施し、LR織文を充填施文。内外面共にやや風化。内面横位乾磨。	弥生中期
第12886 PL.179	15 弥生土器 鉢	A区 脚部片		E 3		括れ部に細い竹管状具の横位方文や縫位側突文を施し、以下に横縫文を施文。外縫丁寧な横位風化・内面一部風化・剥離。	弥生中期
第12986 PL.180	16 弥生土器 蓋	A区 縫部～口縁部 1/6	縫 径 5.6	D 1		擴天井部に径6mmの焼成前穿孔。外縫位、内面横位の刷毛目。	縫式
第12986 PL.180	17 弥生土器 甕	A区 口縁～脚部1/2	(19)	H 1		括れ部に3連止御模様状文を施し、両口縁から頸部にかけて回波状文を5帯・脚部上位に2帯施す。施文具12箇所16mm。内面脚部具の横位削除後・やや長い横位乾磨。	縫式
第12986 PL.180	18 弥生土器 甕	A区 口縁～脚部1/4	(9.6)	D 2		口縁部～脚部にかけてやや混雜な櫛模波状文を4帯施す。施文具7箇所11mm。内面横位乾磨。	縫式
第12986 PL.180	19 弥生土器 甕	A区 口縁部分	(16.4)	D 2		口縁部～脚部にかけてやや混雜な櫛模横縫文を2帯施す。施文具7箇所11mm。外縫一部に煤状炭化物付着。内面横位乾磨。	縫式
第12986 PL.180	20 弥生土器 甕	A区 口縁部1/4	(10)	D 2		く字状に強く内折する口縁部上面に櫛模横縫文を、以下に同波状文を複数帯施す。外縫一部に煤状炭化物付着。内面横位乾磨。	縫式

種 国 PL_No	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値	施上/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第12986 PL.180	21 陶生土器 甕	A区 口縁部片		D 2	括れ部に3連止端櫛状文を施し、複合口縁から頸部にかけて同波状文を5帯施す。内面櫛歯状具の横位撫で後、粗い裏位鏡磨き。	縛式
第12986 PL.180	22 陶生土器 甕	A区 口縁～胴部1/2	(14)	E 3	括れ部に2連止端櫛状文を施し、やや乱雑な同波状文を口縁部と胴部に各1帶施す。施文具10箇12cm。内外面共にやや被熱風化、内面口縁部～胴部横位に鋸歯き。	縛式
第12986 PL.180	23 陶生土器 甕	A区 胴部片		D 2	括れ部に櫛状文を施し、同部に3帯の櫛状波状文とT字文、ボターン状附加文を施す。施文具9箇12cm。内面輪積み痕を残すやや粗い横位鏡磨き。	縛式
第12986 PL.180	24 陶生土器 甕	A区 底部1/3	(10)	F 1	外面裏位刷毛目後、裏位鏡磨き、内面横位鏡磨き。	縛式
第12986 PL.180	25 陶生土器 高杯	A区 口縁～胴部1/3	(21)	D 1	口縁外反部分を高さ13mmほどスリット状にカットする特殊基形。残存のカット部分延長8cm。内外面共に赤色塗彩。	縛式
第12986 PL.180	26 陶生土器 鉢	A区 口縁～底部1/3	(16.4) 5.4	6.8 D 4	底部上げ底状。外面内外面共に丁寧な横位鏡磨き。	縛式
第12986 PL.180	27 陶生土器 高杯	A区 脚部	(12)	D 3	外面裏位鏡磨き、内面横位鏡磨き。	縛式
第12986 PL.180	28 削片石器 石鏟	A区 完形	長幅 1.3 厚幅 0.5 重 1.2	黒色頁岩	両面加工により整形する。	凹基有茎斷
第12986 PL.180	29 削片石器 石鏟	A区 1/2	長幅 (12.6) (13.1)	厚 (2.3) 重 460.1	細粒輝石安山岩	表裏面に節理面を多く残し石材を露頭採取している可能性がある。表面の先端部末端及び先端部右側面に摩滅が認められ使用痕の可能性がある。
第12986 PL.180	30 削片石器 石鏟	A区 完形	長幅 10.4	厚 2.8 重 529.4	細粒輝石安山岩	表裏面に節理面を多く残し石材を露頭採取している可能性がある。
第13086 PL.180	31 陶生土器 甕	C区 底部1/2	6.4	G 2	内外面共に横位鏡磨き。	
第13086 PL.180	32 陶生土器 不明	C区 脚部片		H 1	RIL記文を横位施す。内面横位鏡磨き。	
第13086 PL.180	33 陶生土器 鉢	C区 口縁～底部2/3	(12.7) 4.0	6.3 D 3	外面底部を除いて全面赤色塗彩。	縛式
第13086 PL.180	34 陶生土器 甕	C区 ほぼ完形	11.8 6.6	15.2 D 6	括れ部に櫛状横線文を施し、同波状文を口縁部に3～4帯、胴部上位に1帯施す。施文具8箇12cm。外面胴部裏位鏡磨き、やや被熱風化・剥離。内面横位鏡磨き。外面脚部に斜位研磨。	縛式
第13086 PL.180	35 陶生土器 高杯	C区 环部2/3	15.0	D 2	外面縦・斜位鏡磨き、内面縦・裏位鏡磨き。	縛式
第13086 PL.181	36 磨製石斧	C区 完形	長幅 19.4 5.4	厚 3 重 484.6	変玄武岩	全般的に丁寧に研磨整形される。特に先端刃部付近は滑らかであるが使用痕と想定されるような継ぎ痕が認められない。
第13086 PL.181	37 磨製石斧	C区 完形	長幅 24.1 5.8	厚 3.9 重 818.3	変玄武岩	全般的に丁寧に研磨整形される。表面面の先端には刃部にほぼ直行する継ぎ痕が認められ使用痕の可能性がある。
第13086 PL.181	38 石製品	C区 不明	長幅 (5.3) 0.9	厚 0.6 重 4.4	珪質頁岩	全般的に研磨整形されており擦痕が數多く認められる。光沢がやや認められる。
第13086 PL.181	39 磨石器 敲石	C区 完形	長幅 8.5 3.3	厚 2 重 86.3	頁岩	棒状の円錐を利用。表面面の上下端部付近を中心で継かい凸凹の集中箇所が認められ敲打の跡路と推定される。
第13086 PL.181	40 削片石器 石鏟	C区 4/5	長幅 18.4 (9.8)	厚 2.0 重 504.3	細粒輝石安山岩	表裏面と上端面に節理面を多く残し石材を露頭採取している可能性がある。表裏面の先端刃部側面には摩滅が認められ使用痕の可能性がある。右側刃の上方につぶれやあり着痕の可能性がある。
第13086 PL.181	41 削片石器 石鏟	C区 2/3	長幅 (15.7) 10.7	厚 2.1 重 407.1	細粒輝石安山岩	表面面に節理面を大きく残し石材は露頭採取の可能性がある。両側刃上部のくびり部には摩滅が認められ着痕の可能性がある。上部欠損。
第13186 PL.181	42 上師器 壺	DKN-III-20 口縁部破片	口 14.0	珪石英・輝石・白 色粒/良好/にふい 黄褐色	口縁部は受け口状に内瀝する。横位で施す頭部は裏位ハケ撫で、内面は横位・斜位研磨。	古墳前期
第13186 PL.181	43 陶生土器 甕	DKO-III-16-M- III-18 体部1/4～底部 残存	底	6.6	珪石英少・白色粒 /良好/灰青褐色	体部中位で内瀝する。体部は裏位研磨、底部は斜位ヘラ撫で。内面は横位・斜位研磨。
第13186 PL.181	44 陶生土器 甕	DKN-III-17 V-1 体部1/4～底部 残存	底	4.8	珪石英・輝石・白 色粒/やや軟質/相 色	照原薄手で体部中位で内瀝する。体部は裏位研磨、内面は横位・斜位研磨を施す。
第13186 PL.181	45 陶生土器 甕	DK区 底部残存		底 4.5	珪石英少・白色粒 /良好/灰青褐色	外反気味に聞く体部下半。斜位ハケ撫で後裏位研磨。内面は斜位研磨を施す。
第13186 PL.181	46 陶生土器 鉢	D2往 底部1/2残存		底 3.4	珪石英少・白色粒 /良好/にふい/褐色	小型窓か。外反気味に聞く体部下半。平滑な撫で調整。内面は研磨を施す。
第13186 PL.181	47 陶生土器 甕	DK区 底部破片		底 10.1	珪石英・白色粒 /良好/にふい/赤褐色	口縁部欠損。口縁部に横位波状文を密接多段に配す。体部は研磨。内面も横位研磨が覆う。
第13186 PL.181	48 陶生土器 甕	DKO-III-16 口縁～体部1/4 残存	口 (9.8)	珪石英・白色粒 /やや軟質/浅黄褐 色	頭部屈曲。口縁～体部上半は弱い撫で、下半は斜位ヘラ撫で。内面横位撫で調整を施す。	中期後葉

遺物觀察表

種 国 PL_No	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/燒成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第131国 PL.181	49 陶生土器 甕	國K0-III-16 口縁部～体部上半 1/3残存	口 (12.4)	織紋粒/白色粒/ 良好/にぶい赤褐色	外反する頭部。4～5本単位の横位波状線を2段設け、 頭部には廉状文と下位に波状文を施す。体部は弱い横 位研磨、内面は丁寧な横位研磨を施す。	縛式	
第131国 PL.181	50 陶生土器 甕	國K0-III-17 口縁部～体部上半 半破片	口 15.0	織紋粒/白色粒/ 良好/にぶい黄褐色	口縁～頭部外反する。縦位・斜位ハケ撫で後横位波状文を 多段に密接して施する。内面丁寧な横位研磨。	縛式	
第131国 PL.181	51 陶生土器 甕	國K0-III-17 口縁部小破片		織紋粒/白色粒/ 良好/にぶい黄褐色	折返し状口縁、口縁部横位、頭部斜位撫で調整後横位波状 文を多段に施す。内面横位研磨。	縛式	
第131国 PL.181	52 陶生土器 甕	國K0-III-16-18 口縁～体部上半 1/2残存	口 16.4	織紋粒/輝石/白 色粒/良好/赤褐色	外反する口縁～体部に横位波状文を密接に施す。内面 横位撫で調整後弱い横位研磨。	縛式	
第131国 PL.181	53 陶生土器 甕	國K 口縁部		織紋粒/白色粒/ 良好/にぶい赤褐色	口縁部欠損。口縁部に横位波状文を密接多段に配す。	縛式	
第131国 PL.181	54 陶生土器 甕	國K0-III-17 頭部破片		織紋粒少・白色粒/ 良好/にぶい褐色	縦位ハケ撫で後横位波状文を多段に施す。内面横位研磨。	縛式	
第131国 PL.181	55 陶生土器 甕	國K0-III-17 頭部小破片		織紋粒/輝石/白 色粒/良好/にぶい 褐色	縦位ハケ撫で後横位波状文を加える。内面横位研磨。	縛式	
第131国 PL.181	56 陶生土器 台付甕	國K-N-III-17 黒 口縁～体部1/3 欠損	口 12.6 底 7.9 高 16.5	織紋粒/輝石/白 色粒/良好/明黄褐色 /黒色	口縁部横位撫で後5～7本単位の横位波状文と廉状文を配 す。体部中位は横位研磨、下位は斜位、脚部は縦位研磨を 施す。内面横位研磨。	縛式	
第131国 PL.181	57 陶生土器 台付甕	國K-N-III-15 V 2 脚部1/2欠損	口 12.4 底 7.0 高 12.1	織紋粒少・白色粒/ 良好/淡黃色	口縁部横位撫で後3～5本単位の廉状文を重複施す。体部 は横位研磨、後合部は縦位ハケ撫で、底部は縦位研磨を施 す。内面丁寧な横位研磨。脚部内面は横位ハケ撫で。	縛式	
第131国 PL.181	58 陶生土器 高杯	國K 体部下半～脚部 1/3残存		底 5.0	織紋粒少・輝石/白 色粒/良好/にぶい 赤褐色	身深の体部、脚部は細く小径。体部～脚部は縦位研磨を入 れし、体部内面も丁寧な研磨を加える。脚部は横位撫 で。	縛式
第131国 PL.181	59 陶生土器 高杯	國K0-III-17 脚部のみ残存		底 7.6	織紋粒/白色粒/ 良好/赤褐色	体部は強く聞く。接合部は縦位研磨、脚部は縦位撫で調整 後端部を横位削り。内面体部は丁寧な研磨、脚部は横位撫 で調整。	縛式
第131国 PL.181	60 磨製石斧	國K 1/2	長 (10.4) 幅 (6.8)	厚 重 363.8	未固結凝灰岩	全体的に丁寧に研磨整形される。	
第131国 PL.181	61 磨製石斧	國K 2/3	長 (13.8) 幅 (6.0)	厚 重 432.2	変玄武岩	残存部分のはば全間に研磨整形が認められる。擦痕が顕著 に認められる。	

古墳時代

A 6号墳穴建物

種 国 PL_No	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/燒成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第134国 PL.182	1 上部器 台付甕	床直 口縁部～脚部上 位片	口 13.2	織砂粒/良好/にぶ い赤	口縁部は横ナデ、脚部は縦方向のハケメ後に横方向のハ ケメ。内面は脚部にナデ。	S字状口縁	
第134国 PL.182	2 上部器 台付甕	フク上 口縁部小片		織砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部は横ナデ、脚部はハケメ。内面は脚部にナデ。		
第134国 PL.182	3 上部器 台付甕	床直 脚部	脚 8.7	織砂粒/良好/にぶ い黄褐色	外面部は縦位のヘラ磨き。内面は上半がハラナデ、下半は横 ナデ。		
第134国 PL.182	4 上部器 台付甕	フク上 脚部下位	脚 8.4	織砂粒/良好/黒褐 色	脚部端部は内側に折り曲げ。脚部と脚部上半はハケ目(1 cmあたり6本)。内面脚部はナデ。	S字状口縁	
第134国 PL.182	5 上部器 台付甕	フク上 脚部位	底 4	織砂粒/良好/にぶ い黄褐色	脚部は脚部に巻き上げて形成か。脚部は外側にハケ目(1 cmあたり8本)。内面には砂粒の多い粘土を貼付。	S字状口縁	
第134国 PL.182	6 上部器 台付甕	床直 底部～台部上位 片	底 6.0	織砂粒/良好/にぶ い黄褐色	脚部と脚部の貼付方法不明解。外側は脚部、台部ともハケ メ。内面は底部に砂粒の多い年度を貼り付けている。		
第134国 PL.182	7 土師器 甕	フク上 脚部のみ		織砂粒/良好/明赤 褐色	内面に輪積痕が残る。外側はハケ目(1cmあたり9本)、内 面はヘラナデ。		
第134国 PL.182	8 土師器 甕	床直 口縁部小片		織砂粒/良好/にぶ い赤	外側はハケメ後上半に横ナデ、内面は下半にヘラミガキ。		
第134国 PL.182	9 土師器 甕	フク上 口縁部小片		織砂粒/良好/にぶ い赤	口縁部は内外面とも横ナデ。		
第134国 PL.182	10 土師器 杯	フク上 口縁部小片		織砂粒/良好/にぶ い赤	口縁部は内外面とも横ナデ。		
第134国 PL.182	11 土師器 甕	フク上 底部片		織砂粒/良好/明赤 褐色	内面に輪積痕が残る。外側はハケメを部分的にナデ消 している。内面はほぼ全面にハケメが残る。		
第134国 PL.182	12 磨石器 磨石	フク上 完形	長 10.8 幅 10.1	厚 3.3 重 512.7	粗粒輝石安山岩	表面面のはば全面に磨面が認められる。円錐を利用してい ると思われる。	
第134国 PL.182	13 石製品 砾石	フク上 完形	長 12.3 幅 3.9	厚 4.8 重 260.9	流紋岩	砥面は2面認められる。正面が主要な砥面であり研ぎ減り によりやや内湾する。左側面には部分的な研ぎ箇所が認め られ、便宜的な砥面と判断できる。	

C 1号墳穴建物

種 国 PL_No	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/燒成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第137国 PL.182	1 上部器 杯	床下 1/4	口 13.8	織砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ、体部から底部はヘラ削り。内面は体部に 右端の斜放射状ヘラ磨き。	

種 国 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第137回 PL.182	2	土師器 杯	床上 口縁部～体部片	口 13 底 13	織砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ、体部はへラ削り。内面は体部に右傾の斜放射状へラ磨き。	
第137回 PL.182	3	土師器 杯	床上 口縁部片	口 13	織砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ、体部はへラ削り。内面は体部から口縁部に右傾の斜放射状へラ磨き。	
第137回 PL.182	4	土師器 杯	フク上 口縁部片	口 11.7 底 12.5	織砂粒/良好/赤褐色	口縁部は横ナデ、体部はへラ削り。内面は体部から口縁部に右傾の斜放射状へラ磨き。	
第137回 PL.182	5	土師器 甕	フク上 体部～底部片		織砂粒/良好/明赤 褐色	体部から口縁部はへラ削り。内面は右傾の斜放射状へラ磨き。	
第137回 PL.182	6	土師器 杯	床直 口縁部～底部片	口 12.4 底 12.2	織砂粒/良好/橙 褐色	口縁部は横ナデ、体部(棧下)から底部は手持ちへラ削り。	
第137回 PL.182	7	土師器 杯	床直 1/4	口 13.8	織砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ、体部から底部はへラ削り。内面は体部に右傾の斜放射状へラ磨き。	
第137回 PL.182	8	土師器 甕	床直 口縁部～胴部中 位片	口 12.8 底 16.2	織砂粒/良好/に ぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、頭部から胴部上位はヘラナデ。中位はへラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第137回 PL.182	9	土師器 脚付鉢	床直 1/2	口 13.4 脚 9.9	織砂粒/良好/に ぶい黄褐色	身部裏面は黒色光沢、脚部は脂付。身部口縁部は横ナデ、体部裏面はナデ、中位から底部、脚部上半はへラ削り、下半は横ナデ。内面は身部体部に左傾の斜放射状へラ磨き。	
第137回 PL.182	10	石製模造 有孔円盤	フク上 完形	長 3.4 幅 3.3	厚 0.5 重 8.9	滑石	灰白色～浅黄色。表面裏面共に横方向の擦痕が主体的である。表面の凹は周囲がわずかに隆んでおり、裏面からの穿孔の際に表面側が被剥いた可能性がある。孔径約2mm。
第137回 PL.182	11	石製模造品 刷形品	フク上 完形	長 3.9 幅 2.6	厚 0.5 重 6.2	滑石	明緑灰色。表面は横方向の擦痕が、裏面は斜め方向の擦痕が主体的である。上下の孔径約2mm。
第137回 PL.182	12	石製模造品 刷形品	フク上 完形	長 3.6 幅 3.0	厚 0.5 重 10.0	滑石	灰白色。表面は斜め方向の擦痕が、裏面は横方向の擦痕が主体的である。上下の孔径約2mm。
第137回 PL.182	13	石製模造品 刷形品	フク上 完形	長 4.7 幅 3.6	厚 0.5 重 13.9	滑石	灰白色。表面裏面共に斜め方向の擦痕が主体的である。上下の孔径約2mm。
第137回 PL.182	14	石製模造品 刷形品	フク上 完形	長 4.4 幅 2.7	厚 0.4 重 9.7	滑石	灰白色。左側辺には幅約2mm程度の平坦面が累積して認められ刀子等工具による加工痕の可能性がある。上下の孔径約2mm。
第137回 PL.182	15	石製品	フク上 完形	長 0.7 幅 0.7	厚 0.4 重 0.3	蛇紋岩	黑褐色。表面裏面は平坦で、表面には斜め方向の擦痕が認められる。側面には斜め方向の擦痕が認められる。孔径約2mm。
第137回 PL.182	16	石製品	フク上 完形	長 0.7 幅 0.7	厚 0.4 重 0.3	滑石	灰白色。表面裏面は平坦であるが擦痕は認められない。側面は擦痕は認められて光沢がある。孔径約2mm。
第137回 PL.182	17	鍍石器 磨石	床直 磨石	長 8.5 幅 5.7	厚 4.3 重 324.2	粗粒輝石安山岩	全面に赤色物質が散在する。円錐を利用していると考えられる。

D 1号形塊構造出土

種 国 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第140回 PL.182	1	土師器 壺	1周墓 口縁～体部上半 1/3残存 底部片	口 (9.8) 底 (5.0)	粗石英・白色粒 良好/にぶい赤褐色	口縁部横位撫で、頭部斜位へラ撫で後体部斜位研磨を加える。内面は弱い研磨。断面剥落	2と同一個体
第140回 PL.182	2	土師器 壺	1周墓 底部破片	口 (9.8) 底 (5.0)	粗石英・白色粒 良好/にぶい赤褐色	外面ナデ。器面剥落。内面ナデ。	1と同一個体

種 国 PL.No	No	種別器種	出土位置	法量										観察内容
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	
第140回 PL.182	3	刺・短劍	1号主体部内 床直	(17.0)	13.9	2.0	0.5	(3.4)	1.2	0.4				刃長20cm未満の13.9cmの刃長を持つ短剣。鋸がひどく弱く刃部の明瞭に分る部分が少ない。茎の元部はある程度分る。刃部は鋼の多い内丸造であることが断面から確認できる。鞘がよく残り、ほぼ完全に刺身部に遺存する。茎にも、木目状に遺存する木質が一部に残る。圓弧由来と推定する。

D 4号形塊構造

種 国 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第144回 PL.183	1	土師器 鉢	フク上 ほぼ完形	口 12.0 底 3.5	織砂粒/良好/に ぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、体部はへラ削り後ラミガキ。器面摩滅のため単位不明。底部はラミガキ。内面は底部から体部にへラナデ。	
第144回 PL.183	2	土師器 高杯	フク上 口縁部1/3残存	口 15.4	粗石英・白色粒 良好/にぶい黄褐色	口縁～体部横位撫で調整後弱い研磨。内面平滑な横位撫で	
第144回 PL.183	3	土師器 盃か 小片	フク上 口縁部小片	口 10.0	織砂粒/良好/に ぶい黄褐色	口縁部はへラ削り後横ナデ。内面は横ナデ。	
第144回 PL.183	4	土師器 小型甕	フク上 口縁～体部上半 1/3残存	口 9.8	粗石英・白色粒 良好/にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、体部横位撫で底部は横位研磨。内面横位研磨を施す	

遺物觀察表

種 団 PL_No	No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/成形/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第144回 PL.183	5	石製品 勾玉	フク上 完形	長 幅 0.7 0.2	厚 重 0.9 0.9	1.5 1.48	ひすい	全体的に丁寧な研磨整形が認められる所がある。やや透明感がある。孔は中央付近で段差となっており両面穿孔と考えられる。表面の孔上部の直径5mm。
第144回 PL.183	6	石製品 環玉	フク上 完形	長 幅 0.7 0.7	厚 重 0.8 0.51	1.1 1.48	ぎょくすい	全体的に非常に滑らかであり研磨整形される。透明度が比較的高く外部から孔の形状がわずかに透視できる。孔は中央付近が抜くなつており両面穿孔と考えられる。孔径約3mm。
第144回 PL.183	7	石製品 算盤玉	フク上 完形	長 幅 0.7 0.7	厚 重 0.7 0.51	0.8 0.41	石英	全体的に非常に滑らかであり研磨整形される。透明度が非常に高く外部から孔の形状が透視できる。孔径約2mm。
第144回 PL.183	8	石製品 算盤玉	フク上 完形	長 幅 0.7 0.7	厚 重 0.7 0.35	0.8 0.41	石英	全体的に非常に滑らかであり研磨整形される。孔は中央付近で段差が認められ両面穿孔と考えられる。孔径約2mm。
第144回 PL.183	9	石製品 算盤玉	フク上 完形	長 幅 0.7 0.7	厚 重 0.6 0.35	0.5 0.35	石英	全体的に非常に滑らかであり研磨整形される。透明度が非常に高く外部から孔の形状が透視できる。孔径約2mm。
第144回 PL.183	10	礫石器 凹石	フク上 完形	長 幅 10.5 6.7	厚 重 3.9 425.5	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩	背面側に深み2ヶ所、裏面側にアバ状の集合打痕2ヶ所がある。背面側の深み部は漏斗状を呈する。端部がヒビ割れ、被熱している可能性がある。
第144回 PL.183	11	礫石器 凹石	フク上 完形	長 幅 10.3 5.5	厚 重 3.2 262.4	閃綠岩	閃綠岩	表裏とも礫中央部より下端側にアバ状の集合打痕が広がる。裏面側とモルタルしているほか、小口部分の敲打痕も目立つ。やや小形の瓶平礫を用いる。
第144回 PL.183	12	礫石器 磐石	フク上 完形	長 幅 9.7 8.4	厚 重 4.2 469.4	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩	表裏両面とも摩耗するほか側縁に敲打痕がある。より平坦な裏面側は石の目が潰れるほど摩耗している。
第144回 PL.183	13	ガラス玉	フク上	長 幅 0.43 0.65	孔 重 0.25 0.24			
第144回 PL.183	14	ガラス玉	フク上	長 幅 0.50 0.57	孔 重 0.23 0.23			
第144回 PL.183	15	ガラス玉	フク上	長 幅 0.41 0.51	孔 重 0.23 0.14			
第144回 PL.183	16	ガラス玉	フク上	長 幅 0.49 0.48	孔 重 0.20 0.18			
第144回 PL.183	17	ガラス玉	フク上	長 幅 0.49 0.55	孔 重 0.20 0.17			
第144回 PL.183	18	ガラス玉	フク上	長 幅 (0.30) (0.41)	孔 重 0.20 0.02			
第144回 PL.183	19	ガラス玉	フク上	長 幅 (0.30) (0.28)	孔 重 0.20 0.01			
第144回 PL.183	20	ガラス玉	フク上	長 幅 0.88 0.95	孔 重 0.33 0.45		コバルト着色カリガラス(Group I)	
第144回 PL.183	21	ガラス玉	床直	長 幅 0.63 0.88	孔 重 0.35 0.63		コバルト着色カリガラス(Group I)	
第144回 PL.183	22	ガラス玉	床直	長 幅 0.63 0.77	孔 重 0.20 0.48		コバルト着色カリガラス(Group I)	
第144回 PL.183	23	ガラス玉	床直	長 幅 0.65 0.68	孔 重 0.30 0.39		コバルト着色カリガラス(Group I)	
第144回 PL.183	24	ガラス玉	フク上	長 幅 0.69 0.64	孔 重 0.39 0.37		コバルト着色カリガラス(Group I)	
第144回 PL.183	25	ガラス玉	フク上	長 幅 0.35 0.37	孔 重 0.15 0.03			
第144回 PL.183	26	ガラス玉	床直	長 幅 0.36 0.39	孔 重 (0.13) 0.03			
第144回 PL.183	27	ガラス玉	フク上	長 幅 0.35 0.36	孔 重 0.11 0.03			
第144回 PL.183	28	ガラス玉	フク上	長 幅 0.48 0.34	孔 重 0.22 0.02			
第144回 PL.183	29	ガラス玉	フク上	長 幅 0.25 (0.43)	孔 重 0.02 0.02			
第144回 PL.183	30	ガラス玉	フク上	長 幅 0.37 (0.38)	孔 重 0.25 0.03			
第144回 PL.183	31	ガラス玉	フク上	長 幅 0.25 (0.37)	孔 重 0.02 0.02			
第144回 PL.183	32	ガラス玉	フク上	長 幅 0.48 0.53	孔 重 0.22 0.08		コバルト着色カリガラス(Group I)	
第144回 PL.183	33	ガラス玉	床直	長 幅 (0.48) (0.54)	孔 重 0.13 0.08			
第144回 PL.183	34	ガラス玉	フク上	長 幅 0.38 0.47	孔 重 0.25 0.04		コバルト着色カリガラス(Group I)	
第144回 PL.183	35	ガラス玉	フク上	長 幅 0.25 0.28	孔 重 0.02 0.01			
第144回 PL.183	36	ガラス玉	床直	長 幅 0.30 (0.24)	孔 重 0.25 0.01			
第144回 PL.183	37	ガラス玉	フク上	長 幅 0.66 0.72	孔 重 0.25 0.41		コバルト着色カリガラス(Group I)	
第144回 PL.183	38	ガラス玉	フク上	長 幅 0.29 0.43	孔 重 (0.18) 0.04			

古墳時代集石

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴						備 考	
第1458# PL.183	1 土師器 杯	C1号集石 口縁部2/3欠	口 幅 10.6 8.6	底 高 3.6 11	細 砂 粒 良好/にぶ い黄褐色	口縁部は横ナデ後下方にヘラ削り、頭部にハケ目が残る、脚部は上半分がナデ。下半から底部はヘラ削り。内面は口縁部下位にハケ目(1cmあたり9本)、脚部はヘラナデ。								
第1458# PL.183	2 磨石器 磨石	C1号集石 完形	長 幅 11.2 8.3	厚 重 4.4 478.1	粗 粒 輝 石安山岩	円謹を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。								
第1458# PL.183	3 磨石器 磨石	C1号集石 完形	長 幅 12 10.3	厚 重 4.2 770.4	粗 粒 輝 石安山岩	円謹を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。								
種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置	法量											観察内容
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬		
第1458# PL.183	4 板状品	C1号集石	4.0+	2.5+	0.05									2枚の薄板が一部重なっている。径2mmの穿孔が上半板の重なりのある場所にある。
第1458# PL.183	5 板状品	C1号集石	2.1+	1.7+	0.1									板状品。穿孔が1つ施され。既の可能性のあるものか打たれているか?。
第1458# PL.183	6 板状品	C1号集石	1.7+	1.2+	0.05									極薄板状品。植物模様茎状のものが踏化して付着している。

D 2 号古墳

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴						備 考
第154# PL.183	1 織輪 円筒	四溝東 脚部小片				織砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶ い黄褐色	体部はハケメ、凸部は刷毛、その上下はナデ。内面はヘラ削り。						
第154# PL.183	2 織輪 円筒か 基部小片	周溝 底	17.4			織砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	円筒か形象かは不明。基部端部はヘラナデ、脚部はハケメ。内面はヘラナデ。						
第154# PL.183	3 ガラス玉	フクタ		0.31	0.10								

D 3 号古墳

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴						備 考
第154# PL.183	1 頭患器 鏡	フク上 脚部小片				織砂粒/還元焰/暗 灰	外面上には平行叩き痕。内面は同心円状アテ痕が残る。						
第154# PL.183	2 頭患器 鏡	四溝 脚部小片				織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回りか。外面上は回転ヘラ削り。古代。						

古墳時代遺構外出土上出物

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴						備 考
第157# PL.184	1 土師器 杯	A区 3/4	口 幅 15	底 13.5	細 砂 粒 良好/にぶ い黄褐色	内面は彫か。口縁部は横ナデ、体部(棲下)から底部は手持ちヘラ削り。							
第157# PL.184	2 土師器 杯	A区 口縁部片	口 幅 15	底 11.5	織砂粒/良好/灰 色	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。内面は体部から口縁部に右側の斜放射形へラ削き。							
第157# PL.184	3 土師器 杯	A区 口縁部片	口 幅 13.6		織砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。							
第157# PL.184	4 土師器 高杯	A区 脚部片	脚 12.8		織砂粒/良好/にぶ い黄褐色	脚部は彫位にヘラ磨き、底部は横ナデ。内面は脚部がヘラナデ、底部は横ナデ。							
第157# PL.184	5 土師器 壺	A区 口縁部片			織砂粒/良好/にぶ い黄褐色	内面に輪積痕が残る。外外面ともヘラナデ。							
第157# PL.184	6 石製品 石製品	A区 完形	長 幅 4.3 5.1	厚 重 1.2 38.4		全体的に研磨整形されている。表裏面はほぼ平坦であり非常に滑らかである。孔は中央付近がわずかに狭くなってしまおり両面穿孔の可能性がある。孔径約9mm。							
第157# PL.184	7 ガラス玉	C区		0.45	0.20		コバルト着色カリガラス(Group I)						

古代

A 2 号堅穴建物

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴						備 考
第160# PL.184	1 土師器 杯	フク上 2/3	口 幅 13.4	底 8.7	高 7.5	織砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。						
第160# PL.184	2 土師器 杯	カマド 口縁部片	口 幅 12	底 7.8	高 3.5	織砂粒/良好/明黄 褐色	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。						
第160# PL.184	3 土師器 杯	床下 口縁部～底部 1/4	口 幅 11.4	底 7.2	高 3.7	織砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。						
第160# PL.184	4 土師器 盤	フク上 口縁部片	口 幅 19			織砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、高台が貼付か。						
第160# PL.184	5 土師器 盤	カマド 口縁部～脚部上 位片	口 幅 23			織砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部は横ナデ、脚部はヘラ削り。内面は脚部がヘラナデ。						
第160# PL.184	6 土師器 盤	フク上 口縁部～脚部上 位片	口 幅 22.0			織砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部は横ナデ、脚部はヘラ削り。内面は脚部がヘラナデ。						

遺物觀察表

A 1号堅穴建物

拂 図 PL_No	種 類 種 No	出上位置 残存率	計測値	胎上/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴								備 考		
					①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		
第162回 PL.184	1 領忠器 杯	床直 3/4	口 13.2 底 7.4	3.2 細砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。										
第162回 PL.184	2 領忠器 杯	床直 口縁部～底部片	口 13.4 底 7	3.5 細砂粒・白色粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。										
第162回 PL.184	3 領忠器 杯	フク上 口縁部～底部片	口 13.4 底 7	3.4 細砂粒・還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。										
第162回 PL.184	4 領忠器 杯	フク上 口縁部～底部片	口 13 底 8	3.3 細砂粒・還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。										
第162回 PL.184	5 領忠器 杯	フク上 口縁部片	口 14		細砂粒・黑色粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形。									
第162回 PL.184	6 領忠器 杯	床上 底	7.4		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。									
第162回 PL.184	7 領忠器 杯	フク上 底部片	底 7		細砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。								底部外面に墨 書き。文字不明。	
第162回 PL.184	8 領忠器 碗	床上 口縁部一部欠	口 15.3 底 8.2	台 8.2 高 3.9	細砂粒・還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後高台を貼付。									
第162回 PL.184	9 領忠器 碗	床直 1/3	口 15 底 9	台 8.6 高 5.1	細砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。									
第162回 PL.184	10 領忠器 皿	フク上 3/4・高台欠落	口 12.4 底 1/4		細砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付が 剥落。									
第162回 PL.184	11 領忠器 皿	フク上 1/4	口 13 底 6.8 高 3		細砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。									
第162回 PL.184	12 領忠器 杯蓋	フク上 口縁部片	口 16.8		細砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形。									
第162回 PL.184	13 領忠器 杯蓋	フク上 口縁部片	口 15.8		細砂粒・還元焰/褐 灰	ロクロ整形。									
第162回 PL.184	14 領忠器 蓋	フク上 天井部片			細砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。縁周辺は回転糸切り痕が残り、 その周囲の天井部は中程まで回転へら削り。									
第162回 PL.184	15 領忠器 鉢	フク上 底部・体部片	底 12		細砂粒・酸化鈷/に ぶい・黄根	ロクロ整形、回転右回りか。底部はヘラナデ、高台は貼付 が剥落。									
第163回 PL.184	16 土師器 甕	床上 口縁部～胴部下 位片	口 21 底 22.4		細砂粒・良好/灰黄 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。									
第163回 PL.184	17 土師器 甕	床直 口縁部～胴部下 位片	口 17.8		細砂粒/良好/にぶ い・褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。									
第163回 PL.184	18 領忠器 甕	床上 口縁部～頸部片	口 27		細砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形。									
第163回 PL.184	19 鐘石器 石皿	床直 完形	長 44.4 幅 36.8 厚 重 46980	粗粒輝石安山岩	全面的に自然面と判断される。円礫を利用する。表面は全 体的に平坦であり中央付近に帶状に非常に滑らかな部分が 認められる。										
拂 図 PL_No	種別器種 No	出上位置	計測値	胎上/成形/色調 石材・素材等	法量								観察内容		
					①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧		⑨	⑩
第163回 PL.184	20 両開裝具 小刀	フク上	31.2+	18.2	2.5	0.5	13.0+	1.9	0.4	3.2+	3.2	2.1	0.1	月長が18.2cmと20cm未溝 の小刀である。切先はふくら の弱い平造りである。刃 茎端が欠損している。刃 間は内側で、横開は4mm ほどに対し、刃間は1 mmほどの段差である。刃 器具は、有機質で、刃部 側面に1.5mmほどの幅で 溝が全周している。	
第163回 PL.184	21	フク上	2.1+	1.7+	0.1									金具などと思われる部品(長 2.3cm+、上幅1.6cm)の一 部が共用してあり、この 小刀の器具と推定される。	
第163回 PL.184	22 左頭斧前鍬	フク上	7.4+	4.5	3.25	0.4					1.6	0.4	2.9+	0.45	0.4
第163回 PL.184	23 跖溝小斤	床下土坑	1.9	1.0	0.5										
第163回 PL.184	24 跖溝小斤	床下土坑	1.7	1.4	0.4										
第163回 PL.184	25 跖溝小斤	床下土坑	1.5	1.4	1.2										
第163回 PL.184	26 跖溝小斤	床下土坑	1.1	1.0	0.2										
第163回 PL.184	27 跖溝小斤	床下土坑	1.6	0.9	0.6										
第163回 PL.184	28 跖溝小斤	床下土坑	1.4	1.0	0.7										

A 3号型穴建物

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第1668# PL.185	1 頭患器 杯	フク上 1/4	口 10.6 底 5.8	織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第1668# PL.185	2 頭患器 杯	フク上 口縁部～底部片 底直	口 11.6 底 7.2	織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第1668# PL.185	3 頭患器 杯	床直 1/3	口 12.4 底 7.2	織砂粒：黑色粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第1668# PL.185	4 頭患器 杯	フク上 4/5	口 13.4 底 7.8	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第1668# PL.185	5 頭患器 杯	床上 底部～体部下位 片	底 8	織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第1668# PL.185	6 頭患器 杯	フク上 底部	底 6.4	織砂粒/還元焰/浅 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第1668# PL.185	7 頭患器 碗	フク上 3/4	口 13.7 底 7	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第1668# PL.185	8 頭患器 碗	フク上 1/2	口 15.5 底 6.8	織砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
第1668# PL.185	9 頭患器 碗	フク上 1/3	口 13.8 底 7	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
第1668# PL.185	10 頭患器 碗	フク上 口縁部～体部片	口 15.6	織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。	
第1668# PL.185	11 頭患器 碗	床直 口縁部～体部片	口 15	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。	
第1668# PL.185	12 頭患器 碗	床直 底部～体部下半	底 7.2	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第1670# PL.185	13 頭患器 杯蓋	フク上 口縁部～天井片	端 4.3	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。端みは貼付、天井部は回転ヘラ削り。	
第1670# PL.185	14 頭患器 杯蓋	フク上 口縁部片	口 18.2	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。内面に障灰が付着、焼成時は碗の上に逆さにして重ねて窯入れされている。	
第1670# PL.185	15 頭患器 長颈瓶	床直 底部～胴部中位 片	底 10.4 台 11.2	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ。高台は貼付。内面底部も回転ヘラナデ。	
第1670# PL.185	16 上師器 甕	断続穴内 口縁部～胴部上 位片	口 16.8	織砂粒/良好/に赤 い黄褐	口縁部から頭部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第1670# PL.185	17 上師器 甕	床直 口縁部～胴部上 位片	口 17.8	織砂粒/良好/概	外面部頭部に輪積斑。口縁部から頭部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第1670# PL.185	18 頭患器 甕	フク上 口縁部～頭部片	口 27	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。	
第1670# PL.185	19 頭患器 甕	床直 口縁部片	口 17.2	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。	
第1670# PL.185	20 頭患器 甕	フク上 軸脚部		織砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	外面は平行叩き痕がかすかに残る。内面はアテ貝痕がかすかに残るが、残部分の上位ではナデ消されている。	
第1670# PL.185	21 頭患器 甕	フク上 頭部～胴部上位 片		織砂粒/還元焰/灰 白	胴部は外側がヘラナデ、内面はナデ。	
第1670# PL.185	22 磨石器 台石	床上 長 33.5 幅 11.3 重 18900	粗粒輝石安山岩		垂墨線を利用する。表面の全面に滑らかな部分が認められる。	

C 2号型穴建物

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第1708# PL.185	1 頭患器 杯	フク上 口縁部～底部	口 12.7 底 7.2	織砂粒/還元焰/淡 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第1708# PL.185	2 頭患器 杯	フク上 1/4	口 11.8 底 6	織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。底部は疑似高台状を呈す。	
第1708# PL.185	3 頭患器 碗	P 5 内 完形	口 12.3 底 5.3	織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第1708# PL.185	4 頭患器 碗	フク上 頭部～胴部上位 片	口 15.6 底 7.4	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
第1708# PL.185	5 頭患器 碗	床直 2/3	口 15.8 底 7.7	織砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。外面部口縁部と内面部に墨書き。〔矢〕	
第1708# PL.185	6 頭患器 碗	フク上 底部1/2	底 8.2 台 8	織砂粒/酸化焰/に 赤い黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
第1708# PL.185	7 上師器 甕	床直 口縁部～胴部片	口 20	織砂粒/良好/明赤 褐	外面部頭部に輪積斑が残る。口縁部から頭部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第1708# PL.185	8 上師器 台付甕	床直 御部と口縁部～ 胴部上半の1/4 を欠損	口 12 底 14	織砂粒/良好/明赤 褐	脚部は貼付。口縁部から頭部は横ナデ、胴部はヘラ削り、脚部とも接合部は横ナデ。内面は胴部がヘラナデ。	

遺物觀察表

種 因 PL_No	No	種別器種	出土位置	法量												観察内容
				(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	
第17084 PL.185	9	鐵頭・莖部	フク上	6.4+				3.8+	0.4	0.4	0.4	0.4	2.6+	0.2	0.2	鐵頭・莖部片。明瞭な角閑を有する鐵。7世紀中のものか?
第17085 PL.185	10	刀子刃部	床直	4.4	0.5	0.1										小型刀子刃。刃先のほうには、あまりが刃が認められるが、茎方向に向かうにつれて明瞭な刃部が無くなり、平坦面を形成する。板状鐵片で、製作途上のものである可能性が高い。
第17086 PL.185	11	津	床直	3.4	2.5	1.8										大型津。底部が平らで、甲羅状の高まりを有す。
第17086 PL.185	12	津	床直	3.2	2.9	1.8										津。平面稍円形狀を呈する。
第17086 PL.185	13	津	床直	4.2	2.6	1.6										津。不定形狀である。
第17086 PL.185	14	津	床直	2.5	1.8	1.4										津。小型である。
第17086 PL.185	15	津	床直	1.7	1.3	0.5										津。小型である。
第17086 PL.185	16	津	床直	1.5	1.3	0.9										津。小型である。
第17086 PL.185	17	津	床直	1.4	1.1	0.8										津。小型である。

C 3号竪穴建物

種 因 PL_No	No	種類種	出土位置	残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴								備 考	
					口	底		台	高	厚	重	幅	長	幅	重		
第17386 PL.186	1	須恵器 杯	床上	1/3	13.4	7.8	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。									
第17386 PL.186	2	須恵器 碗	床直		13.4		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。									
第17386 PL.186	3	須恵器 碗	床直	口縁部～底部 1/3	16.2	7.4	台 高 白	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。							内外面に焼が付着。	
第17386 PL.186	4	須恵器 杯	土坑内 底部～体部下位 片		6.5		細砂粒・粗砂粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。									
第17386 PL.186	5	土師器 甕	フク上 口縁部～胴部下位 片		21		細砂粒/良好/赤 いね	口縁部から脚部は横ナデ、胸部はヘラ削り。内面は脚部がヘラナデ。									
第17386 PL.186	6	土師器 甕	フク上 要底部台部欠				細砂粒/良好/黄根	脚部は貼付が剥落。外表面はヘラ削り、内面はヘナで。									
第17386 PL.186	7	須恵器 甕	フク上 脚部				細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	内外面ともヘラナデ。									
第17386 PL.186	8	須恵器 甕	フク上 脚部				細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	内外面ともヘラナデ。内面にアテ具痕がかすかに残る。									
第17386 PL.186	9	讃石器 石皿	床直 完形		26	11	厚 重 5.5 1505.7	粗粒輝石安山岩	粗粒の礫片である。表面の全体が滑らかでありわざかに内消す。その中央辺付には著しく滑らかな部分が帯状に認められ魔方向の礫かい・縦条痕が比較的多くある。またその中央供掛部分には、周晶が抜け落ちた複数な穴の内部に橙色の物質が付着する状況がわざかに認められる。著しく滑らかな部分が表面の中央辺付にあることから、この形態で完形と考えられる。								

D23号堅穴建物

種 因 PL_No	No	種類種	出土位置	残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴								備 考
					口	底		台	高	厚	重	幅	長	幅	重	
第17406 PL.186	1	須恵器 杯	フク上 1/2		13.4	6.6	3.8 細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。								
第17406 PL.186	2	須恵器 碗	床直 底部		7.0		酸化焰/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。								
第17406 PL.186	3	須恵器 碗	フク上 底部片		9.0	8.0	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。								
第17406 PL.186	4	須恵器 碗	フク上 底部片		7.0	7.0	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。								
第17406 PL.186	5	須恵器 碗	床上 口縁部片		17.0		細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。								
第17406 PL.186	6	須恵器 甕	フク上 口縁部小片		11.2		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。								
第17406 PL.186	7	土師器 甕	フク上 脚部～胴片部				細砂粒/良好/明赤 いね	口縁部はコの字か、口縁部から頸部は横ナデ、胸部はヘラ削り。内面脚部はヘラナデ。								
第17406 PL.186	8	須恵器 甕	フク上 胴部下位片				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰 白	外表面は障灰付着者の模型不明。内面は微かアテ具痕が残るが、ほとんど消されている。								
第17406 PL.186	9	須恵器 甕	フク上 脚部				細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回りか。外表面は回転ヘラ削り後回転								

種 国 PL.No	No	種類種 器種	出土位置 残存率	法量										観察内容	
				(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)		
第174回 PL.186	10	刀子	床直	7.9+	4.1	1.2	0.25	2.9+	1.2	0.3					刀子片。切先と茎端が欠損する。間は、棒状が角で、刃開が山形状の刃を呈する。また刃の位置は、横と刃とでずれており、刃開が屈曲が切先に近い。茎が屈曲しており、意識的に曲げた可能性が高い。

A 5号堅穴建物

種 国 PL.No	No	種類種 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴					備 考
				(1)	(2)	(3)		(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	
第175回 PL.186	1	須恵器 杯	フタ上 口縁部片	口	12.4		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。					
第175回 PL.186	2	須恵器 甕	フタ上 胴部下半片				細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。胴部下位は回転ヘラ削り。内面 はへラナデ。					

古墳時代・擬立柱建物

種 国 PL.No	No	種類種 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴					備 考
				(1)	(2)	(3)		(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	
第176回 PL.186	1	須恵器 杯	A2号擬立 口縁部~底部 1/4	口	12.3	底 8.5	高 4	細砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。内面 部に輪粗筋が残る。				

古代土坑群

種 国 PL.No	No	種類種 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴					備 考
				(1)	(2)	(3)		(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	
第177回 PL.186	1	須恵器 杯	B1号土坑群 口縁部~一部欠	口	13.1	底 7	高 4.1 0.0	細砂粒/酸化焰/燒 黄	内外面とも焼。ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切 り無調整。				
第177回 PL.186	2	須恵器 椀	B1号土坑群 1/2	口	15.3	底 9.8	台 8 高 5.4	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。				
第177回 PL.186	3	須恵器 椀	B1号土坑群 2/3	口	16.2	底 7.8	台 7.5 高 6.2	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。				
第177回 PL.186	4	土師器 甕	B1号土坑群 口縁部~底部片	口	18			細砂粒/良好/褐	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへラナデ。				
第177回 PL.186	5	龍泉窯系青 磁か 不詳	B1号土坑群 小片					灰	高台境から体部小片か。釉やや厚く粗い買入る。内外面 無文。				中世か。6と 同一個体か。
第177回 PL.186	6	龍泉窯系青 磁か 不詳	B1号土坑群 小片					灰	高台境から体部小片か。釉やや厚く粗い買入る。内外面 無文。				中世か。5と 同一個体か。

古代土坑

種 国 PL.No	No	種類種 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴					備 考
				(1)	(2)	(3)		(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	
第180回 PL.186	1	須恵器 杯	A5号土坑 底部片	底	7.2		細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。					
第180回 PL.186	2	須恵器 椀	A5号土坑 底部~体部下位 片	底	7.6	台 7.0	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後回転ヘラナ デ。高台は貼付。					
第180回 PL.186	3	須恵器 椀	A15号土坑 1/2	口	14.2	台 8.8 底 8.2	高 5.8	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。右底部回転糸切り後高台を貼付。				
第180回 PL.186	4	須恵器 杯蓋	A15号土 口縁部~天井部 片	口	16.0			細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削り。				
第180回 PL.186	5	土師器 甕	A15号土 口縁部~胴部上 位片	口	19.7			細砂粒/良好/褐	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面は胴部が へラナデ。				

古代溝

種 国 PL.No	No	種類種 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴					備 考
				(1)	(2)	(3)		(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	
第182回 PL.186	1	須恵器 杯	A3号溝 口縁部片	口	13.8		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。					

古代地上

種 国 PL.No	No	種類種 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴					備 考
				(1)	(2)	(3)		(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	
第185回 PL.186	1	須恵器 杯	A3号壇上 口縁部~体部片	口	10.8	底 6.9	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。					
第185回 PL.186	2	須恵器 杯	A3号壇上 口縁部~底部片	口	12.1	高 7.0	3.9	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り無調整。				
第185回 PL.186	3	土師器 小型甕	A3号壇上 口縁部~胴部上 位片	口	7.8			細砂粒/還元焰/に ぶい焼	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面は胴部が へラナデ。				
第185回 PL.186	4	須恵器 椀	A3号壇上 口縁部~底部片	口	14.4	台 7.9 底 7.8	高 4.9	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。高台は貼付、底部の切り離し 技法不明。				
第185回 PL.186	5	須恵器 甕	A3号壇上 口縁部~胴部上 位片	口	43.2*			細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、外面は頸部から胴部に平行叩きとみられる痕 跡がかすかに残る。				

遺物觀察表

種 因 PL.No	器 類 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第185回 6	須恵器 杯	A8号壇上 口縁部~底部 摘~天井部	摘 3.6	織砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は回転ヘラ削り。	
第185回 7	土師器 鉢	A8号壇上 体部片		織砂粒/良好/にふ い黄	内外面とも赤色塗彩。内外面ともヘラ磨き。	
第185回 8	土師器 甕	A8号壇上 口縁部~頸部片	口 20.0	織砂粒/良好/にふ い赤	口縁部から頸部は横ナデ。	
第185回 9	土師器 鉢	A7号壇上 口縁部~底部片	口 底 8.6	織砂粒/良好/橙 白	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。	
第186回 1	須恵器 杯	A5号壇上 口縁部~体部片	口 11.8	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。	
第186回 2	須恵器 杯	A5号壇上 底部片	底 7.0	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は手持ちヘラ削りか、器面磨滅のため不鮮明。	
第186回 3	須恵器 杯	A5号壇上 底部片	底 7.8	織砂粒/酸化焰/浅 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転削りへら起し	
第186回 PL.186 4	須恵器 杯	A5号壇上 体部~底部	底 7.0	織砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第186回 5	土師器 甕	A5号壇上 口縁部~胴部上 位片	口 9.8	織砂粒/良好/にふ い褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第186回 6	土師器 甕	A5号壇上 口縁部~胴部上 位片	口 12.8	織砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	

古代集石

種 因 PL.No	器 類 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第188回 1	須恵器 杯蓋	B8・4号集石 摘欠組	口 17.5	織砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転は右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削り。口縁部は端部を折り曲げ。	
PL.187						
第188回 2	須恵器 壺	B8・4号集石 口縁部~胴部 1/5欠組	底 胸 11.4 22.0	織砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は不定方向のヘラ削り、胴部は下位がヘラ削り、その上位はヘラナデ。上位に2条の凹線が巡る。	
PL.187						
第188回 3	土師器 甕	B8・4号集石 口縁部小片	口 20.0	織砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は内外面とも横ナデ。	
PL.187						
第188回 4	土師器 甕	B8・4号集石 口縁部~胴部上 位片		織砂粒/良好/にふ い相	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
PL.187						

古代品

種 因 PL.No	器 類 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第189回 1	須恵器 杯	A11号壺 1/5	口 14.6	織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削り。	
PL.186						

古代遺構外出土遺物

種 因 PL.No	器 類 種	出上位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第191回 1	土師器 杯	A区 口縁部~底部	口 13.8 底 10.5	高 3.2	織砂粒/良好/橙 白	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り、器面磨滅のため単位不明。	
第191回 2	土師器 杯	A区 底部~体部片	底 9.0		織砂粒/良好/橙	底部と体部はヘラ削り。	
第191回 3	須恵器 杯蓋	A区 口縁部一部~ 摘 欠組	口 9.7		織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中程まで回転ヘラ削り。摘みは貼付が剥落。	
第191回 4	須恵器 杯蓋	A区 口縁部を1/4欠 組	口 17.7 4.7	高 4.9	織砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は中程まで回転ヘラ削り。	
第191回 5	須恵器 杯蓋	A区 1/3	口 16.8 3.7	高 3.8	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は中程まで回転ヘラ削り。	
第191回 6	須恵器 杯蓋	A区 口縁部~天井部 片	口 16.8		織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。天井部は回転ヘラ削り。内面は中央部に回転ヘラナデ。	
第191回 7	須恵器 杯蓋	A区 口縁部~天井部 片	口 19.2		織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。天井部は回転ヘラ削り。	
第191回 8	須恵器 杯蓋	A区 口縁部~天井部 片	口 4.3		織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は中程まで回転ヘラ削り。	
第191回 9	須恵器 杯蓋	A区 口縁部片	口 3.8		織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は回転ヘラ削り。	
第191回 10	須恵器 蓋	A区 摘~天井部片	口 4.2		織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は回転ヘラ削り。	
第192回 11	須恵器 杯	A区 口縁部一部欠 組	口 13.4 底 10.5	高 3.5	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
PL.187							
第192回 12	須恵器 杯	A区 口縁部一部欠 底 7.8	口 12.6 底 7.8	高 3.2	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
PL.187							
第192回 13	須恵器 杯	A区 口縁部1/2欠	口 13.1 底 7.5	高 3.8	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
PL.187							

種 団 PL. N.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/成形/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第1928# PL.187	14	須恵器 杯	A区 3/4	口 12.8 底 7	高 3.2 粗砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	15	須恵器 杯	A区 2/3	口 12.8 底 7.2	高 3.7 粗砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	16	須恵器 杯	A区 1/4	口 14 底 8	高 3.5 粗砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	17	須恵器 杯	A区 1/4	口 12.4 底 5.8	高 3.3 粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	18	須恵器 杯	A区 口縁部～底部 1/3	口 12 底 7	高 3.6 粗砂粒・還元焰/灰 削り	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転へらし起後回転ヘラ	
第1928# PL.187	19	須恵器 杯	A区 口縁部～底部 1/2	口 11 底 6.2	高 3.2 粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	20	須恵器 杯	A区 1/5	口 14.2 底 8	高 3.4 粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	21	須恵器 杯	A区 1/4	口 13.2 底 8	高 3.3 粗砂粒・還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	22	須恵器 杯	A区 口縁部～底部片	口 13 底 8	高 3.8 粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	23	須恵器 杯	A区 1/5	口 13 底 7	高 3.1 粗砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	24	須恵器 杯	A区 1/5	口 12.9 底 8.8	高 3.3 粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。底部 は疑似高台状を呈す。(浮7.8)	
第1928# PL.187	25	須恵器 杯	A区 口縁部～底部片	口 13 底 8.2	高 3 粗砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	26	須恵器 杯	A区 口縁部～底部	口 13 底 7	高 3.6 粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	27	須恵器 杯	A区 1/4	口 12.4 底 7.2	高 4.2 粗砂粒・還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	28	須恵器 杯	A区 底部	底 7	粗砂粒・還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	29	須恵器 杯	A区 口縁部～底部片	口 11.4 底 7	高 3.2 粗砂粒・黒斑/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り無調整。	
第1928# PL.187	30	須恵器 杯	A区 口縁部～体部片	口 12.6	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第1938# PL.187	31	須恵器 杯	A区 口縁部～底部片	底 9.0	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1938# PL.187	32	須恵器 杯	A区 底部～体部片	底 8.0	粗砂粒・還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り無調整。糸切り を2度行った痕跡が残る。	
第1938# PL.187	33	須恵器 杯	A区 底部	底 7.3	粗砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1938# PL.187	34	須恵器 杯	A区 底部片	底 7.2	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1938# PL.187	35	須恵器 杯	A区 底部～体部片	底 7.0	粗砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1938# PL.187	36	須恵器 杯	A区 底部片	底 8.2	粗砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1938# PL.187	37	須恵器 杯	A区 底部～体部片	底 7.6	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1938# PL.187	38	須恵器 杯	A区 底部～体部下位 片	底 6.8	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。底部 は疑似高台状を呈す。	
第1938# PL.187	39	須恵器 杯	A区 底部～体部片	底 7.0	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1938# PL.187	40	須恵器 杯	A区 底部片	底 7.0	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1938# PL.187	41	須恵器 杯	A区 底部片	底 7.2	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1938# PL.187	42	須恵器 杯	A区 底部片	底 7.4	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	外側底部に墨 書。「馬」
第1938# PL.187	43	須恵器 杯	A区 底部～体部片	底 7.4	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1938# PL.187	44	須恵器 碗	A区 口縁部～体部片	口 11.8	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第1938# PL.187	45	須恵器 碗	A区 口縁部～体部片	口 16.4	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。内面に降灰が付着。	
第1938# PL.187	46	須恵器 碗	A区 口縁部～体部片	口 17.6	粗砂粒・還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第1938# PL.187	47	須恵器 碗	A区 口縁部片	口 15.8	粗砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形。	外側に墨書。 「長」の異体字
第1938# PL.187	48	須恵器 碗	A区 底部～体部下位 片	底 8.0 底 8.0	粗砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	

遺物觀察表

種 団 PL.No	No	種 類 類	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/成形/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第1938	49	須恵器 瓶	A区 底部	底 8.0	織砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。 高台は打ち欠かれている。	
第1938	50	灰釉陶器 瓶	A区 口縁部片	口 15.8	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。施釉方法不明。	光ケ丘1号窯 式期
第1938	51	須恵器 瓶	A区 口縁部～底部	口 15.8 底 7.0	織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1938	52	須恵器 瓶	A区 底部～体部下半 片	底 8.8 台 7.8	織砂粒/良好/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1938	53	須恵器 瓶	A区 底部～体部下位 片	底 8.8 台 8.6	織砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1938	54	須恵器 瓶	A区 底部～体部下半 片	底 8.6	織砂粒・黒斑/還 元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラナデ、高台は 貼付。	
第1948	55	須恵器 瓶	A区 底部～体部片	底 7.8 台 8	織砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1948	56	須恵器 瓶	A区 底部～体部片	底 8.4 台 8.2	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1948	57	須恵器 瓶	A区 底部～体部片	底 7.8 台 8	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1948	58	須恵器 瓶	A区 底部～体部片	底 7	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付が 剥落。体部下位に回転ヘラ削り。11	
第1948	59	須恵器 盤	A区 底部～体部片	底 11.4 台 11.8	織砂粒・酸化焰/灰 白い楕	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り、高台は貼付。	
第1948	60	須恵器 瓶	A区 底部～体部片	底 9 台 8.6	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1948	61	須恵器 瓶	A区 底部	底 7.8 台 8.0	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラナデ、高台は 貼付。	
第1948	62	須恵器 瓶	A区 底部	底 8.0 台 7.8	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1948	63	須恵器 鉢	A区 口縁部片	口 38	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。	
第1948	64	灰釉陶器 瓶	A区 口縁部小片	口 15.8	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、施釉方法不明。	光ケ丘1号窯 式期
第1948	65	灰釉陶器 瓶	A区 体部小片		織砂粒/還元焰/灰 オリーブ	ロクロ整形。体部下位は回転ヘラ削り。施釉方法不明。	
第1948	66	灰釉陶器 瓶	A区 長頸直	口 8.2	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。施釉方法不明。	
第1948 PL.187	67	須恵器 蓋	0 摘 天井部片	摘 2.8	織砂粒/還元焰/灰 オリーブ	ロクロ整形。回転右回り。天井部は回転ヘラ削り。摘 みは擬宝珠状のものを貼付。	
第1948	68	須恵器 瓶	A区 胴部上位片		織砂粒/還元焰/灰 白	織部と頭部は2段接合か。ロクロ整形。	
第1948	69	須恵器 瓶	A区 胴部上半片		織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。胴部と頭部は2段接合。外間に隣が付着。	
第1948	70	須恵器 直	A区 底部	底 10.4	織砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1948 PL.187	71	灰釉陶器 瓶	A区 胴部片		織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、破片下位に回転ヘラ削り。外面の下段に「実」 と「良」が並び、逆線した「加」が上段に刻まれている。	外面に刻書。
第1948	72	灰釉陶器 瓶	A区 胴部片		織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。施釉方法不明。	
第1948	73	須恵器 瓶	A区 口縁部～頸部片		織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。	
第1948	74	土師器 甕	A区 口縁部～胴部上 位片	口 21.8	織砂粒/良好/棕 色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第1948	75	土師器 甕	A区 口縁部～胴部片	口 21.8	織砂粒/良好/にぶ い赤褐色	口縁部から頸部は内外面とも横ナデ。	
第1948	76	土師器 甕	A区 口縁部片	口 22.8	織砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部は横ナデ、頸部はナデ。内面は横ナデ。	
第1948	77	土師器 甕	A区 口縁部～頸部片	口 24.0	織砂粒/良好/灰黃	内面は黒色處理。口縁部から頸部は横ナデ後ヘラ磨きか。 内面は口唇部が横ナデ。口縁部から頸部は横ナデ後ヘラ磨き。	
第1948 PL.187	78	須恵器 甕	A区 口縁部片	口 28.0	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。口縁部は柵状工具による痕跡が残る。	
第1948	79	須恵器 甕	A区 口縁部～頸部片	口 15.0	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。	
第1958	80	須恵器 甕	A区 口縁部片	口 28.7	織砂粒/酸化焰/に ぶい楕	ロクロ整形。	
第1958	81	須恵器 甕	A区 口縁部片	口 30.0	織砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。	
第1958	82	須恵器 甕	A区 口縁部片	口 37.0	織砂粒/還元焰/灰 オリーブ	ロクロ整形。	

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎上/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴								備 考		
			底	台		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		
第1958# PL.187	83 頭患器 鏡	頭部～体部片	底 8.8 台 8.9		繊砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。										
第1958# PL.187	84 頭患器 鏡	ALX 脚部片			繊砂粒/還元焰/灰 白	外面は明き痕がナデ消されているが、内面は無文のアテ 具痕が残る。										
第1958# PL.187	85 頭患器 鏡	ALX 頭部～脚部上位 片			繊砂粒/還元焰/灰	口縁部はロクロ整形、脚部は明き痕がかすかに残る。内面 は脚部に無文のアテ具痕が残る。										
第1958# PL.187	86 頭患器 鏡	ALX 脚部脚部上位片			繊砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、内面脚部にアテ具痕がかすかに残る。										
第1958# PL.187	87 土製品 輪轔	ALX 1/3	厚 6.5 孔 1.5	0.7	繊砂粒/良好/にぶ い黄	表裏ともナデ。使用痕はみられない。										
種 国 PL.No	種別器種	出土位置	法量													観察内容
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫		
第1958# PL.187	88 肉闌細身刀 子	頭区	19.9+	13.4	1.4	0.4	6.5+	1.0	0.3							全長が19.9cm以上と20cm を超える長さを有する刀 子であるが、柄が一番あ るところで、1.4cmと細身 の刀子である。研ぎベリ は認められ無い。柄に木質 の明瞭な付着は認めら れない。
第1958# PL.187	89 棒状品	頭区	13.3+	1.9	0.7	1.4	0.7	1.7+	0.7							體に形態が近似し、盤状 工具とする。上面に打ち 印や面あり。下部にいく に促いやや彫くなるも、 端部はやや広がりを見せ ることも刃を形成する のか厚みは薄くなる。
種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎上/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴								備 考		
			底	台		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		
第1968# PL.188	90 頭患器 杯	頭区 底部	底 6.2		繊砂粒；黒焰/還 元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。										
第1968# PL.188	91 頭患器 瓶	頭区 脚部上位片			繊砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形。外面はカキ目、内面はヘラナデ。										
第1968# PL.188	92 頭患器 杯	CLX 1/5	口 12.2 底 6.8	高 4.3	繊砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。										
第1968# PL.188	93 頭患器 輪	CLX 口縁部～底部片	口 12.4 底 7.8	台 7.7 高 4.9	繊砂粒/還元焰/黃 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部切り離し技法などは不明。 高台は貼付。										
第1968# PL.188	94 頭患器 輪	CLX 底部片	底 8	台 7.8	繊砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。										
第1968# PL.188	95 頭患器 輪	CLX 口縁部～底部片	底 7.7		繊砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。										
種 国 PL.No	種別器種	出土位置	法量													観察内容
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫		
第1968# PL.188	96 肩状棒状品	CLX	7.4	0.7	0.7	1.1+	0.7	0.9								先が屈曲する鉤状の鉄製品。新しい鉄製可能性あり。
第1968# PL.188	97 棒状品	CLX	2.4+	0.78	0.7											棒状品。頭部あるいは 釘の茎部の可能性あり。
第1968# PL.188	98 棒状品	CLX	3.4+	0.8+	0.3+											棒状品。頭部あるいは 釘の茎部の可能性あり。
第1968# PL.188	99 棒状品	CLX	3.8+	0.5	0.3											棒状品。頭部あるいは 釘の茎部の可能性あり。
種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎上/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴								備 考		
			口	底		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		
第1968# PL.188	100 頭患器 杯	頭区 1/4	13.0 底 5.2	高 2.8	繊砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。										
第1968# PL.188	101 頭患器 杯	頭区 底部～体部	底 7.0		繊砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。										
第1968# PL.188	102 頭患器 杯	頭区 底部～脚部片	底 7.0		繊砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。										
第1968# PL.188	103 頭患器 杯	頭区 底部～脚部片	底 6.6		繊砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。										
第1968# PL.188	104 頭患器 杯	頭区 口縁部～底部片	口 14.0 底 7.6	台 8.0 高 5.3	繊砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。										
第1968# PL.188	105 頭患器 杯	頭区 底部～体部片	底 7.6	台 7.6	繊砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。										
第1968# PL.188	106 頭患器 杯	頭区 無台片	底 7.0		繊砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。内 面は器面が推り磨かれている。										
第1968# PL.188	107 頭患器 輪	頭区 口縁部片	口 15.0		繊砂粒/酸化焰/ 燒/黑	ロクロ整形、回転は右回り。										
第1968# PL.188	108 長袖陶器 皿	頭区 底部～体部片	底 8.4	台 8.2	繊砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は 貼付。施釉方法不明。										

遺物觀察表

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値			胎上/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴			備 考
第1968# PL.188	109 頭患器 碗	國区 口縁部片				織砂粒/酸化焰/浅 黄相	クロロ整形、回転は右回り。			
第1968# PL.188	110 頭患器 碗	國区 口縁部片				織砂粒/還元焰/灰	クロロ整形、回転は右回り。			
第1968# PL.188	111 上師器 甕	國区 口縁部～胴部上 位片	口 19.4			織砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。			
第1968# PL.188	112 上師器 甕	國区 頭部～胴部上位 小片				織砂粒/良好/にぶ い赤褐	頭部は横ナデ、胴部はヘラ削り。			
第1968# PL.188	113 頭患器 甕	國区 胴部小片				織砂粒/還元焰/黄 灰	外面には平行明き痕が残るが、内面はアテ具痕が微かに残 る。			

中近世

中近世上坑群

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値			胎上/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴			備 考
第1988# PL.188	1 肥前磁器 染付皿	B3上坑群 1/2	口 (4.8) 底 (8.7)	器 4.6	灰白	口縁部は輪花を作る。体部内面に笠や扇状文。外面は唐草 文。残存部の底部内面は無文。高台内1重團線。残存部に 路はない。				17世纪末から 18世纪中葉。
第1988# PL.188	2 陶器 不詳	B3上坑群 底部	底 10.8		灰白	底径が大きく内面は筋輪か筋輪が鉄化粧粒にかかる。底部 内面に重ね焼き跡。大型筒形香炉か。				江戸時代。

中近世土坑

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値			胎上/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴			備 考
第2010# PL.188	1 肥前磁器 染付小丸瓶	B8上坑 口縁部1/7、底 部1/2	口 (8.8) 底 3.3	器 5.5	灰白	瀬戸・美濃の太白手のような色調で焼成不良。外面不明文 様。口縁部内面は2重團線。底部内面1重團線内にコンニャ ク判別による五弁花。				18世纪後葉か ら19世纪初 頭。
第2010# PL.188	2 上師器 小型壺	B9上坑 底部	底 4.5		織砂粒/良好/にぶ い黄褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラ磨き。				
第2028# PL.188	1 瀬戸・美濃 陶器 丸碗	B11上坑 底部	底 5.6		灰白	内面筋輪、外面は高台内まで化粧風に薄い筋輪。高台周縁 を打ち欠いて円盤状に加工。				江戸時代。二 次加工品。
第2038# PL.188	1 肥前磁器 染付筒型瓶	B19上坑 底部1/2	底 (3.6)		白	高台脇と高台境に1重團線。底部内面1重團線内に施乳化 した五弁花。				18世纪後葉か ら19世纪初 頭。

中近世ビット

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値			胎上/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴			備 考
第2078# PL.188	1 瀬戸・美濃 陶器 志野丸皿	A1号ビット 完形	口 11.3 底 6.8	器 2.4	灰白	内面から高台内面に志野釉。高台内は薄く釉がかかる。内 面に目跡3カ所。口縁端部に黒っぽい汚れがあり、火灯皿 としての使用が推測される。				17世纪中葉

中近世井淵

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値			胎上/焼成/色調 石 材・材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴			備 考
第2158# PL.188	1 磁器 染付小皿	C1号溝 1/2	口 (7.1) 底 3.5	器 4.0	白	外面銅板転写による繪付け。内面は無文。高台端部から高 台内無釉。				近現代。
第2158# PL.188	2 製作地不詳 磁器 平底	C1号溝 口縁一部欠	口 11.9 底 4.0	器 5.3	白	機械搬運成型。外面藍色と緑色による銅板転写繪付け。高 台端部無釉。				近現代。
第2158# PL.188	3 肥前磁器 青磁染付鉢	C1号溝 口縁部一部、体 部1/4	口 (19.0)		白	体部外面に唐草文、口縁部内面に花卉文。底部内面周縁に 2重團線。体部内面の無文部に青磁釉。				18世纪。
第2158# PL.188	4 在地土器 火消壺	C1号溝 口縁部1/2、底 部左	口 (18.8) 底 17.0	器 17.1	断面赤褐色、器表裏 落し蓋タイプの火消壺。3カ所の底部外面貼付脚は剥落。					近現代。

種 国 PL.No	細別器種	出土位置	法量										観察内容	
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	
第2158# PL.188	5 鋼?	C1号溝	8.9+	1.8	1.4			1.3	0.7					鋸状工具。鋸・鑿の可能 性あり。基部には厚みが ある。先端に向かい細く なる。
第2158# PL.188	6 大型釘	C1号溝	6.8+	1.6	1.1									大型釘。先端欠失。明瞭 な釘頭有する。茎に木質 付着無し。
第2158# PL.188	7 小型釘	C1号溝	3.8+	0.6+	0.6+			3.4+	0.6	0.4				小型釘。釘頭一部欠損。 木質付着無し。
第2158# PL.188	8 引手状鉄製 品	C1号溝	3.7+	1.6+	0.6	0.4	2.1	0.5	0.4					引手状の金具片。円環部 が残る。新しい製品の可 能性あり。
第2158# PL.188	9 引手状鉄製 品	C1号溝	2.9+	1.4+	0.4	0.3	1.8+	0.6	0.4					引手状の金具片。円環部 の一部残る。新しい製品 の可能性あり。

天明泥流以降土坑

種 因 PL.No	No	種別器種	出土位置	法量											観察内容	
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪		
第2248 PL.189	1	フック状金 具	A2号土坑	10.6+	3.5+	1.2	0.2	7.1+	0.4	0.3						柄部は扁平長方形のもので、フック部に対して直角方向にしている。フック部と想定される部位は、やや下にくにくにつれ折り目を見せるが、途中で欠落してしまった形状は不明である。四戸の古墳群・業田1号墳から同様のものの完形品が1点出土している。

中世道横外

種 因 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴						備 考	
				①	②	③		④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	
第2248 PL.189	1	龍泉窯系 青磁碗	A区 小竹	口 底		器	灰	口縁端部は外反。輪はやや厚く貫入る。						14世紀末から 15世紀初葉頃。	
第2248 PL.189	2	龍泉窯系 青磁碗		口 底	(4.5)	器	灰	口縁端部は外反。輪はやや薄い。						14世紀末から 15世紀中葉頃。	
第2248 PL.189	3	肥前陶器か 器手鏡	A区 武部	口 底(4.7)	器	灰	胎土が灰色で灰釉の碗。貫入る。窓と高台の作りは肥前の器手と同様。高台端部のみ無釉。						17世紀後葉か ら18世紀前葉。		
第2248 PL.189	4	肥前陶器か 染付瓶	A区 武部1/2	口 底(3.5)	器	白	高台薄い。体部外面に奴様の染付2か所残る。高台端部のみ無釉。						18世紀から19 世紀前葉。		
第2248 PL.189	5	肥前陶器か 染付瓶	A区 武部1/2	口 底(3.5)	器	白	高台薄い。体部外面に奴様の染付2か所残る。高台端部のみ無釉。						18世紀から19 世紀前葉。		
第2248 PL.189	6	瀬戸・美濃 陶器	A区 底部	口 底5.6	器	灰白	高台幅狭い。内面から高台外面付近鉛釉。高台は端部を削ぎ鋸歯状に袖薄くかかる。底部内面の一部に白っぽい灰釉。						17世紀後葉か ら18世紀前葉。		
第2248 PL.189	7	在地系上器 か 箱道道工 物か	A区 口跡部分				断面にぶい粒 器表黒						口縁部は玉縁をなし。端部は上方にとがり気味。残存部内 面下部は使用により摩滅し、平滑となる。	14世紀中葉頃。	
第2248 PL.189	8	在地系上器 か 箱道道工 物か	A区 完形	幅 厚	1.6 1.4	高	2.5	純黄柾						箱底道具様の上製品。前後の型による型作り。	江戸から近現代。
第2248 PL.189	9	在地系上器 か 天神人形か	A区 一部欠	幅 厚	3.2 1.3	高	3.5	純黄柾						前後の型による型作り。鳥帽子をかぶり、座り姿で右手に 扇を持つ。	江戸から近現代。
第2248 PL.189	10	古鏡	A区	幅 厚	2.25 0.2			寶木通寶							
第2248 PL.189	11	肥前陶器 染付小豆 甌	A区 口縁部一部、底 部光	口 底(7.7) 3.0	器	3.8	白	外腹○内に壽字文と不明文様。高台内1重巻線内に不明文 様。						18世紀末から 19世紀前葉。	
第2248 PL.189	12	肥前陶器 染付小豆 甌	A区 口縁部1/8、底 部1/3	口 底(9.3) (4.1)	器	2.6	灰白	体部外面と底部内面に染付。底部内面に軸切れ。						江戸時代。	
第2248 PL.189	13	製作地不詳 磁器	A区 1/2 赤鉄小碗	口 底3.0	器	3.3	白	外腹僅かに赤絵と上繪残る。							近現代。
第2248 PL.189	14	製作地不詳 磁器 染付鉢	A区 底部完	口 底8.6	器		白	8角形の鉢。楕化コバルトによる染付。底部内面は鶴と柏 物文で目跡3か所。蛇の目四型高台。							近現代。
第2248 PL.189	15	瀬戸・美濃 磁器	A区 口縁部1/2、底 部1/3 染付小杯	口 底(5.1) (3.0)	器	5.8	白	口縁部に楕化後バルド。外面に3条一组の楕線を楕化後 バルドで描く。内面の高台境に1重巻線。							近現代。
第2248 PL.189	16	瀬戸・美濃 陶器	A区 口縁部一部、底 部2/3 火皿	口 底(9.9) 4.8	器	1.9	灰白	外面口縁部以下は右回転脱削り。錆軸施釉後に体部外面 下の軸を拭う。						18世紀後葉か ら19世紀前葉。	

種 因 PL.No	No	種別器種	出土位置	法量											観察内容
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	
第2248 PL.189	17	銅製品 毛抜	A区	6.8	0.7	0.6	0.7	0.1							銅製の毛抜きと推定。片方のつまみ部は折れて消失。 つまみ部に向けてやや凹がる。
種 因 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴						備 考	
第2248 PL.189	18	瀬戸・美濃 陶器 伝版器	C区 1/3	口 底	(6.8)	器	灰白	口縁部外面既須による不明文様。内外面灰釉。粗い貫入。						江戸時代。	
第2248 PL.189	19	肥前磁 青磁杯か皿	C区 1/4	口 底	(9.0)	器	灰	内外面に青磁釉。発色はやや悪い。蛇の目四型高台。						江戸時代。	
第2248 PL.189	20	銅製品 煙管	C区	長 厚	6.3 0.2	高	1.0	吸口							

遺物觀察表

種 因 PL.No	No	細別器種	出土位置	法量												観察内容	
				(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)		
第2258 PL.189	21	引手状鉄製品	C区	3.2+	1.6+	0.3	0.3	1.7	0.5	0.4							引手状金具。茎部途中から欠損。新しい鉄製品の可能性あり。
第2258 PL.189	22	釘	C区	5.9+	0.6+	0.5	0.4	5.5+	(0.6)	(0.6)							釘が彫削しているもの。かなり倒んでおり、原形の復元は難しい。
第2258 PL.189	23	釘	C区	3.9+	1.05	0.8	0.3	3.6+	0.7	0.7							中型の釘。明瞭な釘頭部を有する。
第2258 PL.189	24	鍼	C区	4.2+		0.4	0.4	3.8+	0.5	0.4							鍼の茎部か？
第2258 PL.189	25	釘	C区	4.0+				4.0+	0.3	0.2							鍼の茎部か。縦めの断面四角形の棒状品。
第2258 PL.189	26	釘	C区	3.6+				3.6+	0.5	0.5							釘の茎部片と推定する。本質の遺存はない。
第2258 PL.189	27	津	C区	2.5	2.3	2.3											津の可能性高い。石に付着している。
第2258 PL.189	28	楕型掌	C区	5.7	4.7	1.2											大きい楕形津である。
種 因 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等			成形・整形の特徴						備 考	
				口 底	器	灰											
第2258 PL.189	29	瀬戸・美濃 陶器 碗類	區 口縁部片														古瀬戸か。口縁部は緩やかに内湾し、端部は小さく外反。 内外面灰釉。 14世紀から15世紀か。
種 因 PL.No	No	細別器種	出土位置	法量												観察内容	
				(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)		
第2258 PL.189	30	茎片	不明	3.5+									3.5+	0.3	0.25		鍼の茎の端部と推定する。 有機質の遺存は無し。
第2258 PL.189	31	頭部?	不明	6.1	0.4	0.15											棒板状品。薄手の扁板状品。両端とも欠失している。